

# 中世後期畿内近国守護の研究

畠山氏の家系・分国支配と内衆および奉公衆等の動向

2 0 0 6 年

新潟大学大学院現代社会文化研究科

弓 倉 弘 年

# 中世後期畿内近国守護の研究

畠山氏の家系・分国支配と内衆および奉公衆等の動向

2 0 0 7 年

新潟大学大学院現代社会文化研究科

弓 倉 弘 年

本論文は、室町幕府管領であり河内・紀伊等の守護でもあった畠山氏を対象とした。畠山氏の家系を明確にし、河内・紀伊の支配体制を検討するとともに、内衆や奉公衆等の動向も加味して、守護の在り方や畿内・近国の様相を明らかにすることを目的とした。

序章では、畠山氏の世襲分国である、紀伊・河内・越中の畠山氏に関する研究史を整理し、本論文の論点を示した。管領家畠山氏系図は、異同の多い諸系図類ではなく、本論文の成果をもとに作成した。

第1部では、畠山氏の家督相続と紀伊の支配体制について論じた。第1章では畠山氏の当主交代について論じた。応仁の乱以降は、正守護か否かにかかわらず、義就流・政長流の当主交代を明確にすることを基本とし、両畠山氏の当主交代を明らかにした。第2章では、紀伊支配にかかわった守護代・奉行人等の検出を通して、紀伊の支配体制について論じた。「室町時代紀伊国守護・守護代等一覧」は、第1章・第2章の成果に基づいて作成した。第3章では某姓宣頭を例に、畠山氏の前に紀伊守護であった大内氏との間で、支配にかかわった人物に関係がないことを論じた。第4章では、応永25年(1418)に発生した守護と熊野本宮との抗争を通して、守護の分国支配の脆弱さと、紀南の支配拠点南部について論じた。付論では、畠山満慶が満家の伯父ではなく、弟であることを論じた。付論では羽柴秀吉が紀伊を攻めた際の畠山式部太夫の人名比定について論じた。

第2部では、畠山氏の分裂抗争の原因と、関係した内衆の動向、分国の状況について論じた。第1章では、畠山氏が義就流と政長流に分裂する原因が、畠山氏内部にあることについて論じた。嘉吉の変後に持国が一部近臣を重視した分国の支配体制をとり、従来の内衆を退けたことが、畠山氏分裂の原因であることを明らかにした。第2章では、畠山氏の紀伊における分裂抗争を、畠山義就と弥三郎・政長の時期について論じた。その際、奉公衆の湯河政春が、在地の理由により一貫して政長方を支持したことを明らかにし、応仁の乱における中央と地方との関係について論じた。第3章では、政長流の紀伊在国内衆である野辺氏について論じ、紀伊国人でないことを明らかにした。

第3部では、守護畠山氏と、紀伊の奉公衆湯河氏・玉置氏・山本氏の関係について論じた。第1章では、山本氏が奉公衆に編成された時期、明応の政変後の湯河氏と山本氏の立場の違いについて論じた。明応の政変によって奉公衆の結合が崩壊したことを、紀伊においても明確にし、戦国期には山本氏が守護権力の一端を担っていた。第2章では、明応の政変後における湯河氏の動向について論じた。湯河氏が畠山政長の嫡子尚順方として活動したことを明らかにし、紀南国人一揆説を否定した。第3章では、戦国期に至っても將軍直属の奉公衆であることを自負する湯河氏の立場について論じた。湯河氏は畠山氏権力に包括されたのではなく、湯河氏の河内出陣には將軍からの要請があった。

第4部では、主に大永から天文年間にかけての、義就流と政長流の家系と権力について論じた。第1章では、天文年間に政長流の河内守護代であった遊佐長教の権力と、長教の暗殺後、安見宗房が台頭した背景について論じた。また、天文年間に至っても守護家の家督決定権は幕府が掌握していたが、守護代等内衆の支持がなければ権力を行使できないことも明らかにした。第2章では、錯綜していた天文年間の畠山播磨守の人名比定について論じ、関係を整理した。第3章では、享禄年間の畠山上総介の人名比定を行うとともに、義就流の河内守護代であった木沢長政の権力について論じた。第4章では、畠山義就以降の義就流畠山氏の家系について論じた。第5章では、天文年間に政長流と義就流の間で行

われた河内半国体制について論じた。河内半国体制は、河内を南北に分割して支配するのではなく、義就流・政長流それぞれに守護職を認めるものであった。

第5部では、遊佐長教全盛期から、畠山氏滅亡に至る時期の畠山氏と内衆の在り方について論じた。第1章では、天文年間から元龜年間に至る畠山氏の河内支配と、内衆の動向について論じた。永禄年間に安見宗房が台頭して遊佐同名となり、足利義昭上洛後は奉公衆となったことを明らかにし、遊佐氏の権力について論じた。第2章では、畠山氏が河内を失陥することとなった、永禄5年(1562)の河内教興寺合戦について、同時代の史料より、この合戦が単に三好・畠山の抗争でないことを論じた。第3章では、永禄から天正年間にかけての畠山氏内衆の在り方について、織田信長との関係を軸に論じた。畠山秋高が殺害され、足利義昭が畿内を去った状況下で、義昭派の河内守護代遊佐信教は重層的な支配体制を解消できず、旧秋高系内衆や根来寺が織田信長の家臣に組み込まれた。

終章は、本論文のまとめとして、4つの観点から論じた。

## 目次

序章	1
管領家畠山氏系図	17
第一部 畠山氏の紀伊支配	
第一章 紀伊守護家畠山氏の家督変遷	20
第二章 紀伊守護家畠山氏の支配体制	53
室町時代紀伊国守護・守護代等一覧	99
第三章 某姓宣頭に関する一考察	106
第四章 応永二十五年・熊野本宮と守護の抗争	112
付論 畠山修理大夫満慶に関して	117

付論	畠山式部太夫と貞政	121
第二部	畠山氏の抗争と紀伊	
第一章	畠山氏分裂の原因に関して	126
第二章	畠山氏の内訌と紀伊	140
第三章	紀伊の野辺氏	165
第三部	守護家と奉公衆家	
第一章	奉公衆家山本氏に関する一考察	176
第二章	戦国期紀州湯河氏の動向	188
第三章	戦国期紀州湯河氏の立場	207
第四部	義就流と政長流の家系と権力	

第一章	天文期の政長流畠山氏	2 2 2
第二章	天文年間畠山播磨守小考	2 4 5
第三章	戦国期義就流畠山氏の動向	2 5 6
第四章	畠山義就の子孫達	2 7 1
第五章	天文年間河内半国体制考	2 9 4
第五部	戦国期の河内支配	
第一章	戦国期河内国守護家と守護代家の確執	3 1 4
第二章	教興寺合戦をめぐる	3 4 1
第三章	織田信長と畠山氏家臣	3 5 2

終章

所収論文について

3 8 1

3 7 1



## 序章

### はじめに

足利一門守護である畠山氏は、室町・戦国期において、河内・紀伊・越中等の守護であるとともに、管領家として室町幕府の中枢に位置していた。河内は京師に近い重要な国であり、紀伊は河内に隣接する重要な場所に位置している。畠山氏は一五世紀半ばに分裂抗争が始まり、それが応仁の乱や山城国一揆等を引き起こしたことは周知の事実であろう。だが、畠山氏は河内・紀伊において、守護家としての名跡を、織田信長上洛以降も保っている。

畠山氏に関する研究としては、小川信氏の一連の研究があり、小川氏はその成果を『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）として刊行された。小川氏の研究で畠山氏に関する部分を、筆者の理解した範囲でまとめてみたい（幕府そのものに関係することは除く）。

鎌倉時代の源性畠山氏の興起から、畠山基国のころまでを対象とされている。畠山基国の時期までなのは、小川氏の研究主題の一つが、室町幕府管領制の確立にあったからである。

当該期の畠山一族の動向を、足利氏一門守護としての幕閣内における立場ばかりでなく、河内・紀伊等の分国支配に至るまで、内衆の動向をも含めて、良質の史料を本に綿密な考証を行っている。

「相国寺供養記」（『群書類従』二十四）を用いて畠山基国の内衆を分析し、遊佐・斎藤・神保氏が大きな比重を占めていたことを明らかにされた。この分析は、畠山氏内衆研究の基礎となっている。

小川氏の研究は、発給文書や古記録等良質の史料を駆使し、厳密な史料批判の上に立論されている。ただ残念なのは、前述の如く畠山基国のころまでで論証が終わっており、管領家と能登守護家に分かれる満家・満慶以降は、ほとんど触れられていないことである。

一九七〇年代までの室町期における守護に関する研究は、守護領国制論・国人領主制論を軸に行われていた。このため、小川氏が行った守護発給文書の分析を核とする研究方法は低調で、守護の政治史的な研究は大きく遅れることとなった。また、満家以降の管領家畠山氏は、幕府の動向の中でその動きが述べられることはあっても、畠山氏の分国支配そのものが、研究対象となることはなかった。

管領家畠山氏の分国支配研究は、「増訂室町幕府侍所頭人並山城守護付所司代・守護代・郡代補任沿革考証稿」(1)以降の今谷明氏による、一連の守護制度研究によって開始されたと言っても過言ではない。今谷氏の研究に関しては後述するので、ここで評価を述べることは差し控えたいが、今谷氏が守護正員・守護代等分国支配機構や人名を検出したことが、その後の研究の基礎となったことは事実である。

本書は、時期的にも方法論的にも小川氏の研究を継承することをめざし、管領家畠山氏の家系や分国支配について、検討していくこととする。そして二流に分かれた畠山氏のうち、義就の系統を義就流、弥三郎(政久)・政長の系統を政長流とする。これは多分に便宜的なものであるが、周知の如く、義就と政長の抗争が応仁の乱や山城の国一揆を招いており、義就と政長の名前を冠すること適切と判断したからである。が以下序章では、畠山氏の世襲分国(分郡を除く)である、紀伊・河内・越中守護としての畠山氏に関する政治史上の位置づけについて、述べていきたい。

## 一 紀伊畠山氏研究史

本節では、紀伊畠山氏の研究史を述べる。江戸時代に編纂された『紀伊続風土記』には「古文書之部」が設けられているように、紀伊には中世史料が豊富に存在している。そのため、戦前より紀伊の室町期に関する研究の大半は『高野山文書』等を利用した荘園制に関するものであり、戦後も荘園制や在地領主制に関するもので占められていた。また、戦国期の研究も、戦前より石山合戦との関係から雑賀衆を中心とした一向一揆に関するものが大半であった。このように室町期と戦国期の接点が長い間存在しなかったのが、紀伊の中世後期史研究の実体であった。そのため本節では、まず、室町期の研究状況を述べ、次に戦国期の研究状況を述べていくこととする。

高野山領荘園の研究をされた江頭恒治氏は「公方役考」<sup>(2)</sup>で、応永二十九年(一四二二)の官省符荘・志富田荘等の史料をもとに、守護畠山氏が京上夫・持夫等の守護役を賦課し、これが厳しい課役であったとされた。江頭氏の研究は「高野山文書」によった実証的なものとされ、戦前に於いては抜kindでた研究であった。だが、特定の時期の特定地域の史料による考察であるとともに、高野山と守護畠山氏の関係が述べられていない。さらに実際に守護役が重いか否かの数量的な実証が欠落しており、今日の政治史の立場から見れば問題が多い。

また、『高野山文書』には、守護畠山氏と主従関係を結んだ頼淵氏が民衆闘争によって在地から追放された件に関する史料が存在している。この関係から守護畠山氏の支配に論究されることが少なからず存在した。

以上のような事情から、紀伊の室町期における守護支配に関しては、荘園制研究の枠組みから論究する場合が多かった<sup>(3)</sup>。これらの研究は、守護畠山氏を地域的封建権力としてとらえ、領域的な領国支配を行っていたことを前提としている。これには以下に述べる守護領国論が影響していると考ええる。

室町期の守護研究において、守護領国制が一九五〇年代には、学会で通説的地位を占めるに至ったことは、先学諸兄が明らかにされているとおりである。守護領国制において重要な位置を占める永原慶二氏の「守護領国制の展開」<sup>(4)</sup>では、畠山氏の紀伊支配に関して、「十四・五世紀を通じて典型的な守護領国制を展開しえたのは斯波・細川・畠山という比較的中央・先進地帯周辺に配置されたもののみであつた」とされた。だが、永原氏の

論文中で紀伊に関して守護領国制を論証した記述が無いばかりか、紀伊に関する先行研究の注記も無い。筆者とすれば、紀伊における守護領国制が論証されたとは言い難いのであるが、この見解が研究者に支持され、紀伊においては守護領国制が研究の前提とされることとなった。

管見の範囲で、紀伊の守護領国制について説明を行ったのは、杉山博氏の「守護領国制の展開」<sup>(5)</sup>である。杉山氏は大内義弘が紀伊守護であった時の南部荘を例として、守護領国制について説明されている。ただし、杉山氏は大内義弘の時点で守護の被官となったとは言い難い国人の愛洲氏を、守護被官の国人として守護領国制の基盤とするなど、論証が十分ではない。

紀伊における守護領国制は、十分な論証と政治上の位置付けがなされないまま、主に社会経済史研究者の間で使用された。そのため、政治史では過去の遺物となった「守護領国制」が、二一世紀に至っても和歌山県下の自治体史等では散見する。

次に戦国期の紀伊畠山氏研究について見ていこう。紀伊における畠山氏は、天正十三年（一五八五）の羽柴秀吉の紀伊平定まで名跡が続いていく。だが、戦国期の紀伊は「自ら大名的成長を遂げなかった土豪の勢力の余勢が、なお典型的に残存して」いたとし、「大寺社と土豪、この両者の密接なる関係が強大なる勢力を築いて」いたとする伊東多三郎氏が「近世封建制度成立過程の一形態 紀州藩の場合」<sup>(6)</sup>が述べた見解に依拠し、守護権力は研究対象とならなかった。

戦後も研究対象は在地領主制や一向一揆に向けられ、守護権力は研究対象とされなかった。一向一揆研究で著名な笠原一男氏は、紀伊に関して「在地の土豪・国人等も紀伊における地形の独立性と割拠性を利用して、それぞれ何時までも対立を続けており、守護勢力として入国した畠山氏もここに十分な領国支配を完成することができなかつた」<sup>(7)</sup>とされた。

室町期に守護領国制が成立したとすれば、笠原一男氏の守護畠山氏が「十分な領国支配を完成することができ

なかった」とする見解は成立しない。両者の見解の間には明らかに矛盾が存在するが、そのことは長年にわたり顧みられなかった。それは、紀伊における中世後期の研究対象が、政治史に向けられなかったからである。

紀伊の戦国期研究において、大きな役割を果たしたのが、石田晴男氏の「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』一向一揆と他勢力の連合について」である<sup>(8)</sup>。石田氏の研究は一向一揆（惣国一揆）論であるが、守護権力と一揆の関係について論旨を展開しており、守護畠山氏研究の上でも、数々の論点を提示している。以下、本書に關係する部分で、筆者が理解した石田氏の見解を示してみたい。

明応の政変によって紀伊の大半は畠山尚順（政長の嫡子）方となったが、湯河氏は奉公衆であつたため、幕府（細川政元政権）方であつた。

畠山尚順による湯河退治が行われたが湯河氏は滅亡せず、永正十七年（一五二〇）に至り湯河光春は紀南で国人一揆を形成して、畠山尚順を紀伊から追放し、守護権力を排除した支配体制を確立した。

天文三年（一五三四）、河内で畠山植長が更迭されて畠山長経が擁立されたが、同時期に紀伊では、非門徒の湯河氏と門徒を含む雑賀衆との間で「惣国一揆」が成立した。

雑賀衆と湯河氏の「惣国一揆」は、天文十一年（一五四二）の畠山植長の河内進攻に伴い、紀伊一國規模の「惣国一揆」に拡大し、「惣国一揆」は守護畠山氏を推戴した。

畠山植長の河内復帰に伴い、紀州惣国勢は河内で活動を行った。

永禄年間の畠山氏の内紛に際し、湯河直光は畠山高政を助けて河内に進攻し、河内守護代となった。

畠山氏と三好氏の河内争奪戦にあたり、湯河直光以下紀州惣国勢は畠山高政を助けて河内に進攻したが、その動員規模は紀州惣国一揆勢の河内進攻以降で最大規模であつた。

石田氏の畠山氏・湯河氏についての理解に対する筆者の見解は、本書三部二章で述べているので、ここでは触れない。ここでは、石田氏の研究がその後の守護権力研究にどのような影響を与えたかを述べたい。

石田氏の研究は、戦国期の紀伊政治史を通史的に論じており、発表当時は好意的に受け止められた。しかし、石田氏の研究は、史料批判や解釈が十分に行われたとは言えず、史料の扱い方でも教訓を残した。今日、紀伊の戦国期を記述する際、論旨が破綻した石田氏の論考をそのまま使用することは無い。

石田氏の研究は、政治史の立場で立論されている。石田氏の研究によって、それまで別々に行われていた一向一揆研究と守護制度研究をつなげる方向性が示され、戦国期の紀伊における政治史の過程が系統的に把握できる道筋ができた。特に奉公衆湯河氏に関しては、それ以前の戦国期研究では対象とされておらず、守護権力を考察する上で奉公衆を研究する必要があることを示す等、戦国期研究に新しい論点を示している。その意味で紀伊の戦国期政治史研究は、石田氏の研究に始まると言っても過言ではないだろう。

後掲する今谷明氏の研究も同様であるが、石田氏は史料の出典を丁寧に注記された。これは研究を志す者にとって、研究の手がかりを与えてくれる役割を果たしている。

紀伊の室町・戦国期権力論において、新しい見解を示したのが、矢田俊文氏である。矢田氏は「中世後期紀伊国における領主権力の自立」<sup>(9)</sup>において、奉公衆湯河氏に関して詳細な検討を行い、室町期には奉公衆が守護権力の介入を許さない独自の政治領域を有していたことを論証された。矢田氏の研究によって、紀伊の守護権力論のあり方が論証され、その後の研究の指標となった。

河内畠山史研究において、数々の業績を上げられている小谷利明氏は、「畠山植長の動向」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)、「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)と、畠山氏に関する重要な論文を発表されている。小谷氏の研究に関しては、次節で触れるが、畠山氏研究は新しい段階に入ったと言えるよう。

## 二 河内畠山氏研究史

本節では、河内畠山氏の研究史を述べる。河内守護畠山氏の研究は、『大阪府史』編纂事業とともに始まったと言っても過言ではないだろう。これは、河内守護の任免を考証した今谷明氏の「室町時代の河内守護」<sup>10</sup>が、『大阪府史』編纂の一環として発表されたからである。畠山氏の場合、一五世紀半ばに分裂抗争が始まっており、もとより正確な守護正員の復元と、義就流と政長流の家系の確定がなければ、研究には取り組めなかった。「室町時代の河内守護」における今谷氏の業績を次に示す。

まず、それまで混乱していた畠山氏の家系と人名をある程度確定した。畠山持国の弟である持永・持富の関係を明らかにし、政長と弥三郎は別人（兄弟）であることを論証した。「家督」と家督継承予定者である「跡目」を区別して論じたことは、従前の混同を正す上で重要なことであった。

大和国宇智郡の守護職を畠山氏が保持しており、分郡守護の概念を提唱された。

河内守護代はわずかな例外を除き遊佐氏が踏襲したことを明らかにされ、守護代の下に小守護代が存在したことを検出された。

戦国期に両畠山氏による半国守護体制が取られていたことを発見された。

今谷氏は畠山氏の分裂抗争に際して京都の政権を幕府と認定し、その政権から補任された者を守護正員として、両畠山氏の錯綜した関係を整理された。応仁の乱時の西幕府論（西軍守護）や明応の政変以降の足利義材の動向を無視したとも思える今谷氏の手法は、今日的観点から言えば問題も多い。だが、両畠山氏の家系すら整理されていなかった一九七六年当時において、一刀両断的な今谷氏の方法は、論旨が明確になり、有効な手法であったと言える。

河内守護の任免においては、基本的には現在も今谷氏の研究に依拠している。これは今谷氏が古文書や古記録といった良質の史料を典拠として守護の任免を考証したからである。軍記物や諸系図類等を典拠としなかったこ

とは、研究とすれば当然のことであろう。しかし、今谷氏の研究以前の畠山氏に関する記述では、軍記物や諸系図類に依拠することが多く、歴史研究の基本がなおざりにされていたと言ってもやむを得ない状況であった。

今谷氏の研究は山城・河内・摂津と進み、山城・河内・摂津の支配体制の比較がなされた。そのため、今谷氏は「摂津における細川氏の守護領国」<sup>(11)</sup>中でも、畠山氏の分国支配について重要な指摘をされている。分国支配に関する国人不採用の原則の問題である。今谷氏は畠山氏の河内支配体制について「そのあり方は、在地性の脱却を前提とし、すなわち守護内衆が世襲制を温存しながらも官僚組織により近い形態で維持されたという点で、兵農分離に至る過渡的産物としての室町的守護の典型的な例といえるのではあるまいか。」とされた。

今谷氏の諸説の意義や問題点に関しては、先学諸兄の批評が出されており、筆者としての見解は本書の各章で示しているので、そちらを参照されたい。本章では、今谷氏の説がその後の畠山氏や畿内の戦国期政治史研究に与えた影響について記す。守護正員のみならず守護代・郡代等の復元より守護支配の制度・機構を分析する今谷氏の研究方法は、山城・河内・摂津等の研究を発表された一九七〇年代後半ばかりか、今谷氏が『守護領国支配機構の研究』を上梓された一九八〇年代後半にあっても、戦国期の畿内政治史を研究する際には大きな指標であった。そのため、筆者や小谷利明氏の初期の研究<sup>(12)</sup>に大きな影響を与えることとなった。

河内守護研究に大きな影響を与えたのが「戦国期守護論」<sup>(13)</sup>である。矢田俊文氏は「幕府が全国支配権の主要な部分を放棄した一六世紀前半は守護全盛の時代であった。幕府権力の重しを取り除かれた後の守護は、一国公権を行使し、分国支配を強化していった」とされた。この論文で提唱された「戦国期守護」「一国公権」の概念は、戦国期の河内の状況を説明する上で、きわめて重要な見解である。

矢田俊文氏は一九九一年「戦国期河内国畠山氏の文書発給と銭」<sup>(14)</sup>を発表された。この論文は矢田氏自身が著書の「あとがき」で書かれているように、「戦国期守護という存在が、形式的なものではなく、実体をもった公権力であることを論証するために」書かれたものであるとともに、「今谷明氏の研究（『守護領国支配機構の



研究』法政大学出版局、一九八七年）を乗り越えることをめざして「書かれたものであった。この論考の内容を以下に示す。

「観心寺文書」「金剛寺文書」に残る畠山氏関係の判物を分析し、文書の文面は受益者の要求によって作成され、受給者が銭を費やして手に入れる実態を証明され、戦国期の畠山氏の文書が名目的なものではないことを論証された。

発給文書の検討から、戦国期の河内が、守護代主導による守護と守護代による重層的な支配体制がとられていたことを論証された。

永禄年間に三好実休（之相）が相伴衆となったことで、公権力者として河内を支配できたことを論証された。矢田氏の研究は、小谷利明氏や筆者が、いわゆる今谷氏的方法から解放される上で、大きな役割を果たした。

小谷氏や筆者の初期の論考は、手探り状態での記述であったこともあり、論旨や内容が錯綜していた。このような河内畠山氏の権力について整理されたのが川岡勉氏である。以下に川岡氏が「河内国守護畠山氏における守護代と奉行人」<sup>(15)</sup>で、論証された要点を示してみたい。

室町期から戦国期への移行にあたって、両畠山氏において守護奉行人制の整備と守護代の自立化を確認できるとされた。そして、義就流と政長流の共通点と相違点を明確にされ、義就流は奉行人に支えられる面が強く、政長流は守護代の自立性が顕著であることを指摘された。この守護奉行人の整備と守護代の自立は、六角氏等他の守護権力でも指摘できるとされた。

畠山氏の河内支配に関し、室町期は河内国内の領主層を分国支配に登用することは少なかった。だが、一五世紀半ばに両畠山氏の分裂・抗争が始まると、双方ともに軍事力の増強と権力編成の強化が求められ、両畠山氏ともに河内の在地領主層を分国支配に登用した。

一六世紀になると小領主・地侍層の成長が顕著になり、畠山氏の分国支配にかかわるようになった。だが、

分国支配の実権が下降しても、分国支配を幕府から国政上で公認されていたのはあくまでも守護家なので、守護守護代の家格は維持された。

川岡氏が従来は別個に検討されていた畠山氏権力に関し、一四世紀末から一六世紀までのいわゆる河内守護の時期を通して検討された。これにより、畠山氏の河内支配の変遷について、一つの流れとして把握することが可能となった。

また、川岡勉氏は「室町幕府 守護体制の変質と地域権力 上意と衆議の関わりを中心に」<sup>(16)</sup>において、室町期から戦国期に至る畠山氏の河内支配を、室町幕府・守護体制の中で論じられた。従来も室町幕府論の中で、畠山氏が語られることはあった。だがそれは、幕府内部での有力守護としての畠山氏の動向であって、畠山氏の分国支配体制から論じることはなかった。川岡氏が従来論証が不十分であった畠山氏の分国支配と室町幕府の関係を結節させたことは、室町幕府 守護体制を支えた守護権力を検討する上で、大きな収穫であった。

畠山氏は激しい家督紛争を繰り返したが、守護家の家督認定における將軍の上意と家臣団の衆議に関して川岡勉氏は、「室町幕府 守護体制の権力構造 上意と衆議との関わりを中心に」<sup>(17)</sup>において、次のように論じられた。すなわち守護家家督の帰趨は、上意との関係に大きく規定され、守護家内部の衆議はむしろ上意主導の裁定を支える機能を果たしており、衆議の役割を過大に評価すべきではない。同時に上意の介入に説得力や実効性を付与するためには、分国内への目配りが不可欠であった。守護職の維持・確保は上意の認定が不可欠であると同時に、地域社会の自立性にも基礎づけられていたとされた。この研究によって、複雑化した畠山氏の家督紛争が整理できることとなった。

河内守護畠山氏を研究する上で、小谷利明氏の研究の果たした役割は重要である、と言うより小谷氏の研究なしでは、河内畠山氏の研究は進まなかったと言うべきであろう。二〇〇三年小谷利明氏はそれまでの研究成果をまとめた『畿内戦国期守護と地域社会』（清文堂出版）を上梓された。また、前節で述べたように、小谷氏は『畿

内戦国期守護と地域社会』を上梓後も、「畠山植長の動向」「畿内戦国期守護と室町幕府」と、畠山氏に関する重要な論文を発表されている。本書に所収した各論文は、それ以前に発表したものであったり、小谷氏と筆者が相互の研究成果によって論を展開したこともあり、ここで小谷氏の研究に関して述べることは差し控えたい。小谷氏の最新の研究成果を反映しきれないことは、筆者の怠惰によるものである。最近の小谷氏の研究は、河内・紀伊を一体として把握された上で室町幕府との関係を論じており、今後の研究の方向性を示している。

### 三 越中畠山氏研究史

本節では越中畠山氏の研究史を述べる。越中の室町・戦国期研究は、加賀の一向一揆研究の影響を受けた一向一揆研究が大きな柱となっていた。また、隣国越後には上杉氏の有力内衆長尾氏が存在しており、戦国期に長尾氏が越中に侵攻したことから、それとの関係での研究が行われていた。このように、越中は越後と加賀の間に位置することから、直接守護畠山氏が研究対象となることは無かった。以上のような事情から、越中畠山氏研究は、大半が地元富山県下での研究となった。

越中畠山氏の研究は、一九六〇年代後半以降の『富山県史』編纂事業とともに行われることとなった。越中中世史研究の中心となったのが、久保尚文氏の研究であり、久保氏は一連の研究成果を『越中中世史の研究』（桂書房、一九八三年）としてまとめられた。久保氏の著書の中で、越中畠山氏に関する主な研究成果は、以下の点である。

越中守護代家神保氏の事績と家系を明らかにされた。

畠山尚順が尚慶と改名した事実とその時期を明確にされた。

久保氏の研究には、畠山尚順が明応七年（一四九八）に越中に下向したなど、実証的とは言えない部分が存在

する。しかし、久保氏の著書が刊行された時点で、河内・紀伊は両国とも、守護代家の事績が明らかにされたとはいえず、越中畠山氏研究は、他の分国の畠山氏研究に先んじていたと言える状況であった。

『富山県史』編纂に携わった熱田公氏は、「畠山家分裂のはじまりをめぐる越中と大和」を発表された<sup>(18)</sup>。この論文は、『富山県史』（通史編 中世、一九八四年）で執筆した内容に関連したものであり、越中畠山氏研究にとって、『富山県史』（通史編 中世）の刊行が、一つの画期となったことは間違いないだろう。

『富山県史』（通史編 中世）刊行以降、前出の熱田氏の論考以外、越中畠山氏研究は、高森邦男氏の一連の研究<sup>(19)</sup>を除いては低調である。これは越中畠山氏研究が、未だに『富山県史』（通史編 中世）の枠組みから発展していないことを示しているよう。たとえば、「両畠山家融和と越中守護代家更迭 長尾為景越中進攻問題の再検討」<sup>(20)</sup>（『富山史壇』一四四号、二〇〇四年）で述べられた久保尚文氏の畠山氏に関する見解は、一九八〇年代の認識そのままであり、一九九〇年代以降の畠山氏研究の成果を反映していないと言っても過言ではない。

越中畠山氏研究においては、『富山県史』の業績を絶対視するのではなく、近年の河内・紀伊等の研究状況を踏まえた上で、新しい見解を提示する必要がある。また、河内・紀伊と同様に、一向一揆研究との整合性を取ることも重要であろう。

## おわりに

守護発給文書に関しては、古文書学的な研究がなおざりにされてきたこともあり、各史料集の文書名の付け方の基準も一貫性が無かった。畠山氏関係の発給文書に関して、『室町・戦国期畠山家・赤松家発給文書の帰納的研究』（研究代表者矢田俊文氏、二〇〇三年）で、発給文書の大半が整理され、統一した基準で文書名が付けら

れた。同書では畠山氏関係の発給文書を機能別に分類しており、書状形式であっても、積極的に判物としている。本書の文書名は、基本的に同書によっている。これらの点を踏まえた上で、本書の論点を以下に示してみたい。

第一部では、紀伊守護家としての畠山氏の家督の変遷と、政長流・義就流の当主の交替を考察する。そして可能な限り、守護代・奉行人等分国支配にあたった人物を復元する。これは、畠山氏研究の基礎的作業であり、両畠山氏の家系と内衆を明確にしなければ、次の段階へ進めない重要な事柄であると考えている。

第二部では、畠山氏の分裂抗争の原因について、内衆の動向を中心に考察する。内衆の対立が如何にして生まれ、どう展開したかが畠山氏の分裂抗争を見る上で、重要だと考えているからである。次に実際畠山氏の分裂抗争が、紀伊の場合どのように展開したのかを、畠山持国から義就・政長の時期までを中心に検討していく。

第三部では、紀伊の守護家畠山氏と奉公衆家である湯河氏・玉置氏・山本氏とのかかわりについて、最大の勢力を有した湯河氏との関係を軸に考察する。奉公衆は守護から独立した支配領域を有していたが、戦国期になると、守護家畠山氏とともに、畿内で軍事行動を行っている。畠山氏権力を分析する上からも、紀伊の政治状況を検討する上からも、奉公衆家である湯河氏・玉置氏・山本氏の動向は重要である。

第四部では、河内を中心にした戦国期の畠山氏権力について考察する。まず、戦国期の政長流・義就流の当主と家系の確定を行う。次に守護代家の権力を検討する。具体的には、政長流では遊佐長教、義就流では木沢長政の権力について述べ、河内半国体制の実相をあかしていきたい。

第五部では、主に細川氏綱の乱以降の河内支配に関して考察する。戦国期には守護代家遊佐氏の権力が伸張するが、遊佐長教の没後その権力がどのように変化したか、他の内衆の動向とともに検討したい。そして、畠山氏が河内を失陥することとなった教興寺合戦の意味について考えたい。最後に、織田政権下の畠山氏の動向について述べていきたい。

本書では、戦国期に畠山氏当主が直接在国して支配した分国である河内・紀伊を一体として捉え、各々の様相

を検討することで、守護家畠山氏の姿を明らかにしていきたい。以上、極めて限られた視点からではあるが、このような問題意識のもとに、本書の記述を進めていく。

#### 註

(1) 『京都市史編纂通信』七〇・七二・七四(一九七五年)、後に同氏著『守護領国支配機構の研究』(法政大学出版会、一九八六年)に所収(一章)。なお、立論の都合上、序章と他の章とは、研究論文引用の注記が異なっていることをお断りしておく。

(2) 同氏著『高野山領荘園の研究』(有斐閣、一九三八年)。

(3) この立場からの論文には、木村安男氏「守護畠山氏の紀州支配と守護課役」(渡辺広先生退官記念会編『和歌山の歴史と教育』所収、一九七九年)、同氏「中世後期の守護裁判 紀伊国守護畠山氏の場合」(『鳴門史学』四、一九九〇年)、同氏「中世後期紀伊国における守護裁判 守護被官鞆淵範景と高山の相論を通して」(『和歌山県史研究』一九、一九九二年)、伊藤俊一氏「紀伊国における守護役地域社会 『荘家の一揆』の前提」(『年報中世史研究』二七、二〇〇二年)等がある。

(4) 『史学雑誌』六一 三(一九五一年)、後に同氏著『日本封建制成立過程の研究』(岩波書店、一九六一年)に所収(二部八)。

(5) 『岩波講座日本歴史』七・中世三(岩波書店、一九六三年)。

(6) 『社会経済史学』一一 七(一九四一年)、後に同氏著『近世史の研究』四冊(吉川弘文館、一九八四年)に所収(二部)。

(7) 同氏著『一向一揆の研究』(山川出版社、一九六二年)十五章七節。

(8) 『歴史学研究』四四八(一九七七年)、後に峰岸純夫氏編『本願寺・一向一揆の研究』(『戦国大名

論 集『13、吉川弘文館、一九八四年』に所収。

(9) 有光友学氏編『戦国期権力と地域社会』（吉川弘文館、一九八六年）。後に改題の上、同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』（塙書房、一九九八年）に所収（二章五節）。

(10) 『大阪府の歴史』七（一九七六年）、後に同氏前掲書に所収（二章）。

(11) 『兵庫史学』六八（一九七八年）、後に同氏前掲書に所収（四章）。

(12) 「戦国期河内における国郡支配について」（『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』一、一九八九年）。

(13) 今岡典和氏・川岡勉氏・矢田俊文氏「戦国期研究の課題と展望」（『日本史研究』二七八、一九八五年）。

(14) 『ヒストリア』一三一（一九九一年）、後に改題の上、同氏前掲書に所収（二章三節）。

(15) 『愛媛大学教育学部紀要 第一部 人文・社会科学』三〇一（一九九七年）、後に同氏著『室町幕府と守護権力』（吉川弘文館、二〇〇二年）に所収（三部二章）。

(16) 『日本史研究』四六四（二〇〇一年）、後に同氏前掲書に所収（二部二章）。

(17) 『愛媛大学教育学部紀要 第 部 人文・社会科学』三三 一(二〇〇〇年)、後に同氏前掲書に所収(二部一章)。

(18) 楠瀬勝氏編『日本の前近代と北陸社会』(思文閣出版、一九八九年)。後に熱田氏著『中世寺領荘園と動乱期の社会』(思文閣出版、二〇〇四年)に所収(部三章)。なお、この論文に関する筆者の見解は、本書二部一章を参照されたい。

(19) 「室町幕府守護制度考 越中国を素材として」(『富山史壇』九五、一九八七年)、「戦国期における北国社会の政治秩序について」(高澤裕一氏編『北陸社会の歴史的展開』所収、能登印刷、一九九二年)、「畠山勝王をめぐる諸問題」(『富山史壇』一四五、二〇〇四年)等。

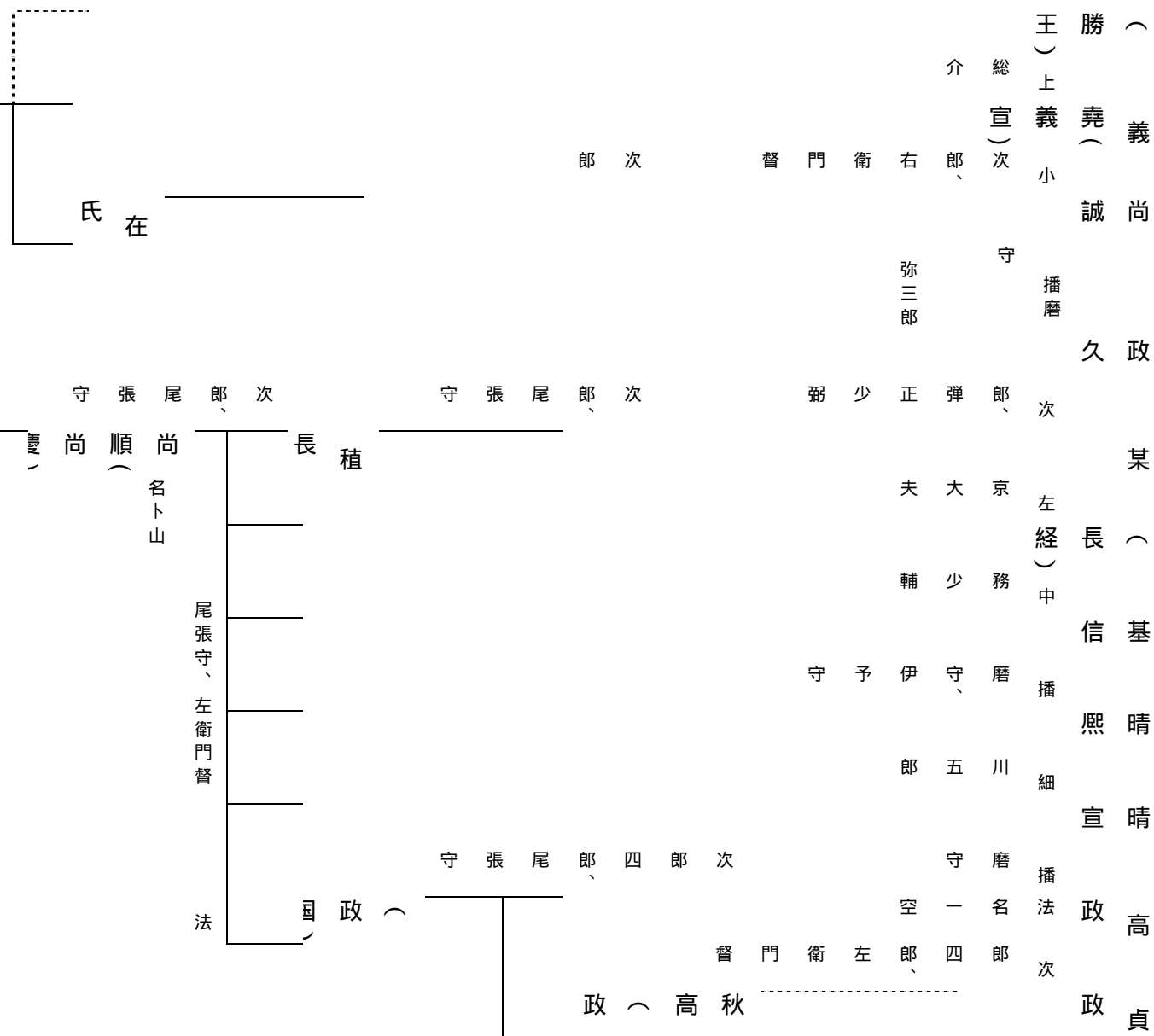
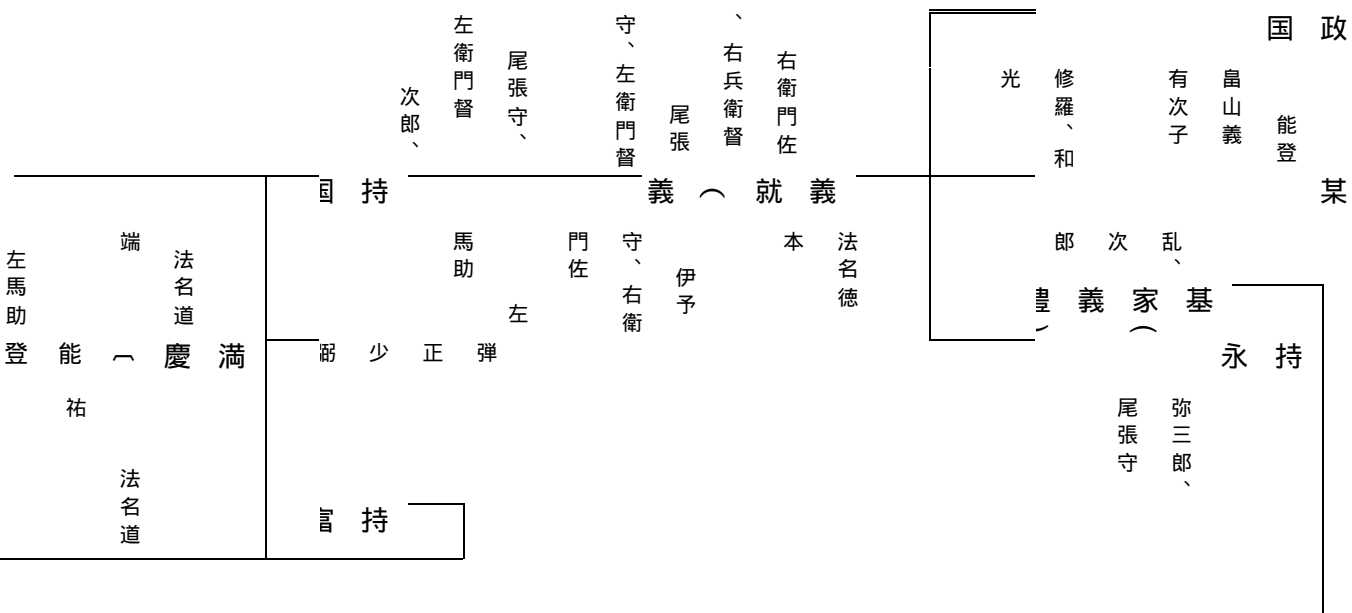
(20) たとえば畠山勝王について、畠山尚順の猶子であることに固執している。だが、長尾為景にとって越中進攻の名目上、越中守護家である畠山氏と共同戦線を張ることが必要であった。そのためには、勝王守護家畠山氏の一員であれば、義就流であっても差し障りが無かったと筆者は考えている。久保氏の文に関しては、本書四部四章も参照されたい。

論 が



管領家畠山氏系図

次  
郎



- ( 1 ) 本系図は、本書で論証した成果をもとに作成した。
- ( 2 ) 畠山尚順の子息は、史料に名が見える順に並べた。
- ( 3 ) 一部の人物は良質の史料を典拠としなかったほか、氏名不詳の人物や女性は、原則として省略した。
- ( 4 ) 畠山弥九郎のように、系譜上に示すことが困難な人物は省略した。

# 第一部

## 畠山氏の紀伊支配

## 第一章 紀伊守護家畠山氏の家督変遷

### はじめに

近年室町時代の守護制度に関する研究は著しく進展した。紀伊においても、南北朝期から大内義弘の時期に関しては、すでに先学諸兄の優れた研究が存在することから、本章では対象としない<sup>(1)</sup>。したがって、本章では、応永の乱の後、紀伊守護に就任した畠山基国以降、元龜四年（一五七三）の室町幕府滅亡までの期間を対象としたい。

畠山基国が紀伊守護に就任して以降は、「河内・紀伊・越中の三守護が一括して畠山惣領に相続されたことは例外がない」との今谷明氏の見解<sup>(2)</sup>をもとにして、今谷氏が考証された河内守護をそのまま紀伊守護に当てはめることが通例化していた<sup>(3)</sup>。確かに、畠山氏の家督と三力国の守護職は関連しており、今谷氏の見解は卓見であった。しかし、今谷氏も述べておられるように、河内に於いては、名目上の守護と実際の支配者が異なる場合が存在していた。紀伊の場合も同様の事態が想定でき、実際に紀伊の在地情勢を検討しないまま、河内守護を紀伊守護に当てはめる方法は、便宜的・形式的作業にすぎないと言えよう。

本章では、室町時代の紀伊における守護支配体制を研究する基礎的作業として、畠山氏家督の変遷と、守護正員の検出を行いたい。守護家の家督は幕府・將軍によって決定されるものである。しかし、応仁の乱以降の紀伊守護を検討するにあたっては、何を持って幕府・守護正員とするかが必要である。本章は基本的に今谷明氏の研究方法に従っているため、守護正員の判断は、今谷明氏の方法を用いたい。

一方、現実には畠山氏が義就流と政長流に分裂して以降、今谷氏も河内で明らかにされたように、守護正員と分国を支配している者が別の場合が存在する。この場合、両家ともに守護家としての意識が存在していたことから、守護正員であるか否かにかかわらず、両畠山氏の活動に言及していく。

## 一 嘉吉の変までの推移

繰り返しになるが、応永の乱で畠山基国が紀伊守護に就任して以降、畠山氏が紀伊の守護職を保持していた。

畠山基国の支配体制と業績に関しては、小川信氏の著書に詳しく、そちらを参照されたい。

応永十三年（一四〇六）正月十七日、畠山基国が没し、嫡子満家がいるにもかかわらず、次子満慶が畠山氏家督を継承した<sup>(4)</sup>。その理由について小川信氏は、嫡子満家が応永の乱以前に足利義満の意に背いて退けられたまま赦されなかったからとされた。

『看聞日記』（『続群書類従』補遺）応永二十五年（一四一八）六月六日条には、畠山満慶が足利義嗣の謀叛に与したとする風聞が流れたと記している。足利義満が晩年に、嫡子の義持よりも次子の義嗣を寵愛したことは周知の事実であろう。畠山満慶が義嗣に近かったことが事実とすれば、足利義満は畠山基国の嫡子満家を差し置いて、足利義嗣方の次子満慶を畠山氏家督に据えたことになる。また、畠山満家は將軍足利義持に近かったため、足利義満没後に畠山氏家督の座につけたと見ることができよう。

畠山満慶の紀伊守護在職の下限は、一部二章で後述の如く、守護代遊佐家長（祐善）が応永十五年（一四〇八）六月二十一日まで還俗していなかったことにより、ここまで引き下げることができる。したがって、畠山満家の家督相続は、応永十五年（一四〇八）六月二十一日以降、同年九月十二日以前<sup>(5)</sup>の間と考えられる。

『史料綜覧』では、永享五年（一四三三）九月十九日に畠山満家が没し、嫡子持国が家督を相続したとする。

ここで畠山氏の家督相続の原則について考えてみたい。『満濟准后日記』（『続群書類従』補遺）永享五年（一四三三）十一月十二日条に「畠山尾張守今日初出仕」と、持国が幕府に初出仕した記事を書せ、同二十四日条には、「畠山統目案堵（安堵）今日書出」と、家督相続の記事が見える。やや後の記事だが、後掲する『建内記』（大日本古記録）嘉吉元年（一四四一）七月一日条には、畠山満家が没して持国が跡を継いだと記している。畠山基国から満慶への相続も没後相続であったことから、畠山氏の家督は没後相続が原則であった。

畠山持国は、永享十三年（一四四一）正月二十九日、將軍足利義教の勘気を被って河内に没落し、家督は舎弟の持永に移った。持永の紀伊守護在職期間は、嘉吉元年（一四四一）七月四日に没落するまでのわずかな期間に過ぎないが、その間の紀伊の情勢はどのようなものだったのであろうか。それを知ることのできる数少ない史料が、次に掲げる「禅林寺文書」（『和歌山県史』中世史料二）五九号である。

#### 寄進幡河寺宝塔燈油田事

合寺所寺段小者、在所大野郷

井松原外新開云々、

右為現当二世所願成就、永燈油田而無懈怠、可有備進之状如件、

嘉吉元年六月十四日

越前守国継（遊佐）（花押）

遊佐国継は、一部二章で後述する如く、元来畠山持国の内衆である。それが持永が守護在職中の嘉吉元年（一四四一）六月十四日に活動が見られるのは、如何なる事情によるのだろうか。『建内記』嘉吉元年（一四四一）七月一日条には、次のように記している（以下史料は、必要部分のみ抜粋）。

畠山一流事、故左衛門督入道道端逝去之後、長子尾張守持国朝臣相統為惣領、舎弟左馬助・弥三郎（持永）此兩人他腹・当腹也、別家居住、惣領加扶持、多年無子細之处、被管人遊佐・斎藤等令張行、内々伺時宜歟、於尾張守

者惣領不可叶、退家宅可下向河内国、以舍弟左馬助可為惣領之由被仰出之、是尾張守近年違時宜有形勢之間、為一流安全之謀歟、若党等如此令了見云々、仍尾張守不及一言之異議下向河内国了、左馬助移彼家各任上意了、

この史料では、畠山持国が將軍足利義教と衝突し、家督干渉を恐れた遊佐勘解由左衛門尉国政や斎藤因幡入道等が、畠山一族の安全を図る目的で、持国の河内への隠居、持永への家督相続を行ったため、持国は異議をささまなかったと記している。河内・紀伊等の畠山氏分国や、京都でさしたる混乱が認められなかったことから、『建内記』の記事は信憑性があり、持国と持永との間に何らかの密約が存在した可能性が窺える。

紀伊では前掲の遊佐国継寄進状の如く、家督相続に伴う在国内衆の交代が見られない。したがって、畠山持永の家督相続は、京都における当主の交代が中心であり、分国支配は持国の体制を引き継いだのであろう。これは必然的に在国内衆に対する持国の影響力の存在が指摘できる。嘉吉の変後程なくして持国が上洛の動きを見せたこと、及び持永の没落とあつけない敗死の背景には、幕府の意向もさることながら、在国内衆に対する持国の影響力も無視し得ないと言えよう。

## 二 持国の跡目問題

嘉吉の変後、畠山持国が家督を取り戻すと、論功行賞と考えられる大規模な人事が行われて、分国の支配体制は一変する。河内では、遊佐・野尻・菱木に代わって、西方・猿倉の名が見える<sup>(6)</sup>。紀伊では一部二章で個別に述べる如く、口郡においては、遊佐・草部から誉田・原・法楽寺に交代する。この後、畠山政長の守護就任時期に、菱木・草部が紀伊在国の内衆として見え、野尻も「二条寺主家記抜」(「続南行雜録」『続々群書類従』



三）永正八年（一五一）七月二日条に「尾州方没落（中略）野尻以下打死」と、政長流の内衆として活動している。菱木・野尻・草部が積極的に持永派として動いたとする史料が無いことから、嘉吉の変後の分国支配体制の一新は、持永派の一掃と言うよりも、持国の河内没落時にも近侍していた側近を登用した面が強いと考えられよう。後の反義就派の形成に鑑みても、嘉吉の変後の内衆の処遇は、重要な意味を持つと言えよう（7）。

さて、畠山氏家督の行方を大きく左右する持国の跡目は、何時如何なる理由で弟の持富に定められたのであるうか。『建内記』嘉吉三年（一四四三）正月一日条に「室町殿<sup>（足利義勝）</sup>飯、管領<sup>（畠山持国）</sup>献如例、依法鉢舍弟尾張守<sup>（畠山持富）</sup>参勤」と記し、持富が法体の持国に代わって椀飯をつとめており、翌四年正月一日にも、持富が法体の持国に代わって椀飯をつとめたことが、『建内記』同日条に記されている。かつて持国も、正長二年（一四二九）三月九日の足利義教の元服に際して、法体の父満家に代わって義教に加冠し、同年三月十五日の將軍宣下の際にも「畠山尾張守<sup>（持国）</sup>為管領<sup>（畠山満家）</sup>代官一人御前二着座」と、父満家の代わりをつとめたことが『満済准后日記』同日条に見える。持国の一連の活動は、畠山氏家督継承者としての行為と見てよい。よって持富の行為も、畠山氏家督継承者としての活動と言えよう。以上のことから、遅くとも嘉吉二年（一四四二）末までには、持富が持国の跡目に決められていたと考えられる。

畠山義就は、『経覚私要鈔』（史料纂集）文安五年（一四四八）十一月二十一日条の記事から計算すると、永享九年（一四三七）生まれとなるが、『大乘院寺社雜事記』（増補続史料大成）延徳二年（一四九〇）庚戌条から計算すると、永享七年（一四三五）の生まれとなる。いずれにしても嘉吉二年（一四四二）の時点では、六歳か八歳の小児であった。持国は嘉吉二年（一四四二）の時点で齢四十を越えており、これは現在と違って老境に入りつつある年齢であった。したがって持国の跡目の決定は、切迫した問題として、義就の成長を待っていられなかったのではないか。

畠山持国の年齢の問題に加えて、嘉吉の変後持富がとった行動も、考慮する必要があるだろう。將軍足利義教

の横死後、持国と持永の対立が深まる中で、嘉吉元年（一四四一）七月四日、持富は河内の持国の元へ走り、これが契機になって持永が没落したと『建内記』同日条は記している。このように持富の持国への帰参は、持国と持永との対立の狭間にあつて決定的とも言える動きであつた。持国が持富を跡目としたことは、この時の行動に対する論功行賞的色彩も濃いと言えよう。

畠山持国の跡目は、文安五年（一四四八）十一月に持富から義就に移った。これを不満とする反義就派の内衆は、享徳三年（一四五四）四月に至り、持富の子弥三郎政久を擁して義就の廃立を企て、ここに畠山氏の家督紛争が表面化した（<sup>8</sup>）。

畠山持富は享徳三年（一四五四）以前に没していたらしく、『康富記』（増補史料大成）同年八月十九日・二十六日条に「故尾張守」と記されている。『康富記』宝徳三年（一四五二）三月二十七日条より、畠山義就（当時は義夏）が伊予守に任じられたことが知れるが、満家・持国と同様の尾張守でない。よつてこの時点では、畠山尾張守持富が生存していたと推定できよう。したがつて持富は、宝徳三年（一四五二）三月二十七日以降、享徳三年（一四五四）四月三日までの間に没したと見られる。

享徳三年（一四五四）四月の反義就派<sup>11</sup>弥三郎派の企ては失敗したが、同年八月二十一日に至り、再び弥三郎派は蜂起した。同日、畠山持国は能登守護畠山義忠邸に逃れ、翌二十二日、義就は没落した（<sup>9</sup>）。

この後の経過を、『康富記』で追つてみよう。

廿六日（<sup>八月</sup>中略）畠山左衛門督入道可隠居之由被申、雖然、不可然之由、為上意被留之、故尾張守子息弥三郎可為家督之間事、可為徳本讓与之儀之由、内々有上意歟云々

廿八日丁未 晴、畠山左衛門督入道徳本隠居建仁寺西来院云々、故尾張守子息弥三郎十三歳云々、令相統一跡之間、今日出仕、懸將軍御目云々、此間管頭細川京兆被扶次彼弥三郎、被隠置者也、自將軍家任徳本入道 申

請旨、被成下弥三郎治罰御教書、雖然於今者被召返件治罰御判、今日有出仕云々、

廿九日（中略）畠山弥三郎、今日移住畠山徳本屋形

（九月）

十日戊午 畠山左衛門督入道徳本、被隠居建仁寺西来院之处、弥三郎相続家督之間、自弥三郎方迎取、同居屋形、是弥三郎成敗毎事可任入道氣色之故也云々、

このように、細川勝元の支援を受けた畠山弥三郎が持国を隠居させ、家督を相続して幕府に出仕した。弥三郎は持国の邸宅に入り、九月十日には建仁寺西来院に隠居していた持国を自邸に迎えている。これは弥三郎が持国の正統な後継者であることを示すために行われた行為であろう。

『康富記』享徳三年（一四五四）九月二十二日条に「是日畠山弥三郎家督相続事治定、被出仕申也」と、再び家督の記事が記されているが、この記事はどのように解したらよいのであろうか。弥三郎の家督相続については、『基恒日記』（増補続史料大成）同年八月二十九日条にも、「畠山弥三郎被仰付家督出仕也」とある。一方、『師郷記』（史料纂集）同年八月二十八日条には、「申剋許、畠山弥三郎参室町殿、騎馬共兩人云々、是去四月比、依左衛門督入道申請、治罰事被仰云々、而今依御免参之云々」と記し、八月二十八日に幕府に出仕して、幕府による「治罰」の命令を「御免」してもらったとするが、家督に関する記載は見られない。

実際は『師郷記』の伝えるように、八月二十八日の段階で弥三郎は、畠山氏の家督を相続する上で、幕府から追討命令が出ていたのでは都合が悪いので、これを取り消してもらったのが事実であろう。『康富記』『基恒日記』に家督に関する記載が見られるは、八月二十八日の時点で畠山持国が隠居し、事実上弥三郎が家督継承者となったため、幕府への出仕を家督承認と見たのではないか。さらに弥三郎にとって、畠山氏家督継承者＝持国の後継者としては、持国を隠居に追い込んだままでは都合が悪く、持国を迎えた上で、九月二十二日に正式の家督承認となったと考えられる。

次にこの時期の分国の情勢を見ていこう。紀伊は概ね持国・義就派が掌握していたことが判明している<sup>(10)</sup>。河内においても弥三郎派の分国支配を示す史料は無く、紀伊と同様に持国・義就派が実権を掌握していたと見られる。弥三郎派は京都での活動が主で、分国支配は後手に回ったようだ。このような中、十一月に至り、状況が大きく変化する。再び『康富記』を引用してみよう。

廿七日（中略）畠山左衛門督入道德本、違例本復之間、今日出仕公方云々、弥三郎（左）右衛門（畠山義統）佐同出仕、彼兩人引禅門之手、被参御前云々、（中略）希代事也云々、

この記事は、隠居したはずの持国が、「違例」として当主の座に復帰したことを伝えている。したがってこの時点で畠山弥三郎は、家督から跡目に戻ったこととなる。持国復帰の事情には、当時の複雑な政治情勢が絡んでいるが、畠山氏内部の事情を考えると、分国を持国・義就方が掌握していたことと、弥三郎が隠居していた持国を自邸に迎えたことで、持国方の影響力が復活したことが考えられる。

持国の復帰は義就派を勢いづかせた。將軍足利義政が義就を庇護したこともあり、義就は享徳三年（一四五四）十二月十三日上洛し、翌十四日幕府に出仕した。分国河内・紀伊を掌握し、將軍の後ろ盾をも得た義就の前に、弥三郎は何ら有効な手段は無く、同二十六日、弥三郎は没落した<sup>(11)</sup>。

享徳三年（一四五四）に至り、畠山弥三郎派が攻勢をかけた背景には、持国の健康状態が関係していたと考えられる。『師郷記』享徳四年（一四五五）三月二十六日条には、持国が享徳二年（一四五三）以来病氣であったと記している。前出の『康富記』享徳三年（一四五四）十一月二十七日条には、持国が將軍の前に出るときも両手を引かれる有様であったと記しているが、これは持国の健康状態がかなり悪化していたことの証左となろう。弥三郎派は、持国の健康状態が悪化したことを好機と見て蜂起したと考えられる。

### 三 長禄・寛正の内訌

享徳四年（一四五五）三月二十六日、畠山持国が没し、義就が家督を継承した。一方の弥三郎も、長禄三年（一四五九）には没し、弟政長が跡を継いで、義就との家督抗争を続けていく。義就は、長禄四年（一四六〇）九月十六日に家督を剥奪されて河内に没落し、同二十三日、政長に家督が与えられることが決定した。九月二十六日、政長は幕府に出仕して、正式に家督を継承した<sup>12)</sup>。

紀伊においては、同年閏九月二十四日・十月四日に、義就方と政長方の合戦が行われ、義就方が敗北するなど、概ね政長方が優勢であった。義就方劣勢の理由としては、同年五月に発生した水論が元で、根来寺衆と守護勢力が衝突した際、守護代遊佐豊後守盛久以下、紀伊における義就方の有力内衆や与党を多数失ったこと、嘉吉元年（一四四一）の持国や享徳三年（一四五四）の錯乱時と違って、義就が幕府・朝廷より公式に追討を受ける立場にあり、加担をためらう勢力が存在したからであろう<sup>13)</sup>。

【表一】

（ ）内は消極派

義村中	就方
（高野山）	（熊野・山）
湯浅	（居氏）

本書一部二章、および二部二章より、長禄・寛正の内訌時の紀伊における義就方と政長方を整理してみると、表一のようになる。一部に流動的な面は存在するものの、表一で示した政長方と義就方の対立関係は、表二で示した応仁の乱時の関係とほぼ同じである。したがって長禄・寛正年間の畠山氏の内訌は、応仁の乱の前哨戦的性格が強いことを物語っている。

寛正四年（一四六三）四月十五日、河内嶽山城が陥落し、義就が高野山に敗走したが、紀伊国内ではすでに寛正三年（一四六二）八月頃より、義就派の活動が活発化していた。一部二章で考察するが、寛正三年（一四六二）八月の時点で、遊佐直重・菱木七郎次郎・野辺十郎等、

政長方の内衆がすでに紀伊の在国していた。これは前述したように、長祿四年（一四六〇）五月の水論の際、義就が紀伊における有力内衆を多数失い、その痛手も覚めやらぬ九月に家督を剥奪されたことと関係が深いと考えられ、義就が支配体制を立て直せなかったことが窺える。紀伊に入った義就は、岡城に拠って抗戦したが、四面楚歌の状態では到底支えることができず、寛正四年（一四六三）八月六日、北山へ没落した<sup>14</sup>。

#### 四 応仁の乱と紀州

畠山義就は寛正六年（一四六五）十一月八日、大和天河に出陣して、活動を再開した。文正元年（一四六六）八月二十五日、吉野を出て大和壺坂寺に陣した義就は、同年十二月二十五日、山名持豊の斡旋により上洛し、翌二年正月二日、幕府に出仕し將軍足利義政と対面した。今谷明氏はこの時点で政長の罷免、義就の還任と見ておられる。

義就が將軍義政と対面した文正二年（一四六七）正月二日、義政は政長の第へ臨もうとして中止し、五日には義就の供応を受けている。翌六日義政は、政長の第を義就に与えようとした上、政長の内裏四足門の守衛を免じている。政長の罷免と義就の復権は今谷明氏の言われるとおり確実である。だが、家督を巡る政長・義就両者の確執が、正月十八日に起こった上御霊社の戦いの原因となるのであるから、正月二日における義就の家督回復は、やや結論を急ぎすぎた感がある。この上御霊社の戦いで政長は敗北して没落した。同二十三日付で幕府が政長と党の追捕を興福寺に命じていることが、『大乘院寺社雜事記』同年二月十六日条に記されていることから、上御霊社の戦いの後、義就が家督を回復したことは確実である。

このように京都では、義就方有利に事が運んでいるが、ここで紀伊の情勢の概略を、二部二章をもとに述べてみよう。紀伊では畠山義就の吉野出陣と同じ頃、能登守護家畠山義有の次男で義就の養子となっていた政国が、

活動を開始した。『蔭涼軒日録』（増補続史料大成）文正元年（一四六六）七月二十日条に、政長方の「遊佐被官人草部太郎左衛門」が、「破損船」と号して「那賀山」より輸送中の材木を押領した記事が見えることから、文正元年（一四六六）七月の時点では政長方が、少なくとも口郡を押さえており、政国の活動が本格化したのは、これ以降と考えられる。文正二年（一四六七）正月一日に南部城（高田土居城）を攻略、広城も落とすなど、政国は政長方の拠点を相次いで手中に収め、根来寺を除く紀伊の大半は義就方に属したと言われるほど、その勢いは強かった。政国は義就の後継者としてその権限を代行したのであり、彼自身が守護に就任したわけではないが、緒戦における活躍は、目覚ましいものがあつた。

応仁元年（一四六七）五月十四日、一転して畠山政長が幕府に出仕した。今谷氏はこれをもって、義就の罷免、政長の還任とされている。確かにこれが契機となつて、政長に味方する細川勝元、義就に味方する山名持豊が、それぞれの与党を招集し、同二十六日、京都での戦端が開かれている。同日、將軍足利義政は、畠山義就に対して「先令下国、全致命堪忍」するよう命じているように、戦闘回避の可能性を探っている<sup>15</sup>。だが、戦端が開かれたため、六月三日足利義政は、牙旗を細川勝元に与え、東軍に加担することを明らかにした。

このような事態の展開に際して、紀伊の情勢は如何に変化したのであろうか。再び二部二章より見ていこう。紀伊の大半を平定した畠山政国は、京都の戦局が逼迫した六月初旬、紀伊より河内に入り、同十七日入京した。一方、応仁元年（一四六七）六月十三日付で、義就与党の蜂起に対して出陣した奉公衆湯河政春の戦功を讃える室町幕府奉行人奉書が発給されるなど、政長方の動きも活発化していた。このことから、六月三日に將軍足利義政が東軍に牙旗を授けたことを契機として、政長が再び守護に還任されたと見なすことができよう。その結果、応仁元年（一四六七）末から翌二年初頭にかけて、政長方は広城・南部城と相次いで奪回した。この後、文明元年（一四六九）十月の西軍に呼応した後南朝の蜂起、同八年（一四七六）十一月から翌九年閏正月にかけての義就方の奥郡における反撃も、大勢を覆すには至らず、政長方優勢の内に応仁の乱の終局を迎えたのである。

【表一】

政 長 方	義 就 方
	畠 山 政 国
草 部 ・ 辺	
根 来 寺 ・ 河 寺	熊 野 三 山 ・ 高 野 山
湯 河 玉 ・ 山 本	
小 山 山 ・ 田 奥 ・ 平 野 等	有 馬 ・ 入 鹿 ・ 日 足 等

表一の際も言及したが、長祿・寛正期と基本的な図式は変化がない。義就に味方した有馬氏は牟婁郡有馬、入鹿氏は牟婁郡入鹿、日足（西）氏は牟婁郡日足を本貫地としていると見られ、表一の土居氏ともども、熊野三山との関係が深く、その影響下にあつたようだ。このように義就は牟婁郡一帯に根強い勢力を持っており、「応仁記」（『群書類従』二十）に「畠山右衛門佐義就、大和・河内・熊野ノ衆催シ」とし、『大乘院寺社雑事記』文明二年（一四七〇）三月二十一日条で後南朝勢を「皆以畠山義就之披<sup>（被）</sup>官人等云々」とするのも、あながち否定はできないだろう。

文明九年（一四七七）九月、分国の實力支配をめざす畠山義就が河内へ下向し、戦火は南山城から河内・紀伊へと拡大した。この状況の変化に伴う、紀伊の情勢を検討してみた。

文明九年（一四七七）十一月十四日、幕府が畠山政長の内衆平三郎左衛門尉に、和田莊の兵糧米負荷の停止を命じている（『大乘院寺社雜事記』同日条）。



文明十四年（一四八二）八月、畠山政長が池田莊を根来寺に寄進した（『大乘院寺社雜事記』同年八月十一日条）。

文明十五年（一四八三）四月二十三日、幕府が願成寺を守護使不入の地として臨時課役を免除し、政長がこれを遵行する（『間藤家文書』、『和歌山県史』中世史料二 四二・四三号）。

（文明十七年）十月二十一日付安楽河弾正左衛門・同新左衛門宛遊佐兵庫助長恒判物（『平野家文書』、『和歌山県史』中世史料一 七号）で、公役の件を報じている。

紀南では二部二章で述べるように、義就方と政長方の戦闘が行われたが、紀北では、  
のように、政長方の分国支配を示す事例が見られる。

紀北でも「護国寺文書」（『和歌山県史』中世史料一）七号、文明十年（一四七八）十二月二十四日付畠山義就判物の如く、義就方の分国支配を示す事例も見られる。護国寺は伊都郡隅田北莊の寺院であり、伊都郡では高野山の動向が注目される。二部二章で述べるが、長禄・寛正の内訌に際し高野山衆徒の中には、義就に与する者があり、義就も寛正四年（一四六三）四月十五日の嶽山城落城後、高野山に入ろうとしていた。応仁の乱においても、「湯河家文書・広島」（『和歌山県史』中世史料二）八号、（応仁二年力）正月十八日付湯河新庄司宛足利義政御内書の文中に「此刻高野山之儀、廻一途計略者、弥可有褒美候也」と、高野山が積極的とは言えないまでも、義就方であったことが窺える。以上のことから、義就は伊都郡方面から勢力の浸透を図っていたのである。

文明十四年（一四八二）三月、畠山政長が畠山義就を攻撃するため、河内に出陣した。河内の戦局に呼応して、紀伊でも義就方の活動が活発化した。文明十五年（一四八三）八月、義就に与する勢力が、政長方の守る田辺や高田土居城に攻撃を加えている<sup>16)</sup>。『大乘院寺社雜事記』同年十一月七日条に、義就が紀伊へ出兵しようとしたと記されているのも、関連した動きと推定できる。このような両畠山氏の戦闘は、文明十七年（一四八五）の

山城国一揆を引き起こすのである。

紀伊における義就方の活動は、延徳二年（一四九〇）六月に至り、紀北で活発化する。河内に次いで紀伊でも実力支配をめざす義就方の誉田勢が入国、同年七月十二日、根来の一乗山で政長方と激突し、「大将」法楽寺某の戦死が『大乘院寺社雜事記』同十六日条に記されるなど、義就方が大敗した。「妙音院朝乗五師日並」（『大日本史料』八編之三十七、延徳二年七月十二日条）同年七月の記事によれば、義就方の軍勢は、一部二章で考証するように、誉田・原・法楽寺等、かつて義就の紀伊支配に関わった内衆を中核に、智莊嚴院・蓮淨院等の高野山勢も加わっていた。高野山勢は、前述した義就の計略によって、動員されたと推定できる。この敗北により、義就方の紀伊進出は頓挫し、口郡では応仁の乱終結後も、概ね政長方が優勢であった。

奥郡はどうであろうか。延徳二年（一四九〇）の根来一乗山合戦に際して政長方は、奥郡の国人を動員したことが、「妙音院朝乗五師日並」より知れる。また、政長方の湯河政春が度々上洛していることから<sup>(17)</sup>推測して、在地はあまり逼迫した状態でなかったと言えよう。口郡・奥郡ともに政長方が優勢で、紀伊全体としても、応仁の乱以来の対立関係に、大きな変化が無かったことが分かる。

このように紀伊での勢力が振るわないまま、延徳二年（一四九〇）十二月十二日、畠山義就は河内に没し、子の基家が跡を継いだ。この時点で基家が正守護でないことは、今谷明氏が論証したとおりである。基家相続後、紀伊における基家方の活動は乏しく、政長方優勢のうちに、明応の政変を迎えるのである。

## 六 明応の政変後の動向

明応の政変により、京都に香嚴院清晃（足利義澄）を擁した、細川政元政権が成立した。一転して追討される立場となった畠山政長は、明応二年（一四九三）閏四月二十五日河内正覚寺城で自刃し、嫡子尚順は紀伊へ没落

した。將軍足利義材（義尹・義植）は政元側に捕らえられたが、六月二十九日、脱出して越中へ下向した。

今谷明氏の見解に従い、京都に成立した細川政元政権を幕府とし、明応二年（一四九三）五月十九日幕府に出仕して家督を認められた基家（義豊）を、紀伊においても正守護とするのは妥当な見解であろう。だが一方では、細川政元政権に属さず、足利義材に誼をとる勢力も少なからず存在したことから、公権力が分裂したとする考えもある<sup>18)</sup>。筆者の浅見で断案を下すことはもとよりできないが、ひとまず畠山尚順（尚慶・ト山）を足利義材方守護とみなしておく。

明応の政変は、紀伊にとっても大事件であった。一部二章で後述の如く、正覚寺城で畠山政長とともに口・奥両守護代が戦死したのをはじめ、分国支配に関わった多くの内衆が戦死した。また、畠山尚順が入国したことにより、紀伊は基家が守護職を得て以来、はじめて畠山氏当主による直接支配が行われることとなった。

紀伊に在国した尚順は、『大乘院寺社雜事記』明応二年（一四九三）七月二十四日条に「屋形尾帳<sup>（張）</sup> 守八有山口城」<sup>19)</sup>「色々合戦之用意」と記されているように、河内奪回をめざしていた。しかし、同年中は『大乘院寺社雜事記』同年五月十五日条に「紀州海ソク共<sup>（賊）</sup>」が、細川政元方の赤松氏の船を襲撃した記事と、『蔭涼軒日録』同年八月朔日条に、「根来衆五百人許在堺」と見える程度である。尚順方は明応の政変で受けた打撃が大きく、紀伊の支配体制再建と基家方の攻勢をしのぐのが精一杯で、組織的な河内反抗は実施されていない。

畠山基家は、明応二年（一四九三）九月十二日紀伊へ軍勢を派遣した。十月四日には高野山勢も加わって、尚順方の根来寺衆を攻撃したが敗北した。明応四年（一四九五）三月、基家は再び紀伊に出兵した。紀南でもこれに呼応して愛洲氏・山本氏等基家の与党が蜂起し、同年四月田辺に乱入した。同年六月十二日、尚順方は愛洲氏の拠点を攻略してこの方面を平定した。このように基家方の作戦は失敗し、同年七月、基家の軍は河内に引き上げた<sup>19)</sup>。この事実、紀伊においては、応仁の乱以来の政長流優位の情勢に変化が無いことを示しているよう。

明応四年（一四九五）六月十一日、一部二章で示した如く、紀伊守護代遊佐順房が遵行状を発給している。

これは、尚順方にとつて、紀伊での戦局に目処がついたことを示すとともに、尚順の紀伊支配が確立したことを示していると言えよう。尚順の紀伊支配と言っても、積極的に分国支配を行った形跡はなく、旧来の政長流与党の勢力を糾合して、河内奪回をめざしていたとするのが実情であろう。明応四年（一四九五）十月と翌五年十月に、尚順は和泉より河内へ入ろうとしたが、成功しなかった<sup>20</sup>。

明応六年（一四九七）九月、基家方の内紛に乗じて尚順は河内へ進攻し、同年十月十三日高屋城を奪い、同八年（一四九九）正月三十日には基家を河内十七箇所城で戦死させた。しかし、同年十二月二十日、尚順は細川政元の軍勢と摂津天王寺に戦って敗れ、紀伊に敗走した。畠山尚順は、明応九年（一五〇〇）八月から九月にかけても河内に進攻したが、河内を奪回するには至らなかった。基家の没後跡を継いだ義英が幼少で、細川政元の後見を受けていた如く、当時は政元の全盛期であり<sup>21</sup>、河内奪回は至難の業であった。

## 七 両畠山氏和睦

盤石と思われた細川政元政権も、永正元年（一五〇四）九月に、摂津守護代薬師寺元一の反乱が発生するなど、細川氏内衆の内紛が激化していく。このような状況は、畠山氏にも影を落とし、畠山義英は同年十二月十八日、それまで対立していた畠山尚順と和睦し、尚順と同じく反幕府方「足利義植（当時は義尹）方についた<sup>22</sup>」。両畠山氏和睦は、細川氏に対する畠山氏の、勢力挽回策的性格が強いことを物語っている<sup>23</sup>。

細川政元政権は、畠山義英の反幕府的姿勢が明確になると守護職を剥奪し、永正二年（一五〇五）十一月二十七日、追討軍を派遣した。追討軍は、永正三年（一五〇六）正月二十六日に誉田城、同二十八日に高屋城と相次いで攻略し、義英・尚順ともに没落した。一連の経過の中で義英が罷免されたのは確実であるが、今谷明氏は両畠山氏の和睦が成立した永正元年（一五〇四）十二月十八日を持って、義英の罷免とされた。

確かに事実としては、畠山義英と尚順の和睦によって義英が細川政元政権に反旗を翻したのであるが、当時この事実が細川政元政権にどの程度知られていたのであるうか。たとえば、「室町家御内書案」（『改定史籍集覧』二十七）永正元年（一五〇四）十二月二十四日付大伝法院三綱中宛足利義澄御内書案に、「就畠山両家和与之儀、抽忠節者尤可為神妙候」と見え、和睦当初細川政元政権は、畠山尚順が帰参したとみなしていたことが分かる。これは義英・尚順を追討するための軍の派遣が、永正二年（一五〇五）十一月と、両畠山氏和睦から一年近くが経過していたことから裏付けられよう。したがって、畠山義英が細川政元政権から守護職（家督）を剥奪されたのは、永正二年（一五〇五）十一月二十七日の追討軍派遣の直前であつた可能性が高いと見られる。

畠山義英が罷免されたことは、細川政元政権を幕府とみなす以上、形式的にせよ畠山氏が紀伊守護職を失つたこととなる。ところが河内に派遣された追討軍は紀伊に進攻せず、紀伊を制圧するつもりは無かつたようだ。よって、細川政元政権「幕府がどのように紀伊守護職を考えていたか分からず、後の課題としたい」。

両畠山氏和睦の行われた永正元年（一五〇四）以降、一部二章で後述する「興国寺文書」（『和歌山県史』中世史料二）三四号、永正四年（一五〇七）八月二十日付遊佐就盛・基盛判物のように、年紀を確定できる畠山義英方の文書が、紀伊国内で見られるようになる。これは義英が尚順と和睦したことで、紀伊国内で尚順方から見て足利義植方守護として、合法的に権力を行使できるようになつたからと考えられる。

永正四年（一五〇七）六月二十三日、細川政元が暗殺され、細川氏も畠山氏と同様に、分裂抗争の時代に入つた。一方、両畠山氏の和睦も、同年十二月四日には破れ、同日、畠山尚順は幕府に帰参して、守護職を得た<sup>24</sup>。

所詮畠山氏の和睦は一時休戦に過ぎず、この後両畠山氏の抗争は、細川氏の抗争と絡み合つて展開していくこととなる。細川氏の抗争で澄元と高国が対立するに至ると、義英は澄元に、尚順は高国に与した。永正四年（一五〇七）十二月十五日、周防に流寓していた足利義植が、大内義興の援助を受けて上洛を開始した。永正五年（一五〇八）四月二十七日、畠山尚順は細川高国とともに足利義植を堺に出迎え、尚順は高国政権下でも守護に任じ

られた<sup>(25)</sup>が、幕府の要職に就くことは無かった。

畠山尚順と義英は、河内を中心に抗争を展開したが、永正十年（一五一三）八月二十四日、河内観心寺周辺の合戦で、義英方は弟播磨守が戦死するなど大敗して没落した<sup>(26)</sup>。以後、永正十五年（一五一八）九月まで義英の消息は知れず、河内・紀伊は尚順の元で、ひとまず平静を取り戻すのである。

## 八 畠山尚順の隠居をめぐって

畠山尚順が、永正十三年（一五一六）八月にはすでに紀伊に在国していたことが、「鹿王院文書」（『鹿王院文書の研究』、思文閣出版、二〇〇〇年）五〇九号、（永正十三年）八月十三日付奉行等河・侍衣寿顕連署書状案に、「御屋形様紀州御在国之事」と見えることから判明する。この後永正十七年（一五二〇）まで尚順は紀伊に在国するが、この間の畠山氏分国の様子を検討してみよう。

### 紀伊

「小山文書」（『大日本史料』九編之十六、大永二年七月十七日条）七月十四日付小山弥八宛ト山（畠山尚順）書状。

「目良文書」（同書）十一月八日付目良左京亮入道宛ト山書状。

いずれも、ト山の署判と紀伊国内で発給されたと見られることから、この時期の書状と推定でき<sup>(27)</sup>、植長の守護在職を示す史料は無い。

### 河内

永正十七年（一五二〇）二月から五月にかけて、畠山植長が高屋城の攻防戦を義英と行っている。（「続南行雑録」所収「祐維記抄」同年二月十六日・三月十六日・五月十日条等）。

同年六月二十二日、畠山植長が細川高国と図り、遊佐順盛を遣わして、筒井順興と越智家全との和を斡旋した（「祐維記抄」同日条）。

は大和の事例であるが、河内の戦局とかわりがあるので記した。ここでは尚順の活動は見られず、植長が活動している。

#### 越中

（永正十七年）正月二十七日付ト山書状（「上杉家文書」一二号）<sup>28</sup>）。

（同年）卯月二十一日付ト山書状（「上杉家文書」一五号）。

（同年）四月二十四日付ト山書状（「上杉家文書」一一号）。

（同年）五月十三日付ト山書状（「上杉家文書」四号）。

（同年）六月十三日付ト山書状（「上杉家文書」九号）。

（同年）六月十九日付ト山書状（「上杉家文書」三号）。

このように畠山尚順の書状は見えるが、植長の活動は見えない。

以上のように、河内では植長の活動が見られるものの、紀伊・越中においては尚順の活動が見られ、植長が活動した形跡はない。次に幕府との関係で重要な、京都における活動を見てみよう。

永正十三年（一五一六）正月十一日、植長が普請始めの礼に、幕府に太刀を献上した（「殿中申次日記」『群書類従』二十二）。

同年正月十四日、植長が禁裏へ物を献上した（「殿中申次日記」）。

同年二月十七日、植長が大内義興等と共に、細川高国の供応を受けた（『後法成寺関白記』同年二月十八日条）。

このように京都では、今谷氏の研究で畠山尚順が隠居したとされた永正十四年（一五一七）六月以前から、す

でに植長の活動が見られる。

一方、植長は永正十七年（一五一八）に至っても、「室町家御内書案」に「畠山次郎とのへ」と記されているように、官途を得た形跡は無い。畠山氏の家督が、基国や満家の時のように、平穩に親から子へ譲られる場合、没後相続であり、その際、相続した子息も、何らかの官途を得ていた。したがって、永正十四年（一五一七）に植長が家督を継承していたとすれば、永正十七年（一五二〇）に至っても官途が無く、「次郎」のままだとすれば、きわめて異例の事態だと言えよう。

かつて畠山持国は、満家晩年の永享四年（一四三二）十月、父に代わって大和の越智・箸尾攻撃に出陣したことが、『満済准后日記』同年十月二十三日条より知れる。また、前述の如く、正長二年（一四二九）三月に行われた足利義教の元服・將軍宣下に際しても持国は、父満家の代わりをつとめている。植長の河内・京都における活動も、これと同様に、尚順の家督継承予定者の行動と見ても何等不思議は無いだろう。

以上を踏まえた上で、以下に私見を示してみたい。

永正十二年（一五一五）十一月十九日に畠山植長が元服したことが、「伊勢貞親以来伝来書」（『続群書類従』二十四上）により知れる。おそらくこれを機に尚順は、京都での事を家督継承予定者（嫡子）たる植長に委ね、自身は紀伊に在国して分国支配にあたった。当時、河内・大和方面では敵対していた畠山義英方の目立った動きは無かったが、紀南では、永正十二年（一五一五）三月以前から、熊野本宮と新宮が度々合戦に及ぶなど、情勢が不安定であった<sup>29</sup>。永正十五年（一五一八）八月、細川高国政権を支えていた大内義興が帰国した。これと前後する同年七月には越中で、九月には河内・紀伊に隣接する和泉で、義英方の活動が行われるようになった。

畠山当主である尚順の紀伊在国は、在京して幕政に参画していた戦国以前の守護の立場からすれば奇異な事である。だが、今述べてきたように、在京して分国支配が行えるほど、情勢が甘くなかったことが一つ指摘できる。今一つは、畠山尚順の細川高国政権内での処遇である。尚順は明応の政変以降、常に足利義植方の中心人物



として活動していた。しかし、細川高国政権内では畠山氏家督を改めて承認されただけで、幕府の要職に就いた形跡は無い。また、山城の守護職も大内義興に握られたとあっては、細川高国政権に対する不満が高じていたとしても不思議ではない。一方では、義英との対抗上細川高国政権と乖離する訳にもいかず、そのため、尚順は紀伊に在国して分国支配を強化し、嫡子植長は家督継承予定者として、幕府に出仕したと考えられる。

永正十七年（一五二〇）八月、畠山尚順は紀伊の広より和泉堺に追放された（「祐維記抄」同年八月条等）。これは、林堂山樹や熊野衆を用いた尚順の支配強化に、内衆や紀伊国衆が反発した結果である（<sup>30</sup>）。同年九月二十五日、幕府（細川高国政権）が根来寺に対して、尚順「没落」の件を報じたことが、「室町家御内書案」に見える。これは根来寺が、尚順と植長との間で微妙な立場にあったためと見られる。

一方、畠山植長は三部二章で述べたように、永正十七年（一五二〇）八月中には湯河氏等と和睦している。植長が紀伊守護として権力を行使した初見は、小山三郎五郎に所領を宛行つた、「小山文書」永正十八年（一五二一）三月十七日付畠山家連署奉書である。これは、畠山尚順が同年三月七日、細川高国と不和になった足利義植に応じたことと関係していると考えられる。

以上のことから、植長の畠山氏家督相続＝尚順の罷免は、永正十七年（一五二〇）八月以降、翌年三月までの期間と見られる。

## 九 大永から天文初年にかけての状況

足利義植とともに淡路に移った畠山尚順は、永正十八年（一五二一）五月、再挙の一環として、紀伊入国を試みたが失敗した。この後、尚順は義英と和睦し、年号も大永と改まった十月、足利義植とともに上洛を企てるが、これも成功しなかった。尚順は、大永二年（一五二二）七月十七日淡路に没した。義英も同年四月に没した可能

性が高く、義就流畠山氏の当主の座は、大永三年（一五二三）三月十八日には義堯（義宣）に移っていた<sup>31</sup>。尚順と義英の和睦は、この後、重要な意味を持つことになる。

畠山義堯は足利義維・細川晴元のいわゆる堺公方府に与し、足利義晴を擁する細川高国政権側の畠山植長との抗争を展開していく<sup>32</sup>。紀伊における義堯と植長の抗争を、次に示す「奥家文書」（『和歌山県史』中世史料一）二三号より考えてみよう。

勝仙院殿被仰付如筋目、当庄之儀、可為御料所、国々官中之儀、上々可為御被官也、并為其賞野山之内八幡領之事、被宛行之訖、存此旨可被抽忠義之由候也、仍執達如件、

大永四

英作判

十一月三日

英正判

橋爪三郎左衛門殿

奥四郎左衛門殿

笠畑中務殿

前山新助殿

後世の写本のため、文意が通じないところもあるが、文頭の「勝仙院殿」は、永正十四年（一五一七）六月十四日付「室町家御内書案」に、「勝仙院畠山尾州」とあることから、畠山尚順と判明する。英作・英正は一部二章<sup>33</sup>で後述するように、畠山義堯の内衆である。義堯の内衆が尚順の下知を、「被仰付如筋目」と先例としていることは、大永元年（一五二一）の尚順・義英の和睦の結果と見られる。尚順と義英の和睦の結果、かつて尚順の強硬路線に与した勢力が義堯の勢力に組み入れられ、植長方と対立したと考えられる。

享祿五年（一五三二）六月十八日畠山義堯が、同二十日には三好元長が相次いで一向一揆に敗死し、堺公方府

は崩壊した<sup>(33)</sup>。これを機として、享禄元年（一五二八）十一月十一日の高屋城陥落以降、劣勢に立たされていた畠山植長が、『金剛寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）二五三号、天文元年（一五三二）十二月十二日付畠山植長判物の如く、失地回復をめざして活動していた。だが、細川晴元と將軍足利義晴が和睦したことで、植長と対立していた義堯の旧臣で晴元の被官となっていた木沢長政も義晴方となり、植長は苦境に立たされた。

天文三年（一五三四）正月、畠山植長は本願寺と同盟して事態の打開をめざした。ところが、これに反対する遊佐長教等が同年八月、畠山左京大夫長経を擁立する事態が生じたため、植長は高屋城に帰れず、紀伊に在国することとなった<sup>(34)</sup>。これは、畠山植長が幕府（細川晴元政権）と対立していた本願寺と同盟したことで、反幕府方となることを遊佐長教等が危惧したからであろう。

畠山長経が当主であった期間は短く、天文五年（一五三六）五月には、畠山播磨守晴熙が高屋城に惣領名代として在城していた。政長流の家督は一時晴熙が代行していたこととなり、植長は家督を放棄したつもりは無かったようだ。天文七年（一五三八）七月、畠山弥九郎が政長流畠山氏の当主「家督継承者」として高屋城に入ると、反発した植長は、河内へ軍事行動を起こそうとした。小谷利明氏の研究によつて、畠山植長が起こそうとしていた軍事行動が、幕府の枠組みを変えることを目的としていたことが明らかになった。植長の立場は、細川晴元政権から見れば反逆者であるが、將軍足利義晴から見れば体制の枠内にあると言った微妙なものとなる<sup>(35)</sup>。よつてひとまず、天文三年（一五三四）以降の畠山植長の立場を、紀伊守護とみなしておきたい。

天文十年（一五四一）十月、木沢長政が幕府に反旗を翻した。高屋城の畠山弥九郎はこれに与して没落し、翌年三月、植長が高屋城に復帰して、畠山氏家督を正式に回復した<sup>(36)</sup>。河内飯盛城の畠山在氏は、幕府との交渉が不調に終わったこともあつて、天文十二年（一五四三）正月に没落した<sup>(37)</sup>。ここに河内・紀伊・越中の守護職は、畠山植長のもとで一本化されることとなった。

## 十 畠山植長の後継者と細川氏綱の乱

畠山植長は、天文十四年（一五四五）五月十五日に没するが、同年三月十三日、畠山氏の家督は細川晴元政権によって、畠山四郎に変更されていた<sup>38</sup>。これが畠山植長没後も変更されなかったため、河内守護代家の遊佐長教が反対し、植長の舎弟播磨守政国を擁立したことから、家督問題が紛糾することとなった。政国が正式に家督を相続できず、惣領名代であったことは、四部一章で指摘したところである。

この一件は、天文年間に至っても守護家の家督継承者が幕府の承認を得ることが必要であることを示している。また一方では、有力内衆の支持がなければ、幕府（細川晴元政権）の承認を得ていても、守護家の当主として権力を行使し得ないことをも示している。

細川氏綱の乱であるが、小谷利明氏の研究で、畠山植長存命中の動向が明らかになった。ここでは、小谷氏が第二次細川氏綱の乱と名付けた、天文十五年（一五四六）夏以降の乱と、畠山氏の対応について見ていきたい。第二次細川氏綱の乱では、守護代家の遊佐長教が中心的役割を果たしている。このことから、遊佐長教が畠山政国の家督を細川晴元政権に承認させるつもりが無かったことが分かる。

政長流畠山氏が反幕府的行動を取っているのを見た畠山在氏は、遅くとも天文十五年（一五四六）末までには細川晴元政権に帰参し、守護職を得たと見られる。飯盛城陥落後も紀北で在氏の判物が見られることから、伊都郡を中心に義就流畠山氏の地盤が存在していたことが分かる。名実ともに守護たらんとして活動した畠山在氏であったが、天文十八年（一五四九）五月九日、堺北庄の戦いで三好長慶・遊佐長教の軍勢に大敗して没落した<sup>39</sup>。細川晴元政権も、同年六月二十四日、摂津江口の戦いで敗北を機に崩壊した<sup>40</sup>。

畠山在氏は没落する時に、当主の座を嫡子の尚誠に譲ったと見られる。だがこれ以降、義就流畠山氏の当主は、守護に任じられることもなく、その勢力は局地的なものとなってしまう。義就流畠山氏は、永禄年間には当主の

消息すら分らないほど凋落し、紀伊における所見は見られなくなる<sup>(41)</sup>。

一方の政長流畠山氏であるが、植長期までは、紀伊で当主の活動が見られるが、以降は分国支配を示す古文書類は見られなくなる。だが、畠山氏は高政の時に至っても、紀伊で大規模な軍事動員を行っている。畠山氏は、守護の基本的権限の一つである軍事動員権を、植長以降も保持していたのである。

## 十一 高政と秋高

前説で述べたように、義就流畠山氏の勢力が凋落したため、以後は政長流の当主交代にを見ていく。

四部一章で指摘したように、畠山高政の家督相続は、天文二十一年（一五五二）九月二十九日である。尾張守の官途を得るまでの間、高政は「次郎四郎」を称していたことが、『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）同年九月二十九日条等より知れる。それまでの畠山氏嫡子が、政長流・義就流を問わず、「次郎」を称していたことからすると異例であり、家系が変わった可能性がある。

高政の次に家督を継ぐのが、秋高（政頼）である。『金剛寺文書』二九七号、永禄八年（一五六五）十二月十一日付判物の発給者が「次郎四良<sup>（郎）</sup>」である。この人物は、同文書の押紙に「畠山次郎四良政慶後云尾張守」とあることから、従来は畠山政慶とされてきた。しかし、この文書の次郎四郎の花押が、『大日本史料』十編之十六、天正元年（一五七三）六月二十五日条の「花押彙纂」に載せる「畠山昭<sup>（秋）</sup>高」の花押と一致することから、「次郎四良」は政慶ではなく、秋高であると結論できる。よって、秋高も高政と同様に、次郎四郎と称していたことが判明した。

通称が次郎から次郎四郎へ変化した理由は不明である。あるいは前出の畠山四郎の家督相続が無視し得なかったからかも知れない。高政の時に畠山氏は河内を三好氏に追われ、再び紀伊に在国することとなった。

次に畠山秋高の家督相続について見ていこう。通説では「足利季世記」（『改定史籍集覧』十三）をもとに、永禄十二年（一五六九）秋とするが、良質の史料で確認できない上、事件の内容も永禄元年（一五五八）の畠山高政と安見宗房の対立の焼き直しと言っても過言ではなく、そのまま信用することはできない。

畠山秋高の当主としての証左を次に示す。

永禄八年（一五六五）十二月十一日、金剛寺に寺領を安堵する（『金剛寺文書』二九七号）。

（永禄九年）二月二十九日、壺井亀介に感状を与える（「古今采輯」）。

（永禄十一年）七月七日、粉河寺に対し、足利義昭の上洛への協力を要請する（「粉河寺文書」三〇号）（42）。

このように、永禄十二年（一五六九）以前から、の寺領安堵、の感状の発給のように、秋高が当主として活動している。に関連して足利義昭は、「粉河寺文書」二八号、（同年）六月二十日付御内書中で「左衛門督相談」と記している。左衛門督は高政でなく秋高のことなので、秋高の家督相続が、足利義昭から承認されていたと言えよう。

畠山氏の家督が高政から秋高へ移るに際し、重要な示唆を与えてくれるのが、次の史料である（傍線は筆者）。

態被申上候、仍 （足利義輝） 公方様去五月十九日、三好・松永以下以所行、被召 （義隆） 御腹候、先代未聞之仕合、無是非

次 第候、天下諸侍御主二候処、三好仕様無念之儀候、善惡被申合、御弔矢被仕度覚悟候、於様躰者、從大御門 （大覚寺）

跡様 （義俊） 可被入仰候間、此度其 （上杉輝虎） 御屋形様、於御上洛者、天下御再興可為御名譽候、南方之儀者、あ此方屋形并

同名 新次郎被相催候、可被及行候、越州・若州・尾州、其外国々之儀者、從大御門跡様被仰調由候間、定

而其 方へも可為御入魂候、就其い政頼・新次郎以書札被申候、御取成肝要存候、京都之儀定具相聞可申候間、

不 能申進候、殊更今度 （足利義輝） 上意様御腹被召候儀、其方上杉御家替二成被申、為御礼御在京候者、三好御成敗之

段、被仰合由風説故、如此旨世上申事候間、旁御弔矢可被遊 （儀肝心候哉）、毎事可然様御取合奉頼候、恐々謹

言、

六月廿四日

宗房（花押）

（河田長親）

川田豊前守殿

（直江政綱）

直井大和守殿

御宿所（43）

この書状の発給者である「宗房」は、従来はこの文書の写本である「歴代古案」の補注に「宗房八江州箕作城主佐々木義賢臣」とあることから、近江の六角義賢の家臣安上宗房とされてきたが、花押の形状より安見宗房と分かる。安見宗房は、四部一章で述べたように、遊佐宗房と名乗っていることから、文中の「同名新次郎」は、遊佐信教（当時は教）である。したがって、いの「政頼」は、畠山政頼II秋高である。傍線部の「政頼・新次郎」と、傍線部の「此方屋形并同名新次郎」とは、対になっていると考えられるので、屋形は畠山政頼である。

この書状の年代であるが、「歴代古案」に「永禄八年」と朱書で記している。文中に「公方様去五月十九日、三好・松永以下以所行、被召 御腹候」と記されている。これが將軍足利義輝殺害と一致することから、この書状の年代は、「歴代古案」のとおり、永禄八年（一五六五）に比定できる。したがってこの書状は、畠山氏の内衆安見宗房から上杉謙信の家臣河田長親・直江政綱にあてて、永禄八年（一五六五）五月の將軍足利義輝暗殺にかかわる畿内の情勢を報告したものである。

この書状より、永禄八年（一五六五）六月二十五日の時点で、畠山政頼が「屋形」と言われていたことが判明した。守護家の家臣が「屋形」と記すときは、普通当主を指す。で示したように、この年の十二月には、政頼が畠山氏当主として判物を発給していることから、政頼（秋高）が永禄八年（一五六五）中に畠山氏の家督を相続したことは間違いないと言えよう。

高政から秋高への畠山氏当主交替は、將軍足利義輝の殺害が関係していると考えている。安見宗房の書状中に「御弔矢被仕度覚悟候」・「南方之儀者、此方屋形并同名新次郎被相催候、可被及行候」と記されており、畠山氏が足利義輝の弔い合戦を企図していたことが分かる。この時の軍事行動は、京都の公家等の日記類には記されていないが、『観心寺文書』(『大日本古文書』家わけ七)二七八号、『金剛寺文書』二八九・二九〇号の禁制より、永禄八年(一五六五)十月に南河内で畠山氏が軍事行動を起こしていたことが知れる。

以上のことから、將軍足利義輝の殺害を契機に畠山氏の家督は、高政から秋高(当時は政頼)に移ったと考えたい。時期は、永禄八年(一五六五)五月十九日以降、六月二十四日以前であろう。畠山高政の活動が永禄八年(一五六五)以降も見られるのは、秋高と高政との間で、権限を分割して行使したからと考えられる<sup>(44)</sup>。

永禄十一年(一五六八)九月二十六日、足利義昭が織田信長と共に上洛、室町幕府が復活した。足利義昭派として活動した畠山秋高は、同年十月四日、高政と共に幕府に出仕したことが『言継卿記』の記事で確認できた。したがって、この時点で秋高が家督を正式に承認され、河内半国と紀伊守護に補任されたと考えられる。

畠山秋高は河内高屋城に居城したが、元龜四年(一五七三)四月、將軍足利義昭が織田信長に対して挙兵すると、その混乱に乗じた遊佐信教に、同年六月二十五日殺害された<sup>(45)</sup>。紀伊には一族の畠山貞政が居り、天正十三年(一五八五)の羽柴秀吉の紀伊平定まで、有田郡の一部の地域権力者として存続した。しかし、天正元年(一五七三)中には足利義昭が織田信長に追放されて室町幕府が滅亡しており、幕府滅亡後の守護補任を検討することとは無意味であると考えるので、秋高の殺害をもって、守護正員の検出と、畠山氏の家督変遷に関する検討を終えたい。

## おわりに

本章は内容的にも方法論的にも、今谷明氏の研究に負うところが大きい。だが、長禄・寛正の内訌以降は、紀



伊は河内と異なった動きをする場合が少なからずあったことが、明らかにできたと考えている。

畠山氏の家督に関しては、畠山尚順が紀伊没落時まで権力を掌握していたこと、畠山秋高の家督相続と足利義輝の殺害が関連しているとみられることを明らかにできた。また、畠山持国が河内に隠遁中も、在国内衆は以前と変化が無かった。これは、嘉吉の変後の持国復権と、大きなかわりがあった。

戦国期になると、尚順・植長、高政・秋高のように、在国して分国支配にあたる者と、在京して幕府に出仕する者が、別に存在する時期があった。これは、戦国期に至ってもなお、幕府との関係が重要な守護畠山氏の姿を示していると言える。

守護に幕府から与えられた権限の一つに、分国内の軍事動員権がある。畠山氏は一五世紀半ば以降、義就流・政長流に分裂して抗争を行うが、両畠山氏が軍勢を動員できたのは、基本的には軍事動員権による。幕府から追討を受ける立場にあった義就が軍事力を行使できた理由の一つに、持永と違い、守護家当主として分国を支配していたことも無視できないであろう。畠山基国以降、紀伊・河内の守護職は、畠山氏が相伝してきた。そのため、室町幕府が存続する以上、紀伊・河内の守護家は畠山氏であると言った意識が、持国のころには、分国内で形成されていたのではないか。畠山氏の分裂抗争を見る上で、守護家の認識は重要であると考えている。

#### 註

(1) 小川信氏『足利一門守護発展史の研究』(吉川弘文館、一九八〇年、主に三編、以下、本文中で注記を省略した小川信氏の著書・研究は、これを指すことをお断りしておく。)。佐藤進一氏『室町幕府守護制度の研究』下、東京大学出版会、一九八八年。岩倉哲夫氏『室町時代の紀伊守護体制について』山名義理・大内義弘の時代」(『海南市史研究』六、一九八一年)。

(2) 同氏『室町時代の河内守護』(同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六

年、初出一九七六年）。なお、本文中で注記を省略した今谷明氏の研究は、これを指すことをお断りし  
て  
おく。

(3) 『和歌山市史』四巻の史料解説がはじめであった。

(4) 小川信氏前掲書、今谷明氏前掲論文。なお、畠山基国の没した日は、『教言卿記』（史料纂集）同日  
条による。

(5) 九月十二日以前とする根拠は、今谷明氏前掲論文による。

(6) 今谷明氏前掲論文。

(7) 詳しくは、拙稿「畠山氏分裂の原因に関して」（本書二部一章）を参照されたい。

(8) 今谷明氏前掲論文。

(9) 今谷明氏前掲論文。

(10) 拙稿「畠山氏の内訌と紀伊」（本書二部二章）。

(11) 今谷明氏前掲論文。

(12) 設楽薫氏「室町幕府評定衆撰津之親の日記『長祿四年記』の研究」（『東京大学史料編纂所研究紀要』

三、一九九三年）。

(13) 本書二部二章参照。

(14) 本書二部二章参照。

(15) 「畠山義昭氏所藏畠山家文書」(川岡勉氏編『畠山家文書集』羽曳野資料叢書三、一九九一年)二三

号。

(16) 拙稿「『藩中古文書』に見える目良・脇田文書」(『田辺市史研究』四、一九九二年)。

(17) 鶴崎裕雄氏「『長享二年四月五日北野会所花の本開百韻』と湯川政春」(同氏著『戦国の権力と寄合

の文芸』四章四節、和泉書院、一九八八年、初出一九七七年)。

(18) 石田晴男氏「室町幕府・守護・国人体制と『一揆』」(『歴史学研究』五八六、一九八八年)。

(19) 拙稿「奉公衆家山本氏に関する一考察」(本書三部一章)。

(20) 『大乘院寺社雑事記』明応四年十月十三日・二十六日条、同五年十月七日条。

(21) 今谷明氏前掲論文。

(22) 今谷明氏前掲論文。

(23) 拙稿「畠山義就の子孫達」(本書四部四章)

(24) 今谷明氏前掲論文。

(25) 今谷明氏前掲論文。

(26) 「拾芥記」(『改定史籍集覧』二十四)同日条。

(27) 根拠は拙稿「戦国期紀州湯河氏の動向」(本書三部二章)を参照されたい。

(28) 本章では、『新潟県史』(資料編三、中世一)を使用し、その整理番号を記した。なお、同日付の山科藤三宛ト山書状が、「歴代古案(別本)」(『富山県史』史料編 中世、一二七九号)に見える。

(29) 註(27)拙稿参照。

(30) 小谷利明氏「畠山植長の立場」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)。

な お、本文中で注記しない小谷氏の研究はこれを指す。

(31) 尚順の動向は、「祐維記抄」による。義英に関しては、本書四部四章を参照されたい。

(32) 拙稿「戦国期義就流畠山氏の動向」(本書四部三章)

(33) 今谷明氏「細川・三好体制研究序説」(同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部四章、岩波書店、一九八五年、初出一九七三年)。

(34) 石田晴男氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』 一向一揆と他勢力の連合について」(『歴史学研究』

四四八、一九七七年、後に峰岸純夫氏編『本願寺・一向一揆の研究』 戦国大名論集<sup>13</sup> に所収、吉川 弘

文館、一九八四年)、金龍静氏「畿内の天文一揆考」(同氏著『一向一揆論』五章、吉川弘文館、二〇〇四年、初出一九八九年)。

(35) 拙稿「天文年間河内半国体制考」(本書四部五章)、「戦国期紀州湯河氏の立場」(本書三部三章)。

小谷利明氏「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)。

(36) 今谷明氏註(2)前掲論文。

(37) 本書四部三章参照。

(38) 拙稿「天文期の政長流畠山氏」(本書四部一章)。今谷明氏註(2)前掲論文。今谷氏は論文(以下、

旧稿とする）を著書に所収にする段階で、「四郎」を「晴熙」とされたが、今谷氏の旧稿の四郎が正しいことは、拙稿「天文年間畠山播磨守小考」（本書四部二章）を参照されたい。

（39） 本書四部三章参照。

（40） 今谷氏註（33）前掲論文。

（41） 本書四部四章参照。

（42） 「粉河寺文書」。以下粉河寺関係の史料は、『和歌山県史』（中世史料一）ではなく、新たに再校訂を行った『粉河町史』三巻を使用した。本文書の年代推定は、『大日本史料』十編之十六、天正元年六月二十五日条による。

（43） 「長岡市立科学博物館所蔵文書」（『上越市史』別編1上杉氏文書集一）四六二号。

（44） 拙稿「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」（本書五部一章）。

（45） 『大日本史料』十編之十六、天正元年六月二十五日条、および本書五部一章参照。

## 第二章 紀伊守護家畠山氏の支配体制

### はじめに

本章では、守護代・奉行人等、畠山氏の紀伊支配に関係した内衆の実名を復元し、紀伊支配に関係した在職期間の推定を試みたい。まず人名を掲げ、次に根拠となる史料・文献を提示したい。人名の検出にあたっては、発給文書を基本とし、『大乘院寺社雑事記』（増補続史料大成）等当時の記録類も適宜参考としたが、軍記物等、後世の人の手にかかる史料は、原則として参考としなかった。また、「栗栖家文書」（『和歌山県史』中世史料二）一二号に名前が見える某姓元門・某姓浄為の如く、在職時期の推定ができない人物も検討の対象としなかった。

#### 遊佐豊後守助国（入道浄安）

小川信氏が著書（<sup>1</sup>）で考証された如く、畠山基国の紀伊守護代である。以下、の人物は、原則として小川信氏の考証に依拠し、本章での検討は省略して、役職名・就任期間を記すこととする。

応永 6 1 2 ——— 同 8 1 1 ——— 同 8 1 2 9（<sup>2</sup>）  
1 2 ——— 1 1 ——— 1 2 9（<sup>2</sup>）  
：  
：

数字は上から順に、年月日を示す。元年・正月は1、閏月はと略す。実線は在職期間が確定できるもの、破線は推定できるもので、矢印は在職期間が延長する可能性あることを示す。

いなは某

名草郡奉行か大野郷の代官。

—— 応永 7 4 ——

長瀬蔵人言弥

在国の被官。

—— 応永 7 6 ——

某姓宣顕

小川信氏は元大内氏被官で、在国の奉行人とされたが、その事実はない。詳細は一部三章を参照されたい。

某姓長潮（長朝力）

在京の奉行人。

…… 応永 9 4 4 ……

某姓秀朝

在京の奉行人。 の秀明と同一人物であろうか。

—— 応永 9 4 4 ——

遊佐民部丞家久（禅久）

小川信氏の研究により、遊佐助国の跡を継いで紀伊守護代に就任したことが、明らかにされている。家久はその後、在職が確認されるので、関係する文書を次に示す。



「且来八幡神社文書」（『和歌山県史』中世史料二）二五号、応永九年（一四〇二）六月二十七日付渡辺源左衛門尉宛遊佐家久遵行状。今月二十三日付守護奉行人奉書の旨に任せて、「外宮役夫工米且来莊段錢」の催促を止めることを命じる。

「小山秀太郎文書」（『田辺市史』四巻）四四五号、応永二十五年（一四一八）十一月一日付中村四郎兵衛入道宛遊佐家久書状。「去月廿九日任御判之旨」て三栖莊内長瀬を鮎川村地頭職の替わりに、鮎川家長に宛行う。

の家久の花押が一致することから、遊佐家久が応永二十五年（一四一八）十一月まで在職したことが確認できる。しかるに、応永十四年（一四〇七）八月には、で述べるように、遊佐家長が守護代として見える。の宛先は牟婁郡（奥郡）であり、遊佐家長の所見は後述の如く口郡であることから、遊佐家久は途中から奥郡守護代に転じたと見られる。これは、後掲する『高野山文書・大』四三二〇号に、「奥守護代」の語が見えることから、確かめられる。

畠山基国が守護の時期に、守護代が口郡・奥郡に分かれて設置されていたとする事例は、現在のところ見当たらない。の遊佐家長との関係から考えて、畠山満慶の守護就任に伴って、口郡・奥郡の両守護代制が実施されたと考えたい。

さて、「応永十五年」の付箋がある『高野山文書・大』七一七〇六号、十月十三日付中村某宛禅久書状で、中村某に対して禅久が南部莊の年貢を催促している。中村氏はで述べるように、奥郡又守護代の地位にある。奥郡又守護代の職にある人物に催促できるのであるから、禅久はそれより上意の地位、つまり奥郡守護代の職にあると推定できるだろう。『高野山文書・大』七一六八一号、応永十六年（一四〇九）十一月二十三日付南部莊年貢勘録状に、「去年十二月遊佐民部殿方一献料」と見え、『高野山文書・大』七一七〇六号の付箋の年号が正しければ、遊佐民部は禅久と推定してよいだろう。

「湯河家文書・東京」(『和歌山県史』中世史料二)四号、(年不詳)十一月二十七日付禅久書状の花押と、前出の 文書の家久の花押を比較すると、近似しているが同一ではない。筆者は遊佐家久は畠山満慶が守護に就任すると出家して禅久と名乗り、奥郡守護代に転じたが、後日理由があつて還俗し、それとともに花押も元の形状に戻したと考えている。遊佐家久が還俗した理由は不明である。あえて想像するとすれば、畠山満家が守護に就任したことが、後述する応永二十五年(一四一八)四月の守護と熊野勢との合戦が関係していると考えられるが、確認できない。

… 応永 9 4 4 ——— 同 13 1 18 ——— 同 25 1 1 …

#### 中村兵庫助入道妙通

小川信氏の研究によつて、畠山基国の在国の内衆であつたことが明らかにされている。中村氏の地位を考えるため、「粉河寺御池坊文書」(『粉河町史』三卷)二六号遊佐家久遵行状案)・同二七号中村妙通打渡状案より、文書の流れを示してみよう。

遊佐家久 中村兵庫助入道妙通 志津河左近将監

これによつて、中村妙通が守護代遊佐家久の命令を受けて、打渡状を発給する立場にあつたことが分かる。

で後述する如く、この後中村氏は奥郡又守護代の職にあつた。以上のことから中村妙通は、一国又守護代の職にあつたと考えられる。の渡辺源左衛門尉が中村妙通の後任であるならば、応永九年(一四〇二)六月二十七日には死亡していたか、奥郡又守護代に転じていたと推定できる。

中村氏の出自であるが、「御影堂文書」(『和歌山市史』四卷、五 九七号)建長六年(一二五四)七月六日付紀伊国守護代・惣官請文案に、紀伊の「御家人等」として「中村左衛門尉藤原盛継」の名が記されているよう

に、紀伊出身の内衆と見られる。中村氏は在地の情勢に明るかったため、畠山氏の分国支配に登用されたのであろう。

—— 応永 9 4 2 1 —— 同年 6 2 7

#### 広瀬某

『高野山文書・大』八 一八二五号、永享四年（一四三二）六月二十五日付高野山寺領人足検断支証等注文に、次のように記されている（以下史料は、必要部分のみ抜粋）。

一 遊佐豊後殿代官中村より長尾方への折紙一通、人足<sub>二</sub>断事

一同中村方より都奉行広瀬方への折紙一通、人足<sub>二</sub>断事

遊佐豊後は で述べたように、畠山基国の時期の紀伊守護代である。よって広瀬某は、基国の時の都奉行と分かる（<sup>3</sup>）。都とは京都なので、広瀬某は畠山氏当主に近侍した、在京の奉行人であろう。

#### 渡辺源左衛門尉

の より、又守護代と見られる。でも述べたが、中村妙通の後任か、名草郡又守護代であろう。

： 応永 9 6 2 7 ——

以下、特に必要な場合を除き、紀伊に関して一時例しか検出し得ない人物、および就任期間も一度しか確定し得ない人物の、在職期間の図示は省略する。

#### 某姓秀明

「且来八幡神社文書」二四号、応永九年（一四〇二）六月二十三日付守護代遊佐民部丞宛奉書で、守護代に宛てて守護の奉書を発給していることより、在京の奉行人と考えられる。の秀朝が誤写とすれば同一人物とも考えられるが、確認できない。

「且来八幡神社文書」二四号の秀明と同じ署名・花押を有する文書を次に示す。

『石清水文書』（『大日本古文書』家わけ四）六 七三号、（応永七年）十月二十一日付守護代遊佐豊後入道宛書状。

『高野山文書・大』二 六九一号、（応永八年）十二月九日付守護代遊佐豊後入道宛書状。

の発給者は、小川信氏の著書で数 とされた人物であるが、前述のように「且来八幡神社文書」二四号の秀明と署名・花押が一致することから、数は秀明である。

—— 応永 7 10 2 1

—— 同 9 6 2 3

某姓明阿

「禅林寺文書」四六号、応永十一年（一四〇四）十月十八日付幡河禅林寺衆徒宛義・明阿連署奉書より、守護奉行人と見られる。

某姓義

前条より、守護奉行人と見られる。

伊地知民部入道寿持

『醍醐寺文書』（『大日本古文書』家わけ十九）一 一四四号、応永七年（一四〇〇）三月十五日付畠山基国

施行状案に、「執事伊地知民部入道寿持」と見え、在京の奉行人と考えられる。『高野山文書』（刊行会本、以下『高野山文書・刊』と略す）二三八〇号、（年不詳）十二月十三日付全慶書状の宛先「伊地知民部」も同一人物であろうか。

遊佐筑前守家長（祐善）

「且来八幡神社文書」二七号（ ）の祐善の花押と、同文書四五号（ ）の家長の花押が一致し、両者は同一人物である。両文書を調べ、家長・祐善の地位を検討してみよう。

応永十五（年）六月二十一日付草部太郎左衛門尉宛遊佐祐善書状。且来莊役夫工米が「免許」されたので、催促する事を禁止した。

（応永十九年）九月二十九日付草部太郎左衛門尉宛遊佐家長書状。且来莊大嘗会段銭の「免許」を知らせる。  
「且来八幡神社文書」二八号、応永十九年（一四一二）九月二十六日付幕府奉行人治部則栄宛富樫満成書状（4）に「紀伊国且来庄大嘗会段銭事、任往古例、可有御免候」と見える。これが の内容と一致することから、の書状は応永十九年（一四一二）と推定できる。

とも草部太郎左衛門尉に命じている。草部太郎左衛門尉は次条で論証するように、口郡又守護代と考えられるので、家長・祐善は口郡守護代に他ならない。遊佐家長は応永二十年（一四一三）六月十五日には越中守護代に転じていたことが、「教王護国寺文書」（『富山県史』史料編 中世、五九一号）より分かる。ここで遊佐家長と祐善の関係を整理すると、より応永十五年（一四〇八）六月二十一日に祐善と称していた人物が、応永十九年（一四一二）九月二十六日には家長と名乗っていたことが分かる。

祐善・家長の時期に該当すると考えられる時期に、守護畠山氏が守護代に宛て発給した、分国支配に関する文書が『醍醐寺文書』一 一四四 号に見える。その年月日・発給者・宛先・内容を、次に提示してみたい（

、  
、  
）。  
応永十四年（一四〇七）八月二十六日付遊佐筑前入道宛畠山満慶施行状写。紀伊国内大伝法院領の段錢免除を命じる。

応永十七年（一四一〇）十月八日付遊佐筑前守宛畠山満家施行状写。紀伊国内大伝法院領の諸公事・国役の免除を命じる。

応永十七年（一四一〇）十月二十六日付遊佐筑前守宛畠山満家施行状写。紀伊国内大伝法院領の役夫工米の免除を命じる。

は紀伊国内の大伝法院（根来寺）領に関するもので、具体的には『醍醐寺文書』二四五七号に記されている「石手・山崎・弘田・岡田・山東・相賀・直河」の各莊園であろう。石手（岩出）・山崎・弘田・岡田は那賀郡、山東・直河（直川）は名草郡、相賀は伊都郡の莊園で、いずれも口郡に存在する。よって、遊佐筑前入道・遊佐筑前守は、口郡守護代である。

ここで、を、年次ごとに並び替えて、遊佐祐善・家長・筑前入道・筑前守の関係を整理してみたい。

応永十四年（一四〇七）八月二十六日……………遊佐筑前入道

応永十五年（一四〇八）六月二十一日……………祐善

応永十七年（一四一〇）十月八日……………遊佐筑前守

応永十七年（一四一〇）十月二十六日……………遊佐筑前守

応永十九年（一四一二）九月二十九日……………家長

これより、遊佐筑前入道Ⅱ祐善、遊佐筑前守Ⅱ家長と考えられる。したがって、遊佐家長は還俗したことになる。

遊佐家長が還俗した理由であるが、一部一章でも述べたように、遅くとも応永十五年（一四〇八）九月十七日

までには、紀伊守護が畠山満慶から満家に交替している。守護の交替に際して遊佐筑前入道祐善は還俗して家長と称し、そのまま満家に仕えたのであろう。また、この推測が正しければ、応永十五年（一四〇八）六月二十一日までは畠山氏の家督は満慶であり、満家への交替はこれ以降、同年九月十七日までの間となるう。

以上のことから、「且来八幡神社文書」二六号、応永十五年（一四〇八）六月五日付室町幕府奉行人奉書の宛先である「守護代」は、遊佐家長である。この室町幕府奉行人奉書が六月五日付であるのに対して、の遊佐祐善（家長）書状の日付は六月二十一日である。また、の施行状が八月二十六日に発給されたのに対して、遊佐祐善（署名は「沙弥」）の遵行状が発給されたのが九月二日であることが、「醍醐寺文書」一一四四号より分かる。いずれの場合も、日付に差があることから、遊佐家長は紀伊に在国していたと見られる。

—— 応永 14826 —— 同 19929 —— 同 20615

#### 草部太郎左衛門尉

前条と重複する部分もあるが、関係する事例を次に示す。

応永十四年（一四〇七）九月二日付草部太郎宛守護代遊佐家長（祐善）遵行状。紀伊国内大伝法院領の段銭の免除（『醍醐寺文書』一一四四号）。

応永十五年（一四〇八）六月二十一日付草部太郎左衛門尉宛遊佐家長書状。且来荘役夫工米が「免許」されたので、催促する事を禁止した（「且来八幡神社文書」二七号）。

（応永十九年）九月二十九日付草部太郎左衛門尉宛遊佐家長書状。且来荘大嘗会段銭の「免許」を「存知」させる（「且来八幡神社文書」四五号）。

（応永二十一年）閏七月二日付草部太郎左衛門尉宛遊佐慶国遵行状。「御即位料且来庄段銭」の免除を「存

知「させる（「且来八幡神社文書」三一号）。

遊佐家長は前条より、遊佐慶国は で考証するように、いずれも紀伊口郡守護代と考えられる。草部太郎左衛門尉は、これら口郡守護代から命令を受けていることから、口郡又守護代と考えられる<sup>(5)</sup>。

—— 応永 14 9 2 —— 同 21 2 ——

#### 木沢兵庫助入道善堯（善光力）

『醍醐寺文書』一 一四四 号、応永十四年（一四〇七）八月二十六日付畠山満慶施行状案に「執事木沢兵庫助入道善堯」と見えるのが初見で、以後「湯橋家文書」（『和歌山県史』中世史料二）一九号、（永享五年）六月二日付木沢善堯書状まで在職が確認できる、在京の奉行人である。

さて、「且来八幡神社文書」に、応永二十一年（一四一四）閏七月二日付（二九号）と、応永二十二年（一四一五）十月十一日付（三四号）の、善光奉書案が見える。善光は奉書の内容より、在京の奉行人と見られるが、堯と光を誤写した可能性が強く、この人物は木沢兵庫助入道善堯であろう。

—— 応永 14 8 2 6 —— 永享 5 6 2 ——

#### 遊佐河内守慶国

遊佐慶国に関係した文書が「且来八幡神社文書」に見える。次に年月日・宛先・発給者・内容を示し、考察してみたい。

応永二十一年（一四一四）閏七月二日付遊佐河内守宛守護奉行人善光（堯）奉書案。「御即位料且来庄段銭」の免除を通達する（二九号）。



応永二十一年（一四一四）閏七月二日付草部大（太）郎左衛門尉宛遊佐慶国遵行状。「御即位料且来庄段銭」の免除を「存知」させる（三一号）。

応永二十二年（一四一五）十月十一日付遊佐河内守宛守護奉行人善光奉書案。「且来庄大嘗会段銭」を「先々」の如く免除したので催促しないよう通達する（三四号）。

より、遊佐河内守＝慶国と判明する。善光（堯）は前条で検討したように在京の奉行人、草部太郎左衛門尉は で検討したように口郡又守護代である。幕府からの命令は別として、畠山氏は分国支配に際して、守護として直接守護代に文書を発給せず、奉行人奉書で命じるのが普通である。遊佐慶国の場合、守護奉行人奉書を受けて口郡又守護代に遵行状を発給しているので、慶国は口郡守護代と見てよい。

で述べたように、前任の遊佐家長が、応永二十年（一四一三）六月十五日には越中守護代の職にあつたことから、遊佐慶国は、この時点ですでに紀伊口郡守護代の職にあつたと見られる。また、 は同日付であり、遊佐慶国は当時在京していたと見られる。

で検討するように、口郡守護代は応永二十六年（一四一九）五月三日にはすでに遊佐国継に交替していた。また、河内守の官途も同年十月二十七日には遊佐国盛が称していたことが、「三宝院文書」（『富山県史』史料編 中世、六一二号）、「仁和寺文書」（同書六一三号）により確認できる。したがって、遊佐慶国はこれ以前に没していたと考えられる。

： 応永 20 6 15 ——— 同 21 2 ——— 同 22 10 11

玉手七郎左衛門入道道秀

玉手氏は『高野山文書・大』八 一八二五号、永享四年（一四三二）六月二十五日付高野山寺領人足検断支証

等注文に、「草部太郎左衛門方より玉手方へ伊都郷奉行の折紙一通」と見える。室町・戦国時代には、「伊都郷」に該当する地名が無いため、「郷」と「郡」の音通（コオリ）と判断し、「伊都郡」の郡奉行と考えたい。

玉手氏の名が見える事例を次に整理してみよう。

「原家文書」(『和歌山県史』中世史料一) 八八号、(年不詳) 二月十一日付かつら原殿宛玉手入道道秀書状。

「原家文書」九一号、(年不詳) 八月十三日付たまで入道道秀書状。

「原家文書」二一五号、(応永二十五年) 卯月三日付玉手七郎左衛門入道宛草部宴盛書状。

ともに、応永二十五年(一四一八)から二十七年(一四二〇)にかけて起こった、隅田八幡宮放生会座敷次第相論に関連した内容と見られることから、この間の書状と見てよい。は文中に「くまの<sup>(熊野)</sup>御こし<sup>(奥)</sup>、昨日二日<sup>(近露)</sup>かつゆ<sup>(近露)</sup>まで御出候よし、<sup>(普田殿)</sup>こんた<sup>(普田殿)</sup>とのより承候」と記されており、一部四章で述べる熊野本宮と守護畠山氏の抗争と月日が一致することから、応永二十五年(一四一八)に比定した。

—— 応永<sup>25</sup>43 —— (同<sup>27</sup>頃) 813 ——

#### 草部主計宴盛

「原家文書」七七号、応永二十五年(一四一八)九月日付 原忠満再陳状写中に、「於大野出帯仕畢、仍草部主計方存知之処」と見え、草部主計が紀伊在国の内衆として活動していたことが知れる。

宴盛は前条の書状で「御内方国の人々かたへ早々大<sup>(野)</sup>へ御出あるへきよし、ふれ<sup>(触)</sup>申さるへく候」と、軍勢の動員を郡奉行の玉手道秀に求めていることから、口郡又守護代と考えられる。また、応永二十五年(一四一八)から二十七年(一四二〇)にかけての、隅田八幡宮放生会座敷次第相論に関する「原家文書」八七号、(年不

詳）正月二十六日付草部宛 原忠満書状に、宴盛の裏花押があることから、宴盛は草部氏であろう。

時期的にも地域的にも草部主計と宴盛の活動時期が一致することから、両者は同一人物と見られる。の草部太郎左衛門尉と同一人物か否かは不明である。

—— 応永 25 4 3 —— (同 27 頃) 8 13 ——

杉原某

「原家文書」八四号、応永二十六年（一四一九）九月六日付隅田八幡宮庁座相論尋下条々事書案に「奉行方」としてその名が見え、在京の守護奉行人に推定できる。

中村四郎兵衛入道

の で奥郡守護代の命令を受けていること、および の考証より奥郡又守護代と見られる。でも触れた（応永十五年）十月十三日付禅久書状の宛先である「中村殿」も同一人物であろう。『高野山文書・大』四・六三号、応永三十三年（一四二六）十一月二十六日付権大僧都勝算証文案中に「故中村殿」と見えることから、この時点では没していたらしい。

—— 応永 15 10 13 —— 同 25 11 1 ——

遊佐越前守国継（孫四郎）

「湯橋家文書」の事例より、国継の地位を検討してみたい。

永享五年（一四三三）四月四日付遊佐越前守宛守護畠山満家奉行人奉書（八号）。

同年四月十九日付左衛門督入道（畠山満家）宛足利將軍家御教書写（一四号）。

同年五月十日付草部中務丞宛遊佐国繼遵行状写（一五号）。

同年五月十日付住道三郎左衛門丞宛草部盛長遵行状写（一六号）。

いずれも用水相論に關した文書である。間には守護代に宛てた守護施行状が存在したと見られるが、確認できない。述べたように草部氏は口郡又守護代である。また、守護奉行人奉書が守護代に宛てて発給されることも考え合わせると、遊佐国繼は口郡守護代である。は同日付である。また、「湯橋家文書」一二号、（永享五年）三月十二日付遊佐越前国繼書状写中に「愚身在国」と記されていることから、遊佐国繼は当時紀伊に在国していたとみられる。

管見の限りで遊佐国繼の初見は、『高野山文書・大』四 五七号、応永三十一年（一四二四）九月三十日付遊佐国繼折紙である。さて、『高野山文書・刊』二 二三九号、応永二十六年（一四一九）五月三日付木沢蓮因・遊佐国盛奉書の宛先である遊佐孫四郎は、守護奉行人奉書が主に守護代に宛てて発給されていることから、守護代と考えられる。孫四郎が後に越前守の官途を得たとしても何等不自然なことではない。よって、遊佐孫四郎は国繼と推定したい。

一部一章で述べたように、「禅林寺文書」（『和歌山県史』中世史料二）五九号、嘉吉元年（一四四一）六月十四日付寄進状が、現在のところ遊佐国繼の終見である。この後、遊佐国繼が畠山持国とともに上洛したのか、罷免されたのかは重大な問題であるが、俄には断定しがたい。

… 応永 26 5 13

同 31 9 30

嘉吉 1 6 14 （？）

熊野成実

応永二十二年（一四一五）八月十八日付で、大野郷幡河寺免田下地を大蔵寺が違乱するのを止め、元の如く幡河寺に渡すよう命じた打渡状を発給している（「禅林寺文書」四七号）。また、『高野山文書・大』八一八二五号に「草部太郎左衛門より熊野方への折紙」と見える。大野郷が名草郡にあること、草部氏より下位にあることより、熊野成実は名草郡奉行とみられる。

#### 誉田某（入道）

の で示した（応永二十五年）卯月三日付草部宴盛書状中に「（誉田殿）こんなとの」とその名が見える。守護使として現地に派遣されていたのであろうか。紀伊に関して誉田氏は、『満済准后日記』（『続群書類従』補遺）応永三十四年（一四二七）二月四日条に「就根来事、（満山満家）自管領以誉田入道申子細」と見え、在京の奉行人として活動していた。この両者が同一人物とは断定できないが、満家の当時誉田氏は、在京の奉行人として活動するばかりか、適宜守護使として在地へ派遣されていたようだ。

#### 草部三郎左衛門入道元俊

草部元俊は、「湯橋家文書」六号、岩橋荘百姓等言上状写中に「去応永廿九年如往古神領御百姓共境仁榊於立置候処、自和佐歎申間、草部三郎左衛門殿承候様者」と見えるのが、初見である。この文書の内容、および「且来八幡神社文書」三六号、応永三十三年（一四二六）八月二十一日付遊佐国継遵行状で、且来八幡宮領役夫工米を免除したことによる催促停止を命じられていることより、口郡又守護代と見られる。なお、応永三十一年（一四二四）正月以前に出家して元俊と称したことが、『高野山文書・大』五九七九号より分かる。

： 応永  
29

—— 応永  
33  
8  
21

藤代某

「熊野詣日記」(『那智叢書』十七) 応永三十四年(一四二七)九月二十二日条に「山東御やと当国の又守護代ふちしろと申者」と見える(6)。山東は名草郡なので、藤代氏は口郡又守護代と見られる。後の編纂物であり、年月日等そのまま記載を信用しがたい面もあるが、「粉河寺旧記・天英本」(『粉河町史』三卷)では、応永三十四年(一四二七)七月より正長二年(一四二九)七月十八日まで、その名が見える。

： 応永 34 7 | 同年 9 22 | 同年 10 7 | 正長 2 7 18  
：

中村某

「熊野詣日記」 応永三十四年(一四二七)九月二十五日条に「三鍋<sup>ナヘ</sup>御まうけ、おくこほりの又守護代中村、」と見え、奥郡又守護代と判明する。あるいは の中村掃部入道道吉と同一人物かも知れないが、関係は不明である。

| 応永 34 9 25 | 同年 10 5 |

湯尾某

「粉河寺旧記・天英本」 応永三十四年(一四二七)二月の記事に、「郡奉行湯尾殿申時」と記す。これが正しければ、当時の那賀郡奉行であろう。

平窪某

「粉河寺旧記・天英本」 応永三十四年(一四二七)二月二十三日の記事に、「京ヨリ大野ノ留守守平窪殿」と

記されている。この記事が正しければ、守護代が上京した際、又守護代とは別に、京都より代行者が派遣されていたようだ。

#### 木沢蓮因

「原家文書」八三号、応永二十六年（一四一九）八月三日付守護畠山満家奉行人連署奉書案、および同文書八六号、応永二十七年（一四二〇）八月付守護畠山満家奉行人連署奉書案に、遊佐国盛と連署しており、在京の守護奉行人と見られる。木沢の姓は、『高野山文書・刊』二二三九号、応永二十六年（一四一九）五月三日付守護畠山満家奉行人連署奉書による。なお、『高野山文書・刊』では、この文書を室町幕府奉行人奉書と誤っている。

—— 応永<sup>26</sup><sub>53</sub> —— 同<sup>27</sup><sub>8</sub> ——

#### 遊佐河内守国盛（左衛門尉・徳盛）

今谷明氏の研究で明らかにされているように、河内守護代である（7）。また、『富山県史』通史編 中世、三章一節より、越中守護代も兼帯していたことが、明らかにになっている。

紀伊では前出の『高野山文書・刊』二二三九号、応永二十六年（一四一九）五月三日付守護奉行人奉書が初見である。「原家文書」八三・八六号、「湯橋家文書」七号等にも、国盛の署判した守護奉行人奉書が見られる。また、永享五年（一四三三）の用水相論に際しては、高野山に守護使として派遣されたことが、『満済准后日記』同年七月十日・二十日条より分かる。

このように紀伊支配に関して遊佐国盛は、在京の守護奉行人としてばかりでなく、重要事件の際は使節として下向している。永享十二年（一四四〇）八月二十日に没したことが、『師郷記』（史料纂集）同日条より分かる。

—— 応永 26  
253 ——

—— 永享 57  
20 ——

#### 平豊前入道

応永三十四年（一四二七）二月十一日に守護使として根来寺に派遣されたことが、『満済准后日記』同日条に記されている。通常は前条の遊佐国盛と同じく、在京の奉行人として活動していたと見られる。

#### 遊佐豊後入道

伊勢守護代であることが、『満済准后日記』応永三十三年（一四二六）八月二十七日条より分かる。紀伊に関しては、使節として根来寺に派遣されたことが、『満済准后日記』応永三十四年（一四二七）八月二十二日条に見える。

#### 斎藤因幡守（入道祐定）

在京の奉行人である。紀伊に関しては、応永三十四年（一四二七）八月の根来寺の紛争と、永享五年（一四三三）七月の用水相論に関して高野山に派遣されたことが、『満済准后日記』応永三十四年（一四二七）八月二十二日条、永享五年（一四三三）七月十日条より分かる。の遊佐国盛と同様に、重要事件に関して分国に派遣された有力内衆である。剃髪して祐定と号したことが、『大徳寺文書』（『大日本古文書』家わけ十七）四 一五三六号より分かる。嘉吉の変後、畠山持永に連座して没落した。

—— 応永 34  
3822 ——

—— 永享 57  
11 ——

長岡新右衛門尉



『高野山文書・大』五 七六二号、(年不詳)八月二十二日付草部元俊書状の宛先に「進上 長岡新右衛門尉」と見える。他に所見が無く詳細は不明であるが、の江河新左衛門尉と同様の地位にあったのではないか。の長岡継覚の祖先と見られる。

草部中務盛長(十郎)

盛長は の より、口郡又守護代と見られる。

「且来八幡神社文書」三七号、永享元年(一四二九)十一月二十八日付遊佐国継下知状の宛先である「十郎」は、盛長が官途を得る以前の通称と見られ、両者は同一人物であろう。

： 永享 1 1 1  
2 8 — 永享 5 5 10  
—

熊野道盛

次に事例を示して、考察してみたい。

「禅林寺文書」五二号、永享二年(一四三〇)六月五日付段銭免状。

「禅林寺文書」五三号、永享三年(一四三一)三月十八日付田地寄進状。

このように、在国の内衆としての活動が見られる。の熊野成実の後任の名草郡奉行であろう。

— 永享 2 6 5 — 同 3 3 8  
1 8 —

誉田三河守久康(善相力)

「向井家文書」(『和歌山県史』中世史料二)七三号、天文八年(一五三九)九月付賀太惣荘百姓等申状案に、「賀吉」

元年秋之時分、当国のしゆこ代(守護)こん田(普)のせんそう御もち候」と記している。一方、『高野山文書・大』四・三二〇号、嘉吉元年(一四四一)閏九月六日付兩所十聴衆評定事書案は、次のように記している。

一料足可被遣方々、

御屋形様へ五貫文

今田殿方へ二貫文

奥守護代 貳貫文

西方殿 三貫文

奥小守護代 壹貫文

西方氏は今谷明氏の研究によつて、河内守護代と判明する。「今田」は誉田との音通(コン)によるもので、誉田氏である。誉田氏は料足が奥守護代と同額であるから、同様の地位、つまり口郡守護代の職にあったと推定できる。以上の事より、嘉吉元年(一四四一)閏九月には、誉田氏が口郡守護代に就任していたことが確定である。

次に「且来八幡神社文書」三八号( )・三九号( )を、検討してみよう。

畠山右馬助代申紀伊国且来庄熊野新宮造営段銭事、先々免除云々、不日可被止催促之由候也、仍執達如件、

文安四

四月廿五日

(波多野通定)

永祥(花押)

(治部)

貞政(花押)

守護代

右馬助殿御領紀州且来庄熊野新宮段銭事、任先々免除之御奉書之旨、可被止国催促候也、謹言、

文安四

卯月廿五日

久康(花押)

## 原七郎右衛門尉殿

は同日付の幕府奉行人奉書である。を受けて発給されたものである。の宛先が「守護代」となっている。で、久康は守護代である。は同日付であることから、当時守護代久康は在京していたと見られる。の久康の花押と、『高野山文書・大』五七五〇号、宝徳元年（一四四九）十月二十一日付誉田久康書状（<sup>8</sup>）の花押を東京大学史料編纂所影写本で照合すると、形状が一致する。よっての久康は誉田久康である。

嘉吉元年（一四四一）に誉田氏が紀伊口郡守護代に就任して以降、文安四年（一四四七）まで、守護代が交替したことを示す史料が存在しないことから、誉田久康は、嘉吉元年（一四四一）の時点で、紀伊口郡守護代に就任していたと見てよい。「森家文書」享徳三年（一四五四）五月十五日付原七郎右衛門尉・法楽寺新右衛門宛久康判物写（<sup>9</sup>）まで在職が確認できる。したがって、畠山義就と弥三郎の抗争が一段落する同年十二月まで在職していたことは確実である。誉田久康は、享徳四年（一四五五）三月に畠山義就が山城守護に就任すると、山城守護代に転じた。次条の原融意ともども、詳細は本書二部一章を参照されたい。

嘉吉 1 6 ——— 享徳 3 5 1 5 ——— 同年 1 2 ——— 同 4 3

## 原七郎右衛門尉（入道融意）

前条で掲げた「且来八幡神社文書」三九号で、守護代誉田久康の命令を受けており、口郡小守護代と見られる。前条で示した「森家文書」より、享徳三年（一四五四）五月十三日までその名が見えることから、でも述べるように、誉田久康と同時期まで在職していたと考えられる。原融意は畠山義就が山城守護に就任するとともに、山城国乙訓・紀伊郡代に転じた。

原融意は『高野山文書・大』五七四八号等では、「融薫」としている。

—— 文安 4 4 2 5 —— 享徳 3 5 1 3 —— 同 4 3

#### 原五郎左衛門尉職近

次に事例を示し、考察してみたい。

「歎喜寺文書」(『和歌山県史』中世史料二)七九号、「享徳弐年」十月二十八日、名草郡歎喜寺に禁制を掲げる。

「誓度寺蔵文書」(「那賀郡古文書」国文学研究資料館史料館蔵)、享徳三年(一四五四)六月二日、「任入道之折紙旨」で、誓度寺に人足の指図を行う。

の「享徳弐年」は異筆であり、必ずしも正確とは言えない。むしろ享徳三年(一四五四)の畠山氏の内訌に際して発給されたとするのが、自然であろう。の「入道」が前条の原七郎右衛門尉だとすれば、名草・那賀郡代と見られ、の法楽寺職久か の原四郎左衛門尉の後任であろう。

—— 享徳 3 6 2 —— (同年力) 1 0 2 8 ——

#### 法楽寺新右衛門尉職久

『高野山文書・大』五 七六九号で、原融意と連署状を発給している。また、で示した「森家文書」中の法楽寺職久と新右衛門尉は、同一人物であろう。小守護代と言うより、伊都郡か那賀郡の郡代と見られる。

—— 宝徳 1 9 1 0 —— 享徳 3 5 1 5 —— 同 4 3

なお、誉田・原・法楽寺氏は、畠山義就が山城守護に就任すると、同国の守護代・郡代に就任している。これ

は享徳三年（一四五四）の畠山弥三郎との錯乱に対する論功行賞的性格が強いと言えよう。

#### 原四郎左衛門尉（入道浄観）

宝徳元年（一四四九）閏十月七日に 原融意より、高野山寺領に対する非例を止めるよう命じられている（『高野山文書・大』五七四八号）。在国の内衆であり、郡代であろうか。畠山義就が守護に就任した後も在国していたことが、「西光寺文書」（『和歌山県史』中世史料一）六三号で、康正二年（一四五六）四月に小若江入道源中と連署寄進状を発給していることより分かる。

—— 宝徳 1 7 —— 康正 2 4 ——

#### 江河新左衛門尉（弾正入道覚円力）

「向井家文書」七四号に、菅田久康が守護代の時「同御内人江河ノ新左衛門」と見え、在京していた守護代菅田久康の代わりに紀伊に派遣されていた菅田氏の被官らしい。でも述べる「施無畏寺文書」（『和歌山県史』中世史料二）二三号、文安三年（一四四六）四月三日に施無畏寺に田地を寄進した江河弾正入道覚円は同一人物であろうか。なお、この文書より、有田郡が口郡守護代の管轄下にあつたとみられることが判明する。

#### 江河六郎右衛門尉

『高野山文書・大』五 七四三号、宝徳元年（一四四九）十月九日付法楽寺職久書状案に「進上 江河六郎右衛門尉」と見える。前条の江河新左衛門尉の後任であろうか。

#### 中村掃部入道道吉

「小山文書」（東京大学史料編纂所影写本）（宝徳元年）閏十月四日付徳本（畠山持国）書状中に、「田辺霍執中村掃部入道遣人」と見え、奥郡小守護代に推定できる。翌二年二月二十九日、畠山持国が山城守護に就任す

ると、山城三郡（乙訓・紀伊・野）小守護代に就任した（<sup>10</sup>）。

#### 遊佐豊後入道盛久

まず、事例を次に示してから考察したい。

『熊野速玉大社古文書古記録』一六九号、享徳三年（一四五四）十二月二十二日、新宮衆徒神官が「神輿動座」を遊佐豊後守に報じる。

「古今采輯」（東京大学史料編纂所影写本）享徳四年（一四五五）七月二十八日、畠山義就が日前国懸両社領を、「任今月廿五日御判旨」で、国造刑部大輔経孝に安堵するよう、遊佐豊後守に命じる。

「方衆座文書」（『粉河町史』三卷）七号、長禄三年（一四五九）四月十日、遊佐豊後守盛久が、名草郡坂井郷の年貢をめぐる小泉某と粉河寺の相論に関して、「任御奉書之旨」で遵行する。

『大乘院神社雜事記』同年五月二十五日条、長禄四年（一四六〇）五月十日、根来寺と守護領の相論に際して、根来寺衆の襲撃を受け、神保近江入道父子・木沢山城守等とともに討死した。

は奥郡、他は口郡の事例である。このことにより、当初奥郡守護代であった遊佐盛久が、享徳の内訌後に菅田久康と交代して口郡守護代に転じたとみられる。ただ、享徳の内訌後の奥郡守護代が検出できないため、遊佐盛久は、一国守護代に就任した可能性もある。

—— 享徳 3 1 2 2 2 2 —— 享徳 4 7 2 8 —— 長禄 4 5 1 0

（転任）

#### 馬場通定

「湯河家文書・東京」一八号の馬場通定の花押が、後世の写本ではあるが「牟婁郡古文書」（国文学研究資料

館史料館蔵）中の「新宮蔵文書」十月九日付通 書状の花押<sup>11)</sup>と特徴が一致する。同書状で馬場通定は、奥郡小守護代中村入道の命令を受けて日高郡財莊の年貢収納を報じていること、前出の「湯河家文書」で湯河氏と音信を取っていることより、奥郡在国の内衆とみられる。いずれの事例も日高郡なので、日高郡の郡代であろうか。なお、「新撰長祿寛正記」（『群書類従』二十）に畠山義就方として、馬場氏の名が見える。

#### （中村力）正通

「藩中古文書」（国文学研究資料館史料館蔵）の「田所平八蔵文書」中に、享徳三年（一四五四）五月十一日付田所平左衛門宛打渡状があり、その内容が名草郡「五ヶ庄」に関するものである。一方、『熊野速玉大社古文書古記録』一六四号には、年不詳十月十日付新宮御神官宛正通書状が存在する。この書状は前条の十月九日付通書状中に見える「中村入道進状候」と関係があるとみられるので、正通はおそらく中村氏であろう。

正通が中村氏とすれば、小守護代とみられる。奥郡小守護代から口郡小守護代に転じたか、あるいはその逆であろう。「新撰長祿寛正記」に、寛正四年（一四六三）六月二十一日の粉河寺の合戦で戦死たと記されている中村左近将監は、正通のことであろうか。

#### 誉田某

『高野山文書・大』六 一三七二号に、長祿三年（一四五九）「二月廿二日ヨリ三月八日マテ誉田東家在庄」と記している。東家には畠山氏の郡支配拠点が存在したとされ<sup>12)</sup>、誉田某は口郡小守護代か守護使として逗留したと考えられる。

#### 神保近江入道

の 参照。守護使であろうか。

木沢山城守

の 参照。守護使であろうか。以下、この相論に係する人物は役職等不詳につき、検討を省略する。

遊佐三郎左衛門尉直重

次に係する史料である「且来八幡神社文書」四〇号（ ）・四一号（ ）を掲げて、検討してみよう。

畠山播磨守知行分紀伊国且来庄 熊野新宮造営料段銭事、先々免除云々、可被止催促之由候也、仍執達如件、  
寛正三

七月二日

守護代

（飯尾）  
之種（花押）  
（清）  
貞秀（花押）

紀州且来庄熊野本宮造営料段銭事、任御免除之旨、可被停止催促也、可申付之状如件、

寛正三

七月九日

菱木七郎次郎殿

直重（花押）

の幕府奉行人奉書を受けて、の遵行状が発給されていることから、直重は口郡守護代とみられる。一部一章で述べたように、当時畠山義就は幕府から追討を受けており、幕府奉行人奉書が義就方の守護代に宛てて発給したとは考えられない。したがって直重は、政長の内衆とみられる。

・ の日付の差より、当時直重は紀伊に在国していたとみられる。寛正三年（一四六二）と推定される畠山政長書状（『熊野速玉大社古文書古記録』一二一号）に、「猶々在国被官人等、可然様御相談候者」と見え、



の野辺十郎左衛門尉も在国していたとみられることから、寛正三年（一四六二）の時点で、政長の守護代が入国していても不思議ではない。

「政所賦銘引付」<sup>(13)</sup>文明六年（一四七四）四月八日の記事に「遊佐三郎左衛門尉直重」の名が見え、直重は遊佐氏とみられる。ただ、紀伊の事例は寛正三年（一四六二）の一例のみであり、遊佐直重は、寛正の内訌の戦局が落ち着くとともに交代したとみられる。

： 寛正 3 1 0 5 | 同 6 4 1 1 | 文明 9 6 1 2 ( ? )

#### 菱木七郎次郎

前条 の史料で守護代の命令を受けていることから、口郡小守護代とみられる。

#### 神保宗右衛門尉長誠（孫三郎・越前守）

次に関係する史料を掲げて（『熊野速玉大社古文書古記録』一三一号、一三二号）、その地位を検討してみたい。

紀伊国高家庄事、去長禄二年六月十七日、可任熊野山新宮御判之旨状如件、

寛正六年四月十一日

神保宗右衛門尉殿

畠山<sup>(政長)</sup>殿判形

当郡高家庄事、被成御遵行候、此趣可被存知候也、謹言、

(寛正六年)

卯月十四日

野辺十郎左衛門尉殿

長誠判

高家荘は日高郡にあり、奥郡守護代の管轄下にある。の畠山政長の命令を受けて、の遵行状を発給していることから、神保長誠は奥郡守護代であろう。神保長誠は政長の重臣であり、政長が家督を継ぐと同じくして、紀伊奥郡守護代の職に就任したと考えられ、応仁の乱中も在職していた。二部二章より、文明九年（一四七七）には、すでに越中に下向していたとみられ、それに伴って紀伊奥郡守護代の職も辞したとみられるが、詳細は不明である。

野辺十郎左衛門尉（掃部允・宗貞力）

前条より、奥郡小守護代とみられる。野辺六郎右衛門尉は、子息であろうか。野辺氏の詳細に関しては二部三章により、本章での検討は省略する。

寛正 3 9 — 文明 9 6 —

遊佐兵庫助長恒（<sup>14</sup>）

「花岡家文書」（『和歌山県史』中世史料一）一号、寛正六年（一四六五）十二月六日付畠山政長書状中に、その名が見えるのが紀伊に関しては初見である。おそらく寛正の内訌の後、の遊佐直重に替わって口郡守護代に就任したのであろう。「奥家文書」五号、文明十八年（一四八六）十一月吉日付中俊良讓状写中に「遊佐兵庫助殿口郡之守護代御持」とあり、応仁の乱後もその職にあった。遊佐長恒は、明応二年（一四九三）閏四月二十五日、畠山政長とともに河内正覚寺城で戦死しており、最後まで口郡守護代であった可能性が高い。

寛正 6 1 2 6 — 文明 1 8 1 1 — 明応 2 2 5

草部太郎左衛門

一部一章でも紹介したが、『蔭涼軒日録』（増補続史料大成）文正元年（一四六六）七月二十日条に、「遊佐被管<sup>（官）</sup>人草部太郎左衛門」の名が見える。草部氏は守護代家遊佐氏の被官か<sup>（15）</sup>、遊佐氏直系の畠山氏内衆であろう。草部太郎左衛門は、の草部氏と同様に口郡小守護代とみられ、『蔭涼軒日録』の記事が正しければ、小守護代は守護代に選任権があつたと考えられる。

#### 山田彦左衛門

「奥家文書」五号、文明十八年（一四八六）十一月吉日付中俊良讓状写中に、口郡「小守護代山田彦左衛門」と記されており、文明年間に口郡小守護代であつたらしい。

#### 平三郎左衛門尉

「間藤家文書」（『和歌山県史』中世史料二）二〇号には、「守護代平殿」と記されているが、『大乘院寺社雑事記』文明九年（一四七七）十一月十八日条には「小守護代八平三郎左衛門尉」と記している。「間藤家文書」の信用性の問題と、で考証した遊佐長恒の口郡守護代在職が動かないとみられることから、平三郎左衛門尉が口郡守護代とは考えられない。だが、『親元日記』（増補続史料大成）文明十五年（一四八三）六月二十七日条で、遊佐長直・神保長誠らとともに足利義政に「進物」を行ったほどの有力内衆を、在国の内衆である小守護代とは認めがたい。追つて後考を待ちたい。平三郎左衛門尉を口郡小守護代とすれば、「間藤家文書」四二号の「知久」が平三郎左衛門に比定でき、同文書四三号の板東慶繁が郡代に比定できる。平三郎左衛門も遊佐長恒と同様に、明応二年（一四九三）閏四月二十五日、畠山政長とともに河内正覚寺城で戦死した。

#### 斎藤基守

今谷明氏の研究で明らかにされたように、在京の奉行人である。紀伊に関しては、『大乘院寺社雜事記』文明九年（一四七七）十一月十八日条に、その名が見える。

某姓直秋（直賢）

前条の斎藤基守と同様に、今谷明氏の研究によつて、在京の奉行人であることが明らかにされている。後に直賢（ ）と改名し、畠山尚順の奉行人となつた（<sup>16</sup>）。

—— 文明 9 11 18 —— 明応 9 8 12 ——

神保与三

「湯河家文書・広島」（『和歌山県史』中世史料二）一六号、（文明十四年）八月七日付畠山政長書状中や、（文明十五年）八月十六日付畠山政長書状中写（<sup>17</sup>）にその名が見える。紀伊奥郡守護代は、の長誠、次条の長通と、神保氏が続くことから、その間に同族与三の在職を想定することは、無理ではないだろう。文明十九年（一四八七）三月十七日に没している（『蔭涼軒日録』同日条）ので、そこまで在職したと考えたい。

∴ 文明 14 8 7 —— 同 15 8 16 —— 同 19 3 17

神保出雲守長通

『熊野速玉大社古文書古記録』一一四号の年不詳二月十九日付神保長通書状が、文中に「次郎基家并越智・古市以下御退治之儀」とあり、明応二年（一四九三）に推定できる。前条の神保与三の没後、奥郡守護代に就任したとみられる。

文明 193 — 明応 2219 — 同年 25

某姓直秀

「原家文書」一五七・一五八号にその名が見える。内容が「原家文書」一五六号の畠山政長書状と関連があり、政長方の在国内衆とみられるが、詳細は不明である。

遊佐越中守盛貞

「湯河家文書・東京」五号にその名が見え、湯河式部に対して「御上洛之時、懸御目可申承候」と記していることから、在京の奉行人であろう。この書状の盛貞の花押と、「東寺百合文書」(第六回東寺百合文書展図録『応仁の乱』所収)え函、応仁二年(一四六八)八月十五日付畠山義就奉行人連署奉書の盛貞の花押を照合すると、形態が一致する。よって、「湯河家文書・東京」五号の盛貞は、畠山義就の内衆遊佐盛貞であろう。したがって「湯河家文書・東京」五号は、畠山政長と義就の抗争が始まる、長祿四年(一四六〇)以前に発給されたとみられる。

なお、畠山義就方は劣勢のこともあり、紀伊に関する事例が少なく、以下、人名の検出も十分に行えず、きわめて不十分なものとなったことを、お断りしておく。

遊佐勘解由左衛門尉順房(又二郎・筑前守)

明応四年(一四九五)六月十一日に「幡河寺領之内、小中谷田地作事」を、「彼作寺家江渡付候由」長岡継覚へ命じており(「禅林寺文書」八〇号)、それを受けて同十二日に長岡継覚が幡河寺年預御坊に宛てて打渡状を発給している(「禅林寺文書」八一号)。したがって順房は守護代であり、「小山文書」にも牟婁郡の国人小山

弥八に宛てた順房の書状がみられるので、順房は一国守護代と考えられる。一部一章でも述べたが、明応の政変に伴い、畠山尚順が紀伊に在国し直接支配を行う状況下では、口郡と奥郡に分けて守護代を設置する必要が無かったからであろうか。順房は畠山政長の時期から紀伊で活動していたとみられ、在地の情勢に明るかったため、守護代に登用されたと考えたい。

「二条寺主家記抄」(「続南行雜録」『続々群書類従』三)によれば、永正八年(一五一一)七月十三日、畠山義英の軍勢と戦って戦死した。

明応 4 6 1 1  
永正 8 7 1 3

#### 長岡新右衛門尉継覚

前条より口郡小守護代と考えられる。

#### 長岡三郎左衛門尉家次

「禅林寺文書」八八号、文亀四年(一五〇四)四月十九日付<sup>(18)</sup>「禅林寺衆徒御中宛長岡家次打渡状は、」禅林寺文書」八七号、同十二日付遊佐順房寄進状を受けたものであり、前条の長岡継覚同様口郡小守護代とみられる。

#### 山田大炊左衛門尉恒定

「間藤家文書」三八号、明応四年(一四九五)十二月二十九日付恒定遵行状と、「平野家文書」(『和歌山県史』中世史料一)九号、永正七年(一五一〇)八月三日付山田大炊左衛門尉恒定書状<sup>(19)</sup>の花押が一致し、両者は同一人物である。この永正七年(一五一〇)八月三日付書状は、同日付の「平野家文書」三一号の遊佐順房書

状と関連して発給されたものに違いなく、山田恒定は前条の長岡家次と同様、口郡小守護代であつたとみられる。さて、「間藤家文書」三八号の打渡先が「名草郡重 郷内願成寺」であり、で口郡小守護代と推定した長岡継覚の打渡先も名草郡内であるから、時期的・地域的な重複が問題となる。『和歌山県史』中世史料二の解説によれば、「間藤家文書」の打渡先である重 郷は、南北朝以前に粉河寺の知行下にあつたことが指摘されている。小守護代の担当は単に郡単位ではなく、知行者の勢力範囲に合わせて設定されていたのではないか。俄に結論を出せる問題ではないが、今後検討する必要があるう。

… 明応 4 1 2 9 ——— 永正 7 8 3 …

#### 丹下孫三郎盛祐

まず史料を掲げて、検討してみたい。

田屋庄半分事、誓度寺令寄進候処、先代(官脱力)為違乱由候、可然様以意見無為去渡候者、可為祝着候、委細之旨神保又次(五)郎・丹下孫三郎可申候、恐々謹言、

明応十年辛酉

尾張守

三月二日

尚慶判

(異筆)  
「根来寺」

大金剛院

田屋庄半分事、誓度寺御寄進之处、先代官依違乱、于今不被去渡候、彼借錢之儀、米谷与次被仰付、以御意見候、早々被相渡候者、可為祝着旨、被成 御書候、猶此趣可令申由候、委細者遊佐又次郎可被申候、恐々 謹言、

明応十年辛酉

三月二日

金

大剛院

丹下孫三郎

盛祐判

神保又五郎

慶恵判

は「森家文書」一一号、は「興国寺文書」四六号だが、内容・日付・宛先より、両文書は本来一連のものであり、何らかの事情で別個に伝えられたと考えられる。『和歌山県史』中世史料二では、の文書を畠山義英奉行人奉書とするが、との関係から畠山尚順（尚慶）奉行人奉書とするのが正しく、丹下盛祐・神保慶恵ともに畠山尚順の奉行人である。

神保又五郎慶恵

前条より、畠山尚順の奉行人と推定できる。

野辺掃部允慶景（弥六）

奥郡小守護代である。野辺六郎右衛門尉の子息であろうか。詳細は、本書二部三章を参照されたい。

—— 永正 10

—— 同 18 3 17 ……

某姓直賢（直秋）

の直秋が改名したらしい。明応九年（一五〇〇）八月十二日付で隅田蔵人に宛てて、遊佐順房と連署状を發給している（「花岡家文書」二号）。なお、直賢を『和歌山県史』中世史料一や、『高野山文書・刊』六 三六五号では、「遊佐勘解由左衛門尉」としているが、これは「畠山家譜」（内閣文庫蔵）によるもので、そのまま



信じることはできない。

#### 長修理少輔宗信

「小山文書」（年不詳）七月二十四日付畠山尚慶書状と、同文書（年不詳）十二月二日付畠山尚慶書状に「長少将」と見え、紀伊在国の内衆とみられる。牟婁郡西向の「小山家文書」<sup>20</sup>（年不詳）6月8日付畠山氏奉行人連署奉書写に「長修理少輔 宗信」と見え、同一人物であろう。某年七月六日、壺井源左衛門尉に宛てて遊佐順房と連署折紙を発給したことが「壺井八幡神社文書」（『羽曳野市史』四卷、四〇二号）に見える長備中守久信は、一族であろう。

#### 藤原則泰

「施無畏寺文書」八号、明応九年（一五〇〇）九月十八日付田地寄進状に「地頭藤原則泰」と署判している。藤原則泰は、湯浅荘で土地を寄進したり、判物を発給できる地域権力者であるから、湯浅一族とみられる。この後、湯浅一族の保田氏が、政長流畠山氏内衆として活動しているので、藤原則泰は保田氏であろうか。次に藤原則泰の判物を示す。

此状誉田殿代寄進なりといへ共、於向後不可有煩候、仍状如件、

永正元年十月日

藤原則泰（花押）

この判物は「施無畏寺文書」二三号、文安三年（一四四六）卯月五日付江河覚円田地寄進状の裏に書かれている。判物の文中にある「誉田殿」は、で考証したように、文安三年（一四四六）当時、紀伊口郡守護代であった誉田久康であり、江河覚円はその代理として紀伊に在国していた。誉田久康・江河覚円はともに畠山持国・義就方の人物であり、その寄進に対して藤原則泰は、「不可有煩候」と記していることから、則泰は畠山尚順方

であったとみられる。

一部一章で述べたように、永正元年（一五〇四）十二月には、畠山尚順と義英の和睦が成立している。その交渉が十月に始まっていたとすれば、藤原則泰の判物は、両畠山氏の和睦交渉を背景に、発給されたと考えることができる。

—— 明応 9 9 18 —— 永正 1 10 ——

#### 遊佐就盛

今谷明氏の研究によって、畠山義英の河内守護代であることが、明らかにされている。紀伊での事例を次に示す。

『高野山文書・刊』七 二七一号、永正四年（一五〇七）六月十三日付在井太夫宛就盛・基盛連署判物（<sup>21</sup>）。

「興国寺文書」三四号、永正四年（一五〇七）八月二十日付誓度寺宛就盛・基盛連署判物。

より就盛は、紀伊でも畠山義英方の守護代家として、判物を発給していることが分かる。ともに両畠

山氏和睦の時期であり、それを利用して畠山義英方は、紀伊での勢力回復と進展を図ったと言えよう。

—— 永正 4 6 13 —— 同年 8 20 ——

#### 遊佐孫三郎基盛

前条の の事例より、遊佐就盛と同様に、畠山義英方の守護代家の人物とみられる。実名は「誓度寺蔵文書」による。

—— 永正 4 6 1 3 —— 同年 8 2 0 ——

遊佐元繁

「平野家文書」三二号に、（年不詳）十二月二十五日付書状があるが、これは同文書二八号の（年不詳）十二月二十四日付畠山義英書状を受けて発給されたとみられる。したがって遊佐元繁は、畠山義英の内衆と推定できる。

某姓康綱

関係する事例を次に示し、検討してみよう。

「小山文書」、永正四年（一五〇七）三月十二日付盛秀・康綱連署判物写。

『高野山文書・刊』七二七〇号、永正四年（一五〇七）六月十三日付在井太夫宛盛秀・康綱連署判物。

はのと同様に、永正四年（一五〇七）六月十三日付在井太夫宛畠山義英判物（『高野山文書・刊』七二六九号）を受けて発給されたもので、畠山義英の奉行人とみられる。

—— 永正 4 3 1 2 —— 同年 6 1 3 ——

某姓盛秀

前条より、畠山義英の奉行人とみられる。

—— 永正 4 3 1 2 —— 同年 6 1 3 ——

#### 遊佐兵庫助英当

『高野山文書・刊』二三八〇号に、（年不詳）極月十七日付書状写がある。永正六年（一五〇九）十二月二十七日付で、河内金剛寺に対して須屋武久とともに、畠山義英判物の副状を発給していることから（『金剛寺文書』二九四・二九五号）、遊佐英当は義英の内衆である。

#### 隅田美作守繁久

「利生護国寺蔵文書」（『紀伊続風土記』古文書之部）中に、永正八年（一五一）九月二十日付繁久書状がある。これは、同日付の畠山義英の副状とみられ、繁久は畠山義英の内衆であろう。「真観寺文書」（八尾市立歴史民俗資料館『真観寺文書の研究』二〇〇一年）五二号で、畠山義英判物（同文書五五号）に対する副状を隅田美作守繁久が発給しており、「利生護国寺蔵文書」の繁久と同一人物であろう。

#### 遊佐弾正忠堯家（弾正左衛門）

「奥家文書」二二号中に（年不詳）二月十一日付堯家書状写が見え、この堯家は『金剛寺文書』二四八号の堯家と同一人物とみられる。『金剛寺文書』（『大日本古文書』家わけ七）二四八号の付箋に「義堯執事、遊佐弾正少弼」と記していることから、堯家は畠山義堯の有力内衆遊佐堯家であろう。

「奥家文書」二二号中の遊佐堯家書状写は、文中に「仍御入洛之儀、阿州被仰合候条、諸口相催候」と記している。一部一章で述べたように、畠山義堯は阿波の足利義維・細川晴元と結んでいた。大永六年（一五二六）十二月より反細川高国勢力の攻撃が本格化し、同十五日三好勝時らが堺に上陸した。三好勢らは翌七年二月十三日に京都桂川の戦いで細川高国方を破り、高国政権を崩壊へ導いた<sup>22</sup>。したがって遊佐堯家書状は、大永七年（一五二七）二月十一日と推定できる。

遊佐堯家は、「古今消息集」（『福井県史』資料編二、中世）の細川道永（高国）感状によれば、大永七年（一

五二七)十一月十九日に、細川高国方の朝倉教景と京都西院で戦って戦死した。

#### 平若狭守英正

一部一章で掲げた「奥家文書」二二号に「英正」の名が見え、この英正は「誓度寺蔵文書」の「平若狭守英正」と考えられる。平若狭守は『観心寺文書』(『大日本古文書』家わけ六)三八〇号、天文六年(一五三七)十一月十三日付畠山氏継目判物礼銭注文中に、畠山在氏の内衆としてその名が見える。したがって平若狭守英正は、大永四年(一五二四)十一月三日の段階では、畠山義堯の奉行人と考えられる。

#### 某姓英作

「奥家文書」二二号中にその名が見え、前条の平英正同様、畠山義堯の奉行人とみられる。他に所見は無く、英作の名は誤写かも知れない。

#### 丹下備後守盛賢

『益田家文書』(『大日本古文書』家わけ二十二)一 二〇五号、(年不詳)六月一四日付畠山尚順(ト山)書状中に「丹下備後守」の名が見え、尚順の時から有力内衆として活動していた。「小山文書」(『大日本史料』九編之十二、大永元年三月十七日条)永正十八年(一五二一)三月十七日付畠山家連署奉書写で、次条で守護代と考察した遊佐長清と連署していることから、守護代に次ぐ地位にあったとみてよい。畠山植長が紀伊に在国していた時期も近侍した重臣であり、家格的には守護代と同格になったとみられる。天文十四年(一五四五)五月十五日に没した(「厳助往年記」同日条)。

—— 永正 18318

—— 天文 14515

遊佐左衛門大夫長清

前条の「小山文書」が、年次の分かる初見である。次に「花岡家文書」三号を示して、その地位を検討してみたい。

就其方御働必定、隅田肥前守被差下、此時別而可致忠節之旨被仰出候、然上者知行分事、急度無相違之様各御馳走、於拙者可為祝着候、毎篇御指南肝要候、尚別紙申候之条、令省略候、恐々謹言、

二月十五日

長清（花押）

智庄殿院

神保式部丞殿

野辺掃部助殿

御宿所

で述べたように、宛先の野辺掃部助は、紀伊奥郡小守護代である。遊佐長清は小守護代に宛てて書状を発給したのであるから、畠山植長の有力内衆で守護代とみられる。

： 永正 18 3 18

—— 天文 3 8

神保式部丞

前条で示した史料中に野辺掃部とともに名前が見える。野辺氏は奥郡小守護代なので、神保式部丞は口郡小守護代とみられる。『高野山文書・刊』や『和歌山県史』中世史料一で、神保式部丞の実名を「満包」とするのは、「畠山家譜」によるもので、従うことはできない。神保式部丞は、「目良文書」（年不詳）十一月八日付畠山ト山（尚順）書状中に名前が見える「神保五郎左衛門尉」と同一人物であろうか。

山本式部丞忠善

次に関係する史料である「中尾家文書」(『和歌山県史』中世史料二) 七号、八号を掲げ、検討してみよう。

当庄不入儀、成其意候上者、忠節可為肝要候、猶委細山本式部丞、玉置兵部大輔可申候、謹言、

六月廿六日

植長(花押)

賀茂小法師殿

当庄不入儀、被成御意得候、珍重候、弥御忠節可為肝要候、此旨相意得可申由、被仰出候、恐々謹言、

六月廿六日

正直(花押)

忠善(花押)

賀茂小法師殿

内容・日付より、はの副状とみられる。したがって、山本式部丞「忠善、玉置兵部大輔」正直に比定できる。は同日付であるから、畠山植長が紀伊に在国していた時期に発給されたとみてよい。

元来奉公衆家として守護権力から独立していた山本氏・玉置氏の一族が、守護畠山氏の副状を発給したことは、守護権力と山本氏・玉置氏が結びついたことに他ならない。本書三部一章も併せて参照されたい。

玉置兵部大輔正直

前条の山本忠善と同様に、畠山氏権力の一端を担っていた。

三宝院快敏

伊都郡代であろうか。詳細は四部一章を参照されたい。

遊佐河内守長教（次郎左衛門尉）

畠山植長・政国期の河内守護代である。紀伊に関しては四部一章を参照されたい。

飯沼九郎左衛門尉康頼

「本宮社家坂本家蔵文書」（牟婁郡古文書）に、（年不詳）二月五日付長清・康頼連署状が見られ、長清は畠山植長の有力内衆遊佐長清であろう。したがって康頼は、次条で述べる寒川景範と連署奉書を発給した飯沼康頼とみられる。畠山植長から政国の時期に紀伊で活動した、在国の奉行人であろう。

—— 天文<sup>16</sup><sub>6</sub><sup>15</sup> —— 同<sup>19</sup> 10 ——

寒川与介景範

次に事例を示し、考証したい。

「間藤家文書」二二号、天文十六年（一五四七）六月十五日付飯沼康頼・寒川景範連署奉書。

「間藤家文書」二三号、天文十九年（一五五〇）閏五月十日付飯沼康頼・寒川景範連署奉書。

ともに文中に「被仰付候」と、守護家当主の意を奉じる文言があり、紀伊在国の奉行人と考えられる。

—— 天文<sup>16</sup><sub>6</sub><sup>15</sup> —— 同<sup>19</sup> 10 ——

丹下越前守遠守

「芋生家文書」（『和歌山県史』中世史料一）三号に、遠守の軍勢催促状が見える。遠守は『金剛寺文書』二



九四号にその名が見え、同文書二九一号、永禄八年（一五六五）十月二十三日付金剛寺宛連署状目の「越前守」と花押が一致する。したがって、遠守は畠山秋高の内衆であり、奉行人とみられる。

永禄年間になると畠山氏は、河内を三好氏に奪われ、安見宗房等河内支配にあたった内衆も没落して、紀伊に在国することがしばしばあった。彼等も河内奪回を試みた際、軍勢を催促したりしているが、検討の対象とはしない。

#### 遊佐勘解由左衛門尉盛

次に事例を示して、検討してみよう。

「隅田家文書」（『和歌山県史』中世史料一）一四号、（年不詳）十一月十二日付隅田市兵衛宛書状。（永禄十二年）卯月七日付金剛峰寺惣分沙汰所宛連署折紙<sup>23</sup>）。

は同日付の畠山秋高感状（「隅田家文書」一五号）の副状であり、は秋高の命令を受けて発給されたものである。また、「粉河寺文書」（『粉河町史』三卷）三〇号、（永禄十一年）七月七日付畠山秋高書状中に、「遊佐勘解由左衛門尉可申候」と記し、当時遊佐盛の副状が発給されたとみてよいだろう。

の署判の位置より、遊佐盛を紀伊守護代と推定したい。「畠山家譜」では「遊佐盛直」とするが、良質の史料で確認できない。

—— 永禄  
1177

—— 同  
1247

#### 平豊後入道

「粉河寺文書」三〇号、（永禄十一年）七月七日付畠山秋高書状中にその名が見えるが、詳細は不明である。

### 三宅志摩守智宣

ので、遊佐盛・遊佐高清とともに金剛峰寺に宛てて連署折紙を発給している、畠山秋高の有力内衆である。

### 遊佐越中守高清（左衛門大夫）

紀伊に関しては前条の三宅智宣と同様に、 の で、金剛峰寺に対して連署折紙を発給している、畠山秋高の有力内衆である。

### おわりに

分国支配に関し、応仁の乱以前の事例になるが、紀伊の場合、守護代が在京した例と在国した例とが検出できた。このことから、紀伊の守護代は、時宜に応じて紀伊と京都とを往来していたと考えられる。守護代が在京した場合には、小守護代（又守護代）とは別に、 の平窪某・ の江河新左衛門尉のように、留守役が置かれていた。これは守護代の職が、小守護代では代行できないことを示しているよう。

また、おそらく畠山満慶の時に守護代が、口郡と奥郡とに分かれて設置されるようになったとみられる。なぜ、分かれたかは分らないが、南北に長い紀伊の国情にあわせて設置されたと考えたい。で示した「施無畏寺文書」八号より、有田郡までが口郡守護代の管轄であることも判明した。

畠山氏の支配体制において、守護代の下に小守護代・郡代が置かれていたことは、今谷明氏が河内を例に論証されている。これらの職は当初からそのように呼ばれていたのではなく、又守護代・郡奉行と呼ばれていた。紀伊の場合、『高野山文書・大』四 三二〇号、嘉吉元年（一四四一）閏九月六日付両所十聴衆評定事書案が、「小守護代」の初見史料である。このことから、又守護代と呼ばれていた職が、畠山持国の時に小守護代と呼ばれる

ようになったことが分かる。郡奉行も同様に、持国の時期に郡代と呼ばれるようになったと考えたい。

畠山政長と義就の任免に伴う守護代等の交替は、当然予想していたが、それ以前にも、嘉吉の変後に畠山持国が復歸した際と、享徳三年（一四五四）の錯乱後にも大規模な交替が行われている。特に嘉吉の変後は、それまでの顔ぶれが一変すると言ってもよいほどの大規模な交替となった。この交替は単に畠山持永派の罷免とみるよりは、持国の河内在国時に近侍したと思われる側近に対する論功行賞の性格が強いのではないかと考えている。これは、この交替で罷免されたとみられる草部氏が、後に畠山政長の内衆として見えることから裏付けられよう。嘉吉の変後に行われた内衆の交替は、後の畠山弥三郎・政長派の形成にとって、看過しえない事態であったと言えよう。

予想されたことであるが、応仁の乱以降においては、分国支配に関係した内衆の検出そのものが難しくなった。ことに明応の政変以降は、応仁の乱以前の職制や、それに基づく文書様式では説明できない場合も多く、新たな検討が必要である。

本章では元来紀伊出身で畠山氏内衆として分国支配等にかかわった人物が、少なからず検出できた。ただ、保田知宗等は紀伊国内での事例を検出できず、本章では検討の対象とはしなかった。これは本章が守護制度の基礎的作業と言うことで、守護の変遷と紀伊支配にかかわった人物の検出を主に行ったからである。このようなきわめて限られた面からの考察であるため、守護制度そのものを検討できたとは言いがたいが、守護制度を考える上では、正確な人名や役職の復元から始めなければならないと考えている。

#### 註

（１） 同氏『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）。主に三編による。以下、本文中で注記を省略した小川信氏の著書はこれを指す。

(2) 『高野山文書』(『大日本古文書』家わけ一、以下『高野山文書・大』と略す)二 六九一号による。本文書の「応永八年」の年号は追筆なので、小川信氏は内容より応永七年(一四〇〇)の可能性がある。著書で述べられた。ただ、応永七年(一四〇〇)とも断定できないので、ひとまず『高野山文書・大』の付年号によって、応永八年(一四〇一)とした。

(3) 今谷明氏は「守護領国制下に於ける国郡支配について」(同氏著『室町幕府解体過程の研究』一部五章、岩波書店、一九八五年、初出一九八二年)で、広瀬某を「郡奉行」とされた。筆者が東京大学史料纂所影写本で確認したところ、『高野山文書・大』のとおり「都奉行」と記していたため、本章では瀬某を都奉行とした。 広 編

(4) この書状の発給者を『和歌山県史』中世史料二では、「某」とした。平成十一年(一九九九)三月に刊行された『加能史料』(室町)により、発給者が富樫満成であることが明らかにされたため、本章ではそれによった。ただ、「且来八幡神社文書」の写真版では、自署は確認できなかった。

(5) 草部氏に関しては、木村安男氏が「中世後期の守護裁判 紀伊国守護畠山氏の場合」(『鳴門史学』四、一九九〇年)で、郡代とした。これは木村氏が在国守護代と小守護代を混同したためとみられ、氏の見解が成立する余地は全く無い。

(6) の検出は、矢田俊文氏「戦国期の奉公衆家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章五節、塙書房、一九九八年、初出一九八六年)によった。

(7) 同氏「室町時代の河内守護」(同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七六年)。以下、本文中で注記を省略した今谷氏の研究はこれを指す。

(8) 『高野山文書・大』五 七五〇号では「益田久康」とする。だが、畠山氏の内衆に益田姓の人物はいない。筆者が東京大学史料編纂所影写本を見た限りでは「益」ではなく「誉」である。

(9) 「先祖旧記帳」(「森家文書」『和歌山県史』未収)。なお、同文の文書が『紀伊続風土記』(古文書部)所収「誓度寺文書」中に見えるが、こちらは「法楽寺」を「柴寺」と誤っている。

(10) 今谷明氏「室町幕府侍所頭人並山城守護補任沿革考証考」(同氏著『守護領国支配機構の研究』一章、初出一九七五年)。

(11) 『熊野速玉大社古文書古記録』一七二号では通公とするが、これは『紀伊続風土記』(古文書部)の誤りを踏襲したためである。

(12) 『和歌山県地名大辞典』(角川日本地名大辞典三〇、角川書店、一九八五年)東家の項。

(13) 桑山浩然氏校訂『室町幕府引付史料集成』上巻(近藤出版社、一九八〇年)。

(14) 「奥家文書」(『和歌山県史』中世史料一)四号では、遊佐兵庫助の実名を「光俊」とするが、東京

大学史料編纂所影写本には、この文書を偽文書と注記しているので、本章では光俊とはしなかった。

(15) 川岡勉氏「河内守護畠山氏における守護代と奉行人」(同氏著『室町幕府と守護権力』三部二章、吉川弘文館、二〇〇二年、初出一九九七年)。

(16) 小谷利明氏「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)。

(17) 拙稿「『藩中古文書』に見える目良・脇田文書」(『田辺市史研究』四、一九九二年)。

(18) 文龜四年(一五〇四)は、二月三十日に永正と改元されており、文龜四年四月十九日は存在しない。

当時畠山尚順は細川政元政権と対立しており、その関係で改元の伝達が遅れたのかも知れない。あるいは、京都を掌握している細川政元政権に対抗する意味で、畠山尚順方が故意に永正の年号を使わなかった可能性もある。

(19) 『和歌山県史』中世史料一では「悦定」としているが、これはこの文書の原本調査ができなかったために『高野山文書・刊』七三四〇号のまま所収したからである。今回東京大学史料編纂所影写本「平野文書」で、訂正と花押の照合を行った。

(20) 網野善彦氏「小山家文書について 調査の経緯と中世文書」(同氏著『日本中世史料学の課題』三章、弘文堂、一九九六年、初出一九九〇年)。

(21) 日野西真定氏編『新校高野春秋編年輯録・増訂版』(名著出版、一九九一年)では、永正五年(一五〇八)とするが、そうすると一部一章で述べたように、この時点では両畠山氏の和睦は破綻しており、畠山義英方の判物は発給が難しかったと考える。

(22) 今谷明氏「細川三好体制研究序説」(同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部四章、岩波書店、一九

八五年、初出一九七三年）。長江正一氏著『三好長慶（人物叢書）』（吉川弘文館、一九六八年）。

（23）奥野高広氏著『増訂織田信長文書の研究』上（吉川弘文館、一九八八年）一六一号、および同文書の

参考文献書の考証による。

〔追記〕旧稿発表以降、畠山氏に関する研究が進展して、分国支配にかかわる内衆が少なからず検出された。また、旧稿時には畠山氏内衆だと考えられていた人物が内衆でなかったり、別人だと考えていた人物が同一人物であったりした場合もある。ただ、筆者の整理の都合上、人名の番号は旧稿のままとし、  
原  
則として新しい人物を加えず、同一人物と見られる人物もそのままにした。

〔参考〕室町時代紀伊国守護・守護代等一覧

（1） 18	間 同	期 13	職 12	在 永	（2） （2） （2）	代 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	守護 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	（2） （2） （2）	人等 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	奉行 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	代・ （遊佐） （遊佐） （遊佐）	守護 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	小
18	同	13	12	永	（2） （2） （2）	（遊佐） （遊佐） （遊佐）	（遊佐） （遊佐） （遊佐）	（2） （2） （2）	人等 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	奉行 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	代・ （遊佐） （遊佐） （遊佐）	守護 （遊佐） （遊佐） （遊佐）	小

- （1） 守護の在職期間で、一部一章中に典拠等を明示した場合は、根拠を注記していない。
- （2） 守護代・小守護代・奉行人とも、必要に応じて表中に再掲した。なお、表中の という番号は、一部二章と共通である。
- （3） 今谷明氏『守護領国支配機構の研究』による。
- （4） 以下は、明確に守護代職とは決めがたい。別の職名で呼ぶのが適切かも知れない。
- （5） 足利義維のいわゆる堺公方府が成立するのは、大永七年（一五二七）二月の京都桂川の戦い以降であるが、当主としての活動が大永三年（一五二三）には見えるので、このように表示した。
- （6） 細川晴元政権から見れば反逆者であるが、將軍足利義晴との関係がよく分からず、この間は保留としたい。
- （7） 守護代と言い難いが、家格的には同格と考えた。



### 第三章 某姓宣顯に関する一考察

#### はじめに

室町時代の守護による分国支配を検討する際、基礎的作業の一つとして、分国支配に携わった守護内衆を検出する必要がある。以前筆者は、紀伊守護畠山氏の分国支配に携わった内衆について、考察を加えたことがあったが、その折り、特異な存在として浮かび上がったのが、某姓「宣顯」であった<sup>(1)</sup>。

筆者は拙稿を取りまとめるにあたり、当然先学諸兄の研究成果を最大限に活用させていただいた。その際、畠山基国の内衆を取りまとめるに当たって、参考にさせていただいたのが、小川信氏の研究であった。小川氏は、某姓「宣顯」は大内義弘の紀伊支配に携わった被官であったが、応永の乱に際して大内弘茂とともに幕府軍に降り、引き続き新たに守護に就任した畠山基国の紀伊支配の任務を分担した奉行人であり、畠山基国が在地の情勢に明る旧大内氏被官の一部をも分国紀伊経営のために起用したとされた<sup>(2)</sup>。

一方「宣顯」に関しては、岩倉哲夫氏も考察を加えている。岩倉氏はこの「宣顯」を大内氏の有力内衆陶氏の一族で、紀伊守護代であった「陶宮内少輔」と推定された<sup>(3)</sup>。

両氏の研究成果をそのまま合わせ考えれば、畠山基国は大内義弘の紀伊守護代であった陶宮内少輔宣顯を奉行人として、分国支配に起用したことになる。これが事実ならば、畠山基国が自らの内衆を差し置いて、武力で討滅した前守護大内義弘の有力内衆を分国支配に起用したことになり、畠山氏の分国支配・家臣団編成を考える上で、すこぶる興味深い事実と言える。

拙稿では畠山氏内衆の検出を急ぐあまり、大内義弘期の分国支配に関しては、一切考察を加えておらず、「宣顯」の問題の大きさを看過していた。前述の如く「宣顯」の問題は、畠山氏の分国支配・家臣団編成の根幹にかかわる重大な問題であると考えられるので、改めて考察を加えてみたい。小川信氏・岩倉哲夫氏の研究成果を否定する考えは毛頭無いが、両先学に礼儀をわきまえないことをお詫びしつつ、本章を進めていきたい。

## 一 宣顯と畠山氏の関係

本節では、某姓宣顯を畠山基国の奉行人に比定できるのか、検討してみたい。小川氏が宣顯を畠山基国の奉行人と推定された際、根拠となった『高野山文書』（『大日本古文書』家わけ一）一三四〇号（史料A）・三四一号（史料B）・三四二号（史料C）を、次に掲げる。

A 高野山領紀伊国荒河庄内山採用事、田仲庄沙汰人百姓等、雖申子細、為他領不立内山之段、支証分明之上者、如元所令停止之状如件、

応永七年十二月五日

沙弥（花押）  
（畠山基国）

B 荒河山事、任御奉書之旨、自田中庄、可被止違乱候、若猶以成煩候者、則可有罪科候、固可被申付候、恐々謹言、

十二月十一日

宣顯（花押）

神代民部丞殿

C 高野山領紀伊国荒河庄内山採用事、任今月五日被仰下之旨、所令停止田仲庄沙汰人百姓違乱之状如件、

応永七年十二月廿三日

淨安（花押）

史料AとCは、年号が記されていることから、応永七年（一四〇〇）十二月に発給されたことが判明する。史料Bは無年号であるが、『大日本古文書』の編者は、史料Bが史料AとCの間に位置し、日付も史料AとCの間に位置することから、史料Bを史料A・Cと一連のものと考えたのである。史料Bの年代を、応永七年（一四〇〇）と推定している。小川氏もおそらく『大日本古文書』の推定によったのであろう。

『大日本古文書』の年代推定は、一見正鵠を射ているように見えるが、内容や宛所の検討を十分に行っていると言えるのだろうか。史料Bの文中に「任御奉書之旨」と見えるが、史料Aはそれに該当するのであろうか。史料Aは文中に奉書文言が無く、小川氏が述べられた如く、書下形式の文書であり、奉書ではない。したがって、史料AはBの「御奉書」には当たらないのである。史料BがAを受けて発給された書状でないことから、史料Bの年代を『大日本古文書』の通り、応永七年（一四〇〇）と推定することは、根拠がないと言えよう。

では、史料Bは何年に発給されたものであろうか。管見の限りでは、史料Bの文中の「御奉書」に該当する史料を見いだすことはできず、現在のところ、正確な年代推定は不可能である。

次に史料Bの宛所である「神代民部丞」について見ていこう。紀伊国人に神代氏は見えず、畠山氏家臣団中にも神代氏は見いだせない。だが、大内氏の家臣に神代氏が見えることは、先学諸兄の研究より明らかである<sup>(4)</sup>。このように、史料Bの発給者はならびに宛所は、ともに大内氏被官である。したがって、人物面から史料Bは、畠山基国の時期に発給されたと言えよう。

以上のことより、宣顯・神代民部丞が共に畠山氏に降り、畠山基国が大内義弘の支配体制をそのまま引き継いだと考えるよりも、史料Bを、大内義弘が紀伊守護に在職していた時期のものと考える方が、自然であると言えよう。『高野山文書』は必ずしも同じ年代の文書を一まとめにしているとは限らない以上、このように結論でき

よう。

## 二 宣頭と陶宮内少輔について

次に宣頭は大内義弘の紀伊守護代「陶宮内少輔」に比定してよいのだろうか。まず、時期の面から検討してみよう。

陶宮内少輔の名であるが、『高野山文書』七 一五四八号、応永五年（一三九八）七月十六日付大内氏奉行人連署奉書<sup>（5）</sup>の宛所に、その名が見えるのが初見であり、「粉河寺御池坊文書」（『粉河町史』三巻）二四号、応永五年（一三九八）十月十五日付守護大内義弘奉行人連署奉書の宛所に、その名が見えるのが終見である。なお、紀伊において、陶宮内少輔の名で発給された文書は、現在のところ知られていない。

次に宣頭の名が見える文書の日付と宛所を示してみよう。

応永六年（一三九九）十一月十六日付三隅入道宛遵行状（『小山文書』『大日本史料』七編之四、応永六年十一月十六日条）。

（年不詳）五月十一日付丹生屋民部卿律師御坊宛書状（『粉河寺御池坊文書』三四号）。

（年不詳）十二月十一日付神代民部丞宛書状（前掲史料B）。

年代が確定できるのはのみであるが、大内義弘は応永六年（一三九九）十二月二十一日に戦死しているの、  
・ はそれ以前と考えてよいだろう。陶宮内少輔の確実な終見が、応永五年（一三九八）十月十五日であり、大内義弘の戦死まで一年以上間がある以上、  
・ の書状は必ずしも陶宮内少輔と時期的に一致するとは限らず、この面から断案を下すことはできないと言えよう。

次に守護代の職から検討してみたい。宣頭は で、部下（郡使か）と見られる三隅入道に、大内義弘の命を遵

行しており、の書状でも部下と見られる神代民部丞に「申付」ている。地域的にも「日高郡印南本郷」であり、が那賀郡の田中荘・荒河荘の事件であるから、紀北から紀中にかけて広がりを持ち、一郡のみではない。以上のことから、宣頭を大内義弘の守護代と考えても支障は無いだろう。

陶宮内少輔の地位であるが、前述の如く、守護奉行人奉書の宛所となっている。守護は分国支配に際して、守護奉行人奉書を守護代に宛てて発給することが多い。このことや岩倉氏の研究により、陶宮内少輔を守護代とすることは妥当であろう。

岩倉氏の言われるように、陶宮内少輔を宣頭とすることは、状況等より考えて有力である。だが大内義弘は、陶宮内少輔の確実な終見である応永五年（一三九八）十月十五日の翌日、九州に下向しており、これを契機に幕府に対する叛意を固めたと言われている<sup>6</sup>。宣頭の発給した文書の内、が応永の乱と言う非常時に発給されており、・も応永五年（一三九八）十月以降に発給された可能性が否定できない以上、平時の紀伊守護代陶宮内少輔が、そのまま在任していたとは限らない。このように、陶宮内少輔と宣頭の名が見える時期が一致するとは限らないことより、両者は同一人物の可能性が存在するが、断定はできないと言えよう。

## おわりに

以上拙い考察に終始したが、大内義弘の被官が引き続き畠山基国に仕え、紀伊の支配に関与した事実がなかったこと、陶宮内少輔が必ずしも宣頭と同一人物と言えないことが、明らかになった。大内義弘の支配体制と畠山基国の支配体制の間に、人的な継承はなかったのである。

筆者が県下の自治体史を執筆する際、室町時代は大内義弘から始めることが多い。これは、大内義弘の時に、曲がりなりにも守護の威令が紀伊一国に行き渡るようになったからである。今後、大内氏と畠山氏の支配体制の

相違点について、研究を深める必要があると言えよう。

# 註

(1) 拙稿「紀伊守護家畠山氏の支配体制」(本書一部二章)。なお、本文中の拙稿とは、旧稿の「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」(『和歌山県史研究』一七、一九九〇年)のことである。

(2) 同氏「畠山基国の活動と管領畠山氏の成立」(同氏著『足利一門守護発展史の研究』三編三章四節、吉川弘文館、一九八〇年)。以下、本章で特に注記をしない小川信氏の研究はこれを指すことを、お断りしておく。

(3) 同氏「室町時代の紀伊守護体制について 山名義理・大内義弘の時代」(『海南市史研究』六、一九八一年)。以下、本稿で特に注記をしない岩倉哲夫氏の研究はこれを指すことを、お断りしておく。

(4) 神代氏が大内氏の奉行人であったことは、田村哲夫氏「守護大名『大内家奉行衆』」(『山口県立文書館研究紀要』五、一九七八年)、および松岡久人氏「西国の戦国大名 大内氏を中心として」(『永原・ホールヤマムラ編『戦国時代』所収、一九七八年。後に岸田裕之氏編『中国大名の研究』戦国大名論集6に所収、吉川弘文館、一九八四年)等を参照されたい。

(5) 『大日本古文書』の編者はこの文書を、「荒河庄山沙汰下知状」とするが、本稿では、岩倉哲夫氏の見解によった。

(6) 臼井信義氏著『足利義満(人物叢書)』(吉川弘文館、一九六〇年)。

## 第四章 応永二十五年・熊野本宮と守護の抗争

### はじめに

応永二十五年（一四一八）に発生した、守護畠山氏と熊野本宮との抗争は、武力衝突に発展した。守護側になりの犠牲を出したこの事件は、守護の分国支配に少なからぬ影響を与えたとみられる。今回、この事件に関する史料をまとめるとともに、事件の概要・背景・歴史的位置付けについて、若干の考察を加えてみたい。

### 一 史料に関して

まず、応永二十五年（一四一八）の守護畠山氏と熊野本宮の抗争に関する史料を、次に一括して掲げる（必要部分のみ抜粋）。

A 七日、晴、聞、熊野神輿御動座、被訴守護云々、（畠山満家）（1）

B 十八日、戊戌、降雨、（中略）熊野神輿紀州タナヘマテ今日御上、守護畠山左衛門督内者  防之、守護勢数十人 打死、神輿  帰座、神人等弥致嗽訴云々、（2）

C 廿四日、晴、玉櫛退出、正永退出、抑聞、熊野神輿奉振、紀伊国田那辺二発向、守護畠山 （左） 右衛門督入道、於此

所防戦、然間田那边二神輿振棄、熊野勢二里許引退、守護勢乗勝追懸、於山中嶮阻、熊野勢返合責戦之間、守護勢打負、或海中二沈死者不知其数、於山中被討侍名字七十余人、其外雑兵不知数云々、河内勢若干被討了、紀伊国人裏返守護勢打負云々、畠山陸梁重可下討手之由申、但神訴之間、自公方御成敗被成御教書了、神訴落居云々、濫傷<sup>(マ)</sup>神領守護違乱之故云々、畠山受病神敵之故歟、<sup>(3)</sup>

D<sup>(八月)</sup>十六日、甲午 晴、<sup>(中略)</sup>後聞、熊野本宮、神輿、今日自田辺庄御歸座也、明日本山御入云々、田辺庄事重被成下安堵御教書故也、其外守護方畠山殿、ヨリ一庄奉寄進本宮云々、為天下為熊野、自他珍重々々、檢校聖護院、先可為如元由、自公方被仰出了、乍去於熊野是非不用申云々、<sup>(4)</sup>

E<sup>(熊野)</sup>くまの<sup>(奥)</sup>御こし、昨日二日ちかつゆまで御出候よし、<sup>(近)</sup>こんた<sup>(雷)</sup>とのより承候、御内方国の人々の御かた<sup>(方)</sup>へ早々大の<sup>(野)</sup>へ御出あるへきよし、ふれ<sup>(触)</sup>申さるへく候、尚々此おり<sup>(折紙)</sup>かみつ<sup>(急)</sup>き候ハ、いそき<sup>(急)</sup>々御出候へきよし、ふれ<sup>(触)</sup>申へく候、謹言、

卯月三日

<sup>(草部)</sup>宴盛<sup>(花押)</sup>

玉手七郎左衛門入道殿<sup>(道秀)</sup><sup>(5)</sup>

史料Aは、この事件に関する京都への第一報であろう。史料B・Cは、事件の概要を記した史料として知られている。史料Dは、事件の結末を記している。史料Eはこの事件に関して発給された書状とみられる<sup>(6)</sup>。

## 二 事件に関して

守護による田辺押領に対する熊野本宮の神輿を押し立てての「神訴」は、応永二十五年（一四一八）四月二日



には神輿が近露にまで進み、同十八日田辺に入って、守護方との合戦となった。神輿が近露から田辺に進むまで、日数がかかっているのは、この間両者の間で、交渉が行われたからとみられる。交渉が不調に終わったため、熊野本宮側が実力行使に出たのである。合戦は最終的には守護方の敗北となった。

幕府から守護方に「成敗」の御教書が出され、事態は一旦解決したかに見えた。だが、熊野本宮側が納得しなかったらしく、八月十六日に至り、幕府より「田辺庄」安堵の御教書と、守護方よりの一荘園寄進で事件は解決した。この時守護から熊野本宮へ寄進された荘園は未詳だが、解決まで少々日数がかかっていることから、熊野本宮の守護畠山氏に対する不信は、かなり強いものがあつたようだ。

史料B・C・Dより、この熊野本宮と守護畠山氏の抗争の焦点が、田辺であつたことが分かる。次にこの理由を考えてみたい。

矢田俊文氏が指摘された如く、この時期奥郡又守護代の中村氏は、日高郡南部荘に在荘していた<sup>(7)</sup>。したがって、守護畠山氏の紀南における拠点は、南部にあつたと言えよう。これは鎌倉時代以来、守護が南部荘の地頭職を兼ねていたからとみられ、当座の支配拠点として都合がよかったからであろう<sup>(8)</sup>。だが南部は、守護の紀南における支配拠点としては、やや北に位置している。

延文五年（一三六〇）の畠山義深以降<sup>(9)</sup>、山名・大内氏ともに牟婁郡にまでは軍事行動を起こしておらず、応永の乱後紀伊守護に就任した畠山基国も同様であつた。したがって牟婁郡には、守護の拠点となるべき守護領が存在しなかったのではない。そこで守護畠山氏は、牟婁郡における水陸交通の要地田辺に、拠点を築こうとしたのであろう。それが守護勢力による熊野本宮領の押領と言う形をとったため、熊野本宮側が実力行使に訴えたとみられる。

「熊野詣日記」（『那智叢書』十七）応永三十四年（一四二七）九月二十五日条には、田辺を「熊野の神領也」と記している。これは応永末年に至っても、守護と熊野本宮の力関係に基本的に変化がなかったことを示してい

ると言えよう。

また、この事件における国人の動向も注視する必要があるだろう。史料Cに記されたように、守護に動員された紀伊国人が熊野本宮方に「裏返」っている。これらの事実は、室町幕府の安定期と言われる応永年間に至っても紀南の地は、守護の支配体制が不安定であったことを物語っている。

## おわりに

この事件は、守護畠山氏が紀北ばかりか河内勢をも動員したため、大規模な軍事衝突となった。結果は守護方が敗北し、幕府の重臣畠山満家の要請にもかかわらず、幕府は軍事行動を起こさなかったばかりか、熊野本宮側に有利な形で決着している。事件の発端が、守護による熊野本宮領の押領だからであろう。

この事件により、守護勢力の牟婁郡進出は打撃を受けた。その結果、戦国期に至るまで、南部が紀南における守護の拠点として、機能していくのである。

## 註

- (1) 『看聞日記』(『続群書類従』補遺) 応永二十五年四月七日条。
- (2) 『満済准后日記』(『続群書類従』補遺) 応永二十五年四月十八日条。
- (3) 『看聞日記』 応永二十五年四月二十四日条。
- (4) 『康富記』(増補史料大成) 応永二十五年八月十六日条。
- (5) 「原家文書」二一五号(『和歌山県史』中世史料一)。
- (6) 拙稿「紀伊守護家畠山氏の支配体制」(本書一部二章) 参照。

(7) 同氏「戦国期の奉公衆家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章四節、塙書房、一九九八年、初出一九八六年)。

(8) 相田二郎氏「高野山領紀伊国南部荘の研究(上)」(『歴史地理』四六 二、一九二五年)、小泉宜氏「地頭請に関する一考察」(『日本歴史』二九八、一九七三年)。

(9) 小川信氏「足利一門守護畠山国清の動向」(同氏著『足利一門守護発展史の研究』三編二章二節、吉川弘文館、一九八〇年、初出一九七八年)。

(追記) 本章の史料A～Eは、二〇〇四年に刊行された『大日本史料』七編之三十、応永二十五年四月三日条に所収されている。

## 付論 畠山修理大夫満慶に関して

応永十三年（一四〇六）正月十七日に畠山基国が没した後、基国の嫡子満家ではなく、次子の満慶が畠山氏の家督を継承したことは、定説化したと考えられていた。ところが、今谷明氏が「一四 一五世紀の日本 南北朝と室町幕府」の中で、「甥満家をさしおいて河内・紀伊・能登・越中四国守護に就いていた畠山修理大夫入道（深秋か）は能登国の守護に左遷された」とされ、それまでの研究成果を否定された<sup>(1)</sup>。この時点で、今谷氏がなぜこのような記述をしたのか、根拠が分からなかったが、『藤井寺市史』（一卷通史編一）で、「河内・紀伊・能登・越中の四カ国の守護職と家督は叔父（基国の弟）の修理大夫入道に与えられた」と記し、その次に根拠らしき記述をされたことで、ある程度判明するようになった。筆者が理解した範囲で要約すると、応永十四年（一四〇七）六月の『観心寺文書』に「畠山修理大夫入道」と見える人物が、応永二十二年（一四一五）六月の『満済准后日記』（『続群書類従』補遺）に「畠山修理大夫」と見える人物と同一人物と考えるのは、矛盾しているということであるらしい。

今谷氏は『国史大辞典』の「畠山満慶」の項すら読まれていないらしく、畠山満家の弟を未だに「満則」と記し、「満慶」と記していない。筆者は能登畠山氏に対する理解がこの程度の畠山修理大夫に関する意見が、成立するとは考えていない。そこで、『上富田町史』（通史編）で、「この説は根拠とした史料の解釈を基本的なところで誤っているなど杜撰なもので、成立する余地はない」と記したが、自治体史という関係上、具体的な論証を省略している。この件に関しては、能登畠山氏の関する先学諸兄の説を紹介すれば十分であることは承知しているが<sup>(2)</sup>、筆者なりになぜ今谷氏の意見が成立しないのか、以下に根拠を示すこととしたい。

『観心寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）一三〇号、応永十四年（一四〇七）六月五日付室町幕府御教書

の宛先は、確かに「畠山修理大夫入道殿」であり、畠山基国が没した後、畠山修理大夫入道が畠山氏の家督を継承している。また、『満濟准后日記』応永二十二年（一四一五）六月十八日条・同十九日条には、確かに「畠山修理大夫」と記しており、「畠山修理大夫入道」とは記していない。だからと言ってこの事例からだけでは、今谷氏の意見が成立したとは限らない。

能登畠山氏に関する史料は、明德四年（一三九三）から応永二十三年（一四一六）までの部分が、『加能史料』（室町）にまとめられている。現時点では、『加能史料』（室町）が能登畠山氏に関しては最高の史料集と言っても過言ではないので、応永二十二年（一四一五）の事例に関して、これをもとに論を進めて行きたい。『加能史料』（室町）では、応永二十二年（一四一五）六月十九日条に、「これより先、幕府、伊勢国司北畠満雅を討たんとし、諸將に発向を命ずる。この日、畠山満慶、大和国へ進発する。」という綱文をたてて、『満濟准后日記』等関係史料を掲載している。この中では、南都興福寺関係の史料である「東院毎日雑々記」（史料A）と「寺門事条々聞書」（史料B）が重要であると考えられるので、次に引用し検討してみたい（必要部分のみ抜粋）。

A 十九日、乙酉、畠山修理大夫入道為北畠少将満雅朝臣對治下向

B 一、六月十九日、為伊勢国司對治、畠山舎弟大夫入道下向

史料Aに「畠山修理大夫入道」、史料Bに「畠山舎弟大夫入道」と記していることから、今谷氏の言われるように、応永二十二年（一四一五）六月の時点で、畠山修理大夫が出家していなかったとすることが否定できる。また、史料Bに「畠山舎弟大夫入道」と記しており、この「畠山」が「満家」であることは疑いのない事実であるから、畠山修理大夫入道が畠山満家の弟であることも同様に判明する。

今谷氏が満慶の名前を誤解した原因のひとつに、『満済准后日記』の記述方法があると思われる。たとえば、『満済准后日記』応永三十四年（一四二七）十一月十一日条では「畠山修理大夫入道」と記しているが、同三十五年（一四二八）正月十七日条では「畠山修理大夫等来」と記し、「入道」の文字が無い。また、『満済准后日記』正長元年（一四二八）四月二十六日条では「畠山修理大夫入道」と記している。この間、畠山修理大夫（入道）死亡の記事が無いことから、この三例の「畠山修理大夫」「畠山修理大夫入道」は、同一人物である。これは筆者がわざわざ記すまでもないことも知れないが、満済が常に姓名や官途等を最後まで正確に日記に記しているとは限らないからである。

さて、畠山満慶が出家して道祐と称したことは、先学諸兄の研究の一致するところである。応永十八年（一四一一）四月三日、能登守護「沙弥道祐」は幕府に対して、同国鵜河保に関する請文を発給している（『加能史料』室町 同日条所収「尊経閣古文書纂」）。応永十三年（一四〇六）九月十日、足利義満とともに東寺に参詣し、仏舍利を奉請した幕臣の中に畠山「道祐」の名がみえる（『大日本史料』七編之八、同日条）。このことから先学諸兄の研究のとおり、畠山満慶が畠山氏の家督継承後に出家して道祐と称し、後に能登守護として活動していたことが証明できる。

以上のことから、畠山基国の没後、畠山氏の家督を継承したのが伯父であるとするのは、史料解釈の誤りによるものであることが、明白となった。したがって、畠山基国の没後、畠山氏の家督を継承したのは、従来どおり満家の弟満慶であると結論できよう。

#### 註

- （１） 同氏著『室町時代政治史論』一部（塙書房、二〇〇〇年、初出一九九四年）。
- （２） 畠山満家の弟が満則では無く満慶であり、満慶がいわゆる能登守護家の祖であることは、米原正義氏

『戦国武士と文芸の研究』一章（桜風社、一九七六年、初出一九六五年）、日置謙氏編・松本三都正氏訂『増訂加能古文書』等を参照されたい。本章はこれら先学諸兄の研究成果に負うところが多く、文の「先学諸兄の研究」は、この註の論考・史料集を指すので、特に注記はしていない。

中 増

## 付論 畠山式部太輔と貞政

天正十三年（一五八五）三月、羽柴秀吉の紀州攻めがおこなわれた。この際、紀伊の各地で秀吉軍と在地勢力との戦闘がおこなわれたが、畠山氏もこの戦いと無縁ではなかった。すでに室町幕府は滅亡し、畠山氏は紀伊の守護ではなかったが、有田郡内で所領を有しており、この地の有力領主でもあったからである。畠山氏は湯河氏らとともに秀吉軍に抵抗したため、有田郡内の所領を失うこととなったが、その際、秀吉軍に抵抗したのは畠山貞政とされている。今までの史料の人名比定に従うと、秀吉軍と戦って戦死した畠山貞政が、江戸時代まで生きて、高家畠山氏の基礎を築いたこととなる。従来はこの点が曖昧にされていた観があることから、ここで、検討してみることとしたい。

羽柴秀吉の紀州攻めにあたり、畠山貞政が戦死したとされる根拠は、『小早川家文書』（『大日本古文書家わけ第十一』）一 二八四号、（天正十三年）三月二十五日付羽柴秀吉書状である。この書状はその後刊行された『大日本史料』十一編之十四、天正十三年（一五八五）三月二十五日条にも所収され、その際、誤植等の訂正を行っている。そこから関係する部分を次に掲げてみよう（以下史料は、必要部分のみ抜粋）。

此表依為多人數、手を分、千石権兵衛尉・中村孫平次・小西弥九郎、其外人数、至湯川館差遣候処、畠山式部太輔・村上六右衛門親子三人・柏原父子・根来法師蓮蔵院以下、数多討果、畠山居城戸屋城乗捕候、三日之内二泉州・紀州任存分候、然者、湯川一城相抱候、即取巻、秀吉儀者紀湊二府城

『大日本古文書』・『大日本史料』等、従来刊行された史料集等では、畠山式部太輔を貞政に比定している。この人名比定をそのまま信じて良いか否か、検討してみよう。



残念ながら天正十三年（一五八五）の時点で、畠山貞政の動向を示した良質の史料が存在しないため、考証は系図類に依拠することとなる。本稿で使用する系図は、『寛政重修諸家譜』所収「畠山系図」（以下、『寛政本畠山系図』と略す）、「両畠山系図」（『続群書類従』五上）、「系図纂要』所収「畠山系図」（以下、『纂要本畠山系図』と略す）であり、「畠山家譜 系図」（内閣文庫本）は使用しない。これは、前三者が比較的良好に利用されているばかりでなく、「畠山家譜 系図」が他の系図類と比べて、あまりにも異なっており、比較の対象とはしにくいからである。

『寛政本畠山系図』では、貞政の官途を「左衛門佐」と記している。「両畠山系図」でも、貞政の官途を『寛政本畠山系図』と同様に「左衛門佐」と記している。『纂要本畠山系図』では、貞政の官途を記していない。いずれの系図類も畠山貞政の官途を式部太輔と記したものはない。諸系図類、特に祖先の事績を記した『寛政本畠山系図』では、高家畠山氏の基礎をつくった畠山貞政の官途を誤って記すとは考えられないことから、貞政が式部太輔を称した可能性は無いと見られる。

次に貞政が秀吉軍と戦った場所をみてみよう。『寛政本畠山系図』では、次のように記している。

十三年三月豊臣太閤兵を遣わして、貞政がまもれる岩室城を攻しむ。ときに家臣白檜某密に太閤にこふて、もし畠山の家を存したまはゞ、内応をなさむといふ。太閤これを許すにより、白檜火を放ちて兵を挙げ城遂に陥る。其のち貞政京師をよび堺・高野山等を経歴し、摂津国小平野庄に住す。

これによると、貞政が秀吉軍と戦ったのは湯川館ではなく、岩室城として記している。「両畠山系図」では、畠山高政が「於岩室城卒、其後貞政保持宮原矣、秀吉公紀州発向之時退去宮原」「閑居摂州小平野庄」と記している。また、『纂要本畠山系図』では、「十三年三ノ 秀吉公来攻岩室城逃走」と記している。「両畠山系図」では貞政の居場所を「宮原」としているが、岩室城は有田郡宮原にあった城なので（一）、他の系図と同義に考えてよい

だろう。いずれの系図も貞政の居城は岩室城であったとすることで、一致したとみることができよう。

岩室城のあった宮原に湯河氏が館を構えたとする史料はない。『小早川家文書』にみえる「湯川館」とは、湯河氏が畠山氏から押領した広とするのが妥当であろう。なぜならば、『小早川文書』に「湯川一城相抱候、即取巻」いた城が湯河氏の本拠地日高郡の小松原と見られるからである。以上のことから、『小早川家文書』の「畠山式部太輔」は、貞政ではないと結論できる。ただし、天正十三年（一五八五）に湯川館で秀吉軍に討ち取られた畠山式部太輔の名前は、現時点では不明とせざるを得ない。

さて、前出の『小早川家文書』に見える「戸屋城」は、有田郡の鳥屋城に比定できる。鳥屋城があった石垣荘は室町時代守護領であった<sup>(2)</sup>。ただし、諸系図類には、貞政が鳥屋城を本拠としたとする記事はない。畠山貞政の居城とされる岩室城の位置した宮原は、奉公衆家畠山氏の所領であり<sup>(3)</sup>、鳥屋城とともに紀伊における畠山氏の拠点であった。したがって、天正十三年（一五八五）に畠山貞政が岩室城に在城していたとしても、何ら不自然なことはないと言えよう。

戦国時代の守護家畠山氏と奉公衆家畠山氏に関する研究は、十分に行われていない。したがって、諸系図類に記された畠山貞政の事績が、どこまで事実なのかよく分からない面がある。この点に関しては、今後の研究課題としたい。

#### 註

(1) 『和歌山県の地名』（日本歴史地名大系三一、平凡社、一九八三年）岩室城の項、『和歌山県地名大辞典』（角川日本地名大辞典三〇、角川書店、一九八五年）岩室山城の項、『定本和歌山県の城』（郷土出版社、一九九五年）岩室城の項。以下、本章における城館の地名比定は、この三書による。

(2) 「京都御所東山御文庫記録」（『大日本史料』七編之十九、応永二十年是歳条所収）に、応永二十年

(一四一三)の「長講堂領」として「紀伊国石垣庄」が見える。この史料には

長門国阿武御領

守護

紀伊国石垣庄

同

と記され、「同」とは「守護」のことなので、石垣庄を守護領と判断した。

(3) 福田豊彦氏「室町幕府の奉公衆体制」(同氏著『室町幕府と国人一揆』五年、初出一九七一年)。

四、吉川弘文館、一九九

## 第二部

### 畠山氏の抗争と紀伊

## 第一章 畠山氏分裂の原因に関して

### はじめに

畠山持国の跡目を巡る義就と弥三郎（政久）・政長との抗争は、結果的に応仁の乱を招いたことで、戦国の争乱の導火線の役割を果たしており、政治上重要な事件となっている。この経過に関しては、以前は混乱もみられたが、今谷明氏が的確に論じられたことで、大変理解しやすくなった。しかし、畠山氏の家督紛争を招いた原因に関しては、今谷氏はほとんど触れておらず、わずかに畠山氏が大和を事実上領国化したため、大和国内の抗争が畠山氏に波及したとする、大和説とも言える考えを提出されている（１）。

この大和説を論証しようとしたのが、熱田公氏である。熱田氏は享徳三年（一四五四）の畠山弥三郎と義就の抗争に際して「（越中の）神保氏らが義就にかえて弥三郎を擁立せねばならぬ積極的理由も、とくに見出せない」として大和説を論じた。大和においては、畠山持国と結ぶ古市胤仙・豊田頼英らが、成身院光宣・筒井順永らを追い落としたことで、成身院「光宣と筒井順永には、畠山持国の影響から脱するために、都合のよい家督を選ぶだけの、さしせまった理由があった」とされた（２）。

室町から戦国時代にかけて守護家では、しばしば家督紛争が発生した。その際、被官（内衆）が主君を交代させた例が、赤松氏などで知られている。しかし、守護被官でもない国人が、影響力を行使されているとは言え、その守護家の家督変更を主導する例は知られていない。畠山氏の家督紛争が、大和の国人が中心となっていたとすれば、前代未聞の事例である。また、大和説では、享徳三年（一四五四）に、弥三郎と持国・義就が家督を争

った際、その舞台となった京都において、弥三郎擁立の中心であるはずの、大和の成身院光宣と筒井順永の動きがみられないことに対する説明ができない。この他、大和説では享徳三年（一四五四）に限らず、畠山氏の家督紛争についての確に論証できない事が多く、問題が多い。

筆者は畠山氏の分国支配体制について、以前から調べているが、その結果、少なからぬ畠山氏内衆が、必ずしも畠山持国から義就への家督の交代を支持していたのではないことが、分かつてきた<sup>(3)</sup>。ただし、筆者も拙稿や自治体史で断片的に述べただけであり、まとめたとは言えない状況であった。そこで本章では、畠山氏分裂の原因について、筆者なりの見解をまとめてみたい。

## 一 分国支配体制の変化

嘉吉二年（一四四二）六月、畠山持国は管領に就任し、同八月二十二日、管領として幕府に出仕した。この時、持国に従った「供」の者については、『康富記』（増補史料大成）嘉吉二年（一四四二）八月二十二日条に、その名が記されている。「供」の者は、持国の有力内衆と考えられることから、「一番」から「五番」まで記されたその名を順に列挙してみると、遊佐弾正・誉田三河・遊佐蓮門・誉田遠江入道子息・斎藤六郎左衛門尉・土肥・洲（隅）田右京亮・斎藤兵庫・神保・椎名次郎左衛門尉である。

『康富記』の記事に見える内衆を、畠山基国期の家臣団を説明するのにしばしば使用される「相国寺供養記」（『群書類従』二十四）の記事と比較すると、斎藤氏が五騎から二騎に、遊佐氏が四騎から二騎に数を減らし、誉田氏が一騎から二騎に数を増やしている。これは、斎藤氏の勢力が嘉吉の変で凋落し、誉田氏が遊佐氏に匹敵する地位を得たことを示している<sup>(4)</sup>。

ただし、『康富記』に名前が見える内衆が、分国支配にかかわる守護代等の役職に就任したとは限らない。よ

つて、嘉吉の変の前後における、畠山氏の分国支配体制を検討することが、すこぶる重要な意味をもつと言える。なお、当時の管領家畠山氏の分国・分郡は、河内・紀伊・越中・大和宇智郡であり、これに加えて宝徳二年（一四五〇）二月には、山城も畠山氏分国となっている<sup>(5)</sup>。

まず河内支配にあたつた内衆について、今谷明氏の研究より抽出してみよう。嘉吉の変の以前、守護代は遊佐国盛、錦部郡代は菱木七郎右衛門入道であつた。それが嘉吉の変後には、守護代は西方国賢、錦部郡代は猿倉正遵に交代している。嘉吉の変以前に大和宇智郡の郡代であつた野尻氏も、嘉吉の変後持国に登用された形跡はない。

次に紀伊の状況を本書一章・二章より見てみよう。嘉吉の変以前の口郡守護代は遊佐国継、口郡小（又）守護代は草部盛長であつた。これが嘉吉の変後には、口郡守護代は誉田久康に、口郡小守護代が原融意に交代するとともに、法楽寺職久や江河新左衛門尉といった人物が、口郡の郡代や奉行人に就任している。

越中では、持永擁立の立役者と言える守護代遊佐国政が、嘉吉の変後失脚し、守護代には遊佐左衛門大夫とともに、新たに神保国宗が守護代に加わり、小守護代には草賀智照が就任している。また、嘉吉の変を契機に、神保国宗が婦負郡・射水郡、遊佐左衛門大夫が砺波郡と、郡単位に担当地域を分割するようになった<sup>(6)</sup>。

ここで特に問題としたいのが、畠山氏膝下の分国とも言える、河内・紀伊の守護代以下分国支配にかかわる内衆である。河内守護代の西方氏は、『康富記』享徳三年（一四五四）九月十日条に、畠山持国の「一族西形入道」と見える。この「西形」氏は、『師郷記』（史料纂集）同日条に「西方」氏と見えることから、西方氏が畠山氏一族であることが分かる。紀伊口郡守護代誉田氏は、河内の国人で、前出の「相国寺供養記」にもその名が見える、根本被官とも言える内衆である。法楽寺氏は大和国鷹山荘法楽寺出身の内衆とみられる<sup>(7)</sup>。猿倉氏・原氏・江河氏の出自は不明である。

西方氏は畠山氏一族とは言え、嘉吉の変以前には、分国支配に名前を見出せない人物であり、最も有力な内衆

がつく職である河内守護代に就任したことは、異例と言えよう。紀伊の口郡守護代菅田氏は、それ嘉吉の変以前から分国支配に名前の見える内衆であるが、せいぜい奉行人クラスであり、守護代の要職につくのはこれが初めてである。河内の錦部郡代である猿倉氏、紀伊の口郡小守護代原氏、郡代等に就任した法楽寺氏・江河氏も同様に、嘉吉の変以前には名前を見出すことはできない(8)。なぜ、畠山持国が嘉吉の変の後、分国の支配体制を一変させ、それまで名前を見出せなかった人物が、分国支配にかかわるようになったのか、まず、持国と持永の抗争について次節で検討してみよう。

## 二 持国と持永の抗争

畠山持国が分国の支配体制を一変させたことは、畠山持永との家督紛争が関係しているとみられる。そこで、持国と持永の家督争いを整理してみたい。

永享十三年(一四四一)正月二十九日、畠山持国は將軍足利義教と対立し、家督を異母弟の持永に譲り、河内へ下向して出家したことが、『基恒日記』(増補続史料大成)・『看聞日記』(『続群書類従』補遺)同日条より知れる。『建内記』(大日本古記録)嘉吉元年(一四四一)七月一日条によると、持国から持永への畠山氏家督の交代は、畠山氏が將軍からの家督干渉を避けるために、有力内衆の遊佐勘解由左衛門尉国政と斎藤因幡入道が中心となって企てたものであり、持国も異議がなかったとする。『建内記』の記事は、持国から持永への家督交代が滞りなく行われたことから、事実とみてよいだろう。また、当時守護家の家督の決定権は、最終的には將軍が保持していたことから、持国から持永への畠山氏家督の交代は、少なくとも將軍足利義教の内意が存在したことは間違いない。

持国と持永の関係は、嘉吉元年(一四四一)六月二十四日に、足利義教が赤松満祐に謀殺されたことで一変す



る。持国が河内に隠居している理由が存在しなくなったからである。持国は上洛をめざしたが、持永の母と結んだ遊佐国政・斎藤因幡入道が計略を巡らして持国を暗殺しようとしたため、事態が紛糾することとなった。持永の母が持国襲撃を企てたのは、一度我が子が入れた家督を手放したくなかったからであろう。

しかし、元来、持国の有力内衆であった遊佐国政・斎藤因幡入道が、持国襲撃に加担した理由は、これでは説明できない。遊佐国政・斎藤因幡入道が、持国を裏切った理由を直接証明する史料は存在しないが、以下の事例より類推してみたい。

畠山持永が守護であった時期の分国支配に関する史料は少なくよく分かっていない。そのような中で唯一の事例とも言えるのが、紀伊口郡守護代遊佐国継である。一部一章・二章で指摘した如く、遊佐国継は、嘉吉元年（一四四一）六月十四日に活動していたことが知られている。遊佐国継は遅くとも応永三十一年（一四二四）九月には紀伊口郡守護代に就任していたことから、紀伊守護が持国から持永に交代した後も、引き続きその職にあったとみられる。これは、家督の変更ににもかかわらず、分国の支配体制を変更しなかったことを意味している。

『建内記』嘉吉元年（一四四一）七月一日条には、畠山持永は持富とともに、持国の「扶持」を受けてはいたものの、「別家居住」していたと記している。当然、持永にも内衆は存在していたはずである。それなのに持永が畠山氏家督の時期に、持永ではなく、元来持国の内衆である遊佐国継の在職が確認できることは、畠山氏家督が持国から持永に交代した際に、分国の支配体制は変更せず、そのまま引き継いだ方ことを意味している。以上のことから推測すると、持国の内衆の多くは家督の変更ににもかかわらず、引き続き持永の内衆となったものと思われる。これは持国の河内下向が將軍足利義教との対立によるものであり、持国の復帰はかなわないと見ていたからであろう。

ところが、持国の河内下向から半年もたたないうちに將軍足利義教が殺害され、状況が一変したのであるから、持国が復帰を企てても当然である。また、遊佐国政・斎藤因幡入道の下には、河内に逼塞中の持国に関する情報

がもたらされていたはずであり、持国が近臣を優遇しようとしていることも、当然つかんでいたはずである。以上のことから遊佐国政・斎藤因幡入道は、持国が復帰したならば、現在の自己の地位が維持できないと見たのであろう。そこで、遊佐国政・斎藤因幡入道は、持国の暗殺計画に加担し、自己の地位を確保しようとしたのであろう。その結果、内衆の二大勢力であった斎藤氏と遊佐氏は、共に嫡流が滅び、傍流が持国・義就方と持富・弥三郎方に分裂することになった。

一方、持国からしてみれば、元来持国の重臣であった遊佐国政・斎藤因幡入道が、持国の暗殺を企てたことに対する衝撃は大きかったのではないか。持国が了承していたとは言え、一度持永方についた他の内衆に対しても、不信感がつのったとしても当然であろう。そのため持国が、河内に逼塞していた時も自分に近侍していた内衆を重用したとしても、自然な成り行きと言えよう。嘉吉の変後新たに登場する、西方・猿倉・誉田・原・江川・法樂寺らは、持国の河内逼塞時も持国に近侍していたため、持国の信頼を得て、河内や紀伊の分国支配に抜擢されたと考えられる。

### 三 持国・義就方の内衆

本節では、畠山義就の擁立と、それに伴う義就と弥三郎・政長との家督（跡目）紛争に関して、義就方の内衆の動向を中心に見て行こう。

嘉吉の変の後、持国の跡目が実子の義就を差し置いて弟の持富に定められていたことは、今谷明氏の研究で指摘されており、義就と弥三郎の跡目争いに関しても、その経過を述べておられる。また、筆者は一部一章で、持富が持国の跡目に定められた理由と、弥三郎派が享徳三年（一四五四）に蜂起した理由についての考察を加えた。本節の記述を進めるにあたり、持国の跡目問題と、義就と弥三郎・政長の家督紛争は、前提として把握しておか

なければならぬ。そこで、持国の跡目問題の概略と、義就と弥三郎・政長の家督紛争の概略について、記述しておきたい。

嘉吉の変後、遅くとも嘉吉二年（一四四二）末までに、持国の跡目は持富に定められた。これは嘉吉二年（一四四二）で四十五歳を迎え、老境に入りつつあった持国に対して、義就はこの年わずか六歳か八歳であり、管領家の跡目としては若すぎたからである。これに加えて嘉吉の変後、持国と持永が対立した際、持富が持国についてたことで、持永が没落せざるを得なかったことに対する、論功行賞の意味があったものとみられる。

文安五年（一四四八）十一月、持国の跡目は持富から義就に変更された。持富はこの後没したため、その子弥三郎が持富の跡を継ぎ、持国の健康状態が悪化したことをおそらく契機として、享徳三年（一四五四）八月蜂起した。弥三郎は義就を没落させ、一時は持国を隠居に追い込んだものの、分国の掌握が出来なかった上に、將軍足利義政の支持もなかったこともあり、同年十二月没落した。

では、持国の跡目は、如何なる理由で持富から義就に変更されたのであろうか。これを探るために、まず、前節で持国近侍派とした、西方・誉田・原・法楽寺・江河氏の動きを見てみよう。

まず、河内守護代の西方国賢であるが、『康富記』によれば、彼は享徳三年（一四五四）九月十日切腹している。これは建仁寺西来院に隠居していた畠山持国が敵対する弥三郎に「迎取」られたからである。『師郷記』享徳三年（一四五四）八月二十八日条には、畠山持国が弥三郎派の攻撃を支え切れずに建仁寺西来院に隠居した際、三十余人がこれに従ったと記している。これらの記事より、西方国賢は畠山持国と共に、建仁寺西来院に入ったと考えられる。このような西方国賢の行動は、持国に常に近侍していた西方国賢の姿をよく示している。したがって、永享十三年（一四四一）に持国が河内に逼塞した際も、西方国賢は持国に同行したと考えられる。

次に、紀伊の支配に携わった、誉田久康・原七郎右衛門入道融意・法楽寺新右衛門尉職久の動向をみてみよう。享徳四年（一四五五）三月、畠山持国が没した後、義就がその跡を継ぎ、山城の守護にも就任している。その際、

山城守護代に就任したのが、誉田三河入道祥栄であり、乙訓・紀伊郡代には原七郎観養が、宇治郡代には法楽寺新右衛門尉が就任している<sup>(9)</sup>。

山城で守護代に就任した誉田三河入道祥栄と紀伊口郡守護代誉田久康との関係であるが、以下のとおりである。「東寺百合文書」長禄三年（一四五九）四月二十三日付山城守護代誉田祥栄書下の花押<sup>(10)</sup>と、「且来八幡神社文書」（『和歌山県史』中世史料二）三九号、文安四年（一四四七）四月二十五日付誉田久康奉書の花押が一致する。このことから、両者は同一人物と判明する。

次に原融意の動向であるが、彼は康正三年（一四五七）正月十九日に山城国乙訓郡上下久世荘から「八幡番人夫」役を徴収している<sup>(11)</sup>。原融意と観養の関係であるが、両者の発給文書の花押の形状が異なることから別人と考えられる。だが、同じ「七郎」を名乗っているもので、親子の可能性が高いとみられる。以上のことから原融意は、原観養の前任の乙訓・紀伊郡代と考えられる。また、法楽寺氏は、発給文書が見えないので断定はできないが、同じ「新右衛門尉」を名乗っていることから、紀伊と山城は同一人物の可能性はある。

また、少し後のことになるが、延徳二年（一四九〇）七月、畠山義就と政長が紀伊一乗山で戦った際の、「妙音院朝乗五師日並」（『大日本史料』八編之三十七、延徳二年七月十二日条）の記事には、義就方の軍勢として「誉田之手者原并法楽寺・江河・田井」と記されている。このように、誉田・原・法楽寺・江河氏は、生粋の持国・義就党であった。したがって、永享十三年（一四四一）に持国が河内に逼塞した際も、誉田・原・法楽寺・江河・田井氏は、持国に従ったと考えられる。

以上述べてきた諸氏以外に、持国・義就党として注目できるのが、遊佐国助と隅田氏である。彼らは宝徳二年（一四五〇）二月、畠山持国が山城守護に就任するとともに、遊佐国助は下五郡守護代、隅田某は上三郡守護代に就任している<sup>(12)</sup>。さらに遊佐国助は、畠山義就の河内守護代に就任したことが明らかにされている<sup>(13)</sup>。『康富記』享徳三年（一四五四）八月二十二日条によれば、隅田某と遊佐国助は、同日、弥三郎派の攻勢を支え切れ

なくなつた義就が一時没落した際、義就に同行するほどの持国・義就党であつた。この事実より、遊佐国助と隅田某も、永享十三年（一四四一）に持国が河内に逼塞した際、持国に近侍していたと考えられる。

誉田久康・遊佐国助の動きを見ると、畠山氏の分国支配に関して、一つの傾向が判明する。持国の時の紀伊口郡守護代であつた誉田久康が義就の時には山城下五郡守護代に就任し、持国の時の山城守護代であつた遊佐国助が河内守護代に就任している事実である。この人事は河内守護代の西方国賢が自害したことによる面もあるが、時期的にみて、義就の家督相続をめぐる論功行賞の性格が強い人事であると言えよう。したがって、畠山氏の分国支配に関しては、河内守護代が最重要の職であつたことが分かる。

以上の事より、義就擁立を企てたのが、西方国賢・遊佐国助・誉田久康・原・法楽寺・江河・隅田等の、持国が河内に逼塞した時に近侍したグループであることが判明した。彼らは自分達にとつて都合がよい、畠山義就の擁立を図つたのであろう。

#### 四 弥三郎・政長方の内衆

義就の擁立が西方国賢・遊佐国助・誉田久康にとつて都合がよいことを証明するためにも、弥三郎・政長の擁立を図つたのはどのような人々であつたのかを明らかにする必要がある。本節では、弥三郎・政長派の内衆について見て行きたい。

今谷明氏の研究で明らかにされているように、享徳三年（一四五四）四月に露見した弥三郎擁立劇では、神保・椎名・土肥氏と言つた越中に関係した内衆が処分されている。神保氏は満家・持国の時に上山城三郡の守護代をつとめた<sup>14</sup>）ほか、『満済准后日記』（『続群書類従 補遺』）応永三十一年（一四二四）七月二十三日条には、神保氏が管領の代理として足利荘の代官をつとめていたことが見えるなど、神保氏は斎藤氏・遊佐氏に次ぐ有力

内衆であつた。神保氏はこの後、弥三郎・政長方のみでなく、義就の有力内衆として、河内の守護代格の神保国久の名が見えることが、今谷氏の研究で明らかにされていることから、遊佐氏と同様に一族が両派に分裂したものである。

享徳三年（一四五四）八月、一時弥三郎が家督を掌握した時期に、弥三郎方として活動した内衆としては、前述した神保氏等、同年四月に弥三郎を擁立しようとしたグループが加担したことは推定できる。弥三郎はその後、家督を回復することなく没したため、弥三郎の内衆を直接知ることとはできない。だが、政長が弥三郎の跡を継いでいることから考えてみると、政長の内衆は弥三郎の内衆を引き継いだものと推定できる。よって、政長の分国支配にかかわった内衆について、検討を加えてみたい。

政長の分国支配をみる上では、長禄四年（一四六〇）に家督を継承した直後に、分国支配に登用された内衆に注目したい。これは、嘉吉の変直後持国に登用された内衆が、持国・義就派形成に大きな意味をもつたのと同様に、長禄四年（一四六〇）に登用された内衆は、弥三郎・政長派の重要人物とみられるからである。

河内は守護代の遊佐長直以外知られていないため<sup>(15)</sup>、紀伊について見ていこう。一部二章より、口郡では守護代に遊佐直重、小守護代に菱木七郎次郎、また、小守護代か郡代に草部太郎左衛門が就任し、奥郡では守護代に神保長誠が、小守護代に野辺十郎左衛門尉が就任したことが判明している。これら内衆の中で、神保氏は先述した通りであり、遊佐氏は一族が弥三郎・政長方と、義就方に分裂していたことが分かる。野辺氏は畠山基国の時に能登支配にかかわったことが知られているが<sup>(16)</sup>、能登が管領家の管轄を離れてからの動静は知られていない内衆である。菱木氏は嘉吉の変以前に河内支配にかわり、草部氏は嘉吉の変以前に紀伊口郡小守護代をつとめている。また、嘉吉の変以前に大和の宇智郡支配にかかわった野尻氏も、政長流畠山氏方として活動している<sup>(17)</sup>。

このように、政長の分国支配にかかわった内衆は、嘉吉の変以前に畠山氏の分国支配にかかわった内衆の子孫

から、登用していることが判明した。これは、分国支配の経験がない政長にとって、以前に経験のある内衆の子孫を登用することで、手堅く支配体制を固めようとした面もあるう。だがそれよりも、野尻・菱木・草部など持国に退けられた内衆が持富のもとに結集し、持富が没した後は弥三郎・政長派として、彼らの擁立を図ったからと考えられる。弥三郎・政長派の形成には、嘉吉の変後持国に退けられた内衆が、大きな役割を果たしていたとみてよい。

有力内衆の遊佐氏と斎藤氏はなぜ分裂し、弥三郎に加担する者が出てきたのであろうか。遊佐氏の場合、河内守護代家が惣領家であり、その下に紀伊守護代家等の一族が存在したと見られる。惣領の立場にあった遊佐国政が、持国に反して没落したのであるから、遊佐一族の多くの者が、連座して持国に退けられたとしても不思議ではない。斎藤氏も同様の理由で持国に退けられた者がいたのであろう。持富は持国に退けられた内衆を取り込み、支持を得ていたのである。

## おわりに

嘉吉の変後、持国に退けられた内衆が頼りにしたのは、この後の弥三郎・政長派の形成より鑑みて、持国の後継者となっていた持富であった。これは、義就が持国の跡目となることが決定したことによって、その後俄に持富・弥三郎派が形成されたとは考えがたいからである。嘉吉の変後、河内近侍派とも言える、西方・誉田等の一部側近重視に陥った持国に対して、菱木・野尻氏等従来より分国支配に携わっていた内衆は、従来の地位を保持するために、持富のもとに結集した。これに対して、一度握った権力を渡したくない西方・誉田氏等河内近侍派は、本来畠山氏家督継承予定者でなかった義就を持国の跡目に擁立することで、自己の地位の安泰を図ったものとみられる。持国も情としては、自分の異母弟持富よりも実子義就が自分の跡を継いだ方がうれしいはずであり、

西方・菅田らの義就擁立に乗ったとしても当然と言えよう。

畠山氏の分裂に際して、今一つ看過し得ないのが、有力内衆遊佐氏・斎藤氏・神保氏の分裂である。特に遊佐氏と斎藤氏は、嘉吉の変以前、内衆の中でも抜きん出た勢力を有していたが、遊佐氏と斎藤氏の惣領家は、畠山持永に連座して滅亡した。このため、遊佐氏と斎藤氏は、一族間で惣領の地位についての対応が分かれ、持国・義就派と持富・弥三郎派に分かれたのである。本来は畠山氏内衆を統括するはずの遊佐氏と斎藤氏の分裂が、畠山氏の跡目争いと結び付き、畠山氏の分裂を決定的なものとしたのである。

以上のことから、畠山氏分裂の原因は、畠山氏内部に存在していたことが立証できたと思う。嘉吉の変後に持国が一部の近臣を優遇したことによる反対派の形成と、最有力の内衆であった遊佐氏・斎藤氏の惣領家が、持永に連座して滅亡し分裂したことが、畠山氏の家督紛争を收拾のつかないものとしたのである。成身院光宣・筒井順永ら大和国衆は、畠山氏の分裂抗争に乗じて自己の勢力拡大を目指したのであり、決して畠山氏の家督紛争を企てた張本人ではなかった。

#### 註

(1) 同氏「室町時代の河内守護」(同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七六年)。なお、本文中で特に註記しない今谷明氏の研究は、これを指すことをお断りしておく。

(2) 同氏「畠山家分裂のはじまりをめぐって 越中と大和」(同氏著『中世寺領荘園と動乱期の社会』部四章、思文閣出版、二〇〇四年、初出一九八九年)。

(3) 拙稿「紀伊守護家畠山氏の家督変遷」(本書一部一章)、および「紀伊守護家畠山氏の支配体制」(本書一部二章)。



(4) 川岡勉氏「河内国守護畠山氏における守護代と奉行人」(同氏著『室町幕府と守護権力』三部二章、吉川弘文館、二〇〇二年、初出一九九七年)。

(5) 今谷明氏「増訂室町幕府侍所頭人並山城守護付所司代・守護代・郡代補任沿革考証稿」(同氏著『守護領国支配機構の研究』一章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七五年)。

(6) 小谷利明氏「室町前期の九条第修理と日根庄代官草賀国宗」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部付論三、清文堂出版、二〇〇三年、初出二〇〇〇年)、『富山県史』(通史編 中世)三章二節。

(7) 拙稿「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」(本書五部一章)。

(8) 本書一部二章参照。

(9) 今谷明氏註(5)前掲論文。

(10) 「東寺百合文書」セ函四五号。「東寺百号文書」について本章では、京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』(吉川弘文館、一九七六―七九年)の整理番号を記した。なお、この文書は、第十一回東寺百号文書展図録『足利義政とその時代』(京都府立総合資料館、一九九四年)に写真と読み本が掲載されている。

(11) 「東寺百合文書」ひ函七九号・八〇号の花押と、同文書ひ函一八二号の原融意の花押、及び「原家文書」(『和歌山県史』中世史料一)一三四号の原融意の花押の形状が一致することによる。なお、今谷明氏が「鎌倉・室町幕府と国郡の機構」(同氏著『室町時代政治史論』一部、塙書房、二〇〇〇年、初出一九八七年)で段銭奉行とされた原融意は、原融意のこととみられる。そうするとその地位は、本文中で考証したように乙訓・紀伊郡代のほうがよいと考える。

(12) 今谷明氏註(5) 前掲論文。

(13) 今谷明氏註(1) 前掲論文。なお前述したように、河内守護代西方国賢は、持国・義就に連座して、

享徳三年(一四五四)九月十日切腹している。遊佐国助は義就に同行していることから、義就が復権した同年十二月十四日以降、河内守護代の職にあったとみてよい。

(14) 今谷明氏註(5) 前掲論文。

(15) 今谷明氏註(1) 前掲論文。

(16) 小川信氏「畠山基国の活動と管領家畠山氏の成立」(同氏著『足利一門守護発展史の研究』三編三章四節、吉川弘文館、一九八〇年)。

(17) 本書一部一章・二章参照。

## 第二章 畠山氏の内訌と紀伊

### はじめに

周知の如く畠山氏は、持国の跡目を巡って、実子の義就と、持国の弟持富の子である弥三郎（政久）・政長が激しく争った。当然この抗争は分国を巻き込み、各地で両派が戦闘を繰り広げた。畠山氏が室町幕府の有力守護だったこともあって、畠山氏の内訌は分国内の抗争に止まらず、応仁の乱を招くなど、幕府権力の在り方とも大きく関わることとなった。

紀伊においても、畠山氏の家督紛争が始まった享徳年間以降、畠山持国・義就派と、畠山弥三郎・政長派の激しい抗争が展開されている。本章では、享徳年間から応仁の乱の終結時にかけての紀伊の政治情勢を検討する基礎的作業として、畠山義就と弥三郎・政長の抗争について、紀伊における事実関係を明らかにしていきたい。

なお、本章では畠山氏の内訌を対象とするため、文明元年（一四六九）の後南朝の蜂起と、それに関係した事項は対象としない。また、紀北と紀南の区分・呼称については、当時の慣例に従って、口郡・奥郡とする（<sup>1</sup>）。

### 一 享徳の錯乱と紀伊

文安年間以降の畠山持国の跡目を巡る争いは、享徳三年（一四五四）に至り、義就と弥三郎の武力抗争に発展した。同年八月には弥三郎派が一斉に蜂起し、畠山持国は隠居に追い込まれ、義就は没落した（<sup>2</sup>）。

この事態に際して、紀伊はどのような状況であつたのだろうか。次に関連すると考えられる史料を示し、考察してみよう。

A 去十日切目出陳之由注進候、弥被致忠節候者可令悦喜候、委細愛洲民部少輔可申候、謹言、

十一月廿日

義夏（花押）

小山隼人殿（<sup>3</sup>）

B 就今度御大事、神輿動座成申罷出候際、去八日注進仕候処、御返事同廿二日到来、拜見畏入候、仍為 上意  
与州様御上洛、公私惣別目出存候、就中御帰座事被仰出候、今度劇任由緒、三鍋庄神輿休申、高家庄御神木 立  
置申候上者、彼両庄事、造営之間御寄進候者、畏入候由、以目安申上候、御披露所仰候、度々当山近年数 ケ  
度、無二忠節被知命候事候上者、無余儀候哉、一段無被仰出候旨候者、率爾難有御帰座候、為御心得令申 候、  
目安之趣委細行事衆可被申候、恐々謹言、

十二月廿二日

新宮衆徒神官

謹上 遊佐豊後守殿（<sup>4</sup>）

史料 B の文中に「与州様」とあるが、畠山義就は宝徳三年（一四五二）三月から享徳四年（一四五五）二月まで、伊予守義夏と称していたことから（<sup>5</sup>）、「与州様」とは、畠山義就に間違いない。享徳三年（一四五四）八月、畠山義就は細川勝元の支援を得た畠山弥三郎派の攻撃を受けて没落したが、同年十二月十四日、義就は將軍足利義政の庇護もあつて上洛し、弥三郎は没落した（<sup>6</sup>）。この事実が史料 B の「為 上意与州様御上洛」の部分及び「十二月廿二日」の日付と一致することから、史料 B の年代は享徳三年（一四五四）に比定できる。

次に史料 A の年代であるが、署名は義就ではなく義夏である。また、義就の求めに応じて、十一月十日に小山

氏が切目に出陣している。この二つのことは、史料Aが史料Bと同様に享徳三年（一四五四）とすれば、矛盾無く説明できる。よって史料Aの年代は、享徳三年（一四五四）とみられる。

史料Bで熊野新宮は「公私惣別目出存候」と、畠山義就の上洛を祝しており、その神輿は義就のために「動座」していることから、熊野新宮は義就方であったと言える。また、史料Aより、牟婁郡の国人小山氏も義就方であったことが分かる。このように、享徳の錯乱に際して紀伊奥郡は、義就方が押さえていた。

史料Bの宛先である遊佐豊後守は、持国・義就方の守護代遊佐盛久である（7）。このように、畠山義就が紀伊を掌握する上で在国した内衆が、重要な役割を果たしたと考えられる。享徳の錯乱に際しては、持国・義就方の内衆が紀伊を掌握しており、紀伊国内では、さほど混乱は生じなかったとみられる。

だが、紀伊国内に弥三郎派が存在しなかった訳ではない。享徳の錯乱に際して、紀伊国人の贅川氏が、弥三郎派として活動していたことが、『師郷記』（史料纂集）享徳三年（一四五四）九月十六日条等より判明する。ただ、贅川氏が活動していたのは京都であり、紀伊ではない。

享徳の錯乱に際して、畠山弥三郎派は京都の掌握に重点を置いた。これは、畠山氏当主の持国が在京していたことと、守護家の家督決定権が將軍・幕府にあったからであろう。その結果、弥三郎派は分国の掌握が後手に回り、義就が在国の内衆を使って分国を掌握した。また、將軍足利義政も畠山義就を庇護した。畠山義就に分国を掌握された上に、將軍足利義政も義就を庇護したとなつては、弥三郎に勝ち目は無く、享徳三年（一四五四）十二月二十六日、弥三郎は没落した。

弥三郎が没落した結果、享徳四年（一四五五）三月、畠山持国が没した時点で畠山氏家督を継承したのは、義就であった（8）。しかし、弥三郎方の勢力が潰え去ったわけでは無かった。

「粉河寺旧記・天英本」（『粉河町史』三巻）に、「同四年六月六日朝、弥三郎乱入ノ故二、十八日ノ会止」と記されている。『師郷記』同年六月六日条には、畠山義就方と弥三郎方の合戦があったと記され、同十三日条

には、「弥三郎於紀伊国蜂起之故」義就が河内に下向したと記されている。「粉河寺旧記・天英本」の記述と、『師郷記』の記載が一致することから、享徳四年（一四五五）六月、紀伊で弥三郎派が蜂起し、粉河を攻撃したことは事実と見てよいだろう。弥三郎が粉河を攻めた時点では、義就が正守護として有効支配を行っており、この攻撃は一時的なものに終わっただけらしい。

享徳の内訌に際して、畠山弥三郎方は分国の掌握が後手に回った。しかし、弥三郎が没落したことで、分国河内・紀伊を中心に、弥三郎方の活動が継続されていくこととなった。弥三郎方の抗戦が粘り強く行われたことから、分国内に広範な反義就勢力が形成されていたことが想定できよう。

細川勝元の支援を受けた畠山弥三郎は、長禄三年（一四五九）赦免された。弥三郎はこの後、程なくして没したとみられ<sup>9)</sup>、この時点では大きな争乱にはならなかったが、この一件は、畠山義就没落の伏線となった可能性がある。

## 二 長禄の家督交代と紀伊

長禄四年（一四六〇）九月十六日、將軍足利義政は、畠山義就に隠居して養子の政国を出仕させるよう申し渡した。同二十日、この措置に反抗した畠山義就が河内に下向したため、畠山氏の家督は弥三郎の弟政長に移った<sup>10)</sup>。

河内に下った畠山義就に対し、幕府は大規模な追討軍の派遣を命じた。『大乘院寺社雑事記』（増補続史料大成）長禄四年（一四六〇）閏九月五日条によれば、紀伊からは守護被官の国人をはじめ、奉公衆の玉置・湯河・山本氏、高野山・根来寺・粉河寺等寺社勢力が、「紀州口」に出陣を要請された。いわゆる紀州衆には、紀伊国内の混乱に対処することが求められたのであろう。

『経覚私要鈔』（史料纂集）長禄四年（一四六〇）閏九月二十四日・十月四日条には、畠山義就が誉田三河入道祥栄（久康）父子・誉田遠江守金宝父子を紀伊に派遣したが、粉河寺の合戦に敗北し、誉田らは河内に引き揚げたと記されている。義就が誉田一族を紀伊に派遣したのは、かつて誉田氏が紀伊守護代であったからとみられる。前出の『経覚私要鈔』には、政長の有力内衆遊佐長直・河内の恩智氏・紀伊の贅川氏が、政長方の「大将」として記されている（11）。

さて、「粉河寺旧記・天英本」には、長禄四年（一四六〇）九月十九日に根来寺衆が粉河に討ち入り、「遠江殿大将テ籠城」した「丹生屋殿土居」を、同二十二日に落城させたと記されている。「遠江殿」は誉田遠江守金宝とみられる。記事の内容も九月ではなく、閏九月の「閏」が何らかの事情で抜けたと考えれば、「粉河寺旧記・天英本」の記事は、長禄の粉河合戦に関する記述と見てよいだろう。

享徳三年（一四五四）の場合と異なり、畠山義就方は、紀伊を掌握することに失敗した。この違いはどこに起因するのだろうか。

一つは、幕府・將軍の姿勢である。享徳の錯乱の際は、畠山持国が健在であり、將軍足利義政も義就を庇護していた。このため、弥三郎方は、一度は持国を隠居に追い込んだものの、持国を排除しての家督相続が困難であり、義就追討の命令が出なかつたからである。長禄の内訌に際しては、義就が將軍の勘気を被つており、義就追討の命令が発せられていた。奉公衆は当然幕府の命令に従うが、寺社勢力も幕府の命令以外に朝廷の倫旨まであるとなれば、義就に与しにくかつたとみてよい。

今一つは、分国支配の問題である。享徳の錯乱に際しては、持国・義就方の内衆が紀伊を掌握していた。しかし、長禄の内訌に際しては、義就方の分国掌握が十分でなかつたらしい。これは以下に述べる、長禄の水論の影響が大きかつたと考えられるからである。

長禄の水論とは、長禄四年（一四六〇）五月に、守護領と根来寺領との間の用水争論がこじれて、根来寺衆と

守護勢力が武力衝突に及んだ事件である。『大乘院寺社雜事記』同二十五日条によれば、この一戦で守護畠山義就方は、守護代遊佐豊後守盛久を初め、神保近江入道父子・木沢山城守等、分国支配にかかわったとみられる有力内衆を失ったばかりか、和佐・宮崎・保田氏等、動員したかなりの数の国人をも討ち死にさせたと伝えられるなど、大打撃を被った。

これに対して義就が、根来寺攻撃のために出陣しようとしていたことが、『大乘院寺社雜事記』同年六月四日・同二十七日条に見える。義就は根来寺への攻撃を優先しようとしたため、分国支配体制の再建は後手に回ったと見てよいだろう。また、多大の犠牲をしいておきながら、軍事行動を止めようとしないうちに義就への不満が、国人の間で高まったとしても当然と言えよう。一方根来寺は、この水論が影響してか、畠山氏の内訌に際しては、長祿四年（一四六〇）以降、一貫して政長流畠山氏に与した。

將軍足利義政の畠山義就に対する家督剥奪は、義就の紀伊支配が動揺している時期に行われた。そのため、緒戦に於いて義就方は、紀伊で地歩を固めることができなかった。河内・大和方面の戦局も芳しくなく、義就は嶽山城に籠城を余儀なくされたのである。

### 三 寛正の内訌と紀伊

紀伊は概ね畠山政長方が掌握したとは言え、義就方の勢力が潰え去った訳ではなかった。『大乘院寺社雜事記』寛正二年（一四六一）三月二十七日条には、同二十六日に義就方の高野山勢が、根来で政長方と戦って敗北したと記している。この記事より、高野山には義就に与する人々が、少なからず存在していたことが分かる。

一方奥郡では、寛正三年（一四六二）に至り、義就方の動きが活発化したことが、次の史料より判明する。



〔紀州土居以下輩〕所々牢人等事、近日可出張之旨風聞云々、事实者好而招重科歟、不廻時日、相談守護代、  
計略、別而可被抽忠節之由、所被仰下也、仍執達如件、 致

寛正三年九月五日

左衛門尉判  
左衛門尉判

熊野新宮衆徒神官御中（<sup>12</sup>）

この史料は、室町幕府奉行人奉書である。室町幕府奉行人が土居氏を支援しないよう熊野新宮に命じていることから、土居氏は義就方と分かる。

『紀伊続風土記』（古文書之部）を紐解いてみると、「日足村西氏蔵」文書中に（<sup>13</sup>）、畠山義就の書状が少なからず見られる。「本宮社家坂本氏蔵」文書中にも、義就の書状が見られる。閏月より、寛正四年（一四六三）と推定できる「十津川郷文書」閏六月二十九日付西十郎宛畠山義就書状中に、「愛洲彦次郎可申候」とある。これらのことより、土居氏以外にも、牟婁郡では西氏・坂本氏・愛洲氏等が、義就方であったと考えられる。

牟婁郡に、なぜ義就に与する国人が存在したのであるうか。義就の父持国は、文安四年（一四四七）に後南朝を討滅するため、熊野の地に軍勢を進めている（<sup>14</sup>）。このような軍事行動を通して、持国・義就派は、熊野の国人を被官化していったのであろう。ただ、土居氏以下義就に与した牟婁郡の国人は、いずれも単独で大規模な軍事行動を起こすだけの勢力を有していなかったと見られており、彼等を束ねることのできる、熊野三山の動向が重要である。

熊野三山に対して畠山政長は、『熊野速玉大社古文書古記録』一二〇号（寛正三年）八月三十日付熊野山新宮衆徒神官宛書状で、「廻計略、被抽忠勤」ことを要求しているように、義就方に付かないよう求めている。史料もそのような政長方による働きかけの一つであろう。これらの働きかけが功を奏したのか、同年十一月には、

「土居殿様之御事者、暫那智大田仁可有御逗留之由承候」と、土居氏の動きが止まったことが、『熊野速玉大社古文書古記録』一四八号（寛正三年）十一月三日付新宮兩座宛盛俊書状により確かめられる。盛俊の姓は不詳だが、書状中に「土居殿様」と義就に与した土居氏に敬意を表していることから考えて、義就方の人物と見られる。盛俊の書状には、土居氏の動きが止まったことに続いて、「兩座明日御出陣之由承候」と、新宮勢の出陣を伝えているが、実際に新宮勢が出陣した形跡は無い。幕府・朝廷との関係を重視する熊野三山は、謀反人義就に対する支援を止めたと考えられる。

寛正四年（一四六三）四月十五日、河内嶽山城が陥落し、義就は高野山に敗走した。だが、高野山内には反義就派が多く存在したため逗留することができず、義就は岡城に入った。義就が籠もった岡城に関して、「新撰長祿寛正記」（『群書類従』二十）では、「和哥浦」（現和歌山市）にあったとしている。また、『益田家文書』（『大日本古文書』家わけ二十二）一 一七八号、（寛正三年）八月七日付益田左馬助宛室町幕府奉行人奉書の文中にも「岡城」が見え、『大日本古文書』の編者は、岡城を那賀郡に比定している。『大日本古文書』の校注に該当する岡城は、粉河町下丹生谷の岡城しか存在しないため、下丹生谷の岡城として、以下の考証を進めていく<sup>15)</sup>。

「西光寺文書」（『和歌山県史』中世史料一）六七号、寛正四年（一四六三）十一月十三日付柏原村氏人等紛失状写に「寛正四年癸未七月十五日二畠山殿当国岡之城二御取籠候之处二、山名タンシヤウ殿御タマシヤウニテ御せメ候、然間物取乱入し」とあり、柏原村が戦火に曝されている。柏原村は橋本市にあり、畠山政長が陣を敷いた菖蒲谷も橋本市にある。柏原村も菖蒲谷も和歌浦の岡城を攻撃するには距離が遠すぎる<sup>16)</sup>。

畠山義就が籠もった岡城について、『経覚私要鈔』寛正四年（一四六三）八月九日条には、「紀州右衛門佐高野鹿<sup>（鹿）</sup>城四所ハツシテ不知行方罷成云々」と記している。『大乘院寺社雑事記』同年八月六日条にも、「畠山衛門佐義就開高野陣」と記しており、岡城は高野山の麓に位置していた可能性が高い。那賀郡粉河町下丹生谷の岡

城は、紀ノ川の北岸に位置しており、高野山の麓とは言い難い。その上、前出の柏原村や菖蒲谷ともかなり距離がある。以上のことから、義就が籠もった岡城は、伊都郡九度山町入郷にあった岡城だと考えられる。

畠山義就は岡城で戦局の立て直しを図ったものの、寛正四年（一四六三）六月二十一日、政長方と戦って敗北したことが、『大乘院寺社雑事記』同年六月二十四日条、『経覚私要鈔』同二十六日条等より知れる。両者の合戦の場所について、「新撰長祿寛正記」では粉河寺とする。「十津川郷文書」六月晦日付西十郎宛畠山義就書状中に、「去廿一日、粉河城被勢遣合戦候て、敵御方少々被打候、彼在所切取候事候間、先引退候」と、義就が六月二十一日に粉河で戦って敗北したことが記されている。

享徳四年（一四五五）の畠山弥三郎方の蜂起、長祿・寛正の内訌の緒戦、寛正四年（一四六三）の義就の紀伊没落時と、紀北では粉河が両畠山氏の合戦の場所となっている。これは粉河が口郡における守護支配の拠点の一つとして、機能していたからであろう（<sup>17</sup>）。

粉河の戦いで義就方が敗北したことにより、政長方の岡城攻めが本格化した。寛正四年（一四六三）六月二十九日、粉河寺行人が伊都郡へ進発し、七月十日、幕府軍は官省符荘に進んだ（<sup>18</sup>）。戦局に展望が見いだせないまま畠山義就は岡城に籠城したが、このような状況では到底支えることはできず、寛正四年（一四六三）八月六日、義就は北山へ逃亡した。政長方による徹底した攻撃は行われず、同年十二月二十四日、政長は京都に召喚された。翌五年正月十四日に上洛した政長は、同年九月二十一日管領に就任し、政長と義就の抗争は決着したかに見えた。

#### 四 応仁の乱の緒戦と紀伊

吉野山中に潜伏していた畠山義就は、寛正六年（一四六五）十一月八日、天河に出陣して活動を再開した。文正元年（一四六六）八月二十五日、吉野を出た義就は、大和壺坂寺に陣を敷き、ここに河内・紀伊・大和は、再

び戦乱の渦に巻き込まれることとなった。同年十二月二十五日、山名持豊の協力を得て上洛した義就は、翌二年正月二日、幕府に出仕して家督の回復を約束された。同十八日に義就と政長は上御霊社で戦い、敗れた政長は没落した。細川勝元の支援を受けた畠山政長は、応仁元年（一四六七）五月十四日、再び幕府に出仕し、これが原因となって応仁の乱が勃発した<sup>19</sup>。

紀伊では能登守護家畠山義有の次男とみられ、義就の養子となっていた次郎政国が<sup>20</sup>、義就の動きに合わせて活動を開始した。政国が文正元年（一四六六）十二月二十一日、芳養荘を熊野新宮に寄進したことが、『熊野速玉大社古文書古記録』三五号、畠山政国寄進状より分かる。一方、文正元年（一四六六）七月の時点では、政長方の内衆草部太郎左衛門の活動が口郡で見られることが、『蔭涼軒日録』（増補続史料大成）同二十日条より分かる。以上のことから畠山政国は、義就が吉野を出て壺坂寺に陣したのと同じ頃、奥郡で活動を始めたと考えられる。

『経覚私要鈔』文正二年（一四六七）二月十二日条では、政国が同年正月一日に「三鍋城」を攻略して紀伊の大半を平定し、従わないのは根来寺のみと記している。三鍋とは南部のことなので、「三鍋城」は高田土居城と見られる。後述の広城とともに、政長方は紀伊における重要な拠点を失ったのである。紀州勢を率いた政国の上洛を、『大乘院寺社雑事記』応仁元年（一四六七）六月九日・同十九日条で確認できることから、応仁の乱の緒戦において紀伊では、義就方が優勢であった。

その後、戦局は如何に動いたのであろうか。次の史料から検討してみたい。

D 就今度畠山右衛門佐与党以下蜂起之儀、紀州広城進発事、早自身令出陣、可被抽戦功之由、被仰出候也、仍執達如件、

応仁元年六月十三日

忠郷

(貞基)

湯河新庄司殿 (新脱力)  
(21)

E 「湯河新庄司殿 勝元」  
(包紙上書)

就紀州広城事、畠山右衛門佐与力輩、令蜂起者、自身令出陣、可被抽戦功之由、被成御奉書候、弥被忠節候者、可然候也、恐々謹言、

六月十四日

(細川)  
勝元 (花押)

湯河新庄司殿 (政春)

F 「 (包紙上書)  
(押紙)

湯河新庄司とのへ」

称光院		
-----	--	--

今度熊野三山并有馬和泉守已下蜂起之处、紀州広城事、依粉骨令落居之間、則敵退散由、註進到来、尤神妙、仍為抽賞、同国志賀庄半分充行訖、此刻高野山之儀、廻一途計略者、弥可有褒美候也、

正月十八日

(足利義政)  
(花押)

湯河新庄司とのへ (22)

史料DEFともに、広城に關した文書である。史料Dの「忠郷」は室町幕府奉行人諏訪忠郷、「貞基」の「真」は「貞」の誤写で室町幕府奉行人布施貞基であろう。史料Dは写であるが、諏訪忠郷・布施貞基は、史料Dと同日付で「西国中脈地頭御家人中」に宛てて「畠山右衛門佐以下凶徒等事」で始まる室町幕府奉行人奉書を発していることから(23)、史料Dは信用に値する。

史料Eは「渡部家所蔵文書」の upper に「長禄三年」とあるが、長禄三年（一四五九）の時点では、畠山義就が正守護なので、この年紀は信用できない。史料Eの文中に「被成御奉書」とあるが、これを史料Dとすれば、日付も内容も一致する。よって、史料Eの年代は、応仁元年（一四六七）に比定できる。

史料Fであるが、この史料も「渡部家所蔵文書」の付箋に「寛正四年」とあることから、寛正四年（一四六三）と考えられないことはない。史料Fと同日付で同内容の文書が「愛川村玉置氏蔵文書」（『紀伊続風土記』古文書之部）にもあり、この文書を『紀伊続風土記』（古文書之部）の元になった「日高郡古文書」（国文学研究資料館史料館蔵）で見ると、「子正月十八日」となっている。御内書を発給する時に普通「子」と記入することはないので、「子」は書き加えられたとみられるが、玉置氏が御内書を受け取った時に記入した可能性がある。ちなみに応仁二年（一四六八）は子年である。史料D・Eはともに、広城での戦いに関したものであるが、広城を攻略したとは記していない。史料D・Eに記された広城の戦いが、応仁元年（一四六七）の年末か、翌年初頭までかかったとすれば、史料Fは応仁二年（一四六八）に比定できよう。

ここで応仁の乱当初の戦局を整理してみると、次のようにまとめられる。

文正元年（一四六六）末から応仁元年（一四六七）六月にかけて、畠山義就の養子政国が、高田土居城（三鍋城）・広城など紀伊の支配拠点を攻略し、紀伊の大半を平定した。

応仁元年（一四六七）六月までに畠山政長が家督を回復し、政国が義就支援のため上洛すると、湯河氏等政長に味方する勢力が義就方に奪われていた広城を攻撃した。

応仁元年（一四六七）末から翌二年早々に政長方が広城を奪回し、紀伊は再び政長方が平定した。

このように応仁の乱の緒戦で、広城を巡る戦いが中心になっていることから、この時期には守護所が大野から広に移されていた可能性が高い。推測することが許されるならば、長禄・寛正の内訌に際して、畠山政長方が守護所を広に移したのであろう。

## 五 応仁の乱の終局と紀伊

応仁の乱の緒戦で優勢であつた畠山義就は、分国河内・紀伊を事実上政長方に奪回されていた。そのような状況下の義就方の動きについて見ていきたい。まず、史料を掲げる。

G 就当国三栖御敵出張候儀、去年十一月廿五日衣笠・秋津口合戦以来、去閏正月十日目吉良城、同十一日被攻落衣笠・知法寺両城並十九日於龍口合戦御軍功之趣、野辺掃部允具申下候、雖不始之儀候、御忠勤誠不可有比類候、仍 御屋形様へ致注進候、定可有御感候哉、弥可然様被仰合、被堅固相踏候者可為肝要候、併憑存 候、委細尚野辺可申候、恐々謹言、

六月十二日

長誠（花押）

小山八郎殿

進之候（24）

H ㄣ（包紙上書）  
（押紙）

湯川新庄司とのへ

称光院	公方義	政寛	正四年
-----	-----	----	-----

去月十日以来、於紀州度々致合戦、目吉良并龍口城已下攻略、敵数多討捕之、剩親類被官数十人被疵之由、 註進到来訖、尤被感恩食候、太刀一腰遣之候也、

二月廿三日

（足利義政）  
（花押）

湯川新庄司とのへ（25）

I

(箇々カ)

可然様御談合候て取成御入候へく候、

書状委細披見申候、仍今度之事、懇京都へ野辺方より致注進候へと申遣候、自是も同篇二申上候間、其返事候、早々御待候てこそ可然候へ共、さ様に方々より三栖へ人を入候八んするに至候八、ともかくも可為御計候、惣而八御料所の事候間、野辺か与力者、さる様二候へ共、別に可然在所も候はんするに八と存候、猶々一廉京都よりも御褒美か候八んすらん、飛脚下着候間者、御延引候てこそよく八候へ共、八や又さ様に地下へ折帛をも被入に至候て八、人をも可被入候哉、いかさまにも野辺方へ御候て被入候者、可然候哉、能様に御思安あるへく候、委細申度候へ共、只今客来候間、重而可申候、恐々謹言、

壬正月二十八日

政春（花押）

七郎殿

御返事（26）

史料G・Hは、湯川敏治氏が指摘されたように、関連した史料である。年代推定には、史料Gの文中にある「閏正月」が重要な手がかりとなる。史料Hの押紙に「寛正四年」とあるが、寛正四年（一四六三）に閏正月は無く、押紙の年紀は信用できない。史料Gの発給者神保長誠は、後述するように畠山政長の有力内衆であり、神保長誠が紀伊の国人小山氏に宛てて書状を発給でき、足利義政も感状を発給できた閏正月は、文明九年（一四七七）しかない。よって史料G・Hの年代は、文明九年（一四七七）に比定できる。

史料Gは六月十二日付であり、史料Hの御内書よりも、かなり後に発給されたことになる。これは越中婦負郡・射水郡の守護代職にある神保長誠が、越中に下っていたからと見られる。神保長誠は越中下向後も、奥郡の国人目良氏に書状を発給したことが知られており<sup>27</sup>、同じ奥郡の国人である小山氏に書状を発給しても何ら不思議なことではない。当然、神保長誠は紀伊奥郡守護代を辞していたと見られるが、政長方の重臣として、書状を発給したのであろう。



次に史料Ⅰの年代であるが、これも書状を発給した「壬正月」が重要な手がかりとなる。また、史料Ⅰの文中に、「京都へ野辺方より致注進」とあるが、「野辺」とは、これも後述するように、畠山政長の内衆で奥郡小守護代の野辺氏である。野辺氏が京都に注進できる閏正月も、文明九年（一四七七）しかない。したがて史料Ⅰも、史料G・Hと同様に、文明九年（一四七七）に比定できる。

史料Gの「衣笠」、「秋津口」、史料G・Ⅰの「三栖」、史料G・Hの「目吉良」、「龍口」はいずれも田辺市の地名であり、これらの史料から、文明八年（一四七六）十一月から翌九年閏正月にかけて、田辺市周辺で義就方と政長方が戦ったことが判明した。衣笠・三栖は義就に与する愛洲氏の所領と言われているので、義就方は愛洲氏を中心とした勢力で構成されていたと見られる。

応仁の乱の期間を通して、紀伊では概ね政長方が優勢であったが、義就方の勢力も根強いものがあつた。このような状況下の文明九年（一四七七）九月、京都での戦局に展望を持てなくなった畠山義就が河内に下向した。これによつて応仁の乱は終結したが、かえつて戦火は拡大することとなった。義就の河内下向が紀伊の情勢に影響を与えないはずはない。紀伊の情勢を見ていこう。

「去二日御敵寄来高田要害之处、為後詰一勢被差遣及合戦、敵数輩手負之御方少々被疵之由候、雖不始之儀候、忠勤之条誠御感悦之至候刻、可達上聞候、定而可有御感候、河内事利州者共申合当手打入候、不日可一途儀仍此方進発候、暇事申候処職之儀善被仰付方々御思案之時分二候間遅々候、猶其方事、弥御廻斗略被抽軍忠候者肝要候、併憑入候、委細神保可申候、恐々謹言、

十月七日

政長

湯河庄司殿（28）

K「（包紙上書）  
」（押紙）

称光院

公方

義政

寛正

湯河新庄司とのへ<sup>29</sup>

今度河州所々城没落事、言語道断之次第也、近日差遣諸勢、可対治義就之上者、先令出陣口郡、相談政長手、可致忠節、依戦功、可有恩賞候也、

十月卅日

湯河新庄司とのへ<sup>29</sup>

(足利義政)  
(花押)

史料Jの年代であるが、文中に「河内事和州者共申合当手打入候」とある。これが『大乘院寺社雜事記』文明九年（一四七七）十月二日条の「大和国越智・古市・筒井以下一国面々兩方二相語之間、悉以去月末進發河内国畢」と記す状況と一致すると思われる。よって、史料Jは文明九年（一四七七）に比定したい。

史料Kは、文中に「今度河州所々城没落」「可対治義就之上者」とあり、これが文明九年（一四七七）の畠山義就の河内下向の状況と一致する。よって史料Kの年代は文明九年（一四七七）に比定できる。

史料J・Kより、畠山義就の河内下向に伴う紀伊の状況を整理してみよう。文明九年（一四七七）九月の畠山義就の河内下向に呼応して、奥郡の義就与党が蜂起し、十月二日「高田要害」（高田土居城であろう）を攻撃したため、湯河氏らが出陣して事態に対処した。ところが河内では、政長が湯河政春に書状を發した十月七日に誉田城が陥落し、十月九日には河内守護所のある若江城が陥落するなど、河内の政長方は総崩れとなった<sup>30</sup>。十月三十日付の足利義政御内書は、そのような状況下に出されたもので、義就の勢力が紀伊に及ぶのを防ぐため、湯河政春に口郡への出陣を要請したのであろう。

畠山義就の河内下向によっても、紀伊の情勢に大きな変化は無かった。これは、湯河氏・根来寺等の在地諸勢力の動向が大きく関わっていると考えられる。

## 六 在地諸勢力の動向

紀伊においては、享徳の錯乱時には畠山持国・義就方が優勢であったが、長禄・寛正の内訌と応仁の乱では、概ね畠山政長方が優勢であった。本節では、義就方優位の状況が政長方優位に変化した原因を考えるために、紀伊の諸勢力の動向を見ていきたい。

口郡の国人貴志信濃入道は、長禄四年（一四六〇）五月の水論に際して、守護畠山義就に動員されているが、政長が守護に就任すると、政長の要請に従って、義就方と戦っている<sup>31</sup>。このように国人層は、正守護の命令に従うことが多かったと見られる。また、高野山や熊野三山には、長禄・寛正の錯乱や応仁の乱に際しても、義就を支持する動きもあった。高野山の動向について「新撰長禄寛正記」には、大勢として「右衛門佐殿八上意ヲソムキ給、天下二責メラレ、已ニ討手トシテ日ノ御旗ヲ向ラル、上八、朝敵タル事ウタガイナシ」との理由で支持をためらったと記している。これは朝廷・幕府の権威に抗しがたい寺社勢力の本質を表していると言えよう。

牟婁郡の国人小山氏は、享徳の錯乱に際しては、史料Aの如く持国・義就方に与しているが、応仁の乱では史料Gの如く、政長方に与している。享徳三年（一四五四）十一月の時点で義就は没落中であった。しかし、この時点では持国が健在であり、持国派の内衆が紀伊を掌握していたことが大きな要素になっていると考えられる。このことは、前述した長禄四年（一四六〇）五月の水論で、有力内衆や与党の国人を多数失ったことが、長禄・寛正の錯乱で義就が劣勢に立たされた一因であることの傍証となろう。

同じ牟婁郡の国人でも前述の如く愛洲氏は、一貫して義就方であった。愛洲氏は南朝方の勢力で、畠山満家の時まで畠山氏との関係を示す史料は無く、守護の被官化したとは言いが難かった。そのような愛洲氏が、たとえ反幕府方とはいえ、畠山一族である義就に与していることは、満家から持国時期に、畠山氏が国内の国人の被官化を進めたことの証左となろう。全くの推測になるが、文安年間の後南朝討滅戦を通じて、奥郡の国人の被官化

を進めたと考えたい。応仁の乱に乗じて紀伊で後南朝が蜂起した際、「皆以畠山義就之披官人」と『大乘院寺社雑事記』文明二年（一四七〇）三月二十一日条に記されているのは、このような事情をよく表していると言える。

次に日高郡小松原を本拠とした湯河氏の動向を見ていきたい。湯河氏は紀伊の国人であっても、守護被官ではなく、幕府奉公衆であった。まず、史料を掲げる。

又扇子一本下給候、目出度祝着存候、猶巨細者御使僧二令申候、

御状委細披見申候、如仰爰許之儀、大方雖勝利之分候、敵城未落居候、仍御寺領高家西庄之事、從去年十月之時分、為新宮兩座、号熊野旧領、令乱入、于今知行候、言語道断之次第候、吉田之社務知行栗田分東庄并政春近年拘置候荊木村、其外守護領共、皆々一途知行候、及菟角之儀候者、可有敵同意歟之沙汰候間、守護も未能是非之御候、如何様国属無為候者、連々可申合候、於拙者聊不可存疎略候、此旨能々寺家江可預御披露候、恐々謹言、

十一月十八日

政春（花押）

大徳寺納所御寮

御報（<sup>32</sup>）

大徳寺の莊園である高家西莊に関して、湯河政春が大徳寺に出した書状である。高家莊は南北朝期以降、大徳寺領ばかりでなく、熊野新宮領も存在するなど、権利関係が錯綜していた。熊野新宮は將軍足利義政から長祿四年（一四六〇）六月に、守護畠山政長からは寛正六年（一四六五）四月に、改めて高家莊を安堵されている。その後、一時的に御料所として、奉公衆の山本氏に預けられていたが、文明四年（一四七二）十月五日、大徳寺に「返付」されている（<sup>33</sup>）。

史料Ⅰの年代であるが、文中の「新宮両座」乱入は、少なくとも將軍足利義政からの高家莊安堵を前提にた実行行使と考えられるので、長禄四年（一四六〇）以降と考えられる。文中に「大方雖勝利之分候、敵城未落居候」とあるが、紀伊において長禄・寛正の内訌時には、十一月に該当する城攻めは無い。そうすると史料Ⅰの城攻めは、応仁元年（一四六七）十一月頃の広城の状況と言えないだろうか。文中の新宮が高家莊に乱入したのを「去年十月」とするが、史料Ⅰを応仁元年（一四六七）とすると、「去年十月」は文正元年（一四六六）十月となり、これは畠山義就の養子政国が紀伊で活動を始めた時期と一致する。また、史料Ⅱの文中に、新宮が「可有敵同意歟」とあるが、「敵」を畠山義就（政国）方とすると、史料Ⅲの「今度熊野三山并有馬和泉守已下蜂起之处」と一致する。したがって史料Ⅰの年代は、応仁元年（一四六七）に比定できよう。

史料Ⅰの年代が応仁元年（一四六七）に推定できたことで、高家莊が一時御料所となった理由は、次のように説明できる。応仁の乱に際して、熊野新宮勢の乱入などで、高家莊の支配が混乱したため、御料所として奉公衆の山本氏に預けられたのであろう。同じ奉公衆でも、湯河氏でなく山本氏となったのは、以下に述べる湯河氏と熊野新宮の対立関係を幕府として憂慮していたからではないか。

湯河氏は室町幕府奉公衆として、守護権力から独立した支配領域を有しており、その支配は、支配地域を通る幹線ルートである熊野街道の関の支配を通して得た経済的実力によって裏付けされていた。湯河氏が支配する小松原の関に対して熊野衆徒は、応永十六年（一四〇九）、関の停廃を幕府に訴えて、それが認められている<sup>34</sup>。

このように湯河氏と熊野三山との対立は、かなり以前から存在していたのである。史料Ⅱに記された、湯河政春が「近年拘置候荊木村」を熊野新宮が占拠したのは、湯河氏と熊野三山との対立が存在していたためとみられる。

前述の如く、文正元年（一四六六）十二月二十一日、畠山義就の養子政国は、芳養莊を熊野新宮に寄進した。芳養莊は、「康正二年造内裏段銭并国役引付」（『群書類従』二十八）に湯河安房入道が段銭を納めたと記されているように、室町時代中期には、湯河氏一族の所領化していた。畠山政国による熊野新宮への芳養莊寄進は、

熊野新宮と湯河氏の対立を利用して行われたと考えられる。一方で畠山政国は、湯河氏一族の支配下にあった芳養荘を熊野新宮に寄進したのであるから、熊野新宮は味方、湯河氏は敵と判断していたと見てよい。

湯河氏は奉公衆であるが、文正二年（一四六七）正月から応仁元年（一四六七）五月の畠山義就が紀伊守護であった期間、義就方として活動した形跡は無い。史料E・Fは、湯河政春が政長方「東軍」として戦っていることを賞したものである。その日付は、応仁元年（一四六七）六月十三日・十四日付であり、湯河政春がそれ以前より政長方として戦っていたことが想定できる。以上のことから、応仁の乱に際して湯河氏は、義就から政長に守護が交代したことで立場を変えたのではなく、一貫して政長方に与していたと見られる。湯河氏にとって畠山義就と政長の抗争は、守護家の内紛であり、守護被官で無い奉公衆としては、將軍からの命令が無い限り正守護方に付く必要はなかった。湯河氏が政長方に与したのは、熊野新宮との対立と言った在地の理由によるとみられる。文明二年（一四七〇）十二月七日、湯河政春は將軍足利義政から、「紀伊国所々本新領地」を安堵されている<sup>(35)</sup>。將軍から直接領地を湯河政春が安堵されたことは、湯河氏が幕府直属の奉公衆であったからである。畠山氏の内訌で政長方に与したからと言って、湯河氏が畠山氏の被官となった訳ではなかった。

## おわりに

畠山氏の内訌は、室町幕府にも分国の紀伊・河内にも大きな影響を与えた。紀伊では、畠山持国が没した後は、義就方・政長方ともに、正守護に任じられていた方が優位であった。これは、守護被官化した国人衆ばかりか、寺社勢力・奉公衆も幕府や朝廷の意向を無視し得なかったからと見られる。これは熊野三山や高野山が、義就に對して積極的に支援しなかったことから明らかであろう。

河内においては、文明九年（一四七七）の畠山義就の河内下向によって、戦局は一変した。しかし、その影響

は紀伊までは浸透せず、紀伊においては、政長方優勢の図式は覆らなかった。これは国人に影響力を持つと思われる寺社勢力や、有力国人が編成された奉公衆の存在が大きかったことが、理由として挙げられよう。

畠山氏の内訌は、守護被官化したと言い難かった愛洲氏のような国人衆や、守護権力から独立した支配領域を持つ湯河氏等の奉公衆、寺社勢力をも巻き込んだ動乱となった。そこには、湯河氏と熊野新宮の対立のような、在地の情勢が密接に関わっており、両方に与することで自己の勢力を拡大することを期待して、簡単に妥協することができなかったからであろう。畠山氏の内訌が長期化したことと、紀伊における根強い義就方勢力の存在は、在地の対立関係抜きには考えられないのである。

畠山氏は基国以降、義就・政長まで一貫して紀伊守護に任じられたことで、畠山氏が紀伊の守護家であるとする意識が、紀伊の諸勢力中に形成されていたと見られる。この意識は、畠山氏の内訌に際して、本来は守護権力から独立した勢力をも戦乱に取り込む一因となったのではないか。戦国期になると紀伊畠山氏の権力は弱体化したと言われるが、戦乱によって諸勢力が二派に分かれたことが、紀伊における守護畠山氏の名跡を室町幕府滅亡まで続かせる理由の一つになったと考えられる。

#### 註

(1) 『和歌山県地名大辞典』（角川日本地名大辞典三〇、角川書店、一九八五年）「奥郡」の項によれば、口郡は伊都・那賀・名草・海部の四郡、奥郡は在（有）田・日高・牟婁の三郡である。だが、畠山氏の国支配において在田郡は、口郡の管轄であった。詳細は拙稿「紀伊守護家畠山氏の支配体制」（本書一部二章）を参照されたい。

(2) 今谷明氏「室町時代の河内守護」（同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七六年）。

(3) 「神宮寺村・小山文書」(東京大学史料編纂所影写本)。同内容の文書は、「久木村・小山文書」(東京大学史料編纂所影写本)にも存在し、『紀伊続風土記』(古文書之部)にも収録されているが、『紀伊風土記』では、「義夏」を「義度」と誤っている。なお、本書で「小山文書」としているのは、「久木村・小山文書」である。

(4) 『熊野速玉大社古文書古記録』一六九号。なお、『熊野速玉大社古文書古記録』所収文書で、『紀伊続風土記』(古文書之部)を典拠とした文書は、「牟婁郡古文書」(国文学研究資料館史料館蔵)で誤りを訂正した。

(5) 『基恒日記』(増補続史料大成)享徳四年(一四五五)二月七日条に「与州義夏任右衛門佐」と見え、畠山義夏が伊予守から右衛門佐に任じられた。

(6) 今谷明氏前掲論文。

(7) 本書一部二章参照。

(8) 今谷明氏前掲論文。

(9) 今谷明氏前掲論文。

(10) 設楽薫氏「室町幕府評定衆摂津之親の日記『長祿四年記』の研究」(『東京大学史料編纂所研究紀要』

三、一九九三年)。

(11) 拙稿「畠山氏分裂の原因に関して」(本書二部一章)。

(12) 『熊野速玉大社古文書古記録』一二七号。



(13) この文書は、東京大学史料編纂所影写本では「十津川郷文書」として架蔵されている。本章では東京大学史料編纂所影写本を使用することから、以下、「十津川郷文書」とする。

(14) 『康富記』（増補史料大成）文安五年（一四四八）正月十九日・二十七日条等。なお、具体的な経過に関しては、『田辺市史』一卷六章二節の、筆者担当部分を参照されたい。

(15) 特に注記していない城郭も含めて、本章の城郭に関しては、水島大二氏監修『定本和歌山県の城』（郷土出版社、一九九五年）によった。

(16) 特に注記していない地名を含めて、本章の地名比定は、前出の『和歌山県地名大辞典』によった。

(17) 高木徳郎氏「中世における村落景観の変容と地域社会」（『地方史研究』二六九、一九九七年）で、粉河に畠山氏の郡支配の拠点があったことが述べられている。

(18) 岩倉哲夫氏「畠山義就の岡城籠城戦」（『ぐんしょ』五一、二〇〇一年）。

(19) 今谷明氏前掲論文、および拙稿「紀伊守護家畠山氏の家督変遷」（本書一部一章）参照。

(20) 畠山政国の出自については、米原正義氏「能登畠山氏の文芸」（同氏著『戦国武士と文芸の研究』一

章、桜風社、一九七六年、初出一九六五年）による。

(21) 「古今采輯」（東京大学史料編纂所影写本）。

(22) 「湯河家文書・広島」（『和歌山県史』中世史料二）E 一三・F 八号。なお、これと同文の文書

が「渡部家所蔵文書」（東京大学史料編纂所影写本）であり、『御坊市史』三卷史料編に翻刻されている。「湯河家文書」に関しては、湯川敏治氏「湯河文書について 広島県 日比新氏蔵」（『和歌山史研究』五、一九七七年）を参照されたい。なお、本文中で注記しない湯川氏の研究はこれを指すことをお断りしておく。と

(23) 今谷明・高橋康夫氏編『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇』上、七三一号（思文閣出版、一九八六年）。

(24) 「小山文書」。

(25) 「湯河家文書・広島」九号。

(26) 「湯河家文書・東京」八号。

(27) 拙稿「奉公衆家山本氏に関する一考察」（本書三部一章）。

(28) 「古今采輯」。

(29) 「湯河家文書・広島」一一号。

(30) 『大乘院寺社雜事記』文明九年(一四七七)十月八日・九日条等。

(31) 『大乘院寺社雜事記』長祿四年(一四六〇)五月二十五日条に「畠山氏打死人数」として、「貴志信

乃入道」の名が見える。しかし、「御崎家文書」(『和歌山県史』中世史料二)一一号、十月一日付畠山  
長書状写の宛先が「貴志信濃入道」であることから、『大乘院寺社雜事記』の貴志信濃入道打死の記  
事  
は、誤りの可能性が高い。

(32) 『大徳寺文書』(『大日本古文書』家わけ十七)一 二三二号。

(33) 『熊野速玉大社古文書古記録』三二・九六・一三一・一三二号。『大徳寺文書』一 五一八・五一九

号。

(34) 矢田俊文氏「戦国期の奉公衆家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章五節、塙書房、一  
九九八年、初出一九八六年)。

( 3 5 )

「渡部家所蔵文書」二七号。

〔追記〕

粉河町は現在紀の川市となっているが、粉河の地名が必要なので、旧町名のままとした。

### 第三章 紀伊の野辺氏

#### はじめに

室町時代から戦国時代にかけて、紀伊国日高郡高田城・平須山城（平須賀城）に根拠を構えたと伝えられているのが、野辺氏である。野辺氏は戦国時代に滅亡したと伝えられていることから、動向に関しては分からないことが多い。本章では、そのような野辺氏について、拙い考察を試みてみたい。

紀伊の野辺氏は、中世ではどのように呼ばれていたのであろうか。「畠山家記」（『大日本史料』九編之十六、大永二年七月十七日条所収）に、当国の住人「野辺<sup>ノシヘ</sup>六郎左衛門」とある。また、「山田莊天田村荊木惣次郎蔵文書」（元和八年（一六二二）極月十六日付荊木七郎右衛門書上（一））には「南部高田ぢん二而のんへ殿合戦之時」（傍線は筆者）と見える。これらは近世の史料であるが、野辺氏の呼び方に関して特に不自然ではないことから、中世でもこのように呼ばれていたと考えてよいだろう。

#### 一 野辺氏の出自について

紀伊の野辺氏の出自に関しては、管見の限りでは、次の三説に分類できる。

第一の説は、野辺氏が清和源氏源経基の子で、満仲の弟満快の後裔快次を祖とする説である。『日高郡誌』（下巻）野辺氏の項で紹介され、『上南部誌』、『和歌山県の地名』（『日本歴史地名大系』三一、平凡社、一九八

三年）平須山城の項等でもこの説がとられ、『南部町史』（通史編二巻）でもこの説が紹介されている。第一の説を手際よくまとめたのが『和歌山県の地名』平須山城の項なので、以下に必要部分を引用して、この説の紹介としたい。

野辺氏は正安二年（一三〇〇）湯河氏の祖に従って熊野山中の賊を討伐し、その功で芳養（現田辺市）の辺りを与えられたという。その玄孫（曾孫とも）の快行が延文五年（一三六〇、一説に延元元年）湯河氏に従って山門攻めに参加して津戸野庄（現東本庄の津殿）を与えられ、津戸野に屋敷を構えたといい、この地に城を築くきっかけとなった。快行の曾孫忠秀は山田に高田城を築いたが、さらにその子忠房がそれより北方のこの地に城を構え本拠を移したという。

この説の根拠は地元に伝えられた系図であり<sup>(2)</sup>、一番県下に流布している説としてよいだろう。第二の説は、「紀伊国地土由緒抜」（『大日本史料』十一編之十四、天正十三年三月二十五日条）の記載である。まず、史料の関係部分を次に示す。

日高郡南部西本庄村二、湯川磨<sup>(庶)</sup>流と申候愛須武右衛門と申者居申候、（中略）又一族二野辺掃部と申者御坐候、此者も器量之者二而、所々手柄仕候、

この史料によれば、野辺氏は湯河氏の庶流愛洲（須）氏の一族であるという。前出の『日高郡誌』でも愛洲氏の項で、この第二説を紹介しているが、大正十二年（一九二三）に刊行された『日高郡誌』に今日的な史料批判を求めることは酷なので、致し方ないのかも知れない。「清和源氏湯河系図」<sup>(3)</sup>等の史料によれば、湯河氏は清和源氏源満仲の子武田信光を祖としている。第二説では、野辺氏は湯河氏・愛洲氏の同族として、清和源氏と結びついている。

第三の説は、太田亮氏『姓氏家系大辞典』（一九三六）の野辺氏の条である。以下、必要部分を引用する。

小野姓 前条第一項、第二項両氏の後也。紀伊国の豪族にして、続風土記紀伊国日高郡西本莊村城跡条に「平須山城跡、村の良、山上にあり、幡山城跡は村の西北にあり、要害城と云ふ。畠山家の文書に、野辺六郎右衛門尉と云ふあり、御霊社永正十年の棟札に『地頭小野氏、野辺弥六慶景』といふあり、皆此の城主なべし」と。

又財部の旧家にも野辺氏ありて、「南部莊西本莊野辺氏の分家なり」と見ゆ。

文中の「前条第一項、第二項」とは、「野部」の条の「1 小野姓横山党」「2 小野姓猪俣党」のことである。これらを要約すると、野辺氏は武蔵七党の一つ横山党の流れをくむ武蔵国西多摩郡野辺を本拠とする武士であり、紀伊の野辺氏も本姓が小野なので、これと同族であるとする。

これら三つの説の是非について検討してみよう。

第一の説の根拠は、前述した如く系図である。系図は近世になってから作成されたものが多く、その内容は必ずしも真実を伝えているとは言えず、信用に値しないものが少なからず存在する。『上南部誌』や『南部町史』に所収された野辺氏の系図では、そこに記された人名を含め、記載の大半が良質の史料で確認できない上、明らかに誤った事柄が記されていることから、そのまま信じることはできない。

『南部町史』（史料編）には、永正十年（一五一三）の須賀神社の棟札が三枚収められている。十月の棟札（4）には「御地頭殿小野氏野辺慶景生年廿二歳」、十一月の棟札には「大檀那小野氏野辺弥六生廿二歳」、十二月の棟札には「大檀那領主小野氏野辺弥六生年廿二歳」と見え、いずれも「小野氏野辺」で一致している。ゆえに紀伊の野辺氏は、太田亮氏が『姓氏家系大辞典』で指摘されたように、武蔵七党の一つ、横山党の流れをくむ武士であると言える。

## 二 野辺氏と畠山氏の関係

野辺氏は武蔵国西多摩郡野辺出身の武士であるが、何時如何なる理由で紀伊に來たのであろうか。野辺氏は次項で述べる如く、畠山政長の内衆であり、政長と義就が家督を争った寛正年間が、紀伊における初見である。良質の史料では、野辺氏の系図に書かれているように、鎌倉・南北朝時代まで、紀伊における活動を遡ることはできない。

畠山氏の分国の中で、紀伊以前に野辺氏の活動が知られているのが能登である。畠山氏は基国の時には、紀伊とともに河内・越中・能登等の守護を兼帯していたが、その時期に、能登在国の被官として、野辺氏の活動が知られている<sup>(5)</sup>。能登の野辺氏は、『大日本史料』七編之二、応永三年（一三九六）三月二十九日条所収「得田文書」に「野辺弥太郎」「小野 判」と署判している。能登の野辺氏も、本姓が小野であることから、紀伊の野辺氏の同族と考えてよいだろう。

野辺氏の能登での活動は、畠山基国の後は見られなくなる。これはおそらく能登が、管領家の管轄から離れたからであろう。野辺氏は管領家と能登守護家が分かれた際、管領家の満家に従ったと考えられる。しかし、野辺氏は管領家で重用されなかったらしく、満家・持国の時期に、古文書・記録類等にその名を見いだすことはできない。そのため野辺氏は、畠山氏の家督紛争に際して、弥三郎・政長に与したとみられる。

野辺氏が畠山氏の被官となった経緯はよく分かっていないが、畠山氏は武蔵国男衾郡畠山莊を本貫地としており、野辺氏と同じく武蔵国出身である。また、南北朝期に畠山基国の伯父国清が、関東執事・武蔵守護だった時期がある<sup>(6)</sup>。このような事情から、畠山氏と野辺氏が主従関係を結んだとしても、何ら不思議はないだろう。



### 三 野辺十郎をめぐって

寛正年間に紀伊で活動した野辺氏について、当時の古文書には通称等は、どのように記されているのであろうか。

『高野山文書』（『大日本古文書』家わけ一）二 二九三号、（寛正五年）十二月二十四日付会行事性覚書案には、「野辺十郎兵衛尉」と記されている。

『熊野速玉大社古文書古記録』一三二号、（寛正六年）卯月十四日付神保長誠遵行状写（7）の宛先は「野辺十郎左衛門尉」である。

・ とも案文が写であり、誤写した可能性が存在することから、同一人物と考えてよいだろう。この野辺十郎左衛門尉（兵衛尉、以下左衛門尉とする）について以前筆者は、『熊野速玉大社古文書古記録』一三六号―一四六号の「宗貞」なる人物が野辺氏であると推定したが（8）、今一度その是非について検討してみたい。

A 奥郡之事、面々以無為之儀申談、去十五日令入国候、祝着無極候、殊両座之御事者、一段無御等閑候条、本望此事候、尚以無御如在之儀候者所仰候、先日預御音信候、悦喜申候、則御返事候者、定而可参着候哉、諸事重可申入候、恐々謹言、

三月十七日

宗貞判

新宮衆徒神官御中

B 就今度御敵等可令出張之儀、自屋形御置状候、則令達候、上意御嚴重之御事候間、弥無御如在之儀候者、可為肝要候由、能々可申旨候、恐々謹言、

九月六日

宗貞判

新宮衆徒神官御中（９）

史料Ａの文頭に「奥郡之事」とあり、次いで「去十五日令入国候」とあることから、紀伊奥郡に関係した人物である宗貞が入国したことが分かる。この宗貞は史料Ｂで「自屋形御置状候、則令達候」という立場であったことから、彼は紀伊に在国した守護内衆であると言えるだろう。では、史料Ａ・Ｂの書状はいつ頃発給されたのであろうか。次に史料を掲げて検討してみよう。

Ｃ土居出張事、顕形之由其聞候、然上者、当庄年貢以下事、一途静謐之間者、不可有社納之、如何様属無為候者、可申談候、地下人等、此分申付候也、恐々謹言、

十月廿一日

宗貞判

高家庄使節御中（１０）

史料Ｃの年代であるが、文頭に「土居出張事」とあり、これと関係していると考えられる寛正三年（一四六二）九月五日付熊野山新宮衆徒神官宛室町幕府奉行人奉書が、『熊野速玉大社古文書古記録』一二七号に見える。したがって、宗貞は寛正年間の畠山氏の内訌に関して、紀伊に入国したと考えられる。また、史料Ｃの土居氏は、畠山義就に与して蜂起しようとしており、これに新宮が味方しないように宗貞が要請していることから、宗貞は畠山政長の被官であった。

史料Ａに「奥郡」と記されている。史料Ｃの「高家庄」は日高郡にあり、新宮は牟婁郡である。宗貞の活動した地域は牟婁郡から日高郡に及んでおり、日高郡も牟婁郡も紀伊の奥郡であった<sup>（１１）</sup>。このように宗貞は、畠山政長の被官で紀伊奥郡の支配に関係した人物であると言えよう。

奥郡守護代神保長誠は在京していたため、実際に在国していたのは、小守護代の野辺十郎左衛門尉であった。

宗貞も紀伊に在国して、奥郡一帯で活動していることから、小守護代の野辺十郎左衛門尉の実名を、宗貞としてよいだろう。

紀伊奥郡に畠山政長の小守護代として入国した野辺氏について、前出の『高野山文書』二・二九三号、会行事性覚書状案では「南部庄代官野辺」と記している。これは、室町時代南部荘が守護の支配下に入り、この地が紀伊奥郡支配の拠点となり、奥郡小守護代が南部荘の代官を兼ねていたからである。

寛正年間以降で野辺氏の名が見えるのは、文明八年（一四七六）と推定できる「小山秀太郎文書」（『田辺市史』四巻史料編、四 五九号）十一月二十八日付某姓長則書状であり、この文中に「野辺掃部允」と記されている。この野辺掃部允は、前出の野辺十郎左衛門尉が官途を変更したと考えても、何ら不自然なことではない。そのため、野辺十郎左衛門尉が後に野辺掃部允と称したと考えておきたい。

#### 四 野辺六郎右衛門と慶景

戦国時代に入り、野辺氏の活動が見えるのは、明応四年（一四九五）である。（明応四年）六月十二日付畠山尚順書状に、「野辺六郎右衛門尉」の名が記されている。明応の政変後も野辺氏は政長流畠山氏の奥郡小守護代として、活動していたことが分かる。野辺六郎右衛門尉と野辺掃部允の関係は未詳であるが、親子とみて誤りないだろう。

次に野辺氏の名前が見えるのは、前出の永正十年（一五一三）の須賀神社の棟札である。十月の棟札に野辺氏が「御地頭」と記されており、永正年間に至っても野辺氏が、小守護代として南部荘の地頭であったことが分かる。また、十一月の棟札には「大檀那小野氏野辺弥六生廿二歳」と記されている。この棟札から計算して、野辺慶景が明応元年（一四九二）の生まれであり、永正十年（一五一三）には「弥六」と称していたことが分かる。

このことから、野辺慶景は前出の野辺六郎右衛門尉の子息と考えられる。

野辺慶景は林堂山樹や熊野衆と結んで分国支配の強化をめざす畠山尚順と対立し、永正十七年（一五二〇）八月、奉公衆家の湯河氏等とともに尚順を紀伊から淡路に追放した。畠山尚順の嫡子植長が尚順の強硬路線を修正したため、野辺慶景は植長に赦免された<sup>12</sup>。「小山文書」永正十八年（一五二一）三月十七日付畠山家連署奉書の宛先が「野辺掃部允」であり、文中に野辺「慶景」の名が記されていることから、野辺慶景が掃部允を称していたことが分かる<sup>13</sup>。

野辺氏は大永年間中に、古文書・記録等にその名を見いだせなくなる。野辺慶景について『熊野年代記』には、大永二年（一五二二）に本宮の竹之坊・玉置篠之坊らに攻められ、「南部ヘイシユ野辺城ヲチ」て滅亡したと記している<sup>14</sup>。事実関係を良質の史料で確認することはできないが、この後野辺氏の活動が見られなくなることと、野辺慶景が本宮勢ら熊野衆と結ぶ畠山尚順と対立していたことなどを考えあわせると、ありえないことではないだろう。

## おわりに

この小文では、野辺氏の出自と紀伊入国の事情、人名比定を中心に検討を加えた。その結果、野辺氏が紀伊の国人領主ではなく、元来武蔵国出身で、寛正年間に畠山政長の紀伊奥郡小守護代として入国したことが判明した。しかし、本章一節で紹介した第一・第二の説を、浮説として片づける訳にもいかなないと考えている。

たとえば第二説では、湯河氏と愛洲氏が同族で野辺氏はその支族であったとする。実際、湯河氏も愛洲氏も本姓は源氏であるが、野辺氏は小野である。本姓が違う武士の一体化説がなぜ生まれたのか、検討する必要があるだろう。室町時代から戦国時代にかけて、紀南の地では湯河氏の勢力が増大していく。そのことと、湯河氏・愛

洲氏・野辺氏が一体化する伝承との関連を考えてみれば、このような同族化の伝承は、紀南の中世史研究の上で、重要な問題を含んでいると言えるのではないだろうか。

註

(1) 「日高郡古文書」。『御坊市史』(第三巻史料編)では、「紀伊国古文書」(国文学研究資料館史料館蔵)の一部として翻刻しているが、何家の史料かは記していない。

(2) 地元に残る系図としては、『上南部誌』に「野辺氏系図」が、『南部町史』(通史編)に「野辺氏系」が、それぞれ収められている。

(3) 湯川敏治氏「湯河文書について」(『和歌山県史研究』五、一九七七年)。

(4) 『南部町史』(史料編)では九月の棟札とするが、文面に「永正十年癸酉九月始之同十月下旬葺治也」と見えることから、十月の棟札とした。

(5) 小川信氏「畠山基国の活動と管領畠山氏の成立」(同氏著『足利一門守護発展史の研究』三編三章四節、吉川弘文館、一九八〇年)。

(6) 小川信氏「畠山国清の動向と分国の消長」(同氏前掲書三編二章二節、初出一九七七年)。

(7) 『熊野速玉大社古文書古記録』に所収された文書は、「牟婁郡古文書」(国文学研究資料館史料館蔵)で校合した。なお、『熊野速玉大社古文書古記録』では、この文書を打状渡するが、守護代から小守護への文書なので遵行状とした。

(8) 拙稿「紀南戦国史序説」(安藤精一氏編『紀州史研究』四、国書刊行会、一九八九年)。

(9) 『熊野速玉大社古文書古記録』A 一三七号、B 一四〇号。

(10) 『熊野速玉大社古文書古記録』一四五号。

(11) 奥郡の領域等については、拙稿「畠山氏の内訌と紀伊」(本書二部二章)を参照されたい。

(12) 拙稿「戦国期紀州湯河氏の動向」(本書三部二章)、小谷利明氏「畠山植長の動向」(矢田俊文氏編

『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)。

(13) 『大日本史料』九編之十二、大永元年(一五二一)三月十七日条。

(14) 白石博則氏執筆『定本和歌山県の城』(郷土出版社、一九九五年)「平須賀城」の項。

## 第三部

### 守護家と奉公衆家

## 第一章 奉公衆家山本氏に関する一考察

### はじめに

紀伊の奉公衆としては、湯河・玉置・山本・畠山の各氏が知られている<sup>(1)</sup>。畠山氏は紀伊守護家の一族であるが、他の三氏はいずれも紀伊の国人であり、国人系奉公衆と言ってもよいだろう。このうち湯河氏に関しては、矢田俊文氏の研究によって、守護権力に介入されない支配領域を有していたことが明らかにされている<sup>(2)</sup>。

筆者は以前、『上富田町史』の編纂にかかわり、『上富田町史』（史料編上）の中世史料の校訂と、通史編の南北朝から戦国にかけての執筆を、山本氏の動向を中心に行ったが、自治体史という制約上、論証を十分に行っていない部分があった。また、『上富田町史』の刊行以後、新たに判明した事実もある。よって本章では、紀伊の国人系奉公衆である山本氏の動向について、まとめてみることにしたい。

### 一 奉公衆山本氏の編成に関して

奉公衆の編成を記載した史料として番帳があり、山本氏は湯河・玉置・畠山氏とともに四番衆に属していたことが知られている。番帳の成立を、福田豊彦氏の研究と、今谷明氏の研究<sup>(3)</sup>によって年代順に並べると、次のような順序となる（以下、番帳のように記す）。

「文安年中御番帳」（『群書類従』二十九）。



「永享以来御番帳」(『群書類従』二十九)。

「久下文書・四番衆交名」(『兵庫県史』史料編 中世三)。

「長享元年九月十二日常徳院殿様江州御動座當時在陣衆着到」(『群書類従』二十九)。

「東山殿時代大名外様附」(今谷明氏『室町幕府解体過程の研究』二部三章)。

紀伊の国人系奉公衆である湯河・玉置・山本氏に関しては、矢田俊文氏が指摘されたように、湯河・玉置氏が番帳からすでにその名が見えるのに対し、山本氏が番帳と番帳にその名が見えず、番帳が初見であることが問題であった。番帳には四番衆として「山外中務少輔」の名が見える。この「山外」が「山本」の誤りであると言いつれなかったのは、番帳の四番衆に「山下中務少輔」の名が見え、この「山下中務少輔」を二番衆山下氏の一族とする研究が存在するからであった<sup>(4)</sup>。

福田豊彦氏の研究によれば、番帳と同時期の奉公衆の編成を記した史料に、『蜷川家文書』(『大日本古文書』家わけ二十一)一三〇号と同三一号の「幕府番帳案」がある。この史料と番帳を比較検討することで、福田豊彦氏が指摘されたように、互いの史料の誤りなどを正すことができる。次に、「幕府番帳案」の該当箇所を見てみよう。

『蜷川家文書』三〇号「幕府番帳案」には、四番衆として「山本中務少輔」の名が見え、『蜷川家文書』三一号「幕府番帳案」にも四番衆として「山本中務少輔」の名が見える。一方、『蜷川家文書』三〇号・三一号の「幕府番帳案」には、奉公衆の四番衆として、「山下中務少輔」の名は見えない。このことから、番帳の「山外中務少輔」が、「山本中務少輔」であることが分かる。

番帳は文安元年(一四四四)五月から文安六年(一四四九)正月の間の成立、番帳は宝徳二年(一四五〇)から享徳四年(一四五五)正月の間の成立とされる<sup>(5)</sup>。これらの事実から、番帳の前に成立した番帳である「幕府番帳案」(『蜷川家文書』)や、後に成立した番帳などのいずれにも山本氏の名が見えるのに、番帳

にのみ山本氏の名が見えないことが不自然であると言えよう。したがって、番帳 四番衆の「山下中務少輔」は、森幸夫氏が指摘された二番衆の山下氏の一族ではなく、「山本中務少輔」の誤りであると結論できる。

また、「花営三代記」(『群書類従』二十六) 応永三十二年(一四二五) 二月二十二日の記事に、「大御所奉公」として「山本中務丞」の名が見える。以上のことから、応永年間には山本氏が奉公衆に編成されていたことは、間違いないと言えよう。

山本氏は「山本下総守」が長禄四年(一四六〇) 九月、「不申御暇、知行分紀州下国」したので、所領の「櫛原莊」を没収されている<sup>(6)</sup>。長禄四年(一四六〇) 九月十六日、畠山義就は將軍足利義政から「隠居」を命じられ、それを不満として、同二十日に河内に下向している。これは前出の山本下総守が、無断で紀伊に下向した九月十八日と時期が一致する。また、後掲する史料 A・B で、山本氏と行動を共にする愛洲氏は、畠山義就の書状中に名前が見えることから、長禄・寛正の内訌の際には、すでに畠山義就方であった<sup>(7)</sup>。状況からの判断になるが、山本下総守の行動は、畠山義就の動きと関係している可能性が高いのではないだろうか。ただし、山本下総守の子息は京都に残っており、長禄四年(一四六〇) 閏九月には、畠山義就の追討のための出陣を命じられている。『大乘院寺社雜事記』(増補続史料大成) に山本氏をわざわざ「奉公衆」と注記しているのは、このような事実が背景に存在したと関係があるのかも知れない。

一方、玉置氏は文安元年(一四四四) 二月十日、徳増が前年の禁闕の変の際、後南朝を「引組」したとして、管領畠山持国に「被誅」たことが、『康富記』(増補史料大成) 文安元年(一四四四) 二月十二日条に見える。玉置氏は禁闕の変にもかかわらず、その「遺跡」は子息の「小太郎」に安堵され<sup>(8)</sup>、「文安年中御番帳」をはじめとする番帳類にその名が記載されているなど、奉公衆四番から外されたとする史料はない。また、山本氏も応仁の乱に際しては、文明四年(一四七二) まで高家莊を幕府から預け置かれたことが、『大徳寺文書』(『大日本古文書』家わけ十七) 一五一八・五一九号より知られている。以上の事実から、一度奉公衆として編成さ

れば、少々のがあっても、編成を外されることはなかったと考えておきたい。

## 二 明応の政変後の山本氏

明応の政変によつて、奉公衆の結合は崩壊したとされる。紀伊の場合、湯河政春は京都と幕府の機構を押さえていた、いわゆる細川政元政権の足利義高（義澄）・畠山基家（義就の子）方につかず、足利義材・畠山尚順（政長の子）方であつたことが、明らかになっている<sup>（9）</sup>。玉置氏の動向は管見の限りでは明らかにできないが、山本氏の動向については、次の史料から明らかにできる。

A 山本・同愛洲為退治、相談野辺六郎右衛門尉、去九日至田辺進発、尤以神妙候、弥粉骨憑入候、恐々謹言、

六月十二日

目良左京亮殿<sup>（10）</sup>

（畠山）  
尚順（花押）

この史料は、畠山尚順が書状を紀伊の国人目良氏に発給していることより、尚順が紀伊に逃れた明応二年（一四九三）閏四月以後と見てよい。また、久保尚文氏の研究によれば、畠山尚順は明応七年（一四九八）夏には、尚慶と改名していたとされる<sup>（11）</sup>。したがって史料Aの年代は、明応二年（一四九三）から明応七年（一四九八）の間に比定できよう。

明応二年（一四九三）から明応七年（一四九八）の間の、紀南の出来事として注目できるのが、「勸進帖・闘鶏神社所蔵」（『田辺市史』四巻、四七〇）の記事である。この史料に「明応四季卯月比、諸軍勢乱入而破却社壇」と見え、明応四年（一四九五）四月に田辺で戦闘があつたことが分かる。また、『大乘院日記目録』（増補続史料大成）明応四年（一四九五）三月十六日条には、畠山基家が越智とともに紀伊に出兵したものの、同七

月十一日条には「散々」に打ち負けて「引退」したと見える。これらの記事より、明応四年（一四九五）三月から七月にかけて、紀伊で畠山尚順方と基家方の戦闘があり、それが田辺でも戦われていたことが分かる。この事実は、史料Aの内容を矛盾なく説明できる。よって、史料Aは明応四年（一四九五）と推定できよう。

さて、史料Aと関係していると考えられる史料が今一つ存在する。その史料を次に掲げて、検討してみたい。

B 尚々、先日杉坊下之時、如此之状祝着候、万取乱候間、不能詳候、爰許之時宜、委細此僧可被申候、

其後者久不令申候、非本意候、仍山本方并愛洲三郎為退治、自去六月之初田辺御出陣之由候、御粉骨不及申候、殊同十二日愛洲構被攻落之刻、御被官人被被疵之由、野辺六郎右衛門尉注進候、御忠節之至、無比類候、被励軍功者、可為簡要候、委細猶野辺可申候、恐々謹言、

十月五日

目良左京亮殿

進之候（<sup>12</sup>）

（神保）  
長誠（印）

史料Bの内容は、六月に山本氏と愛洲氏が田辺を攻め、これに対して目良氏らが出陣したことに關する神保長誠の書状であり、この内容は、史料Aの内容と一致すると言えよう。

史料Bは、以前拙稿で、寛正四年（一四六三）と推定した文書である（<sup>13</sup>）。年代推定の根拠は、神保長誠が紀伊の国人に宛てて書状を出していることから、神保長誠が紀伊支配にかかわっていた時期、つまり奥郡守護代の時期と考えたからである。史料Bで神保長誠は印判を使用しているが、実際に長誠は、明応二年（一四九三）正月以降は中風のため、印判を使用している（<sup>14</sup>）。ただし、神保長誠自身が文明十五年（一四八三）にはすでに越中に在国しており、紀伊の国人に書状を出す必然性はないと考えたことと、実際に「目良文書」を調査した方が、史料Bの文書を写とされたため、旧稿を執筆する時に、史料Bの神保長誠が使用したのが印判か花押かは重視し

なかった。

史料Bを史料Aとの関係から明応四年（一四九五）と推定し直すと、以下の事柄の説明がつく。まず、史料Bで、六月の出来事に対する神保長誠の書状が十月にまで遅れたことに關しては、紀伊と越中との距離や、細川政元政権が畿内一帯を支配している状況を考えると説明がつく。次に史料Bの「野辺六郎右衛門尉」であるが、以前拙稿で、「野辺六郎右衛門尉・十郎兵衛尉・十郎左衛門尉が、同一人物なのか別人なのかを断定することは、難しい」<sup>(15)</sup>とした。しかし、史料Bの年代が寛正四年（一四六三）から明応四年（一四九五）に下がったことで、野辺十郎兵衛尉・十郎左衛門尉と野辺六郎右衛門尉の名が見える時期が重ならず、別人であると断定できるようになった。

以上の事より史料Bの年代は、明応四年（一四九五）に比定する方が良いと言えよう。

史料A・B等より、明応四年（一四九五）の、紀南における畠山尚順方と基家方の抗争は次のように整理できるだろう。明応四年（一四九五）三月、畠山基家が越智とともに紀伊に出兵し、これに呼応した愛洲氏・山本氏等、紀南の畠山基家党が蜂起して、田辺を占拠した。これに対して畠山尚順方は、奥郡小守護代野辺六郎右衛門尉が、紀南の国人目良氏らを動員し、同年六月九日、田辺に兵を進めた。両者の戦闘は、六月十二日に尚順方が「愛洲構」を攻略したことによって大勢が決し、田辺一帯の平定に成功した。なお、「愛洲構」であるが、史料A・Bより、明応四年（一四九五）の戦闘は、田辺を中心に行われていることから、「愛洲構」は平須賀城ではなく、衣笠城の可能性が高い。紀南における敗戦に続き、畠山基家自身も、紀伊での合戦に敗北して、七月十一日には河内に引き上げたのである。

以上述べてきたように、山本氏は明応四年（一四九五）の時点で、畠山基家方についていた。足利義高（義澄）が「湯川」某に「玉置・山本以下申合、於紀州一段抽忠節者」と味方につくように御内書を発給したのも<sup>(16)</sup>、このような事実が存在したからであろう。玉置氏の動静は不明だが、前述の如く湯河政春は畠山尚順方なので、

紀伊においても奉公衆は、足利義材・畠山尚順方と、足利義高・畠山基家方に分裂したことになる。

### 三 戦国期の山本氏

明応の政変後、足利義高・畠山基家方についた山本氏であったが、この動きに変化はなかったのだろうか。その後の山本氏の動向を「小山文書」（東京大学史料編纂所影写本）から見てみよう。

C 一瀬江諸勢取懸候処、合力其動被思召神妙候、弥山本方被申合堅固覚悟可為肝要候、仍安宅大炊助・有馬武略之義旁以被成 御書候、同対俊次御書可有頂戴候、然上者、別而大炊助入魂此時属御本意候様、馳走粉骨 由相心得可申候、委細者泰地修理亮可申旨候、恐々謹言、

六月八日

盛賢（花押）

長清（花押）

小山三郎五郎殿

史料Cの盛賢は丹下盛賢、長清は遊佐長清で、いずれも畠山植長（尚順嫡子）の内衆である。史料Cの年代を確定することは難しいが、遊佐長清と丹下盛賢の紀伊における活動時期は永正十八年（一五二一）以降である。丹下盛賢は天文十四年（一五四五）五月に没しているが<sup>17)</sup>、天文十一年（一五四二）三月以降は畠山植長とともに河内高屋城に復帰していることから、史料Cの年代は、これ以前と考えるのが妥当ではないだろうか。よつて、ひとまず史料Cは、永正十八年（一五二一）以降、天文十一年（一五四二）以前の書状と推定しておきたい。

「一瀬」は山本氏の本拠地「一ノ瀬」のことと考えられる。一ノ瀬が敵に攻められているので、「山本方」と申し合わされて「堅固」に守る「覚悟」が必要であると「小山三郎五郎」に、畠山植長の内衆である遊佐長清と

丹下盛賢が申し入れていることから、山本氏が畠山植長方であったことが分かる。この事実より、遅くとも天文初年には、山本氏は畠山植長方についていたのである。

史料A・Bで山本氏とともに畠山基家方として活動していた愛洲氏であるが、須賀神社の永正十年（一五一三）十二月十八日の棟札に「野辺弥六」の「御代官衆」として「愛洲源右衛尉」の名が見える。野辺弥六は畠山尚順の内衆である。したがって、愛洲氏は永正十年（一五一三）には、すでに畠山基家方から尚順方についているとともに、「野辺弥六」の「代官」と記されているように、尚順の被官化していたのである。

では、山本氏も畠山氏の被官化したのであろうか。次に掲げる史料が、その手掛かりになるだろう。

D 「賀茂小法師殿 植長」

当庄不入儀、成其意候上者、忠節可為肝要候、猶委細山本式部丞、玉置兵部大輔可申候、謹言、

六月廿六日

植長（花押）

賀茂小法師殿

E 当庄不入儀、被成御意得候、珍重候、弥御忠節可為肝要候、此旨相意得可申由、被仰出候、恐々謹言、

六月廿六日

正直（花押）

忠善（花押）

賀茂小法師殿（<sup>18</sup>）

史料D・Eの関係であるが、この二つの史料は年号はないものの同日付であり、関係が想起できる。史料Eで忠善らが「御意得」「被仰出候」と記しているのは、他の史料が無いことから、史料Dの畠山植長書状とみてよく、忠善らが畠山植長の意を受けて書状を発給していたとみられる。一部二章で指摘したように、署判の位置か

ら史料D文中の「山本式部丞」は、史料Eの「忠善」に該当し、「玉置兵部大輔」は「正直」に該当する。

史料D・Eの宛先である賀茂氏は、現在の海南市下津町小松原の在地領主であることから、「当庄」とは加茂荘のことであろう。史料D・Eの年代は俄に決しがたいが、畠山植長が紀伊に在国していた天文初年から、河内に復帰する天文十一年（一五四二）三月までの間と見て大禍ないだろう。

史料Dの形式は書状であるが、加茂荘の「不入」のことを記していることから、内容的には判物に入る。史料Eは、山本忠善・玉置正直が史料Dの畠山植長書状を受けて発給した副状である。だが、山本氏・玉置氏ともに奉公衆家であり、政治権力的には、守護から独立した存在である。また、史料D・Eは山本氏の本来の勢力範囲である櫛原荘など牟婁郡の事例ではなく、玉置氏の本拠地の日高郡の事例でもなく、海部郡の事例である。この事実をどのように解したら良いのだろうか。

史料DとEは同日付であることから、同じ場所で発給された可能性が高いと言えよう。この推定が正しいとすれば、その場所は、畠山氏が紀伊で拠点としていた広とみられる。広に山本氏と玉置氏の一族があり、守護と一体となつて権力を行使していたことになる。この一例のみで判断することは難しいが、畠山植長は河内高屋城を有力内衆によつて負われるなど、その権力基盤は不安定であり、紀伊国内の有力国人である山本氏や玉置氏の協力なしには、海部郡でも十分に権力を行使できなかったのではないだろうか。山本氏・玉置氏はともに、本拠地とは別のところで守護権力の一翼を担うことによつて、存在価値を増していたのであろう。

## おわりに

室町時代山本氏は奉公衆家として、政治的には守護権力に属さない独自の在地支配を行っていた。しかし、明応の政変後における奉公衆結合の崩壊と、両畠山氏の抗争が続けられたことが加わって、山本氏は畠山氏の分国



支配体制に協力するようになる。これは畠山氏権力の実態を考え併せてみると、山本氏が畠山氏権力に屈服し、その支配を受けたと言うよりも、山本氏の協力なしには、畠山氏の支配が成り立たなかったと言うべきであろう。山本氏・玉置氏は天文十一年（一五四二）三月、畠山植長の河内入国に際し、植長軍の一員として、河内に軍を進めたことが、『多聞院日記』（増補続史料大成）同年三月八日条に記されている。これも畠山氏に協力した行動と捉えることが、現時点では妥当であろう。

本章では、湯河氏の動向には触れなかった。三部三章で述べるように、戦国時代になっても湯河氏は畠山氏と距離を置いた対応を行っている。同じ紀伊の奉公衆家でありながら、山本氏・玉置氏の畠山氏との関係と、湯河氏の畠山氏との関係の差は、如何なる事情によるものなのか、今後検討を加えて行く必要があるだろう。

#### 註

（１） 福田豊彦氏「室町幕府の奉公衆体制」（同氏著『室町幕府と国人一揆』 四、吉川弘文館、一九九五年、初出一九八八年）。以下、本文中で注記しない福田豊彦氏の研究は、これを指す。

（２） 同氏「戦国期の奉公衆家」（同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章五節、塙書房、一九九八年、初出一九八六年）。以下、本文中で注記しない矢田俊文氏の研究は、これを指す。

（３） 福田豊彦氏「室町幕府の奉公衆 御番帳の作成年代を中心として」（同氏前掲書 二、初出一九七一年）。今谷明氏氏「『東山殿時代大名外様附』について 奉公衆の解体と再編」（同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部三章、岩波書店、一九八五年、初出一九八〇年）。

（４） 森幸夫氏「室町幕府奉公衆山下氏」（『国史学』一四四、一九九一年）。

（５） 福田豊彦氏註（３）前掲論文。

（６） 設楽薫氏「室町幕府評定衆摂津之親の日記『長祿四年記』の研究」（『東京大学史料編纂所研究紀要』

三、一九九三年）。

(7) 拙稿「畠山氏の内訌と紀伊」(本書二部二章)。

(8) 「玉置家文書」(『和歌山県史』中世史料二)一号、文安元年(一四四四)五月十日付管領畠山持国下知状案。

(9) 拙稿「戦国期紀州湯河氏の動向」(本書三部二章)。

(10) 「田辺家文書」(京都府立総合資料館所蔵)。本史料の所在に関しては、和歌山大学の海津一朗氏、

大山崎町歴史資料館の福島克彦氏のご教示を得た。なお福島克彦氏の調査によれば、「田辺家文書」は本来「目良家文書」の一部であった。

(11) 同氏著『越中中世史の研究』一章四節(桂書房、一九八三年)。

(12) 「目良文書」。この文書は『紀伊続風土記』古文書之部に活字化されているが、尚々書きが欠落しているなど誤りが多い。そのため、『上富田町史』編纂の際、東京大学史料編纂所影写本より翻刻した。

(13) 拙稿「紀南戦国史序説」(安藤精一氏編『紀州史研究』四、国書刊行会、一九八九年)。以下、本文中での拙稿はこれを指す。

(14) 『富山県史』(通史編 中世)第三章第二節、四四九ページ。

(15) 拙稿「紀伊の野辺氏」(『くちくまの』一一五、一九九九年)。

(16) 「渡部家所蔵文書」(『御坊市史』三卷)二〇号。

(17) 拙稿「紀伊守護家畠山氏の支配体制」(本書一部二章)。

(18) 「中尾家文書」(『和歌山県史』中世史料二) D 七号、E 八号)

## 第二章 戦国期紀州湯河氏の動向

### はじめに

戦国期紀伊国の国人領主と言え、湯河氏がその代表格としてあげられる。それは、湯河氏の規模が他の国人を抜きんでていたと言うことよりも、湯河氏以外には戦国期の国人領主に関する研究が行われていないといふような状態であるからであろう。

湯河氏をはじめとする、紀伊の戦国政治史研究を、それなりの水準に引き上げたと言われたのが、石田晴男氏である<sup>(1)</sup>。石田氏はそれまで研究史の上で、暗黒時代と言っても過言ではなかった、紀伊国の戦国期の政治状況について、湯河氏と雑賀一揆に畠山氏のかかわりを核とした、惣国一揆論を展開された。石田氏の研究は、当時の研究の死角をついたものであり、加えてその説を、峰岸純夫氏が広く一般に紹介したこともあって<sup>(2)</sup>、紀伊の中世史研究を志す者に与えた影響も大きなものがあつた。そのためか、石田氏の説によつて中世史を記述している書物も、少なからずみられる。石田氏は紀州惣国の意味を誤解しているが、これに関しては、先学諸兄の優れた業績や筆者の別稿を参照されたい<sup>(3)</sup>。本章では石田氏が惣国一揆の前段階とされた、明応二年（一四九三）以降の湯河氏と畠山尚順の関係から、永正十七年（一五二〇）の畠山尚順の紀伊追放、紀南国人一揆説の是非について、検討を加えることとする。

なお、畠山尚順（尚慶・ト山）は政長の嫡子で足利義材（義尹・義植）方、畠山義英は基家（義豊）の嫡子で義就の孫にあたり足利義澄・細川政元方であることを、念のために確認しておきたい。

## 一 湯河氏に関する研究について

石田氏の研究は、本章では避けて通ることができない。よって、以下に石田氏の研究の中で、本章に係る部分を、筆者なりに要約することとする。

明応の政変で細川政元が政権を掌握した結果、畠山政長は敗死し、嫡子尚順は分国紀伊に逃れた。畠山氏の家督は畠山義就の嫡子基家に移り、河内は基家が掌握することになる。このような事態に対し紀伊では、基家側の勢力は浸透せず、諸勢力は尚順側に結集していくが、湯河氏のみは例外であった。室町幕府奉公衆であった湯河氏は、足利義澄の下知にしたがって、尚順に協力しなかったのである。これに対して畠山尚順は、明応六年十一月（一四九七）から永正五年（一五〇八）八月の間に「湯川退治」を敢行するが、湯河氏は高田城に籠もって奮戦したため滅亡せず、湯河氏は永正八年（一五一一）八月の京都船岡山の戦いに、足利義澄方として参加した。畠山尚順は永正十四年（一五一七）、嫡子植長に河内高屋城を譲って紀伊広城に隠居し、紀伊の領国支配強化に専念する。その一環として湯河勢力の一掃のため、「湯河少弼御退治」が行われた。その結果永正十七年（一五二〇）八月、紀南に湯河氏を中心とした国人一揆が成立して、畠山尚順は淡路へ追放され、翌年五月の再入国の試みも失敗する。ここに紀南では湯河氏による守護支配権を排除した支配が志向され、以後、湯河氏には奉公衆としての活動はみられなくなり、紀州における「一揆」支配への可能性が生じた。以上が筆者が理解した石田氏の説による、湯河氏の紀南支配に至るまでの経過の概要である。

さて、湯河氏の領域支配に関しては、矢田俊文氏も論稿を発表されている<sup>（4）</sup>。矢田氏は、室町時代紀伊国において国人領主として在地に本拠をかまえ、当参御家人としての家格をもつ湯河・玉置・山本氏は、守護の介入を許さない独自の政治領域を有していたとされた。そしてそれは、それぞれの地域の幹線ルートを中心地である

関の支配という経済的実力によって裏打ちされていたことを論証された。また、「衣奈八幡神社文書」明応二年（一四九三）十一月二日付湯河政春判物を例にして、戦国期の湯河氏は、日高平野とその周辺の裁判権を握り、荘官職の安堵までできる権力となっており、この事より、戦国領主が幕府・守護等の介入を排除した絶大な権限を有していたとされたのである。

矢田氏の研究は良質の史料による手堅い方法をとられており、湯河氏権力の経済的基盤にまで論証されているところなど、石田氏の研究よりも、格段に説得力があると言えよう。したがって、湯河氏は室町期に奉公衆として守護権力を排除した領域支配を行っていたとする、矢田氏の研究成果に従うべきであろう。

石田氏の湯河氏に関する研究の一角は崩れたわけだが、紀南国人一揆説については、その後そのままとなっている<sup>(5)</sup>。筆者は以前、この紀南国人一揆説や明応二年（一四九三）以降の湯河氏の動向に対して、疑問を呈したことがあったが<sup>(6)</sup>、そのときは紙数等の関係もあり、詳細に論及することができなかった。以下、明応二年（一四九三）以降、大永元年（一五二一）に至るまでの湯河氏の政治的な立場について、私見を述べていきたい。

## 二 明応の政変後の湯河氏の動向

石田氏は、明応の政変後湯河氏が、紀伊に在国した畠山尚順方ではなく、幕府奉公衆として將軍足利義澄の下知に従ったとされた。だが、そのような見解は成立するのであろうか。まず、石田氏が論拠とされた史料について検討することからはじめていきたい。

A 畠山尾張守事、既於河州令出張候之間、此時可加退治候、就其、玉置・山本以下申合、於紀州一段抽忠節者、

如望可有恩賞候、各心中趣具可言上候、別而憑入候、為其以自筆申遣候也、

十一月十二日

(足利義澄)  
(花押)

湯川とのへ

B 「上包」  
十一月十三日

鷹橋四郎右衛門尉

長次

湯川殿御宿所

畠山尾張守殿事、就河州御出張之儀、既從京都可被加御退治候、早被抽御忠節者、隨望御申可有御恩賞之段、被成御自筆御内書候、御面目至不可過之候、此等趣急度可令申之由、以乳母御局被仰出候、則御請到来可目 出度候、恐々謹言、

十一月十三日

長次(花押)

湯川殿御宿所

C 十 天文十六年丁未閏七月八日

岱宗建康 宮内少輔源政春

勝歌道、明応三甲寅年法住院義澄御代二被召出、南方副將軍之位二成、錦ノ直垂ヲ賜リ湯川重宝卜成、(7)

史料A・Bは、石田氏が論拠とされた足利義澄の御内書と鷹橋長次の書状である。史料Aによれば、足利義澄が湯河氏に味方につくように依頼していることは事実といえるが、はたして湯河氏はこれを受け入れたのであるうか。それを実証するためには、史料Bの解釈が重要である。石田氏は史料Bの文中に、「御請到来可目出度候」とあるゆえに、湯河氏が足利義澄方についたとされた。しかし、史料Bをみれば一目瞭然だが、この部分は「則」

の字から解釈すべきである。「則」が「すぐに」ではなく、「もし……ならば」の意味であることは、文法の上からも、史料A・Bの日付からも明らかである。なぜならば、郵便もFAXもない戦国期に、十一月十二日に京都で出された御内書が、わずか一日もたたずに京都から紀伊日高郡小松原の湯河政春のもとに至り、その返事が十一月十三日に、京都にもたらされたとは考えられないからである。したがって、史料BはAの副状であり、史料Aとともに湯河氏に対して味方についてくれるように要請したと解するのが自然であろう。

石田氏が鷹柳とされた、史料Bの鷹橋長次とは何者であろうか。橋と柳の字体は草書にするとよく似ており、この史料が影写本ということもあって、字体だけでの判断は難しい。また、史料Bの「上包」は後筆の可能性もあり、「鷹」は同じ音の「高」の字の誤りかもしれない。管見の範囲になるが、当時の室町幕臣や細川政元の家臣に鷹（高）柳氏が見えないことから、長次は鷹（高）橋氏としてよいだろう。

また、石田氏が傍証とされた史料Cだが、たしかに湯河政春は連歌を愛好したことで知られている。だが連歌を含め、湯河政春が京都で活動していた時期は、明応の政変以前であり、明応二年（一四九三）以降は記録類から見えなくなる（8）。そのような湯河政春が、明応三年（一四九四）に足利義澄に召し出されたというのは、系図特有の何らかの誤りに基づく捏造記事であると断定できよう。史料Cの記載が信用できないことは、湯河政春が「南方副將軍之位」に就いたという、まったく良質の史料で裏付けできない事が記されていることから、明らかである。以上の事から、石田氏の提示した史料からは、明応の政変後湯河政春が、細川政元・足利義澄方であつたとする事は論証できないと言えよう。

次に永正八年（一五一）八月の京都船岡山の合戦に、湯河氏が足利義澄方として参加した事が事実であるか否か、検討を加えてみたい。船岡山合戦に関する当時の記録・古文書類に湯河氏参戦の記事はみえない。湯河氏参戦の記事がみえるのは、「足利季世記」（『改定史籍集覧』十三）以下のやや質のおちる軍記物で、同じ軍記物でもより良質の「細川両家記」（『群書類従』二十）にはみえない。船岡山の合戦に関して、「足利季世記」



に参戦の記事がみえるのに、「細川両家記」に参戦の記事がみえないのは、湯河氏だけではない。三好之長も同様である（9）。要するに、湯河氏が船岡山の合戦に参加したとする、良質の史料はないのである。したがって、船岡山合戦に関する史料からは、湯河氏が足利義澄方として、この戦いに参戦した事実を認めることはできないと言えよう。

永正五年（一五〇八）六月、畠山尚順が結んでいた足利義尹（義植）が、大内義興とともに上洛した。このような事態に対して、湯河氏はどのように対応したのであるうか。明応二年（一四九三）以降の湯河氏の動向とも大いにかかわっていると考えられるので、今一度史料を提示して検討していこう。

D 「謹上畠山殿人々御中 左京大夫義興」

就湯河孫三郎御礼言上之儀、貴札之趣達 上聞候、委細被聞召分候、誠面目之至、定可為祝着候、弥忠節肝要之由、可申入之旨候、恐惶謹言、

八月六日

左京大夫義興（花押）

謹上畠山殿人々御中（10）

E 「 後小松院

公方義教 応永卅二年

湯河安房守とのへ

西国衆着岸已前、和泉国令出張、一段抽戦功者、尤可為神妙候也、

十二月三日

湯河安房守とのへ（11）

（足利義尹）  
（花押）

史料Dは小川信氏がその解説で述べられているように、永正五年（一五〇八）六月の足利義尹の上洛に際し、湯河孫三郎が味方したことについて「御礼言上」したことを大内義興に報じたものである。史料Eは湯河孫三郎が上洛に協力したことに對する、足利義尹の感状である。

史料D・Eは、湯河孫三郎が足利義澄方ではなく、足利義尹「畠山尚順方であつたことを示している。またこれ以前から、湯河孫三郎には湯河政春とともに、足利義尹や大内義興から上洛に協力するように申し入れがあつたことが、「渡部家所蔵文書」（二八・二九・三〇号）により判明する。湯河孫三郎と湯河光春の關係は不明だが、孫三郎が政春とともに行動していること、まだ官途を得ていないことから、政春の後継者か、湯河氏嫡流に近い者であるとみてよいだろう。あるいは、湯河孫三郎は光春なのかも知れない。

以上のことから、明応二年（一四九三）以降も、湯河氏は政長流畠山氏「畠山尚順方として行動していた事が明らかにになった。したがって、湯河氏が足利義澄方として活動したとする石田氏の見解は、成立しないと言える。

### 三 湯河退治について

「湯河退治」に關し、石田氏の提示された史料を、次に掲げてみよう。

F 就湯河退治、去年以來於所々忠節無比類候、殊近日敵依楯籠高田城、昼夜粉骨神妙候、弥申合野辺、可抽戦功事肝要候、謹言、

六月五日

尚慶（花押）

目良左京亮入道殿

G 為湯河少弼御退治、被寄御馬候、此刻被抽忠節者、可為御祝着之由、被成 御書候、於御望之儀者、可申達

候条、御粉骨肝要候、委細兩人可被申候、恐々謹言、

五月三日

小山弥八殿

順房（花押）

進之候（<sup>12</sup>）

史料Gの順房は、畠山尚順の紀伊守護代遊佐順房である。この史料Gを石田氏は、永正十四年（一五一七）六月以降と推定されたが、その根拠は示されていない。遊佐順房は一部二章で論証した如く、永正八年（一五一一）七月に、畠山義英の軍勢と戦って戦死しているので、史料Gは永正八年（一五一一）以前と推定でき、永正十四年（一五一七）六月以降には下らない。史料Fは「尚慶」の名前より、尚順が尚慶と改名したのが明応七年（一四九八）夏と言われるので（<sup>13</sup>）それ以降とみられ、尚順がト山と称する永正五年（一五〇八）八月以前と推定してよいだろう。これらのことから史料F・Gは、その時期が重なることから、一連のものと考えることができよう。以上の事から、畠山尚慶（尚順）と対立していたのが、「湯河少弼」であったことが分かる。

では、史料Gの「湯河少弼」とは、一体誰のことであろうか。史料Eの「湯河安房守」が湯河政春である事は、先学諸兄の一致するところであり、筆者も異論はないので、「湯河少弼」は政春ではない。石田氏は「湯河少弼」を湯河宮内少輔光春とされたが、史料Gの年代が石田氏の推定より一〇年以上繰り上がったことで、天文十三年（一五四四）十一月六日までその活動がみえる湯河光春が（<sup>14</sup>）、永正五年（一五〇八）以前に「少輔」の官途を得ていた可能性は低いと考えられる。よって、「湯河少弼」を光春とすることは難しいのではないだろうか。

また、史料Fで湯河少弼が籠もったと記された「高田城」であるが、この城は長禄・寛正の内訌以来、政長方と義就方がたびたび攻防戦を繰り広げた、畠山氏の紀南支配の拠点であった（<sup>15</sup>）。日高郡小松原ではなく高田城での攻防戦が中心なのであるから、畠山尚順の「湯河退治」は、畠山尚順の湯河氏の宗家に対する攻撃ではなく、長禄・寛正以来の両畠山氏の抗争の延長線上にあると考えるのが妥当であろう。

以上の事から明応から文亀年間にかけての畠山尚順の「湯河退治」は、河内での畠山基家・義英方の攻勢に呼応した、紀伊国内での基家・義英「旧義就方の攻勢に対する戦闘であったとみられ、奉公衆湯河氏の根拠地小松原を攻略したわけではなかったと考えられる。紀伊国内では、この時期はまだ応仁の乱以来の対立の図式に大きな変化はなかったと言いうことができるだろう。

さて、前述のごとく奉公衆家湯河氏では、政春と孫三郎が畠山尚順方として活動していたことが、明らかにされている。一方、湯河氏内部では、政春と甥の僧普蔵主との対立が存在していたことが知られており<sup>16</sup>、必ずしも政春のもとで一本化していたわけではなかった。そのような政春と対立した人物が、基家・義英方に与したとしても、何ら不思議はない。以上のことから、畠山尚順と対立した湯河少弼は、小松原の宗家の支配に反抗する庶家か、牟婁郡道湯川に本拠を構える奥の湯河氏の流れをくむ者かで、畠山基家・義英方に与した者と考えるべきであろう。

永正五年（一五〇八）に成立した細川高国政権のもとで、畠山尚順は幕府に復帰するが、永正十三年（一五一六）八月にはすでに紀伊に在国していた。紀伊に戻った尚順は、分国における反尚順勢力の一扫と支配強化をめざした。この動きに関係すると思われる、次の史料を検討してみよう。

H 就蛇食之敵没落、其口之儀成意懸、頸式、討捕、到来候、尤神妙候、弥彼牢人等成敗之儀、併可為忠節候、猶野辺可申候、謹言、

七月十四日

ト山（花押）

小山弥八殿

I 於平守城、連々忠節無比類之条、神妙候、弥無疎略可走廻事肝要候、委細神保五郎左衛門尉可申候、謹言、  
十一月八日

ト山（花押）

史料Hの蛇食城は現在の白浜町と上富田町の境に位置する城であり、史料Iの平守城は南部の平須賀城であるから<sup>(18)</sup>、これらの史料より、紀南で戦闘が行われていたことが分かる。『熊野速玉大社古文書古記録』一五四号、永正十二年（一五一五）三月二十一日付室町幕府奉行人奉書に、「就熊野山本宮・新宮確執、度々及合戦」とみえ、永正十二年（一五一五）三月以前から、熊野本宮と新宮が度々合戦に及んでいたことが分かる。さらに推測が許されるならば、尚順と対立していた畠山義英方の活動が活発化するのが、永正十五年（一五一八）九月以降である。畠山尚順は紀伊に戻って以降、大和の林堂山樹や熊野衆と結び、大和・紀伊の支配を強化したことが、明らかにされている<sup>(19)</sup>。この状況と史料H・Iの戦闘が関連していると考えられるのではないか。よって史料Hは、永正十六年（一五一九）か十七年（一五二〇）、史料Iは永正十五年（一五一八）か十六年（一五一九）に比定できよう。

#### 四 畠山尚順の紀伊追放について

本節では、永正十七年（一五二〇）に発生した、畠山尚順の紀伊追放について検討していくこととする。畠山尚順の追放について記した史料を次に掲げる（必要部分のみ抜粋）。

「尾州内衆与被及合戦、打負テ、人二三十人ニテ泉界迄没落候ト云々、仍広ノ大将之事、尾州御曹司河内二被座弟お内衆トノ相定云々、尾州近年当国ヲ林堂并熊野衆以下二被出之、及度々寺社領押領候、併大明神之御 罰云々、<sup>(20)</sup>

K一、今度紀州之儀、依中意雜説、不慮題目出来候、無念至極候、乍去、泉州於堺津無事に取退候、心安可被存候、紀州国民已下申子細候之間、遊佐河内守与令調談成其行、則時属本意、重而可申候、<sup>(21)</sup>

史料Jで畠山尚順は、自身の内衆との合戦に敗れて堺へ没落したとし、尚順自身は史料Kで、「紀州国民已下申子細候之間」ゆえ堺に退いたと記している。以上の事から尚順は、内衆のみならず紀伊国人とも対立するなど、かなり孤立した状態にあったとみられる。

史料Jには日付がなく、畠山尚順が紀伊から没落した月日は、正確には分かっていない。永正十七年（一五二〇）の時点で、畠山尚順の書状がまとまってみられるのは「上杉家文書」である。「上杉家文書」の編年目録で調べてみると、永正十七年（一五二〇）六月十九日に長尾為景に書状を発給した後、八月十一日まで、書状を発給していないことがわかる。「祐維記抄」六月二十三日条には、尚順の有力内衆林堂山樹が、広で「生涯」したと記している。したがって尚順の追放劇は、六月十九日以降、八月十一日までの間に行われたと考えられる。尚順追放に係したと考えられる史料が「小山文書」に見えるので、次に掲げて検討してみよう。

L野辺掃部允依企不思儀覚悟、国へ劇言語道断次第、湯河・玉置許容之处、光春所々押領、然時者別儀各不敏 旦  
非分国候、掃部充並令同心輩赦免之上者、申合別而忠節可為神妙候、委細遊佐左衛門大夫・丹下備後守可 申  
候也、謹言、

八月廿日

小山八郎左衛門尉殿

植長（花押）

M野辺掃部允慶景依不思儀之覚悟、国へ劇出来所々合戦、湯河・玉置動被思召無比類御許容处、国人知行其外  
光春押領種々雖被成御届不被致承引、剩広庄押而可被入候由、言語道断然者御敵造意候歟、所詮非可被捨国 候

条、慶景並令同心仁躰被召置御恩地被仰付上者、如先々各可被申合、若背御下知輩在之者、永代被放御被官  
至知行候者忠次第可被仰付、然時者忠節可為肝要候、於時宜者、神保式部丞・保田五郎右衛門尉被仰含由可  
申上候、恐々謹言、

八月廿日

盛賢（花押）

長清（花押）

小山八郎左衛門尉殿<sup>(22)</sup>

史料L・Mは石田氏の説によれば、天文三年（一五三四）の可能性も存在する。史料Mの文中に「剰広庄押而可被入候」とあり、湯河光春が紀伊守護所のある広を押領したことが判明する。大永二年（一五二二）三月に、湯河光春が「東広庄善覚田十町」を能仁寺衆徒中に寄進したことが、「勝楽寺文書」（『御坊市史』第三巻史料編）に見える。このことより、大永二年（一五二二）の時点で、広がすでに湯河氏の勢力下に入っていたことがわかる。

史料L・Mの野辺掃部允慶景は、二部三章等で述べた如く、紀伊奥郡小守護代で、政長流畠山氏の有力内衆である。その野辺慶景が「不思議之覚悟」「言語道断」と記されているのは、畠山尚順に敵対したためであろう。これは史料Jの「尾州内衆与被及合戦」という記事と一致する。また、湯河光春が各地の所領を「押領」して合戦に及んだことは、史料Kの「紀州国民已下申子細候」という事と関連するとみられる。また、『熊野年代記』（熊野三山協議会）では、野辺氏の平須賀城が大永二年（一五二二）に落城したとする<sup>(23)</sup>。野辺氏の活動が大永年間になると見えなくなることから、『熊野年代記』の記事は、事実の可能性が高い。以上の事より史料L・Mの年代は、大永二年（一五二二）以前と推定できよう。

史料Lの「湯河・玉置許容之处」、野辺「掃部充並令同心輩赦免之上者」という部分は、畠山植長と湯河・玉

置・野辺氏の間で、妥協が成立したことを窺わせる。これは史料Jの、「広ノ大将之事、尾州御曹司河内二被座弟お内衆トノ相定」という記事にみえる、畠山植長と紀伊の内衆の妥協が成立したことに関係していると考えられるだろう。永正十八年（一五二一）三月十七日、紀伊守護畠山植長は、小山三郎五郎に牟婁郡内誉田分の地を宛行っているが、この際、野辺掃部允慶景に対して守護奉行人から書状が発給されたのは<sup>24</sup>、野辺慶景が赦免されていたためであろう。これらのことより、史料L・Mの年代は、永正十七年（一五二〇）に比定できよう。

畠山尚順が紀伊を追放された理由を考える上で、当時の政治状況を見てみよう。細川高国政権に敵対する細川澄元らの反攻は、永正十六年（一五一九）十一月、細川澄元が三好之長とともに摂津兵庫に上陸したことで本格化した。翌十七年（一五二〇）二月、摂津の戦いに敗れた細川高国は近江に走るが、將軍足利義植は高国に同行せず、京都に残った。同年五月一日、將軍足利義植は細川澄元に対し、細川氏家督を承認したが、程なくして細川高国が京都を奪回した。同十一日、三好之長は切腹に追い込まれ、細川澄元は再び没落した。

この過程で畠山植長は、細川高国方の武将として河内で細川澄元方の畠山義英と戦っていた。畠山尚順はその際、足利義植に同調したのではないか。明応の政変以降、常に足利義植方として戦ってきた畠山尚順が、自分を重用しない細川高国政権に不満を抱いても当然であり、義植と行動を共にしても当然と言えよう。これは尚順が、細川高国政権に与する畠山植長の支配する河内に戻れなかったことから推定できる。

畠山尚順が追放されたのは、細川澄元方の反攻が失敗し、畿内がひとまず細川高国の下で安定した時期である。足利義植に与する畠山尚順の姿勢と、新参の林堂山樹らを用いた分国支配強化に不安を感じた内衆の野辺慶景らが、尚順の強硬路線に反発していた奉公衆家の湯河・玉置氏と結んで、尚順を紀伊から追放したのであろう。

林堂山樹の切腹と時を同じくして、大和では畠山植長支持の国人一揆が成立した<sup>25</sup>。紀伊でも同様に、畠山尚順に背いた内衆野辺慶景の赦免、奉公衆家の湯河氏・玉置氏の「許容」となった。畠山植長としては、細川高国政権が復活したことで、一度細川高国政権の枠組みから離れた畠山尚順を、分国内に置いておく事は出来な



った。その意味で尚順を追放した野辺慶景らは、赦免されても当然であった。史料L・Mに畠山尚順の名が見えないのは、このような事情があったからであろう。

## 五 紀南国人一揆説について

前節で述べたように、永正十七年（一五二〇）八月、畠山尚順は、紀伊から没落した。石田氏の説によれば、これを契機に紀南に守護支配権排除をめざす湯河氏を中心とした国人一揆が成立し、尚順の翌年五月の再入国の試みも紀南国人一揆の頑強な抵抗の前に失敗したとする。前出の矢田氏の研究によって、湯河氏は室町幕府奉公衆として守護支配から独立した支配領域を有していたことが、実証されており、永正十七年（一五二〇）の時点で、湯河氏が守護支配権排除をめざした石田氏の説は否定されている。しかし、石田氏が紀南国人一揆説を撤回したわけではないので<sup>26</sup>、本節では紀南国人一揆説の是非について、検討していく。

紀南国人一揆説の最大の弱点は、一揆契状をはじめとする国人一揆に関する史料が見いだせないことである。史料H・Iの如く、小山氏・目良氏等の紀南国人は、湯河氏ではなく、畠山植長と結んでいる。そして何より、前節で指摘した如く小山三郎五郎は、守護畠山植長から知行の安堵を受けている。守護権力の排除を指向した国人一揆の構成員とみられる国人が、守護から知行の安堵を受けることは考えられない。一体湯河氏はどうな国人達と一揆を結んでいたのだろうか。石田氏の論文からこの答えは見いだせない。

また、国人一揆に対しては「成員間の平等を基礎にした契約的関係で結ばれ、多数決制が採用されていたことなどに共通の性格を認めることができる」<sup>27</sup>という理解が、広く支持されていることは言うまでもないだろう。湯河氏の勢力が突出した状態で、このようなことが可能であったのだろうか。湯河氏を中心とした国人一揆が成立したとするのは、あまりにも不自然な状況であったと言えよう。

次に、淡路に没落した畠山尚順の紀伊再入国の企てについて検討してみよう。畠山尚順が紀伊再入国を企てた「翌年五月」とは言うまでもなく、八月二十三日に大永と改元された、永正十八年（一五二一）五月のことである。この年の三月七日、將軍足利義植は細川高国との不和が原因で和泉堺に出奔し、ついで淡路に赴いて再挙を図っている。この義植の行動に畠山尚順が応じたことが、『二水記』（大日本古記録）永正十八年（一五二一）三月九日条に見える。明応二年の政変以降、畠山尚順は常に足利義植と行動を共にしていたことから、足利義植の呼びかけに応じたのは、当然と言えよう。このように、永正十八年（一五二一）五月の畠山尚順の紀伊再入国の企ては、足利義植の動きと関連づけて考える必要がある。この点について石田氏の論稿では、畠山尚順の再入国の企ての次に、足利義植の再挙があるかのように述べているなど、基本的な論旨の立て方に問題があると言わざるを得ない。

永正十八年（一五二一）五月の時点で畠山尚順と植長の父子は、尚順が足利義植方、植長が足利義晴・細川高国方に分かれて敵対していた。また、尚順は義就流の畠山義英と和睦して、足利義植の再挙に協力していた。したがって植長とすれば、たとえ父といえども、敵対する足利義植方の勢力を分国内に入れるわけにはいかず、これを排除しようとするのは、細川高国政権の守護として当然の行為であると言えよう。植長の行動に、国人一揆の支持は何ら関係ない。つまり、畠山尚順の紀伊再入国の企てと国人一揆説とは、何ら結びつかないのである。このように、大永元年（一五二一）十月の畠山尚順と植長の戦闘は、足利義植と細川高国の対立が根本原因であった。以上述べてきたことから、「足利季世記」にみえる「土民一揆」をもとに紀南国人一揆説を展開することには無理があり、国人一揆に関する史料が無い以上、紀南国人一揆説は成立しないと結論できる。

おわりに

明応の政変後も湯河氏は、当主の政春が政治的には従来の畠山政長方に与する路線を踏襲し、尚順方に与していた。これは、湯河氏が足利義材を將軍家として認識していたからであって、湯河氏が畠山氏の被官となつたわけではなかつた。湯河氏にも惣領家の地位を巡る対立があつたらしく、政春と対立する勢力が基家・義英方と結び、畠山尚順・湯河政春と対立したのである。このため、反湯河政春方は反畠山尚順方となり、いわゆる「湯河退治」となつたとみられる。

永正十三年（一五一六）にはすでに紀伊に在国していた畠山尚順は、従来の内衆や与党の国人らを軽視し、大和の林堂山樹や熊野衆を重用して、分国支配の強化をめざした。具体的には畠山義英方の勢力一掃をめざしたばかりか、尚順方の有力与党である湯河氏等の勢力削減すら狙っていたらしい。これは湯河氏が、奉公衆家として守護権力を排除した独自の支配領域を有していたからであろう。

畠山尚順の強硬策は、湯河氏等従来の尚順与党の反発を招き、軽視された畠山氏在国内衆も尚順を見限つた。ここに元尚順与党の国人と尚順内衆の利害が一致し、それが畠山尚順の紀伊追放となつたのであろう。ただこれによつて、石田氏の言われるような国人一揆が、紀南の地に成立したわけではなかつた。

湯河氏は畠山尚順の紀伊追放に乗じて守護所の広を押領し、勢力をさらに拡大した。だが、これで紀伊守護所が実態を失つたと考えるのは早計である。史料「に」仍広ノ大将之事、尾州御曹司河内二被座弟お内衆トノ相定云々」と記されているように、畠山植長の弟が広に「大将」として入っている。小谷利明氏の提唱された永正十七年体制は、紀伊においては守護権力と奉公衆家等国人との妥協として成立したのであつた。

註

（１） 同氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』 一向一揆と他勢力の連合について」『歴史学研究』四四

八、一九七七年、後に峰岸純夫氏編『本願寺一向一揆の研究』 戦国大名論集13 に所収、吉川弘文館、一

九八四年）。なお、本章で特に注記をしない石田氏の論稿はこれを指す。

(2) 同氏「一向一揆」(『岩波講座日本歴史』八・中世四、岩波書店、一九七六年)、及び同氏「中世の変  
革期と一揆」(『一揆と国家』五、東京大学出版会、一九八一年)。

(3) 小山靖憲氏「雑賀衆と根来衆 紀州『惣国一揆』説の再検討」(同氏著『中世寺社と荘園制』二部  
八章、塙書房、一九九八年、初出一九八三年)、拙稿「紀州惣国をめぐって」(『和歌山地方史研究』三  
一九九八年)等。

(4) 同氏「戦国期の奉公衆家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章五節、塙書房、一九九八  
年、初出一九八六年)。

(5) 同氏「室町幕府・守護・国人体制と一揆」(『歴史学研究』五八六、一九八八年)。

(6) 拙稿「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」(『和歌山県史研究』一七、一九九〇年)。

(7) 史料A「渡部家所蔵文書」二〇号、史料B「渡部家所蔵文書」二一号、史料C「湯川氏代々系図」(『御  
坊市史』三巻史料編)。本章では湯河氏惣領家の文書を、「湯河家文書」(『和歌山県史』中世史料二)  
ではなく、「渡部家所蔵文書」(『御坊市史』第三巻史料編)を使用した。これは、『御坊市史』が東  
大学史料編纂所影写本を翻刻され、本章に関する文書を翻刻されているからである。なお、両文書の  
係については、湯川敏治氏「湯河文書について 広島県日比新氏蔵」(『和歌山県史研究』五、一  
七七年)を参照されたい。

(8) 鶴崎裕雄氏「『長享二年四月五日北野会所花の本開百韻』と湯川政春」(同氏著『戦国の権力と寄合  
の文芸』四章四節、和泉書院、一九八八年、初出一九七七年)。

(9) 今谷明氏は、三好之長の船岡山合戦参加を疑問視している(同氏著『戦国三好一族』、新人物往来社、一九八五年)。

(10) 「畠山家文書」二号(小川信氏「國學院大學図書館所蔵『畠山家文書』」翻刻と考察」、『國學院大學図書館紀要』一、一九八九年)。

(11) 「渡部家所蔵文書」三二号。

(12) 史料F「目良文書」、史料G「小山文書」。ともに東京大学史料編纂所影写本。

(13) 久保尚文氏「守護畠山尚慶の一字書出と花押」(同氏著『越中中世史の研究』一章四節、桂書房、一九八三年)。

(14) 「法蔵寺文書」(国文学研究資料館史料館蔵「在田郡古文書」)。

(15) 拙稿「畠山氏の内訌と紀伊」(本書二部二章)。

(16) 『熊野速玉大社古文書古記録』一七〇号、(年不詳)十一月二十一日付熊野山新宮衆徒神官等請文案。

(17) 史料H「小山文書」、史料I「目良文書」(いずれも『大日本史料』九編之十六、大永二年七月十七

日条所収）。

(18) 『和歌山県地名大辞典』（『角川日本地名大辞典』三〇、角川書店、一九八五年）「蛇喰城」の項。

「平 守城」を「平須賀城」とするのは、『平須賀城発掘調査報告書』（南部川村、一九九六年）の川崎雅史氏の見解による。

(19) 小谷利明氏「宇智郡衆と畠山政長・尚順」（『奈良歴史研究』五九、二〇〇三年）、同氏「畠山植長の動向」（矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年）。

(20) 「祐維記抄」（『続南行雑録』『続々群書類従』三）。本章で「祐維記抄」は、『続々群書類従』三の判読不明部分を、『大日本史料』九編之十一で補った。

(21) 「上杉家文書」一七号、（永正十七年）八月十一日付畠山卜山（尚順）書状。本章では『新潟県史』（資料編三中世一）を使用したため、同書の文書番号を記した。

(22) 史料L・Mは、東京大学史料編纂所影写本では、「神宮寺村小山藤五郎蔵」の「小山文書」である。

「神宮寺村小山藤五郎蔵」の「小山文書」は、『紀伊続風土記』古文書之部には、翻刻されていない。なお、旧稿時の誤りを『日置川町史』一卷で正した。 な

(23) 白石博則氏執筆『定本和歌山県の城』「平須賀城」の項（郷土出版社、一九九五年）。

- (24) 「小山文書」(『大日本史料』九編之十二、大永元年三月十七日条所収)。
- (25) 小谷利明氏註(19)前掲論文。
- (26) 石田晴男氏註(5)前掲論文。
- (27) 佐藤和彦氏執筆『国史大辞典』「国人」の項。

### 第三章 戦国期紀州湯河氏の立場

#### はじめに

紀伊の有力国人で室町幕府奉公衆でもある湯河氏と、紀伊守護畠山氏の関係は、戦国期ばかりでなく紀州中世史の上で、きわめて重要な位置を占めている。しかし、湯河氏と畠山氏の間を研究対象としたのは、石田晴男氏がはじめてであると言つても<sup>(1)</sup>過言ではなく、また、湯河氏に関しても、矢田俊文氏の研究<sup>(2)</sup>以外に、これと言つた研究の蓄積があるわけでもない。

筆者は以前、明応二年の政変以降、およそ大永初年までの湯河氏と畠山氏の間を検討したが<sup>(3)</sup>、当然、それ以降も両者のかかわりは続いていく。天文十一年(一五四二)三月に湯河光春が畠山植長とともに河内に兵を進め、植長の河内回復に協力したこと、永禄二年(一五五九)から同五年(一五六二)にかけて、湯河直光が畠山高政を助けて河内に出兵したことは、『和歌山県史』等自治体史にも書かれるので、一般にも知られている。さらに織田信長の時期になつても湯河直春が、元亀元年(一五七〇)八月から九月にかけての、野田・福島陣に織田信長・足利義昭方として参戦している。また、天文七年(一五三八)にも湯河光春は、畠山植長とともに上洛を企てていた。

湯河氏が畠山氏とともに、河内に兵を進めたのは如何なる理由によるものであろうか。筆者は、石田氏が提唱されたように、湯河氏が守護畠山氏を推戴したからとは考えていない。そのことを踏まえた上で、本章では天文七年(一五三八)と、永禄二年(一五五九)から同五年(一五六二)にかけての二つの時期を中心に、湯河氏の



動向を述べていくこととしたい。

## 一 領主としての立場

天文七年（一五三八）に湯河光春が、畠山植長とともに河内に兵を進めようとしていたことは、從來知られていない。この件が見えるのは、『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）天文七年（一五三八）八月十四日条である（必要部分のみ抜粋）。

A 十四日 從湯河宮内少輔以書状、就尼子出張尾州被出候間、彼人も可上洛候、然者得指南候八んよし申候、

この史料の「湯河宮内少輔」に関して、「証如上人書札案」中の「証如上人方々へ被遣宛名留」（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻）中に、次のように見える。

B 湯河宮内少輔

本願寺 まいる、御宿所 光春 有裏付 恐々謹言

湯川宮内少輔殿 御返報 恐々謹言

○奉公衆ノ位也

史料Bの記載より、史料Aの「湯河宮内少輔」は、湯河光春に比定できる。また、『天文日記』天文七年（一五三八）八月二十九日条に「湯川宮内少輔へ返状出之候」とあることにより、証如が湯河光春に返事を出していることが分かる。その書状の案文が、「証如上人書札案」に見える。

C 芳札之旨為悦候、仍就尾州御進発之儀、可有御出張之由候、珍重々々、定可令達 意之条勿論候、連々對門下中、無御等閑之段祝着難申述候、弥預御入魂候者本望候、猶期後音候、恐々謹言、

廿九日出之

八月廿八日

湯河宮内少輔殿 回報

史料Cには、「尾州」の「進発」とともに、湯河光春が「出張」と記されている。湯河光春は紀伊の国人なので、そこから推察すると、「尾州」は畠山尾張守植長となる。はたして、『天文日記』天文七年（一五三八）八月二十八日条に、「畠山尾州へ以好便宮原浄祐下候間事付候一札下候」とあり、史料Cの「尾州」は、確かに畠山尾張守植長である。『天文日記』によれば、畠山植長とその有力内衆丹下盛賢にも証如が書状を出しており、その案文が「証如上人書札案」に残っている。

D 先日者預御報候、殊太刀一腰送給候、祝着難申謝候、急度可有御上洛候由珍重候、定早々可為御本意候条勿論候、次下間備中守事者前代未聞候、抑藉人之儀候間、自然雖示預候、不可隨賢意候、以御分別無御許容候 者喜悦候、委細丹下備後入道可被申候、恐々謹言、

廿八日出之

八月廿五日

光

尾張守殿 進覧之候

E 尾張守殿急度可有御上洛候由、先以珍重候、次太刀一腰送給候、祝着之至候、兼又下間備中守事、令申候处、前々承候趣、只今之儀相違候、無其曲候、向後於無御許容者、可為喜欽候由、以書状令啓候、猶得其意被申 述

候者本望候、委細美濃法橋可申候、恐々謹言、

八月廿五日

光

丹下備後入道殿

史料Dの宛先は畠山植長、史料Eは丹下盛賢である。史料D・Eの「下間備中守」の件は、今回は検討を割愛するが、これらの史料から、畠山植長が上洛を計画していたことが分かる。天文七年（一五三八）八月の時点で、紀伊に在国していた植長が上洛を目指した理由として考えられるのは、当時の政長流畠山氏の家督問題であろう。河内では天文七年（一五三八）七月四日、畠山弥九郎が高屋城に「屋形」として入り、同年八月二十六日には家督の相続を幕府から承認されている<sup>(4)</sup>。まったくの推測になるが、畠山弥九郎が家督を継承したと言うことは、河内のみならず、名目上紀伊・越中の守護職も弥九郎が得たことになる。畠山植長とすれば、自己の立場を脅かすことになりかねない弥九郎の家督相続には反対で、実力行使をしても、これを阻止しようとしたのではないだろうか。

以上のことから、史料Aの「尾州」も、畠山植長としてよい。また、史料Aより、畠山植長の上洛計画に山陰の尼子氏が関係していたことが分かる。この時期、尼子氏が上洛を企てていたことは、先学の研究によりすでに指摘されているところであるが<sup>(5)</sup>、畠山植長との関係を述べたものはない。現時点で筆者には、畠山氏と尼子氏がどのような上洛作戦をたてていたかを論じる準備はない。だが、天文七年（一五三八）八月に畠山植長が尼子氏と結んで上洛を企てていたことが明らかになったことにより、これに関係していると見られる文書を次に掲げる。

F 「湯しき殿 長」

なを、々、かやうの事も<sup>(等開)</sup>うかんなきにつきて申候、われ、々、もんこんにて候、ふん<sup>(分別)</sup>へつあるへくとを

かしく候、返々、かやうの事も、さた候てハ、きよくあるましく候、いくゑも、三つ、かんよふた  
三入候、の

一日八色々しゆこん、しゆちやくに候、猶々人してハいかゝ候まゝ、しよしやうにて申候、此一かきの中に  
て、しあんをくわへられ候て、けわう院所まで、三つ、にて申しこされ候へく候、此一かきひやうふのせ  
たんかうなされ候へく候、もんこんも万いかゝ候まゝ、かくのことき申候、しせんこの一かきの中に、  
五郎事に、かまひ候八んと、しあんもゆくへく候へとも、のふもりあひかゝへ候八んふんを、ゆひあわ  
まゝ、五郎に八かまい候ましく候、心よせしたいに、申しこされ候へく候、此一かきのほかに、としより  
ちきやうこれあるあいた、一かきにもせ候八んするを、丹下所まで、ひやうふのせうないしやうに、と  
よりともちきやうにハ、のそミこれなきよし申し候、さやうのきにつき候て、一かきにもせす候、  
国の物中にて、しかるへく候きハ、これなくてハなきかとし候、ゆさ中に、此三人ならてわこれな  
候まゝ、かくのこときしたゝめ候、なを、そこもとのきゆたんなきやうに、こゝろかけせんに候、し  
のきをもミあわせ、又ハすこしのさうせつにかゝかひてハ、ほんゐの事も、ゑいたいなるましきと、たね  
かくこも此ときにて候、中国よりもまへ、より一かきにて申し候、世上のき、まついつれへも申あ  
せへきやうたいとも、此はうへしよしやうにて、ちう、申候、そのうへにて、てまへふりやくにて候  
ゝ、此はうしせんゑんににつきては、ちうゝ申あわせ候事候とも、まつミあわすへきやうに申候へハ、  
いたい此はうのてたても、あいはつるまでにて候まゝ、とにかくいまにはしめさるきに候へとも、そのは  
兩人ならてハ、たのミ入候ハす候、猶々くまのゝきも、きのふそのはうへ、やうたいあいとのへへき事、  
こし候につきて、たまきひやうふの大夫事も、けわう院所まで申しこされ候、心え候、そのほか万きつとあ  
とゝのへられ候へく候、いづれもあき所ある事にて候まゝ、のそみの事ハ申しこされ候へく候、もんこんあ  
さきにて候はんまゝ、万かた、三つ、候へく候、  
と

八月八日

たね長（花押）

ゆのかわしきふ大殿（湯河式部）

G  
ちきやうあき所の事（知行）（空）

— 上下国しゆ中

— 丹下やまと なかすちにて六百

七百ほととり候、

— さかう（酒匂） 下かわちわかいと申

所にて千とり候、

— ほんま（本間） これも下かわちにて八百ばかり

たかやすそのほかにて候、

— ゆさひくわん（遊佐被官） ものあき所の事

— なかせうち かわちくになかにてとり候、まつわうをなしく、なかすちひかしの山そへ、あをたに千

はかりとり候、まつわうの中にて、きやうけりやうにてくよう、あかり候、又おんちに

候、

— かいほり（萱振） これも下かわちにて、千とり候、

— ゆきまつ（行松） 七百八百あいた、

史料F・Gはいずれも「湯河家文書・東京」（『和歌山県史』中世史料二、F 一二二号、G 一二三号）であり、  
芳養の湯河式部大輔家に関する文書である。これらの史料は、従来は天文十一年（一五四二）以降の畠山植長の  
書状であると推定されていた（6）。しかし、史料Fの傍線部分と、史料Aの「就尼子出張尾州被出候」とが関連

していると考えられる。したがって、史料Fの傍線部分「中国より」前々から「申し」てきたのは尼子氏であり、史料F・Gの年代は、天文七年（一五三八）と推定できよう。

ただし、天文七年（一五三八）に、畠山植長が上洛のために軍事行動を起こした形跡を、管見の限りでは確認できない。尼子氏や旧細川高国党との連携が十分でなかったのかも知れないが、詳細は現時点では分からない。

史料Gは、具体的に河内で畠山氏が湯河氏に知行を宛行える場所を提示している史料として知られているが、畠山氏と湯河氏の関係はどのようなものであるうか。次節でこの点を検討してみることとしよう。

## 二 奉公衆家としての立場

まず、永禄元年（一五五八）から同五年（一五六二）にかけての、湯河氏と畠山氏の動向を見ておこう。永禄元年（一五五八）十一月、畠山高政は安見宗房らと不和になって紀伊に没落した。永禄二年（一五五九）八月、湯河直光は三好長慶とともに、畠山高政の河内復帰を援助した。この後、畠山高政が安見らと和睦したことから高政は、永禄三年（一五六〇）十月、三好氏に河内を追われた。永禄四年（一五六一）七月、畠山高政は河内奪回のための兵を挙げ、湯河直光もこれに加わった。翌五年（一五六二）三月、畠山軍は和泉久米田の戦いで河内高屋城主であった三好実休を戦死させたが、同年五月の河内教興寺の戦いで湯河直光らが戦死するなど三好軍に敗北し、河内を三好氏に明け渡すこととなった。

俗説では、湯河直光が永禄二年（一五五九）八月に畠山高政を河内高屋城に復帰させた功績で河内守護代に就任したとするが、直光が河内守護代に就任した事実はない<sup>7)</sup>。では、湯河直光はどのような立場で畠山高政とともに河内に出兵したのであるうか。関係すると思われる史料を、一つ提示してみよう。

H 尚々  松田之儀、相伝先祖本知之儀候之处、三好家近年押領仕候条、是又無御相違様御取含可為本望候、

今度対高屋出陳仕間敷由、被成下 御内書候ハバ、致御請候、仍去年河州表出勢砌、畠山中務少輔家督之儀、我等従高政被申付候、尤可得御意处、 則下国令延引候条、只今申上候、此間筋目無相違様被為御意得候 者、弥忝可存候、雖 者得本知之儀、三好家押領仕候間、長慶被仰付候者可為本望候、尚使僧申含候条、不 能態筆候、恐々謹言、

九月十三日

直光（花押）

大館左衛門佐殿

御宿所

この湯河直光の書状は、從來知られていなかった史料である（8）。史料Hの年代であるが、前述の如く湯河直光は永禄五年（一五六二）五月二十日の教興寺合戦で戦死しているため、史料Hはそれ以前のものである。湯河直光で文中の「去年河州表出勢砌」に該当する出来事は、永禄二年（一五五九）八月の河内出陣以外にはない。よって、史料Hの年代は、永禄三年（一五六〇）と推定できる。

史料Hが永禄三年（一五六〇）の書状であることから、文中の「高屋」は畠山高政とみられる。この場合「対」は「応じて」の意味なので、湯河直光が畠山高政の出陣要請を断ったことが分かる。その際、湯河直光は「御内書」を「御請」致して出陣を取りやめたとしている。つまり、將軍足利義輝の意向によって湯河直光が、守護畠山高政の要請に応じなかったのである。

永禄三年（一五六〇）九月、河内の政治情勢は重大な局面を迎えていた。畠山氏と三好氏の対立は同年六月以降、河内での戦闘状態に入り、戦局は三好方が優勢であった。永禄二年（一五五九）に畠山高政とともに河内に

入った湯河直光が、永禄三年（一五六〇）に畠山高政を助けなかったのは、俗説では河内守護代を罷免されたか  
らと見られていた。事実はどうでなく、將軍の意向が働いていたのである。

さて、史料Hには、今一つ興味深い事実が記されている。湯河直光が畠山高政から「畠山中務少輔家督之儀」  
を申し付けられたと言うのである。畠山中務少輔家は、播磨守家などとともに、畠山氏の庶家の一つである。畠  
山中務少輔家の家督は、畠山植長の弟基信が没した後、空席となっていたのである。史料Hより、畠山氏の場  
合、庶家の家督継承権を、永禄年間に至っても宗家が掌握していたことが判明した。

また、史料Hより、畠山高政が湯河直光に与えようとしたのが、畠山中務少輔家の名跡であり、河内守護代職  
でなかったことも明らかになった。このことをどのように評価するかは難しいが、筆者としては、奉公衆家とし  
て畠山氏の統制の外にあった湯河氏を、家格では湯河氏より上になるが宗家より下になる畠山中務少輔家の名跡  
を与えることで、畠山氏が支配体制の中に湯河氏を位置付けようとしたからと考えたい。戦国期に至っても湯河  
氏が奉公衆家としての立場を自負していたことは、史料Bに証如が「奉公衆ノ位也」と注釈していること、史料  
Hで足利義輝の御内書が湯河氏の動向を左右していることから明らかであろう。

史料Hより、畠山高政が湯河直光に「畠山中務少輔家督」を与えようとしていたことが分かった。このことか  
ら、次の史料について考えてみよう。

I 高政催江州諸牢人出張之由、其聞候、去年如被仰出、対三好修理大夫父子并豊前入道、別而令馳走、抽忠節  
者可為神妙候、猶晴光可申候也、

七月廿三日

畠山宮内大輔どのへ（<sup>9</sup>）

この史料（御内書案）の「畠山宮内大輔」が誰にあたるのか、従来は分かっていなかった。筆者はこの人物を



湯河直光に比定したい。まず、史料Hより湯河直光が畠山姓を与えられていたことが明らかになった。したがって、直光が畠山姓を名乗ったか否かは別として、案文の宛先として「畠山」と記したとしても不思議ではない。次に官途の問題であるが、湯河直光が永禄五年（一五六三）五月の教興寺合戦に至っても中務少輔ではなく、宮内大輔を称していたことは、この合戦の顛末を記した「大館記書案」（『ビブリア』八三、一九八五年）中に、「湯河宮内大輔」と記されていることから確認できる。以上の事から史料Iの「畠山宮内大輔」を、湯河直光に比定してもよいだろう。史料Iの「畠山宮内大輔」を湯河直光に比定したことで、史料I文中の「去年如被仰出」は史料Hに記された「御内書」とみることができ、つながりもよい。

史料Iの御内書にもかかわらず、湯河直光は畠山高政とともに河内に出陣している。その理由のひとつとして、史料Hの尚々書きに湯河直光が記しているように、湯河氏の「相伝先祖本知」の所領を、三好氏が押領していたことが関係していたからとみられる。永禄四年（一五六二）に至っても、この事態が解決していなかったのである。

今一つは、永禄四年（一五六二）から翌五年（一五六三）にかけての畠山高政の河内進攻の経緯である。周知のごとくこの作戦は、畠山氏が単独で実行したのではなく、近江の六角義賢と呼応したものである。これに際しては、裏で將軍足利義輝が六角と畠山に通じていたと言われ<sup>10</sup>、足利義輝の叔父大覚寺義俊が、反三好戦線の形成に大きな役割を果たしていた<sup>11</sup>。

畠山高政は、永禄四年（一五六二）七月中には紀伊から和泉に進攻しているが、程なく戦線は膠着状態となった。戦況が大きく変化するのは、翌五年（一五六三）三月である。同五日に和泉久米田で畠山軍は、三好実休を討ち取るなどの戦果をあげ、一気に三好長慶の飯盛城に迫った。この戦いで湯河直光は大きな役割を果たしているが、湯河氏の軍勢が永禄四年（一五六二）七月から参戦したとする史料は、管見の限りでは見つけられなかった。推測になるが、湯河直光の軍勢は、当初から畠山高政の軍には加わらず、永禄五年（一五六三）に至り参戦

したのではないだろうか。それが、膠着状態から一転して、久米田合戦による畠山軍の勝利につながったのである。

以上のことより推測を重ねれば、永禄四年（一五六二）七月の御内書とは裏腹に、將軍側から畠山高政に与するようにとの働きかけが湯河直光にあった可能性が高い。それが行われたのは、同年年末から永禄五年（一五六三）はじめにかけての時期と考えたい。

## おわりに

湯河氏は永禄年間に河内守護代に就任したとされるなど、従来、守護権力に取り込まれたとみる考え方が一般的であった。しかし、本章で述べてきたように、湯河氏は永禄年間に至っても、奉公衆家として、守護権力とは一定の距離を置いていたのである。畠山氏は高政が恩賞として畠山姓を与えようとするなど、湯河氏を取り込もうと画策したが、実際に湯河氏が畠山姓を名乗ることはなかったようで、この企みは失敗したらしい。

天文七年（一五三八）の畠山植長の上洛計画に湯河光春が与した際に、將軍の意向を示す史料は、現在のところ知られていない。したがって、これは湯河氏が領主として、畠山氏に与することが、勢力拡大につながると判断したからであろう。史料Gでは、畠山植長から具体的に知行地が示されている。これらの地が実際湯河氏に与えられたか否かについては分かっていない。しかし、湯河光春が畠山植長に与する上で、重要な判断材料になったことは違いがないと言えよう。また、永禄五年（一五六三）に湯河直光が畠山高政の陣営に加わった背景の一つに、三好氏による湯河氏の所領の押領があった。湯河氏が畠山氏に与した理由の一つには、河内の所領問題が存在していたのである。

一方では、湯河氏は守護権力から自立した、奉公衆家でもあった。永禄三年（一五六〇）から永禄五年（一五

六三）にかけては、將軍からの働きかけが、畠山高政の陣営に加わるか否かの上で、大きな判断材料となっている。本章では検討の対象としなかったが、元龜元年（一五七〇）の野田・福島陣では、將軍足利義昭も出陣しており（『言継卿記』同年九月二日条等）、それが湯河氏の出陣につながったと考えられるなど、湯河氏の行動基準に將軍家からの働きかけが重要な意味を持っていた。また、天文十一年（一五四二）三月に、畠山植長が河内に出陣したのは、石田氏によると將軍足利義晴の意向が働いていたからとされる。この指摘は重要であるが、筆者は將軍からの働きかけは、畠山植長ばかりでなく、湯河光春にもあったと考えたい。

戦国時代の湯河氏は、独自の支配領域を有する国人領主であった。それとともに、旧来からの奉公衆家としての意識も存在していた。したがって、湯河氏が畠山氏の支配体制に組み込まれることは、意識の上からでもできなかったのである。

#### 註

（１） 同氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』 一向一揆と他勢力の連合について」（『歴史学研究』四四八、一九七七年、後に峰岸純夫氏編『本願寺・一向一揆の研究』 戦国大名論集<sup>13</sup> に所収、吉川弘文館、

一九八四年）。なお、本章で石田氏の研究はこれを指し、特に注記しないことをお断りしておく。

（２） 同氏「戦国期の奉公衆家」（同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章五節、塙書房、一九九八年、初出一九八六年）。

（３） 拙稿「戦国期紀州湯河氏の動向」（本書三部二章）。

（４） 拙稿「天文年間河内半国体制考」（本書四部五章）。

（５） たとえば、松浦義則氏「戦国大名の領主層掌握について 出雲尼子氏を例として」（『福井大学教

育学部紀要』 部 三〇、一九八一年、後に岸田裕之氏編『中国大名の研究』 戦国大名論集 6 に所  
吉川弘文館、一九八四年）などに、尼子氏の上洛に関する指摘がある。

(6) 石田晴男氏前掲論文。

(7) 拙稿「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」(本書五部一章)。

(8) 筆者は東京大学史料編纂所でこの史料の存在を知り、原文書の有無を確認した。原文書は尊経閣文庫  
所蔵で、小谷利明氏が『大阪狭山市史』二巻(史料編古代中世、中世史料七三三号)に翻刻された。本  
では原文書との対比の意味からも、小谷氏の業績を参考に東京大学史料編纂所影写本(「前田家所蔵  
書」)を翻刻した。 文 章

(9) 「伊勢貞助記」(『後鑑』 新訂増補国史大系 四、永禄四年七月二十三日条)。なお、本稿では、  
『後鑑』 編者の施した返り点は省略し、句点を読点に改めた。

(10) 長江正一氏著『三好長慶(人物叢書)』(吉川弘文館、一九六八年)。

(11) 小谷利明氏「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)。



## 第四部

### 義就流と政長流の家系と権力

## 第一章 天文期の政長流畠山氏

### はじめに

管領家畠山氏は、義就と弥三郎・政長の家督紛争を機に、二流に分裂する。政長の系統は、河内・紀伊の守護家として、室町幕府滅亡まで続いていく。

戦国期の政長流畠山氏にあつて、畠山植長や遊佐長教の時期が、一つの転機となつたと考えている。史料の残存性の問題もあるのだが、紀伊の場合畠山植長の時期を境に分国支配を示す判物や奉行人奉書が、ほとんど見られなくなるからである。一方、河内においても、一時政長流畠山氏当主の名前が、良質の史料で分からなくなる時が存在した。これは守護代家遊佐長教の勢力が強力になったことと、関係があると考えている。

本章では、天文年間を中心にした政長流畠山氏に関し、遊佐長教とそれに関係する内衆を通して、その動向を検討していきたい。

### 一 遊佐長教の権力

天文三年（一五三四）政長流畠山氏当主であつた畠山植長は更迭され、紀伊在国を余儀なくされた<sup>(1)</sup>。政長の家督は左京太夫長経が継いだ<sup>(2)</sup>が、ほどなくして播磨守晴熙が高屋城に入っている<sup>(2)</sup>。このような状況下で政長流畠山氏の河内支配を主導したのが、河内守護代家の遊佐長教である。遊佐長教の権力を考察するにあたり

重要と考える、『金剛寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）二五八号遊佐長教判物を次に示す（以下史料の傍点は筆者）。

A 河内国天野山金剛寺々領事、任御代々 宣旨院宣手続証文同順盛証状之旨、令免除四至之内田畠山野以下所当官物并国役臨時雜事欠所検断等、令禁断殺生、可被全寺家領知之由、任御判之旨、知行不可有相違状如件

天文六年十二月廿五日

長教（花押）

金剛寺に対しては、天文六年（一五三七）十二月十三日付で木沢長政も判物を発給したことが、『金剛寺文書』二五四号から分かる。天文六年（一五三七）の時点では、河内に半国体制が確立しており、政長流では畠山晴熙が、義就流では在氏が当主であった。いずれも河内半国体制に関した文書であり、河内半国体制は、遊佐長教と木沢長政が中心的役割を果たしていたと言える。

戦国期の河内では、守護と守護代による重層的な支配体制が取られていたことが明らかにされている。史料Aの文中にも「任御判之旨」と、守護の判物に任せる旨が記されている。しかし、史料Aに対応する政長流畠山氏当主の判物は知られておらず、木沢長政の場合も同様である。史料の残存性の問題もあるので、あくまでも推測に過ぎないが、受給者が文書の文面を決定するのであるから<sup>(3)</sup>、守護家の当主がいる以上、遊佐長教・木沢長政ともに守護代の文書と言うことで、文面が決まっていた可能性がある。

史料Aの文中に「同順盛証状之旨」に任せと記されている。この遊佐「順盛証状」とは、『金剛寺文書』二三〇号、明応七年（一四九八）十二月二十五日付遊佐順盛判物であろう。次にその判物を示す。

B 河内国天野山金剛寺々領事、任代々 宣旨院宣手続証文之旨、令免除四至内田畠山野以下所当官物并国役臨時雜事闕所検断等、令禁断殺生、可被全寺家領知之由、任御判之旨、知行不可有相違状如件



明応七年十二月廿五日

左衛門尉藤原（花押）

史料Bの文言は、「同順盛証状之旨」が無い以外は史料Aとほぼ同文であり、史料A・Bは同一内容と言える。また、史料A・Bはともに「十二月廿五日」付である。一方木沢長政の判物は、天文六年（一五三七）十二月十三日付である。遊佐長教が判物を木沢長政と同日付にしなかったことは、遊佐長教が遊佐順盛の判物を意識して、意図的に「十二月廿五日」付にしたと考えられる。

遊佐長教が遊佐順盛の判物を先例とし、同月日付で判物を発給したことは、遊佐順盛の判物が守護代家遊佐氏にとって、重要な意味を持つことを示していると言えよう。遊佐長教は遊佐順盛の判物を先例とすることで、政長流守護代家による河内支配の正当性を示そうとしたからであろう。

『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）天文五年（一五三六）七月二十八日条に、「遊佐内河内両郡代」と見える。「遊佐」は遊佐長教のことなので、天文五年（一五三六）の時点で、河内の郡代は事実上遊佐長教が掌握していたことが分かる。以上のことから、天文三年（一五三四）に畠山植長を更迭した時点で、守護代家である遊佐長教が政長流畠山氏の河内支配を掌握したと考えたい。

天文三年（一五三四）以降の河内半国体制下において、政長流畠山氏では、形式的には守護と守護代による重層的な支配体制がとられた。しかし、守護の判物が見えないことから、実質的には守護代家遊佐長教を中心にした支配体制が指向されたとみられる。

## 二 畠山植長河内復帰後の紀北支配

天文十一年（一五四二）三月、畠山植長が河内に復帰したことで、政長流畠山氏の支配体制はどのように変化

したのであろうか。「原家文書」(『和歌山県史』中世史料一)より(C 一九一号、D 一九二号、E 一八九号、F 一八八号、G 一九〇号)、紀伊の事例を検討してみたい。

C 「<sup>(端裏書)</sup>すたの

さんほうゐん」

昨日者治部卿 原方由緒一儀付而預御状候、委細披見申候、原方証状案文等被見置候、縦雖岩蔵分無紛候、数年彼方知行上者、治部卿申分不相届候、彼仁江可相加異見候条、面向不可及御糺明候、被成其意長教へも 御入魂肝要候、猶長伊豆方可被候、恐々謹言

三宝院

快敏(花押)

十月廿六日

丹下備後入道殿

御宿所

D 「<sup>(端裏書)</sup>すたの

さんほうゐん」

先日 原方治部卿申事付而、此等式儀以内儀可相果覚悟候て、治部卿にも種々加異見候、雖然不能同心候、面向以御批判可相果由申候間、被入御耳筋目次第可被仰付候、小治 分事者、郡戸方・長方兩人其迄之御夫 を被申候へと申越候間、可被成御尋候、為其令啓候、恐々謹言

三院

快敏(花押)

十月廿八日

丹備 御宿所

E 小池治部卿隅田岩倉為知行之由、隅田 原三郎左衛門尉下地相論事御糺明処、御代々御判証狀無紛上者、三郎左衛門尉知行不可有相違、存其旨可被申付候由、被仰出候、恐々謹言

十二月十八日

丹下備後入道

盛賢（花押）

遊佐次郎左衛門尉殿

F 小池治部卿相論下地事、御代々御判之旨無紛上者、不相替可有知行之由、被仰出候、恐々謹言

天文十一

丹下備後入道

十二月十九日

盛賢（花押）

原三郎左衛門殿

G 小池治部卿隅田岩倉為知行之由、<sup>(ママ)</sup>忠下地相論事、被成御糺明処、御代々御判無紛上者、知行不可有相違之由、被仰出候、可被存其旨候、猶新五郎可被申候、恐々謹言

遊佐

十二月廿日

長教（花押）

原三郎左衛門殿

進之候

史料C、Gは、小池治部卿が違乱した隅田岩倉の地を、原三郎左衛門に安堵した一件に関するものである。Eで丹下盛賢が文書を発給した宛て先の遊佐次郎左衛門尉は、『天文日記』天文十年（一五四一）六月四日条に、「遊佐次郎左衛門新次郎事」とある。遊佐新次郎は、「証如上人書札案」（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻）宛名留に「長教、遊佐新次郎」とあることより、遊佐次郎左衛門は、河内守護代遊佐長教と分かる。

史料Fは近世の写であり、念のために「天文十一」年と記した年号を確かめてみたい。遊佐長教が次郎左衛門尉と称した初見は、前出の『天文日記』天文十年（一五四一）六月四日条である。長教は天文十三年（一五四四）三月二十三日に、従五位下河内守に任じられたことが『歴名土代』（湯川敏治氏編、続群書類従完成会、一九九六年）に見えるので、その間、次郎左衛門尉と称したとみられる。この期間に史料Fも入るので、「天文十一」の年号は、信用に値する。

史料Eで丹下盛賢は、遊佐長教に小池治部卿の一件を報告し、その結果、遊佐長教が原三郎左衛門に発給した書状が、史料Gである。史料FとGは一日違いであり、文面に若干の差はあるものの、内容はF・Gとも原三郎左衛門に知行を認めていることから、同一事件に関するものと判断できる。丹下盛賢は、畠山植長が紀伊に在国を余儀なくされた時も、植長に近侍していた重臣である。その丹下盛賢とともに河内守護代家の遊佐長教も書状を発給していることから、畠山氏が紀伊においても河内と同様の、守護家と守護代家による重層的な支配体制をとっていたことが分かる。時期的には、畠山植長が遊佐長教と和解し、河内に復帰した天文十一年（一五四二）三月以降と考えたい。

史料Gに遊佐長教が「被仰出候」と記している。遊佐長教は守護代なので、「被仰出」たのは、守護畠山植長にほかならない。紀伊における遊佐長教の立場は、小谷利明氏が論証されたように、守護の意を報じる立場であったことは確かであろう（4）。

小池治部卿の一件では、それまで紀伊の支配にかかわらなかった河内守護代家の遊佐長教が、紀伊支配にかかわっている。たとえ遊佐長教が守護の意を奉じていたとしても、遊佐長教の文書がなければ、原三郎左衛門に対する知行安堵は効力を発行しなかったと考えられる。遊佐長教は確実に権力を伸張させていたのである。

史料C・Dより、三寶院快敏は守護代格の丹下盛賢に小池治部卿の一件を報告したことから、伊都郡の郡代か小守護代とみられる。三寶院快敏は、史料C・Dの端裏書に「すた」とあることから、隅田一族出身であるとみ

られる。隅田氏は、畠山基国の時には、すでにその名が見えるなど、早くから畠山氏内衆となっていた<sup>(5)</sup>。また、『天文日記』天文十六年（一五四七）十一月三日条に「高野三寶院」とあることから、三寶院は高野山の子院と考えられる。畠山氏は、紀伊の有力国人である隅田氏一族の人物が入っている高野山の子院の一つ三寶院を通して、高野山に影響力を行使したのであろう。

三寶院快敏が河内に進出したことは、『天文日記』天文十五年（一五四六）九月五日条に、「鷹山<sup>主殿助</sup>、三寶院、吉益、行松源内助、安見等へ、就出陣」と見え、第二次細川氏綱の乱に際して出陣したことが知れる。三寶院快敏の河内進出は、高野山の軍事力を背景にしての行動であつたと考えられる。

三寶院快敏の畠山氏内部での活動を示すのが、「壺井八幡及通法寺文書」（『羽曳野市史』四巻、中世四四八号）に見える次の史料である。

H 平石跡職事、中務大夫任讓旨、息千徳丸可有相続、但小法師至十五歳迄、為名代塗岡兄弟仁彼知行分被仰付候訖、其内山林并被官百姓等事者、三分一可被存知、小法師為堪忍分、毎年拾五石宛、可被遣之、此旨堅令 可  
存知之由、被仰出者也、仍執達如件

天文十七

九月三日

盛知（花押）

快敏（花押）

壺井源右衛門殿

三寶院快敏と連署している盛知は、後述するように、畠山氏の有力内衆丹下盛知である。丹下盛知と連署していることより三寶院快敏は、河内においても郡代か小守護代に登用されていたと考えられる。三寶院快敏は、前述したように、高野山の軍事力を背景に、河内においても紀伊と同等の地位を獲得したとみられる。政長流畠山

氏は、高野山の子院を小守護代・郡代クラスに登用して、在地の支配と軍事力の動員を行っていたと言えよう。

### 三 畠山植長の死と家督紛争

天文十四年（一五四五）五月十五日、畠山植長が河内高屋城に没した。植長の死後、後継者が容易に決まらなかったことが、「天文十四年日記（兼右卿記）」（『加能古文書』一三一〇号）より分かる。

I河内辺事、家督之儀未定候、故尾州如遣言者、能州守護息男候、依之当時其扱候、然処二不慮二能州匠作入道死去候間、兎角打過候、多分可為此人之旨其沙汰候、佐々霜台之扱候、但於河州、尾州舎弟衆各其覚悟之由候、多分可及闘乱之旨、京中上下其沙汰候、恐々謹言

八月十九日

兼右

大内殿

この史料によれば、畠山植長は自分の後継者として、能登守護家から養子を迎えるつもりであったが、天文十四年（一五四五）七月十二日に能登守護家当主の畠山義総が没したことで、これがなおざりになってしまった。河内では畠山植長の「舎弟衆」が「覚悟」を決めているので、戦乱になるだろうと記している。

畠山植長が没した後に家督紛争があったことは、『言継卿記』等の諸記録類は勿論、「足利季世記」（『改定史籍集覧』十三）・「細川両家記」（『群書類従』二十）等の軍記物や、「畠山系図」（『続群書類従』五上）等諸系図類にも記されていない。だが、「私心記」（北西弘氏編『真宗史料集成』三卷）天文十四年（一五四五）六月二日条には、畠山植長の葬儀が幾度も延期されたと記されており、後掲する史料とともに、植長の後継者が正式に決まっていなかったことが推定できる。

能登守護家と管領家畠山氏（以下、宗家とする）の関係は、戦国期に至っても続いていた。畠山植長宛の能登守護家畠山義総の書状が、紀伊の「尾崎重光家文書」<sup>(6)</sup>に存在することから、能登守護家と宗家の関係は、植長が紀伊に在国していた時期も続いていたと考えられよう。また、良質の史料ではないが、「両畠山系図」等に畠山尚順の娘が「能州修理大夫妻」（義総か）になったと記している。したがって、畠山植長が自分の後継者を能登から迎えようとしても、不思議ではないと言えよう。

では、畠山植長が能登守護家から後継者として迎えようとしていた人物とは、一体どのような人物なのであるうか。『加能古文書』の編者は、畠山義総の子義続に比定している。だが、一般論として考えてみると、たとえ管領家の跡継ぎとは言え、畠山義総が自分の後継者である義続を養子に出すつもりがあつたのだろうか。次の史料から検討してみよう。

「態一筆令啓候、仍尾州為弔從此方之御使分、從貴寺御出世之御方御一人御下向候者、可為祝着之由候、從屋形香奠千疋、從左衛門佐方同五千疋被差上候、御意得候而可被仰届候趣、相意得可令申旨候、彼家督未相定候間、直書者無之候、遊佐河内守方江、從遊佐豊後守方之書状迄候、可被成其御意得候、彼香奠已上六千疋、音坊与申山伏二申付、只今被差上候、彼山伏河内迄御供可仕候由被申付候、委細彼者可申候、御造作之義是非候、次從拙者河内江之書状共も上申候、何も被御覧分、預御届候者可畏入候、猶從岑首座可有演説候不能詳候、恐々謹言

六月八日

総貞 在判

栗棘庵参 侍者御中（7）

『加能古文書』の編者の考証により、書状を発した「総貞」は能登守護家の有力内衆温井総貞、「屋形」は畠山義総、「左衛門佐」は畠山義続である。書状の日付は六月八日であり、畠山義総が没する一月以上前である。

史料Ⅰの記すように、畠山義統が植長の跡を継ぎ、宗家の家督を継承するのであれば、畠山義総が存命中の六月八日の時点で、何らかの動きがあるはずである。それを能登畠山氏の重臣温井総貞が知らないわけではない。したがって、温井総貞が京都の栗棘庵に宛てた書状の文中に、「彼家督未相定候間」と、他人事のように書くことは無いと言えよう。

畠山義総の香奠が千足なのに対して、畠山義統の香奠は五千足である。これは畠山義総が隠遁状態にあり、義統が家中を取り仕切っていたからであろう(8)。能登畠山氏を義統が取り仕切っている以上、現実問題として、義統が能登を離れ宗家の家督を継承することは不可能であった。

以上のことから、畠山義統が宗家の家督を継承することは、現実問題として不可能であるばかりか、そのような動きも無く、事実として確認できなかった。では、畠山植長の跡を継ぐ人物とは誰だったのであろうか。一人は史料Ⅰより、遊佐長教等と結んだ「尾州舍弟」であり、この人物は、畠山播磨守政国とみられる(9)。今一人は、「天文十四年日記」(『ビブリア』七六)天文十四年(一五四五)三月十三日条で、幕府に太刀・馬等を献上した記事が見える、畠山四郎であろう。以下に、当該史料を示してみたい。

K	一御太刀	一腰	御馬一疋	代替 畠山四郎
一	同	同	同	御字御礼同

史料Kの畠山四郎が如何なる人物なのか、確たる史料が無いので分からない。ただ、史料Ⅰの畠山植長が能登守護家から養子を迎えようとしたことが事実とすれば、史料Kの行為はこれに当たる可能性がある。では畠山四郎は、能登守護家関係の人物と言えるのであろうか。

当時能登守護家の内紛により、畠山九郎らが能登を出て京都に居していたため、畠山四郎はこの一党の可能性がある。天文末年から弘治年間にかけて「能州畠山四郎某」が能登方面で活動したことが、「反故裏書」(堅田



修氏編『真宗史料集成』二巻、同朋舎出版、一九七七年）に記されている。この畠山四郎は、畠山晴俊と名乗っていたらしい<sup>(10)</sup>。畠山晴俊の「晴」は將軍足利義晴の偏諱を受けたものとすれば、史料Kの畠山四郎の記事と一致することから、史料Kの畠山四郎が畠山晴俊である可能性は高い。

史料K中に「代替」とあることから、これは畠山氏の家督継承に関する史料である。天文十四年（一五四五）三月十三日の時点で、畠山植長は存命中であり、そのような中で四郎に対して畠山氏の家督継承が行われたとすれば、極めて異例の事態と言えよう。あくまで推測に過ぎないが、以下に私見を示してみたい。

畠山植長は河内復帰後も、細川晴元の対抗者である細川氏綱と結んでいたことが明らかにされている<sup>(11)</sup>。そのため細川晴元政権としては、畠山氏に対して、干渉を企てていたのではない。畠山四郎の家督継承と、天文十四年（一五四五）五月に細川氏綱が挙兵したことは、無関係では無いだろう。史料Iの内容は伝聞であり、史料Jの文中に畠山植長が能登守護家から養子を迎えるとの記述が無いため、細川晴元政権が畠山四郎の家督継承を、意図的に植長の遺言に仮託した可能性が強い。

細川晴元政権は、幕府の枠組みを変えようとする畠山植長を排除するために、畠山四郎に家督を継承させようとした。この動きを知った畠山植長は、細川氏綱と結び挙兵を企てたものの、植長が没したことで、竜頭蛇尾に終わったのではない。これは、「嚴助往年記」（『改定史籍集覧』二十五）天文十四年（一五四五）五月六日の記事に、「尾州死去之故、牢人失力歟」と記していることから推測できよう。

高屋城内では、畠山植長とその重臣丹下盛賢が没したことで状況が変化し、守護代家遊佐長教は、自己に都合の良い畠山播磨守政国の擁立を図った。これを幕府（細川晴元政権）が受け入れなかったため、遊佐長教と守護家系の内衆が一致して、幕府の干渉を退けようとしたのである。そのため、政長流に基盤を持たない畠山四郎は河内高屋城に入らず、実権を握れなかった。そればかりか細川晴元政権は、没落していた義就流の畠山在氏の帰参を認めたため<sup>(12)</sup>、河内に基盤を持たない畠山四郎は、晴元政権からも必用が無くなったのである。

天文十四年（一五四五）五月、細川氏綱が挙兵し、細川晴元は鎮圧のために軍を派遣した。その中に畠山氏内衆の野尻氏が五〇〇名を動員したことが、『言継卿記』同二十五日条に記されている。この記事より、この時点で遊佐長教が細川晴元方に与していたことが知れる<sup>13)</sup>。その遊佐長教が中心となつて翌十五年（一五四六）に第二次細川氏綱の乱を起こすのであるから、畠山氏家督を巡る遊佐長教と細川晴元政権の亀裂は相当深かつたに違いない。

畠山播磨守政国であるが、『天文日記』天文十五年（一五四六）十二月二十八日条に「惣領名代」と記されており、正式に家督を継承できなかったことが分かる。これは細川晴元政権が、畠山政国の家督相続を承認しなかつた事にほかならない。一方遊佐長教らは、細川晴元政権に畠山政国の家督相続を承認させることにはこだわらず、幕府の枠組みを変えるべく、第二次細川氏綱の乱に加担したのである。

#### 四 遊佐長教の全盛

畠山植長が没した後、遊佐長教の地位はどのように変化したのであるうか。次の史料から検討してみよう。

上寺段米其外臨時之課役以下、任先々旨御免除通、河内守一札被申候、猶得其可申之由候、恐々謹言、

天文十四

吉益長門守

十一月廿八日

匡弼（花押）

萱振飛驒守

賢継（花押）

真観寺

御侍者中（<sup>14</sup>）

史料上では遊佐長教の文書を「河内守一札」と記している。また、史料上に対応した守護家奉行人が「真観寺文書」一四号に見えるので、河内の支配体制は基本的に変わらなかったと見られる。

さて、萱振氏は『大乘院寺社雑事記』（増補続史料大成）長祿四年（一四六〇）五月二十五日条に、「遊佐被官」として「カヤフリ」氏が見える。この記事より、萱振氏は遊佐氏の被官人か、畠山氏内衆であったとしても、早くから遊佐氏直系と言える存在であったと考えられる。史料上で畠山氏内衆の吉益匡弼と遊佐氏被官の萱振賢継が連署状を発給していることは、吉益匡弼が事実上遊佐長教の奉行人化したことを物語っている。この事実より、後掲する史料〇の走井盛秀・田川純忠・吉益匡弼は、実質的に遊佐長教の奉行人であると言っても、過言ではないだろう。

遊佐長教は天文十五年（一五四六）夏以降、いわゆる第二次細川氏綱の乱を通して、守護代家の権力を強化していったとみられる。そのような遊佐長教の権力が変化したことが分かる史料を、次に示してみよう<sup>(15)</sup>。

M城州上三郡守護代之儀、兩人御存知之儀候之条、從彼諸侍每篇被申事弘頼・宗房可被仰次候、以余仁申子細候共、一向不可能御許容之由、對御兩人先日御直書相調候、就其普賢寺衆之事、於坊儀在之由候之間、則令披露候之處、如此從諸侍中へ御直札被遣候之間、為御兩人被付置可被仰付候、弥堅固筈事取申候、委細者兩使へ申候、猶林与一可申候、恐々謹言

十月六日

吉益甚介

匡弼（花押）

鷹山主殿助殿  
（弘頼）

安見与兵衛尉殿  
（宗房）

御陣所

この史料の年代であるが、鷹山弘頼・安見宗房が遊佐長教の麾下に参じるのは、天文十一年（一五四二）である<sup>16</sup>）。遊佐長教らが山城に軍事行動を起こすのは、天文十五年（一五四六）の細川氏綱の乱であり、翌年七月まで細川氏綱・遊佐長教方が、事実上南山城を支配しているので、史料Mの年代は、天文十五年（一五四六）に比定できる。

吉益匡弼は遊佐長教の奉行人であるから、史料Lの「御直書」とは遊佐長教の文書であろう。遊佐長教の文書が「御直書」と記され、相当高いことに注目したい。これは、細川氏綱の乱の勝利を背景に、遊佐長教の地位が上昇したからであろう。ただ、史料Mに対応する十月四日付守護家奉行人平盛知書状が「興福院文書」に見られることから、重層的な支配体制に変化は無かったとみられる。

遊佐長教の河内支配で注目できるのが、次の史料である<sup>17</sup>）。

N 至小滝城、始草部弥介其外人数差上候、幸近辺之儀候間、別而馳走御忠節此時候、委細猶両三人可申候、恐々謹言

五月廿九日

金剛寺年預坊

進之候

O 至小滝城、被差上御人数候、幸近辺之儀候之条、別而御馳走御忠節可為肝要之由、御直書被参候、猶能々相意得可申由候、恐々謹言

五月廿九日

吉益長門守

匡弼（花押）

遊佐

長教（花押）

田川参河守

純忠（花押）

走井備前守

盛秀（花押）

#### 金剛寺年預御坊

史料N・Oでは、遊佐長教の書状と遊佐長教直系の畠山氏奉行人奉書とが、同日付で発給されている。これに対応する守護家奉行人奉書は現在のところ知られていない。したがって史料N・Oは、守護家当主が不在の時期と考えられる。

天文十八年（一五四九）六月の細川晴元政権の崩壊後、遊佐長教・三好長慶らは將軍足利義輝とも対立し、義輝をも近江に逃亡させた。政長流畠山氏の惣領名代であった政国は、この事態を快く思わなかったらしく、紀伊に遁世した<sup>18)</sup>。遊佐長教はこのような事態に際し、畠山氏一族を当主として擁立しなかったとみられる。したがって、史料N・Oは、天文十八年（一五四九）六月以降、遊佐長教が暗殺される天文二十年（一五五一）五月五日以前のものと推定できよう。この間の五月二十九日は、天文十九年（一五五〇）のみであるから、史料N・Oの年代を、天文十九年（一五五〇）に比定したい。

前述の如く、史料N・Oに対応する守護家奉行人の文書は見られない。これは遊佐長教が、部分的にも守護家と守護代家による重層的な支配体制を解消したと見るべきであろう。

畠山植長の死後、遊佐長教（守護代家）奉行人と畠山氏（守護家）奉行人が連署状を発給したように、遊佐長教の権力が伸張した。ただ、この時点では畠山政国を惣領名代として擁立していたこともあり、守護家と守護代家の重層的な支配体制を克服することはできなかった。だがこれも畠山政国が紀伊に遁世したことで変化し、重層的な支配体制を解消する可能性が出てきたのである。以上のことから、畠山植長没後の河内は、事実上遊佐長

教の領国であつたと言つてよいだろう。

## 五 畠山高政と安見美作守

俗説では、天文十九年（一五五〇）八月に畠山政国が没し、その子高政が跡を継いだとする。だが、『天文日記』天文二十一年（一五五二）九月二十九日条に、「畠山次郎四郎播磨子也」とあり、この人物は『天文日記』天文二十二年（一五五三）三月六日条に、「畠山尾張守二郎次郎事也」とあることから、畠山高政に間違いない。以上のことから、畠山高政の家督相続は天文十九年（一五五〇）ではなく、天文二十一年（一五五二）であつたことが判明した。

また俗説では、畠山高政は遊佐長教の暗殺後、安見美作守直政を河内守護代としたとする。まず、安見直政の名前であるが、この名前は『姓氏家系大辞典』「安見の項」所収「安見系譜」中に、「十八代図書助直政は交野城にありて畠山高政に属す」とある程度で、良質の史料はもとより、「足利季世記」等軍記物や「両畠山系図」等諸系図類にも、直政の名を見出すことはできない。一方、『石清水文書』（『大日本古文書』家わけ四）三八五三号、（弘治二年）七月二十二日付片岡満菊宛宗房書状の折封上書に、「安見美作守宗房」とある。また、『蜷川家文書』（『大日本古文書』家わけ二十一）三六六一号にも「安見美作守宗房」とある。よつて、安見美作守の実名は直政ではなく、宗房である<sup>（19）</sup>。

次に安見宗房の出自であるが、今谷明氏は『戦国三好一族』（新人物往来社、一九八五年）中で、「天文間日次記」の記載をもとに、大和越智氏の間身出身とする説を唱えている。「天文間日次記」は、奈良興福寺の大般若經の奥書の記載をもとにしていると言われ、「良尊一筆書写大般若經奥書集」には、確かにそのような記載がある<sup>（20）</sup>。安見氏は天文年間まで記録・古文書等はもちろん、軍記物にも名前が見えないことから、事の真偽は

確かめようもない。だが、遊佐長教は越智氏と対立していた筒井氏と結んでいるので、「天文間日次記」の記述をそのまま信じることはできない。

前述したように、安見宗房は天文十一年（一五四二）以降、鷹山弘頼と行動していたことが明らかにされている。安見氏の本拠地は、河内国交野郡私部郷と言われている。この地は鷹山氏の本拠地である大和国添下郡鷹山荘と近接しており、私部郷に鷹山氏の所領が存在したことが知られていることから、安見氏と鷹山氏が一体となつて行動したとしても、不思議なことではない。推測の域を出ないが、安見氏は北河内・北大和・南山城の国境一帯を地盤とした小領主だったのではないか。

『金剛寺文書』二九三号、（永禄八年）十月二十三日付畠山家連署奉書（折紙）に、「遊佐美作守宗房」の花押と、『石清水文書』・『蜷川家文書』等の安見宗房の花押が一致する。安見宗房が遊佐氏を称した初見は、管見の限り永禄八年（一五六五）年である。したがって、このころ安見宗房は遊佐氏の家格を手に入れたとみられる<sup>21</sup>。

『言継卿記』天文二十三年（一五五四）三月八日条には、「遊佐内安見」と記されている。『言継卿記』は遊佐長教が暗殺された後の記事であるが、その時点でも安見宗房は、守護代家遊佐氏系の内衆と捉えられていた。

『言継卿記』天文二十三年（一五五四）三月八日条に、「安見之子野尻満五郎」とあり、安見宗房の子が、野尻氏の養子となっていたことが分かる。「良尊一筆書写大般若經奥書集」によれば、野尻氏は天文二十一年（一五五二）二月、萱振氏とともに安見宗房によって肅清されている。「良尊一筆書写大般若經奥書集」の記事が正しければ、安見宗房は野尻氏に自分の子供を養子に入れ、野尻氏の乗っ取りを図ったことになる。野尻氏は山城国綴喜郡野尻郷の出身とみられ、隣接する河内国交野郡に進出していた。野尻氏が北河内の有力な国人であったことは、前出の『言継卿記』天文十四年（一五四五）五月二十四日条に、野尻氏が動員した軍勢を「河内野尻五百」と記し、相当数の軍勢を動員していることから知れよう。安見宗房が野尻氏の勢力を手中に収めたこと

は、「養父彦次郎氏所蔵文書」(『枚方市史』六卷)中に、野尻宗泰と安見宗房が連署した文書が見られることから確認できる。安見宗房は北河内の有力国人野尻氏の勢力を手に入れることで、北河内の地域権力者となっていたのである。

次に史料を掲げて、天文末年の安見宗房の地位を検討してみたい。

P 禁制紫野大徳寺并諸塔頭、付門前

一、当手軍勢甲乙人等、乱妨狼藉事、

一、剪採山林竹木事、

一、相懸矢銭兵粮米事、

右条々堅令停止訖、若違犯之輩在之者、速可被処嚴科者也、仍下知如件

天文廿貳年八月日

美作守(花押)

備中守(花押)(<sup>22</sup>)

天文二十二年(一五五三)、三好長慶方の軍勢と將軍足利義輝方の軍勢が戦った際、畠山氏の軍勢も出陣した。同年七月十四日、京都船岡山で細川晴元の軍勢を安見宗房の軍勢が防ぎ、八月一日には河内・紀伊の援軍が上洛したことが、『言継卿記』同日条に見える。このことから、史料Pはこれに関連して発給された禁制である。

花押の形状より、史料Pの発給者の美作守は安見宗房、備中守は丹下盛知である。丹下盛知は守護家畠山氏系の内衆で、『観心寺文書』四一一号、天文十七年(一五四八)六月十九日付観心寺段銭皆済状により、観心寺から段銭を徴収していたことが知られている。史料Hの例とともに考え合わせると、丹下盛知は小守護代か郡代クラスに登用されていたと考えられる。史料Pで安見宗房は、丹下盛知の次位に署判していることから、丹下盛知



と同格がそれ以下の地位であつたとみられ、天文二十二年（一五五三）八月の時点で守護代に就任していたとは考えられない<sup>23</sup>）。安見宗房を河内守護代とする俗説は、一軍の指揮官であつた安見宗房と、後年遊佐同名になつた安見宗房とを時間軸を無視して同一視したからであろう。

前述したように、天文二十年（一五五一）五月五日、遊佐長教が暗殺された後、政長流畠山氏内部で権力闘争が激化し、翌二十一年（一五五二）二月十日、萱振氏・田川氏らが安見宗房らによつて肅清された。史料Pの丹下盛知は守護家系の内衆であるから、安見宗房は守護家系の内衆と結んで、萱振氏等を肅清したのである。守護代家系内衆でも走井氏はこの後も名前が見えることから、遊佐長教直系の内衆で内紛があつた可能性が高い。遊佐長教暗殺後に政長流畠山氏では、丹下盛知ら守護家系の内衆と安見宗房らが、守護代家直系の走井氏らと結び、萱振氏・田川氏らを排除することで実権を掌握したのであつた。

## おわりに

戦国期の河内では、守護と守護代による重層的な支配体制が取られていた。天文三年（一五三四）に畠山植長が河内を追放された後、政長流畠山氏の河内支配においては遊佐長教を中心とした支配体制が確立された。この体制は、実質的には守護の判物を必要としないものの、形式的には守護の判物を前提としたものであつた。

天文十一年（一五四二）、畠山植長が河内に復帰したことで、名実ともに守護家と守護代家による重層的な支配体制が復活した。植長は紀伊在国時も近侍した丹下盛賢や、紀伊在国時に登用した高野山の三宝院快敏らの内衆を河内でも用い、彼らが守護家系内衆の中核を形成したと考えられる。特に高野山の三宝院快敏を登用したことは、寺社勢力と畠山氏のかかわりを示す重要な出来事であつたと言える。また、河内守護代の遊佐長教が、紀伊支配にかかわるようになったことは、守護代家遊佐氏権力伸張の上で、一つの画期となつたとみられる。

天文十四年（一五四五）の家督紛争によって、一六世紀半ばに至っても、守護家の家督決定権を幕府が掌握していたことが明らかになった。幕府 守護体制は、この時期に至っても、機能していたと言えよう。一方、守護家の家督は幕府が決定しただけでは、実際に意味を持たず、守護代家以下の有力内衆の支持が無くては、守護家の支配が成立し得ないことも明らかになった。

畠山植長の没後、遊佐長教らが擁立した人物の家督相続を細川晴元政権が認めなかったことで、遊佐長教らは幕府の枠組みを変える第二次細川氏綱の乱を起こした。この乱は幕府の枠組みを変えるどころか、將軍をも排除する形となったため、畠山政国は紀伊に隠居した。これによって遊佐長教は、重層的な支配体制を解消したかに見えたが、ほどなく暗殺されたため、この路線は頓挫することとなった。

遊佐長教の暗殺後、政長流畠山氏内部で権力闘争が発生し、遊佐長教直系とみられる萱振賢継らは、安見宗房らによって肅清された。安見宗房や丹下盛知は河内国人層に基盤を持っていたと言えよう。後年、畠山高政と対立した安見宗房が、一度は追放されたものの、再び登用されたことは、この事実を物語っている。このような畠山氏内部の権力闘争は、畠山氏が河内を三好氏に奪われる伏線となったとみられる。

#### 註

（１） 石田晴男氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』 一向一揆と他勢力の連合について」、『歴史学研究』四四八、一九七七年。後に峰岸純夫氏編『本願寺・一向一揆の研究』 戦国大名論集<sup>13</sup>、吉川弘文館、一九八四年に所収）。

（２） 拙稿「天文年間河内半国体制考」（本書四部五章）を参照されたい。

（３） 矢田俊文氏「戦国期の守護家」（同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章三節、塙書房、一九

九八年、初出一九九一年）。

(4) 小谷利明氏「守護近習と奉行人 政長系畠山氏の支配構造」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部三章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九九二年)。

(5) 小川信氏「畠山基国の活動と管領畠山氏の成立」(同氏著『足利一門守護発展史の研究』三編三章、吉川弘文館、一九八〇年)。

(6) 『加能古文書』二二九八号、年不詳八月二十三日付尾張守宛義総書状。『加能古文書』二二九九号、年不詳十二月十五日付尾張守宛義総書状。両文書の発給者である義総の花押は、畠山義総の花押であり、宛先の「尾張守」は畠山植長であろう。なお両文書とも、和歌山県立文書館『収蔵史料目録』五に、写入りで紹介されている。 真

(7) 「栗棘庵文書」(『加能古文書』一三〇六号)、なお、尚々書きは省略した。

(8) 『富山県史』通史編 中世、四章二節。

(9) 畠山播磨守の実名を政国とする良質の史料は無いが、否定する史料も無いため、本文中では政国を使用する。畠山播磨守に関しては、拙稿「天文年間畠山播磨守小考」(本書四部二章)を参照されたい。

(10) 米原正義氏著『戦国武士と文芸の研究』(桜楓社、一九七四年、初出一九六五年)一章、東四柳史明氏「能登弘治内乱の基礎的考察」(『国史学』一二二、一九八四年)参照。

(11) 小谷利明氏「畠山植長の動向」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)。

(12) 拙稿「戦国期の義就流畠山氏」(本書四部四章)参照。

(13) 小谷利明氏の見解による。『大阪狭山市史』二巻、五九〇頁参照。

(14) 「真観寺文書」一五号(八尾市立歴史民俗資料館『真観寺文書の研究』、二〇〇一年)。

(15) 「興福院文書」(『大阪狭山市史』二巻、六九二号)。

(16) 小谷利明氏「山城上三郡と安見宗房」(同氏前掲書二部付論2、初出一九九四年)。

(17) N 『金剛寺文書』二六一号、O 『金剛寺文書』二六二号。

(18) 拙稿「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」(本書五部一章)参照。

(19) 『蜷川家文書』三 六六一号の安見宗房の花押と、「上杉家文書」(『新潟県史』資料編三中世一)

四 ○五号の「安上宗房書状」の花押とが一致することから、この書状の発給者は安見宗房である。従来  
安 上宗房と言われていた人物の発給した文書の花押は、管見の限りでは、すべて安見宗房のものであつ  
た。  
ちなみに、近江六角氏の家臣に、安上氏は存在しない。この誤認は、河内畠山氏と上杉氏の間を、  
六角 氏が取り持っていたからであろう。

筆者が國學院大學栃木短期大学教授鍛代敏雄氏と石清水八幡宮様のご厚意で、『石清水文書』三 八  
五三号の原文書を拝見した際、「安見」の「見」の字の草書体が「上」に似ており、誤る可能性が存在  
す

ると判断した。以下は推測になるが、「上杉家文書」等で「安見」を「安上」としたのも、「見」と「上」を誤ったからであろう。

(20) 稻城信子氏著『日本中世の経典と勧進』史料編一(塙書房、二〇〇五年、初出一九九五年)。

(21) 小谷利明氏註(16)論文の指摘により、安見宗房は当初から遊佐一族でないと改めた。

(22) 『大徳寺文書』(『大日本古文書』家わけ十七)一 二六三号。花押の照合は東京大学史料編纂所影

写本で行った。なお、「安上宗房」と注記された「美作守」の実名は、「大徳寺文書編年総目次」(同文 書  
十四)で、「安見宗房」に訂正されている。

(23) 安見宗房の地位に関しては、本書五部一章も参照されたい。

## 第二章 天文年間畠山播磨守小考

### はじめに

天文年間の畠山氏研究をややこしくしている問題に、畠山播磨守を誰に比定するかと言う問題がある。これは『後鑑』や『史料綜覧』が、現在の研究水準からみれば、やや短絡的とも言える人名比定を行ったからではないだろうか。また、同時期の細川氏にも「播磨守」「弥九郎」「四郎」が存在したことが、この混乱に拍車をかけたことは間違いない。そして、今日の畠山氏研究の出発点と言っても過言ではない今谷明氏の研究(1)と、それを受けた石田晴男氏の研究(2)が、その人名比定を無批判的に受け入れたことが、影響しているからとみられる。筆者も史料を十分に吟味しきれなかったゆえ、最初に発表した小文では、畠山播磨守や政国の人名比定は混同したままであった(3)。筆者はその後、折に触れて誤りをできうる限り改めてきたつもりであったが、ひとつの論考にまとめなかったためか、なかなか先学諸兄の理解を得られず、今だに混同されている方が少なくない。いつまでも畠山播磨守や政国に関した基本的な事柄で、行きつ戻りつしているような状況では、畠山氏研究の進展は覚束ない。そこで本章では、天文年間の畠山播磨守の人名について、整理することとしたい。

### 一 畠山播磨守関係史料

天文年間の畠山播磨守を検討するにあたっては、史料の使用は当然の事ながら、同時代の記録類や古文書とい

った良質のものに限り、後世作成された軍記物や諸系図類といった価値の劣るものは原則として使用しない。これは、軍記物や諸系図類の作者が、当時の状況を的確に把握しているとは限らないからである。

また、「政国」の名の見える書状も、「古今采輯」（東京大学史料編纂所影写本）等に、何点かみられる。「古今采輯」の文書は写であり、天文年間の畠山政国の文書か否か確定できないものがほとんどである。仮に「古今采輯」の政国の文書が、天文年間の畠山政国の文書であったとしても、本章の論旨には影響しないことから、今回は言及しない。また、畠山政国の文書とされている文書には、細川政国と混同しているものが存在する（4）。以上のような前提によって、天文年間の畠山播磨守関係史料を次に示す（以下史料は、必要部分のみ抜粋）。

A 『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻）天文五年（一五三六）五月十八日条。

遊佐方へ今度札うち候儀、又久無音之儀二付而十荷五種書状遣候、又播磨守とて尾州弟高屋に遊佐新次郎婦民部卿婦とひとつになり屋形など、申候とて、其かたへ書札并太刀馬代遣候、使何も円山隠岐也、遊佐方に御湯つけかけて三献にてあひ候、又播磨所にて八肴三献にてあわれ候

B 『天文日記』天文五年（一五三六）五月十九日条

従高屋円山隠岐帰候、遊佐方にて八湯づ氣かけて三献、又播磨の所にて八肴三献にてあひ候とて候、従両所書状之返事有之

C 『天文日記』天文七年（一五三八）八月十日条

播磨守畠山高屋方屋形上表より先度之為返、一腰并三種五荷以使者着給候間、そとあひ候（中略）即返状出之、

D 「証如上人書札案」（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻）天文七年（一五三八）八月十日付書札案

芳札之趣喜悅候、殊太刀一腰、三種五荷送賜候、御懇意之段祝着此事候、委細下間左衛門大夫可申候、恐々謹言

同十日出之

八月十日

畠山播磨守殿 御返報

E 「証如上人書札案」宛名留（5）

一、畠山播磨守上表、本願寺進覽之候、晴熙、無裏付、恐々謹言

F 『大館常興日記』（増補史料大成）天文九年（一五四〇）二月十五日条

一、摂州来入、来月より御門役事、奉行方より以御下知、畠山播州へ可申候、佐方より副状可仕分申合候、然間さき、のこく三ヶ月被勤申候へ之由候て可然哉、御内談由承之間、尤其分無余儀存候由申之也

G 『大館常興日記』天文九年（一五四〇）三月二十八日条

一、日行事撰并豆州御同道臨来晴光八他行云々、仍御門役事御内談也、畠山播州へ以佐被仰出候御返事去廿六日日付也 御請を被申候、然共如先々八難勤申由文言在之何連来朔日已前に其扱候へ八尤候歟

H 「天文十四年日記（大館常興日記）」（ビブリア七六、一九八一年）天文十四年（一五四五）八月十五日条

一、御太刀 一腰 御馬 一疋 始而御礼 畠山播磨守  
若公様江進上之 畠山播磨守使僧

一、同 同 同

I 『歴名土代』（湯川敏治氏編、続群書類従完成会、一九九六年）天文十四年（一五四五）從五位下の記事



畠山播磨守

源晴熙 同十四・十二・四、同日、伊与守、

J 『天文日記』 天文十五年（一五四六）十二月二十八日条

畠山播磨守へ、就為惣領名代移住彼亭之祝儀太刀、馬代遣之、使平井七郎衛門也

K 『天文日記』 天文十六年（一五四七）正月二十七日条

畠山播磨守為名代遣之 遊佐、丹下、走井等へ、始毎年樽遣之、遊佐へ八、直札遣之也

L 『天文日記』 天文十六年（一五四七）十一月三日条

今朝氏綱、四郎、播磨、遊佐、丹下、長塩、赤沢、走井、<sup>高野</sup>三宝院等へ樽遣之、使又二郎也

M 『天文日記』 天文十七年（一五四八）五月二十五日条

廿五日 畠山播磨守へ、就今度無事、三種五荷遣之使麻生

N 『御内書要文』（<sup>6</sup>）（年欠）五月二十五日付御内書案

畠山家督之事可令存知候、猶晴光可申候也

五月二十五日

畠山播磨守とのへ

O 『御内書要文』（年欠）十二月十九日付御内書案

長教・長慶令一味参洛事、雖加意見依不同心遁世由其聞候、為事実者尤神妙、猶晴元・定頼・晴光可申候也  
十二月十九日

## 畠山播磨守とのへ

P 『天文日記』 天文二十一年（一五五二）二月十七日条

畠山播磨入道へ、太刀、梅染十端遣之、宮原浄祐下国二事付候、雖以書状可申、被煩目之由候、以上野書状寺杣迄申遣

Q 『天文日記』 天文二十一年（一五五二）九月二十九日条

畠山家督次郎四郎播磨子也就被成之、以一札太刀、馬代遣之使円山

以上の史料をもとに、天文年間における畠山播磨守の実像について、考察を加えていこう。

## 二 畠山播磨守晴熙

史料Aが天文年間における、畠山播磨守の初見である。この史料の「尾州」について、『石山本願寺日記』では「遊佐」、「真宗史料集成」では「細川」と注記している。しかし、遊佐氏・細川氏ともに「尾州」は「尾張守」の官途を得た者はなく、筆者が旧稿で指摘した如く、畠山尾張守植長とするのが妥当である。したがって、「播磨守」は畠山植長の弟とみられる。

史料Bの記事は高屋城に関する史料なので、この「播磨」守は、史料Aの播磨守と同一人物と考えられる。

次に畠山播磨守の名が見えるのは、天文七年（一五三八）八月である。史料Cでは、「播磨守畠山高屋方屋形上表」と記され、畠山播磨守が「高屋屋形」を辞職したことが分かる。『石山本願寺日記』では、割書の「上表」の部分が欠落している。筆者は迂闊にも『真宗史料集成』と『石山本願寺日記』は同じ内容のものと思

いこんでいたため、旧稿では畠山弥九郎と畠山播磨守を混同してしまい、不十分な結論となってしまう(7)。史料A・B・Cの畠山播磨守についてまとめみると、天文五年(一五三六)五月十八日には「高屋屋形」を称していた畠山播磨守が、天文七年(一五三八)八月十日の畠山弥九郎の入城に伴って「高屋屋形」を「上表」したとするのが自然である。よって、史料A・B・Cの畠山播磨守は、同一人物と考えてよいと言えよう。

史料Dの前にEについて検討してみよう。史料Eは証如が発給した書状の宛先であるが、この「畠山播磨守」を『石山本願寺日記』の校訂者が「勝熙」と判読し、『石山本願寺日記』では畠山播磨守に「勝熙」と注記した。このため、先学諸兄の論文や自治体史等でも、これに依っている場合が少なからずみられる。「勝熙」については、森田恭二氏によつて、「晴熙」の誤りであることが明らかにされ、また「畠山播磨守」の次に「上表」の二字が欠落していることも明らかにされている。この成果をもとに、畠山播磨守晴熙の活動時期を見ていこう。

北西弘氏の研究によつて、証如が実際に返書を相手方に発給した際には、「天文日記」に「印が記されていることが、判明している(8)。「天文日記」の畠山播磨守に関する記事で「印が記されているのは、史料Cの天文七年(一五三八)八月十日条である。史料DはCと同日付の書状案であり、内容的にも史料DとCは関連している。前述の如く史料Dは森田恭二氏によつて「畠山播磨守」の次に「上表」の文言が欠落していることが明らかにされており、内容的に史料Cの「播磨守畠山高屋方屋形上表」に対応した記事であることが分かった。したがって史料C・D・Eは、森田恭二氏が指摘された如く、天文七年(一五三八)八月十日の史料であると言えよう。以上のことから、史料A・Bの畠山播磨守も「晴熙」のことと考えられ、晴熙は天文五年(一五三六)五月には、すでに活動を開始していたのである。

次に畠山播磨守晴熙の名が見えるのは、Iの天文十四年(一五四五)十二月四日である。この史料によれば、この日晴熙は従五位下に叙せられ、伊予守に任じられたとする。周知の如く播磨は大国であり、伊予は上国であるので、この補任の記事は問題がありそうにみえる。室町幕府内談衆大館常興の手による「大館常興書札抄」(『群

書類従『九』には、受領名について、次のように記している。「伊予守」は「左衛門佐・右衛門佐など程事也」とし、「播磨守」は上国の「摂津守」や下国の「淡路守」などとともに、「八省輔ほどの御用なり、八しやうのふと云うは、中務大輔・少輔・式部大輔・少輔（中略）の事なり」としている。当時の幕府の感覚から言えば、晴熙の補任は決して格下げであつたとは言えないと筆者は考えている。

史料Ⅰより、史料Ⅵ・Ⅶの畠山播磨守は、「晴熙」とするのが自然であろう。ただ、史料Ⅷの畠山播磨守が天文十四年（一五四五）八月十五日に、將軍足利義晴に対して「始而御礼」を行ったとする記事は、晴熙の活動状況からみて、いささか遅いような気がする。『歴名土代』の叙任に関する日付は必ずしも正確でない場合がみられることから（<sup>9</sup>）、晴熙の伊予守叙任は、天文十四年（一五四五）十二月四日ではなく、同年八月以前の可能性が高い。史料Ⅷの畠山播磨守は、次節の政国の可能性が高いと考えている。

「天文十四年日記」天文十四年（一五四五）三月十三日条にみえる「畠山四郎」を『後鑑』では「晴熙」に比定している。『後鑑』のように畠山四郎を「晴熙」とすると、天文十四年（一五四五）三月十三日に將軍足利義晴に「御字御礼」を行った畠山四郎が、史料Ⅷの如く同年八月十五日に將軍に「始而御礼」を行ったのは矛盾しているのではないか。よつて畠山四郎と晴熙は別人と言えよう。

### 三 畠山播磨守政国

「天文日記」には天文十四年（一五四五）十二月以降も史料Ⅵ・Ⅶの如く、畠山播磨守の名がみえる。これらの史料にみえる畠山播磨守は、伊予守に任じらた晴熙が、再び播磨守に戻つたとは考えられないことから、史料Ⅵ以降の畠山播磨守は、明らかに晴熙とは別人と言えよう（<sup>10</sup>）。

では、史料Ⅵ以降の畠山播磨守は政国に比定してよいのだろうか。「古今采輯」中の畠山政国らしき文書写を

はじめ、「足利季世記」(『改訂史籍集覧』十三)等の軍記物、「両畠山系図」(『続群書類従』五上)、「畠山系図」(『新訂寛政重修諸家譜』二)等の諸系図類も「畠山播磨守政国」と記している。だが、諸系図類の記す畠山政国の没年である天文十九年(一五五〇)以降も、畠山播磨守の生存がPで確認できるなど、「天文日記」と諸系図類では没年が一致しない。このように、すでに拙稿で指摘したところでもあるが、畠山播磨守の名を政国とする決定的な史料はない。ただ、「足利季世記」の記す人名は何の根拠もないとは言えないことから、ひとまず「以降の畠山播磨守の名を政国としても、差し支えないだろう」。

前述した如く、畠山播磨守の実名比定をややこしくした理由の一つに、『後鑑』や『史料綜覧』の編者が、畠山弥九郎をさしたる根拠もなく、畠山政国に比定したことにある<sup>(11)</sup>。弥九郎を政国とする史料は存在しないが、今一つ「大館記(覚悟)」(『ビブリア』八四、一九八五年)の史料を提示して、弥九郎の実名を検討してみたい。

為字之礼、太刀一腰・青銅千足到来、目出候、猶晴光可申候也、

十月十六日

畠山弥九郎とのへ

この史料によると、畠山弥九郎が將軍足利義晴に「字之礼」を行ったことが分かる。したがって弥九郎は、義晴の偏諱を受け、おそらく「晴」と名乗ったはずである。このような人物を政国に比定することは、不可能であると断言できよう。弥九郎が政国と名乗っていない以上、史料「以降の畠山播磨守と弥九郎を同一人物と考える根拠はないと言えよう。よって、畠山弥九郎と史料「以降の畠山播磨守は別人とみられる」。

おわりに

以上述べてきたことを整理すると、次のようになるだろう。A・G・Iは畠山播磨守晴熙に關した史料であり、J・Q（おそらくHも）は畠山播磨守政國に關した史料であると考えられる。

畠山播磨守晴熙は、弥九郎とは別人である。天文五年（一五三六）五月に高屋城で「屋形」を称していた、畠山植長の弟播磨守晴熙は、天文七年（一五三八）八月、畠山弥九郎の家督相続に伴い、高屋城を退城した。以後は播磨守家当主として活動したものとみられ、遅くとも天文十四年（一五四五）十二月には、従五位下伊予守に叙任されている。

畠山晴熙と同じく畠山植長の弟とみられる播磨守政國は、弥九郎や晴熙とは別人である。四部一章で述べた如く、播磨守政國は、植長没後の家督紛争の結果、「惣領名代」として第二次細川氏綱の乱に加担している。

政國の地位から推察するに、天文五年（一五三六）五月から天文七年（一五三八）八月にかけての晴熙は、後の政國の「惣領名代」と同様の地位にあったものと考えたい。これは、天文三年（一五三四）八月に政長流畠山氏の家督を継いだとされる畠山左京大夫長経が、天文五年（一五三六）の時点で諸記録・古文書等にその名がみえず、すでに没していたか、失脚していたとみられるからである。

政長流畠山氏においては、畠山播磨守家の当主とみられる晴熙・政國はともに、本家の家督をめぐる重大な問題が起こった際に、その活動がみられる。播磨守家の当主は、本家の重大事態に際し、一族や内衆を束ねる重要な地位にあったものと考えられる<sup>(12)</sup>。政長流畠山氏における本家と播磨守家の関係は、細川氏における本家と典厩家の関係と類似したものであったようだ。

#### 註

- (1) 同氏「室町時代の河内守護」（同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六

年、初出一九七六年）。

(2) 同氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』 一向一揆と他勢力の連合について」(『歴史学研究』四四

八、一九七七年、後に峰岸純夫氏編『本願寺一向一揆の研究』 戦国大名論集<sup>13</sup> に所収、吉川弘文館、一

九八四年)。

(3) 拙稿「戦国期河内畠山氏の動向」(『國學院雑誌』八三 八、一九八二年)。以下、本章で注記しない旧稿はこれを指す。

(4) たとえば、森田恭二氏が「河内守護畠山氏の系譜をめぐる諸問題」(同氏著『大乘院寺社雑事記の研究』五章、和泉書院、一九九七年、初出一九九五年)で畠山政国の文書とされた、「日根文書」十月四日付日根野五郎宛政国書状は、花押の形状からみて、細川政国の書状である。筆者が知りうる限りで畠山政国の文書の可能性があるのは、「古今采輯」中の文書を除けば、「土屋家文書」二月二十八日付土喜左衛門宛政国書状のみである。なお、本文中で注記しない森田氏恭二氏の研究はこれを指す。

(5) 森田氏恭二氏前掲論文。

(6) 今谷明氏「室町幕府御内書案の考察 軍勢催促状・感状を中心に」(同氏著『室町時代政治史論』二部、塙書房、二〇〇〇年、初出一九八五年)中に翻刻された、飯倉晴武氏所蔵文書。

(7) 拙稿「天文年間の畠山氏」(『和歌山県史研究』一六、一九八九年)。なお、畠山弥九郎と播磨守の混同を正したのは、小谷利明氏である(同氏「戦国期河内における国郡支配について」『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』一、一九八九年)。

(8) 同氏「天文御日記解題」(北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年)。

(9) たとえば細川晴元は、『歴名土代』では天文六年(一五三七)八月一日に従五位下右京大夫に叙任さ

れたと記されているが、それ以前に任官されていたことは間違いない（吉井功兒氏「細川晴元・昭元父に関する若干の基礎的考察 任官・改名時期や“右京大夫”などの検討を中心に」『ヒストリア』二〇、一九八八年）。

（10） この播磨守に関しては、拙稿「天文期の政長流畠山氏」（本書四部一章）、および「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」（本書五部一章）も参照されたい。

（11） 『後鑑』の場合、明治三十七年（一九〇四）七月に刊行された『続国史大系』本には、「弥九郎」を「政国」とする注記はない。だが、昭和九年（一九三四）九月に刊行された『新訂増補国史大系』本では「弥九郎」に「政国」と注記している。これが昭和十一年（一九三六）七月に刊行された『史料綜覧』巻九とともに、混同の原因となったと考えている。

（12） 畠山播磨守家の地位に関しては、小谷利明氏の指摘が重要である。同氏「守護権力と宗教権力 贈答文書論」（同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部五章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九九四年）、および、『動乱の河内』（八尾市立歴史民俗資料館図録、一九九三年）を参照されたい。



### 第三章 戦国期義就流畠山氏の動向

#### はじめに

足利氏の一門守護で、河内・紀伊・越中等の守護を兼ねていた畠山氏は、管領家として室町幕府の中核にあつた。しかし、その家督紛争は激烈をきわめ、二流に分裂した畠山氏の抗争は、応仁の乱や山城の国一揆をはじめ、いくつかの政変劇を引き起こしている。このように畠山氏の動向は、畿内一帯の政治情勢を検討する上では、きわめて重要な位置を占めていると言っても過言ではないだろう。

そのような畠山氏の中でも、本章では大永年間から天文年間にかけての、義就流畠山氏の動向について述べていきたい。この時期の義就流畠山氏の家系を確定し、内情を調べることが、畿内一帯の政治情勢を究明する上で重要と考えている。それは、政長流畠山氏は曲がりなりにも室町幕府滅亡時まで家系が存続するものの、義就流畠山氏は、天文年間に勢力が凋落するからである。

#### 一 畠山義堯と代替わり安堵状

応仁の乱以降の両畠山氏の抗争の中で、大永元年（一五二一）十月、義就流畠山氏の義英は、政長流畠山氏の尚順と和睦し、淡路にあった前將軍足利義植の再挙に協力した<sup>(1)</sup>。しかしこれ以降、畠山義英の消息は明らかにできず、大永三年（一五二三）三月には、義堯の名が見えることが、次の史料より判明する<sup>(2)</sup>。

河内国観心寺雜掌申同国観心寺郷段錢以下、臨時課役并検断等事、早任寛正弍年四月廿七日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

大永参年三月十八日

義堯（花押）

当寺衆僧御中

文中に記された「寛正弍年四月廿七日免除」に該当する文書は、『観心寺文書』一六四号、畠山義就判物である。政長流畠山氏の人物が、敵対している義就の判物を先例とするとは考えられないので、義堯は義就の子孫と考えて間違いないだろう。

この畠山義堯判物と同じ大永三年（一五二三）三月十八日付で義堯が観心寺に発給した文書（禁制・判物）が、『観心寺文書』に全部で六通残されている。次に二二一号も含めて、内容を示してみよう（括弧内は『観心寺文書』の番号）。

禁制（二一九号）。

寺領七郷地頭領家職の安堵（二二〇号）。

段錢以下臨時課役并に検断等の免除（二二一号）。

大和宇智郡須恵莊の寄進（二二二号）。

下司・公文職の安堵（二二三号）。

八尾福智院領買得分の寄進（二二四号）。

）と同様に、観心寺に対して、最初に同年月日付で集中的に禁制・判物を発給したのは、畠山義就である。畠山義就は、寛正二年（一四六一）四月二十七日付で、観心寺に対して禁制・判物を発給したが、『観心寺文書』一六三・一六四・一六七・一七〇号より分かる。当時畠山義就は幕府の追討を受ける立場にあり、正守護

ではなかった<sup>(3)</sup>。畠山義就は守護家当主として権力を行使する証として、一連の判物群を発給したのであろう。したがって、義就の判物を先例とした判物を発給した人物は、義就の子孫と考えられる<sup>(4)</sup>。

第三節で述べるように、天文六年（一五三七）十一月十三日、畠山在氏が一連の判物を発給したが、観心寺はこれを「御屋形様継目御判」と呼んでいる。このことから、義就の子孫が観心寺に同日付で発給した禁制・判物は、義就流畠山氏の当主が交替したことを示す代替わり安堵状とみてよいだろう。

畠山義就の跡を継いだ基家の場合、延徳三年（一四九一）十二月六日に義就や義堯と同様の文書を発給したが、『観心寺文書』二〇六―二一〇号より分かる。これは前年十二月の畠山義就の死去を受けて発給されたものと見てよい。畠山義英の場合は、『観心寺文書』五七五―五八一号より、永正元年（一五〇四）七月十八日に代替わり安堵状が発給されている。畠山義英が家督を継承したのは、明応八年（一四九九）正月であるから、この発給の遅れは、細川政元の影響が強かったことを意味していよう<sup>(5)</sup>。

これらの事例から、遅くとも大永三年（一五二三）三月には、畠山義英に代わり義堯が義就流畠山氏の家督についていたとみて誤りないであろう。この義堯とは一体何者であろうか。「両畠山系図」（『続群書類従』五上）等諸系図類には義堯の名を見いだせず、直接畠山義英との関係を記した記録類も無いが、義英の嫡子と考えたい。それは次に考証するように、「両畠山系図」や「足利季世記」（『改訂史籍集覧』十三）に畠山義英の嫡子として記されている畠山義宣が、義堯とみられるからである。

享禄五年（一五三二）六月十八日に、一向一揆に攻められて「畠山上総介」<sup>(6)</sup>が自害した際の「二条寺主家記」（『続南行雜録』『続々群書類従』三）の記事に、「畠山義高御自害」とある。これが「高」と「堯」の音通（たか）によると考えられるからである。この時自害した人物について「両畠山系図」や「足利季世記」は、「義宣」と記しており、「二条寺主家記」の「義高」自害の記事と一致する。また、「足利季世記」に記す畠山義宣の活動は、義堯が観心寺に判物を発給した大永三年（一五二三）以前にはみられず、義宣と義堯の活動時期

は一致する。

以上のことから、「両畠山系図」や「足利季世記」の「義宣」は、義堯であると結論できる(7)。

## 二 木沢長政の台頭

大永七年(一五二七)二月、京都桂川の戦いで足利義維を擁した細川晴元方が勝利し、細川高国政権が崩壊して堺公方府が成立した(8)。河内においても細川晴元と結ぶ畠山義堯勢の進出が目立ち、享禄元年(一五二八)十一月には、細川高国方の畠山植長が守る河内高屋城が陥落した。当時畠山義堯の有力内衆であった木沢長政の活躍は、目覚ましいものがあつた。以下、本節では木沢長政が台頭した過程について、検討してみたい。

畠山義堯が義就流の家督を相続した時点から、木沢長政が守護代であつたのではない。当初の守護代は遊佐堯家であつた。遊佐堯家は『金剛寺文書』(『大日本古文書』家わけ七)二四七号、大永三年(一五二三)五月二十七日付畠山義堯判物の副状を、同二十八日付で発給したことが『金剛寺文書』二四八号より分かることから、この時点ではすでに守護代家当主であつたとみられる。

代々河内守護代は遊佐氏が踏襲することが慣例化し(9)、守護代家として強力な権力を有していた。一方、木沢氏は『蔭涼軒日録』(増補続史料大成)明応二年(一四九三)七月二十八日条に、「遊佐越中守・平・木沢・隅田」と記され、義就流畠山氏の有力内衆であつたことが知れるが、守護代家ではなかった。守護代家より家格の劣る木沢長政の河内守護代就任は、きわめて異例なことと言える。長政台頭の背景を探るためにも、遊佐堯家等、遊佐氏の動向を見てみよう。

遊佐堯家であるが、「古今消息集」(『福井県史』資料編二、中世)の細川高国(道永)書状に、高国方の朝倉教景が、大永七年(一五二七)十一月十九日に京都西院で、「遊佐弾正忠」以下「百余人討取」つたと記して

いる。このことから、遊佐堯家は、大永七年（一五二七）十一月に、戦死したとみられる。

一方、『二水記』（大日本古記録）享禄三年（一五三〇）十二月十八日条には、木沢長政が「令害遊座<sup>（佐）</sup> 出奔」と記している。木沢長政が殺害した遊佐は、堯家と言うよりも、他の人物ではないかと考えている。大別すると義就流畠山氏の守護代家である遊佐氏は、就家・堯家と「家」を通字とする系統と、就盛・基盛・英盛と、「盛」を通字とする系統とに分けられる。

木沢氏と遊佐氏の関係であるが、『談山神社文書』一七号、八月五日付遊佐中務丞英盛書状に「於委細木沢左衛門大夫可被申入候」とあり、畠山義英の内衆木沢左衛門大夫が、遊佐英盛の下で活動していたことが分かる。木沢左衛門大夫が長政とは断定できないが、長政が堯家とは別の遊佐氏を殺害しても不思議はない。よって、木沢長政が殺害した遊佐氏は、堯家とは別人と考えたい。推測になるが、大永七年（一五二七）の遊佐堯家戦死による守護代家の動揺を利用して、木沢長政は遊佐（基盛か）を殺害したのであろう。

木沢長政の行動には不明な事も多いが、前出の『二水記』享禄三年（一五三〇）十二月十八日条によれば、細川高国のもとに一時いたものの、これを見限り細川晴元の被官となったと記している<sup>（10）</sup>。木沢長政は河内で戦功があったと言われ、細川晴元との関係を梃子として、義就流畠山氏の実権掌握を図ったとみられる。

当時の義就流畠山氏の内情であるが<sup>（11）</sup>、遊佐氏が畠山氏内衆の中で、最も強勢を誇っており、守護家畠山氏とともに、守護代家として、重層的な支配を行っていた<sup>（12）</sup>。だが、義就流畠山氏においては、明応年間に遊佐氏と誉田氏が守護代職を巡って争ったことが、今谷明氏の研究によって明らかにされている。このように義就流畠山氏には、守護代家遊佐氏と他の内衆との激しい抗争があり、根強い反遊佐勢力が存在していた。おそらく木沢長政は、反遊佐勢力と結託したのではないか。

このような木沢長政の振る舞いに対して畠山義堯は、享禄四年（一五三一）八月と翌五年五月の二度にわたり、木沢長政の居城である飯盛城を攻撃した。畠山義堯が木沢長政を攻撃したことは、義堯にとって木沢長政の行動

が、義就流畠山氏の家格秩序を乱す行動と写ったからであろう。

畠山義堯と三好遠江守の行動を、いわゆる堺公方府は内部で対処できず、本願寺に一揆を起こすよう要請した。一向一揆の攻撃を受けた畠山義堯は、享禄五年（一五三二）六月十五日、河内の石川道場で自刃した。一向一揆の力を借りなければ、義就流畠山氏の権力を掌握できないところに、木沢長政の勢力の弱さが窺える。

一向一揆は同二十日、堺で三好元長を自殺させ、堺公方府は滅亡した。一向一揆によって細川晴元や木沢長政は、反対勢力を一掃した。しかし、一向一揆の矛先は細川晴元や木沢長政に向けられることとなり、木沢長政ら是一向一揆の鎮圧に奔走することとなった<sup>(13)</sup>。一向一揆の鎮圧後、河内では木沢長政と政長流畠山氏の守護代家である遊佐長教との間で和睦が成立し、半国体制が確立した<sup>(14)</sup>。

### 三 木沢長政の権力

本節では、木沢長政の権力について、検討してみたい。『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）天文五年（一五三六）正月二十日条に「大和之儀木沢為守護間」と記されているように、木沢長政は大和で守護を称していた。木沢長政は河内においても同様に、守護就任を望んでいたと考えられる。これに関連すると思われる『観心寺文書』二二七号を、次に示す。

河内国観心寺領同七郷地頭領家事、雖為半済、悉被還附訖、然上者、下司公文職、同諸散在共、以全被領知、段銭以下臨時課役并検断等、任御代々御判旨被免除之条、弥無相違被寺務、国家安全可被抽懇祈之状如件、

天文元

十一月十三日

長政（花押）

観心寺衆僧御中

史料中に「任御代々御判旨」とあるが、代々木沢氏は観心寺に対して判物を発給しておらず、義就流畠山氏当主が発給した判物であろう。木沢長政は畠山氏当主の判物を先例とした判物を発給することで、自分が守護権力を継承し、分国支配を行おうとしてたのであろう。だが、室町幕府が存続した畿内にあつては、一介の畠山氏内衆である木沢長政が、河内守護家である管領家畠山氏の家格と同格になることは許されず、畠山義堯の弟在氏を擁立することとなったと考えられる。『蓮成院記録』(『多聞院日記』附録)天文二年(一五三三)正月の記事が正しければ、畠山在氏は、すでにこの時点で木沢長政に擁立されていたとみられる。だが、木沢長政の文書に変化が見られるのは、次に示す『金剛寺文書』二五四号からである。

河内国天野山金剛寺々領事、任代々 宣旨院宣手続証文之旨、令免除四至内田畠山野以下之所当官物并国役臨時之雜事闕所検断等、禁断殺生、可致寺家領知由、任御判旨、知行不可有相違者也、仍状如件、

天文六年丁酉十二月十三日

長政(花押)

当寺住侶中

文面から「御代々」が無くなり、「任御判旨」と現畠山氏当主の判物によって安堵する旨に変化した。だが、これに対応する畠山在氏の判物は知られていない<sup>(15)</sup>。文面の変化は、畠山在氏が代替わり安堵状を発給したと関係すると思われる。実際の判物の有無にかかわらず、守護家当主が判物を発給できる状態となったため、木沢長政の判物にも守護家当主の判物を前提とした文言に変化したのであろう。

畠山在氏は、天文六年(一五三七)十一月十三日付で、代替わり安堵状を観心寺に発給したことが、『観心寺文書』二三一・二三三・二三四・二三六・二三九・三八〇号より分かる。天文六年(一五三七)十一月に至って在氏の代替わり安堵状が発給されたのは、細川晴元政権が安定し、河内半国体制も軌道に乗ったからであろう。

代替わり安堵状の中でも、内衆の動向が分かる三八〇号を次に掲げて検討してみよう。

御屋形様継目御判札銭注文

参貫文

飯盛(畠山在氏)御屋形様 小次郎殿

壹貫文 御屋形様御奉行

平若狭守殿

壹貫文 同

井口殿

壹貫文 同

木沢中務殿

壹貫文

木沢左近大夫入道殿 浮泛ノ事也

(吉)  
貫文

木沢左京亮殿  
(長政)

貳貫文 是者取次

窪田豊前入道殿  
(家利)

以上合拾貫文

文殊院年預之時

天文六年丁酉十一月十三日

宥盛

この文書には、当時の畠山在氏の主だった内衆の名が見える。木沢姓の人物が三名も見え、数の上で他の内衆を圧倒しているばかりか、遊佐姓の人物が一人も見当たらないことが分かる。義就流畠山氏の守護代家遊佐氏は、木沢長政に殺害されたとされる享禄年間に入ると動向がはっきりとせず、木沢長政が実権を掌握していた時期は、文書どころか記録類にすらその名を見いだせない状況である。

この文書より、木沢長政の一族である木沢中務が、畠山在氏の奉行人であることが分かる。一方、木沢長政とその父親の木沢浮泛には、奉行人との記載が無く、彼らは奉行人とは別の立場にあったことが分かる。先述のように、この文書に遊佐氏が一名も見えないことと考え合わせると、木沢長政は守護代家の権力を乗っ取ったと言



えるだろう。木沢浮泛も独自に判物を発給できる地域権力者であった<sup>16)</sup>。木沢長政は守護奉行人に一族の中務を送り込む一方で、自らは守護代家権力を掌握したのである。

木沢長政は、守護代家遊佐氏を没落させ、畠山義堯を自刃に追い込んだ後、木沢一族を中心に義就流畠山氏家臣団を編成した。家格の面で畠山在氏を守護家当主として擁立する必要こそあったものの、実権は木沢長政が掌握していたと考えて間違いないだろう。天文初年の義就流畠山氏においては、守護家と守護代家の重層的な支配体制から、守護代家権力を事実上乘った木沢長政主導の支配が行われていたのである。

義就流畠山氏で権力を掌握した木沢長政ではあったが、河内においては、政長流畠山氏の勢力を排除できず、先述したように、遊佐長教との半国体制となった。大和で守護を称した木沢長政にとって、河内における立場はきわめて不十分なものであり、これが、天文十年（一五四一）に起こした反乱の一因となった。

#### 四 畠山在氏の動向

木沢長政は天文十年（一五四一）十月、細川晴元政権に対して反乱を起こし、翌年三月十七日の河内太平寺の戦いで敗死した。例外な様であるが、畠山在氏は木沢長政の反乱に積極的に加担しておらず、太平寺の戦いの後も飯盛城を維持していた。このような在氏の動向は、守護家をしのぐ権力を持った木沢長政を、快く思っていないからであろう。

『史料綜覧』巻十、天文十一年（一五四二）三月二十日条に飯盛城陥落の記事を載せるが、同書が典拠とした史料中に、該当の記載を見出せない。『多聞院日記』（増補続史料大成）天文十一年（一五四二）閏三月八日条に、「今日飯盛ノ城工惣勢可打寄之由、高屋ヨリ被催之处二、依雨降ルニ歟延引」と、雨で飯盛城攻撃が延引されたとある。したがって、『史料綜覧』の記事は誤認であろう。

『大館常興日記』（増補続史料大成）天文十一年（一五四二）四月八日条で、畠山在氏が木沢長政の弟左馬助の赦免を幕府に願っていることが分かる。この記事から判断して、幕府（細川晴元政権）は木沢一族の肅清を求めてはいたが、在氏を追放することまでは考えていなかったとみられる。結局、幕府と在氏との交渉は不成功に終わり、翌十二年（一五四三）正月に飯盛城が陥落したことが、『天文日記』同年正月二十六日条で分かる。

畠山在氏は天文十二年（一五四三）四月二十四日、本願寺と音信を通じたことが『天文日記』同日条に見え、復権を目指して活動を行っていた。天文十二年（一五四三）正月に、在氏が飯盛城から没落した後発給した文書（判物）を、次に示してみよう。

「隅田八幡神社文書」（『和歌山県史』中世史料一）三三号、天文十二年（一五四三）九月十日付隅田名字衆中宛畠山在氏判物<sup>17)</sup>。

「護国寺文書」（『和歌山県史』中世史料一）一〇号、天文十二年（一五四三）十一月九日付護国寺住持宛畠山在氏判物。

「観心寺文書」二四一号、（天文十四年）九月二十六日付観心寺宛畠山在氏判物。<sup>18)</sup>

「金剛寺文書」二六八号、天文十五年（一五四六）八月十六日付天野山住侶之中宛畠山在氏判物。

「真観寺文書」七号、天文二十四年（一五五五）九月十一日付真観寺宛畠山在氏判物<sup>19)</sup>。

・ は第一次細川氏綱の乱の時期である。 は畠山植長の没後、後継者が決まらなかった時期である。 は第二次細川氏綱の乱が起こった時期である。 の隅田八幡神社、 の護国寺、 の観心寺、 の金剛寺は、いずれもそれ以前より義就流畠山氏当主の判物が見られる寺社である。したがって畠山在氏は、政長流畠山氏が動揺した時期に、以前から関係の深い寺社に権力を行使したのである。いずれ細川晴元政権と畠山植長・遊佐長教の間が決裂すると見た河内・紀伊の諸勢力が、没落中とは言え、畠山在氏の判物を求めた可能性が高い。

の判物は、河内・紀伊・大和宇智郡の国境付近に集中している。これと「畠山家譜」の写本がこの地域

に集中していることを考え合わせると<sup>(20)</sup>、義就流畠山氏の根強い地盤が、河内・紀伊・大和宇智郡の国境地域に存在していたと言えよう。

史料の残存性の問題もあるのだが、との間隔が開いていることが分かる。これは、天文十五年（一五四六）の秋頃が、畠山在氏にとって、一つの転機となったからであろう。これは天文十五年（一五四六）夏頃から、政長流の守護代家である遊佐長教が中心となつて、第二次細川氏綱の乱が起こつたからである。

天文十六年（一五四七）二月九日、細川晴元方の軍勢が、細川氏綱方の摂津原田城を攻めたが、その際の「細川両家記」の記載に、「畠山総州」が晴元方の一員として、城攻めに加わつたと記している。「足利季世記」には、天文十五年（一五四六）末に「畠山新上総介・同遊佐越中守・木沢大和守」が、細川晴元の求めに応じて、淡路衆・四国衆とともに上洛し、摂津に発向したと記している。「細川両家記」「足利季世記」等軍記物では、義英・義宣（義堯）と、義就流畠山氏の当主を「総州」「上総介」と記している。したがって、畠山在氏は上総介の官途を得たことは無いものの、摂津原田城攻めに加わつたとされる、「細川両家記」の「畠山総州」、「足利季世記」の「畠山新上総介」は、義就流畠山氏の当主<sup>21</sup>在氏と考えられる。

畠山在氏は、細川晴元の求めに応じて出陣したのであるから、細川晴元政権から畠山氏家督を承認されたと考えるのが自然である。したがって、天文十五年（一五四六）末から遅くとも翌年二月までの間に、畠山在氏は細川晴元政権に帰参し、畠山氏家督を回復したと考えたい。

細川晴元政権に帰参した後の畠山在氏の動向は、記録・古文書類では分ならず、「細川両家記」「足利季世記」に依拠することとなる。畠山在氏は摂津・河内を転戦し、天文十六年（一五四七）七月二十一日の摂津舎利寺の戦いでは、細川晴元方の勝利に貢献したが、三好長慶が遊佐長教と和睦したことで状況は一変した。天文十八年（一五四九）五月九日の堺北荘の戦いで在氏は、三好長慶・遊佐長教等の軍勢に大敗して再び没落した。義就流畠山氏の家督は尚誠が継承したものの、この後、義就流畠山氏当主が守護職を得ることは、二度と無かつたので

ある。

## おわりに

義就流畠山氏では、守護家と守護代家の重層的な支配体制が行われていたが、これが義堯の時に大きな変化を迎えることとなった。家格的には守護代家ではない木沢長政が、細川晴元の後ろ盾を得て、義就流畠山氏の実権を掌握しようとしたからである。義就流畠山氏の家格秩序を乱す木沢長政の行為に、畠山義堯らは強く反発して木沢長政を攻撃するが、反対に滅ぼされてしまい、義就流畠山氏の実権は、木沢長政が掌握した。

筆者は、木沢長政自身が河内守護への就任を望んでいたと考えている。だが、細川晴元政権は室町幕府による秩序維持を図ったため、木沢長政は、管領家畠山氏が保持していた河内守護に就任することができなかった。木沢長政が、守護畠山在氏を擁立しなければならなかったのは、このためである。

また、木沢長政は義就流畠山氏の実権を掌握する際、一向一揆を利用して対立していた畠山義堯らを滅ぼす方法をとった。この方法で木沢長政は、義就流畠山氏の実権を掌握することはできたが、義就流の勢力そのものは、弱体化することとなった。そのため河内で木沢長政は、政長流畠山氏の遊佐長教との間で、半国体制を取らざるを得なかったのである。

これらの事が、天文十年（一五四一）に起こった、木沢長政の反乱の原因となったことは、間違いないだろう。木沢長政の一連の行動は、義就流畠山氏の勢力を削ぐ形で行われた。それが畠山在氏・尚誠の時期に、義就流畠山氏の勢力が凋落した原因となったと考えている。

義就流畠山氏が没落した後、河内には三好氏の勢力が入ってくる。現在のところ推測の域を出ないが、河内国内には政長流畠山の支配を快く思っていなかった勢力が存在し、これが三好氏と結び付いたからではないだろう

か。今後更なる検討が必要であろう。

註

(1) 畠山義英の動向に関しては、拙稿「畠山義就の子孫達」(本書四部四章)も参照されたい。

(2) 『観心寺文書』(『大日本古文書』家わけ六)二二一号、畠山義堯判物。

(3) 今谷明氏「室町時代の河内守護」(同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七六年)。なお、本文中で注記をしない今谷明氏の研究は、これを指すことをお断りしておく。

(4) 詳細は、拙稿「畠山義就の子孫達」(本書四部四章)を参照されたい。

(5) 今谷明氏前掲論文。

(6) 『言継卿記』等の記録類ばかりか、軍記物でも「細川両家記」(『群書類従』二十)には、実名は記されていない。

(7) なお、畠山義宣の書判がある年不詳の書状が『観心寺文書』一五五号に見える。この文書の花押は、『観心寺文書』の畠山義英や義堯の花押と形状が異なっており、両者の関係は不明である。あるいは、義堯が義宣と改名したのかも知れない。

(8) 今谷明氏著『戦国期の室町幕府』四章(角川書店、一九七五年)。

(9) 今谷明氏註(3)前掲論文。

(10) 小谷利明氏「畠山植長の動向」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)によれば、享禄二年(一五二九)に細川高国が援軍を求めて流浪した際、細川晴元方についたとする。

(11) この時期の畠山義堯の奉行人として、平英房・小柳家綱が『観心寺文書』二二五・二二六号等に見える。今谷明氏は註(3)前掲論文(旧稿)においてこの兩名を畠山植長の奉行人とされたが、『観心寺文書』二四三号で平英房が畠山在氏の命令を奉じていることから、兩名とも義就流畠山氏の奉行人である。

(12) 矢田俊文氏「戦国期の守護家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の構造』二章三節、塙書房、一九九八年、初出一九九一年)。

(13) 今谷明氏註(8)前掲書。

(14) 拙稿「天文年間河内半国体制考」(本書四部五章)。

(15) 遊佐長教の場合も同様である。拙稿「天文期の政長流畠山氏」(本書四部一章)を参照されたい。

(16) 小谷利明氏「奉書様式文書と奉行人文書 義就流畠山氏の河内支配」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部二章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九九七年)。

(17) 「隅田家文書」(『和歌山県史』中世史料一)三五号に、同日付同文の隅田名字衆中宛畠山在氏判物写が存在する。これとの判物は、元来同一の文書と考えられるので、本文中に提示しなかった。

(18) この判物を天文十四年(一五四五)と推定した根拠は、『観心寺文書』二四二号椎名英胤書状と、同文書二四三号平英房書状に「天文十四乙巳」の押紙があることによる。

(19) 八尾市立歴史民俗資料館『真観寺文書の研究』(二〇〇一年)。なお、『史料綜覧』巻十、天文十二年(一五四三)五月九日条には、畠山在氏が河内真観寺の諸公事を免除し、同書天文十五年(一五四六)六月一日条には、畠山在氏が河内真観寺の臨時課役を免除したと記している。しかし、『史料綜覧』が根拠とした「真観寺文書」に見えるのは、いずれも政長流畠山氏内衆の文書である。

(20) 『畠山記集成』(『羽曳野記史料叢書』一)の川岡勉氏の解説による。

〔追記〕 畠山義堯と義宣の文書を調査された小谷利明氏は、義堯が義宣と改名したことを論証された(同氏「畿内戦国期守護と室町幕府」『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)。

## 第四章 畠山義就の子孫達

### はじめに

応仁の乱の勇将として知られる畠山義就の動向は、一五世紀中後期の畿内を中心とした政治情勢を語る上で、重要な役割を果たしている。義就の子孫達（いわゆる義就流畠山氏）の動向も同様に重要であり、戦国期の畿内一円の政治情勢を見るときに、避けて通ることはできないと言えよう。だが、その勢力が一六世紀半ば以降、著しく凋落したこともあって、諸系図類も異同が多く<sup>(1)</sup>、家系を確定することは等閑にされており、義英以降は、生没年どころか実名さえも、正確に伝わっているとは言い難い状況である。筆者は以前、義就流畠山氏の家督の変遷について検討したが、もとより不十分なものであった<sup>(2)</sup>。

そこで本章では、畠山義就の子孫達の実名を初め、生没年・当主の交替等の検討を通して、その家系を確定していきたい。なお、当主の交替をもつて、義就流畠山氏の家督相続とみなすことをお断りしておく。

### 一 家督の推移に関して

畠山義就の没後その子基家が跡を継ぎ、基家の没後その子義英が跡を継いだことは、『史料綜覧』等、先学諸兄の研究成果により確定できる。義英以降の家系を記した系図には、「両畠山系図」「津川本畠山系図」「畠山家譜系図」があるが、現存する古文書や記録類と系図上人名が合わないなど問題が多く、その家系を俄に確定



しがたい。そのような中で注目されるのが、以前筆者が指摘した『観心寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）に見える判物である（<sup>3</sup>）。次にその一つを掲げ、検討してみよう。

A 河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭以下臨時課役并検断等事、早任寛正式年四月廿七日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

延徳三年十二月六日

当寺衆僧御中

基家（花押）

文中の「寛正式年四月廿七日免除之旨」の判物を次に示す。

B 河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭以下臨時課役并検断等事、早任永享十年十一月十五日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

寛正式年四月廿七日

当寺衆僧御中

右衛門佐（花押）

右衛門佐は『観心寺文書』の編者の考証の如く、花押の形状より畠山義就である。史料A・Bより、畠山基家が父義就の判物を先例にしていたことが判明する。では、義英はどうであろうか。

C 河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭以下臨時課役并検断等事、早任寛正式年四月廿七日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

永正元年七月十八日

当寺衆僧御中

上総介在判

この判物の「上総介」は、『観心寺文書』の編者の考証のとおり畠山義英である。義英も史料Cの文中に「寛正式年四月廿七日免除之旨」とある如く、史料Bの義就の判物を先例とした、史料Aの基家の判物と同じ文面の判物を観心寺に発給している。また、政長の子孫であれば、敵対している義就の判物を先例とした判物を発給するとは考えられない。したがって、義就流畠山氏の家督継承者達は、史料Bの義就判物を先例とした判物を、観心寺に発給していたと考えられる。

このことから、基家・義英以外に、史料Bの義就判物を先例とした判物を、『観心寺文書』中より探し、次に示してみよう。

D 河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭以下臨時課役并検断等事、早任寛正式年四月廿七日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

大永参年三月十八日

義堯（花押）

当寺衆僧御中

E 河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭以下臨時之課役并検断等之事、早任寛正式年四月廿七日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

天文六年十一月十三日

在氏（花押）

当寺衆僧御中

F 河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭以下臨時課役并検断等之事、<sup>早</sup>甲任寛正式年四月廿七日免除之旨、可被全寺家領知之状如件、

天文十八年六月四日

尚誠（花押）

## 当寺衆僧御中

史料D・E・Fより、義堯・在氏・尚誠なる人物が、史料Aの基家、史料Cの義英の場合と同じく、史料Bの義就判物を先例とした判物を、観心寺に発給している。このことより、義堯・在氏・尚誠を、基家・義英と同様に、義就流畠山氏の家督継承者としてよいだろう。

さて、史料Bで畠山義就が先例とした「永享十年十一月十五日免除之旨」とは、『観心寺文書』一八〇号の、畠山持国の判物である。畠山義就は父持国を先例とすることで、管領家畠山氏の嫡流であることを、誇示しようとしたのであろう。義就の判物を先例とした彼の子孫達も、当然義就と同じ管領家畠山氏嫡流の自負があつたに違いない。以下、基家・義英・義堯・在氏・尚誠について、各々の兄弟をも含めて、義就流畠山氏の家系を見ていこう。

## 二 基家とその兄弟

当初畠山義就には男子が無く、能登守護家畠山義有の次男政国を養子としていた<sup>(4)</sup>。政国は『大乘院寺社雑事記』(増補続史料大成)寛正四年(一四六三)八月六日条に「畠山衛門佐義就開高野陣、同次郎被召取云々」とあり、長禄・寛正の錯乱では義就と共に幕府軍と戦っていた。このことより、政国は錯乱の始まる長禄四年(一四六〇)九月には、すでに義就の養子となっていたと考えられる<sup>(5)</sup>。『大乘院寺社雑事記』寛正四年(一四六三)十二月二十五日条等で、義就の赦免が伝えられており、これが事実とすれば、同様に養子の政国も赦免されたとみられる。

寛正六年(一四六五)十一月七日、畠山義就が大和天河に出陣すると、政国も紀伊で活動を開始し、文正二年

(一四六七) 正月には、紀伊の大半を平定した。政国は、年号も改まった応仁元年(一四六七) 五月に応仁の乱が勃発すると、同年六月、上京して義就の陣に加わった。しかし、義就に実子が生まれたことで、政国と義就は不和になり、文明二年(一四六九) 十月五日、政国は越前で殺害された<sup>(6)</sup>。

畠山政国の殺害と関係があると考えられる、義就の実子誕生はいつであろうか。『大乘院寺社雑事記』文明六年(一四七四) 九月十九日条に「義就之息、兄七歳、弟六歳、悉皆二人」とあり、義就に二人の子息がいたことが分かる。この記事より計算すると、兄は応仁二年(一四六八)、弟は文明元年(一四六九)の生まれとみられる。

『大乘院寺社雑事記』文明二年(一四七〇) 八月二十八日条には、「畠山子息三歳此間古市二預之、昨日上洛云々、号修羅和光」とある。この記事より修羅が応仁二年(一四六八)の生まれと分かり、『大乘院寺社雑事記』文明六年(一四七四) 九月十九日条の「義就之息、兄七歳、」は、修羅と判明する。

一方、『蔭涼軒日録』(増補続史料大成) 明応二年(一四九三) 二月十五日条「畠山次郎殿也、右衛門佐義就公之第二子、修羅法師殿弟也、乱法師殿也」と見える。これによつて畠山次郎が義就の第二子で修羅の弟と分かり、『大乘院寺社雑事記』文明六年(一四七四) 九月十九日条の「弟六歳」は、『蔭涼軒日録』明応二年(一四九三) 二月十五日条の「畠山次郎」と言える。この畠山次郎は、『親長卿記』(増補史料大成) 明応二年(一四九三) 二月十五日条に「河内畠山次郎基家」とある如く、畠山基家と確認できる。よつて畠山基家は、文明元年(一四六九)の生まれであろう。

当然、修羅が義就の後継者となるはずだったが、修羅が文明十五年(一四八三) 十一月十四日に死亡したことが、『大乘院寺社雑事記』同年十一月十五日条に記されている。修羅が没したため、跡目は次子の基家となったが、これをめぐつて、『大乘院寺社雑事記』文明十六年(一四八四) 九月十日条では浮説と断りながらも、修羅の没後にその子が生まれたため、義就が「一家之乱之基」となるのを防ぐため、母子を殺害したと記している。義就の跡目を巡つては、義就自身の場合と同様に、一筋縄ではいかなかったようだ。

では、修羅は諸系図類では、どのように表されているのであろうか。「清和源氏系図」から検討してみよう。

なお、系図の割書は、必要に応じて記していくこととする。

基持  
家永 早世  
次弥 也  
郎三  
郎三  
郎三

この系図では、基家を義就の次男としているのみならず、修羅ばかりかその子に比定できる人物も記されており、『大乘院寺社雑事記』の記事とも一致する。また、政長の兄弥三郎も記されている。このように「清和源氏系図」は、管領家畠山氏の家系を比較的正確に表していると思われる。だが、義就流では基家、政長流では尚順までしか記されていないのが惜しまれる。

次に「両畠山系図」を見てみよう。

義某弥三 尚持  
昭郎 順  
初一度  
元相続家  
家督  
又基家弥  
豊二郎弾  
義正少弼  
二  
郎  
上  
総某弥九  
介郎早世

義就の子として見える義昭の名は、良質の史料には見えない。また、義就の弟として基家と、持富の子で政長の兄である弥三郎が記されている。持永と持富の順も逆であり、「両畠山系図」は、持国から基家にかけて、記載が混乱していることが分かる。「両畠山系図」は、畠山氏の家系を記す上でよく用いられるが、他の系図類と同様に、厳密な検討を行わないでの使用は慎むべきである。

「両畠山系図」に義就の弟として記載されている基家であるが、系図には子がいて早世したと記されている。想像することが許されるならば、この記載は修羅とその子と見ることはできるのではないだろうか。したがってこの基家は、単に基家が誤って記載されたと言うよりは、修羅とその子が誤って記載されたと言っべきであろう。

### 三 基家の改名をめくって

文明十七年（一四八五）八月六日に元服した畠山基家は（『大乘院寺社雑事記』同日条）、延徳二年（一四九〇）十二月十二日、父義就が没するとその跡を継いだ。明応二年（一四九三）、いわゆる明応の政変が起こり、畠山政長が河内正覚寺城で敗死し、基家が守護に就任した（<sup>7</sup>）。

基家が守護に就任した後改名したことは、周知の事実である。『史料綜覧』等通説では、義豊と改名したとす  
るが、今谷明氏は『大乘院寺社雑事記』明応二年（一四九三）六月十五日条を根拠に、基家が「義国」と改名し  
たとされ、義豊改名説を否定されている（<sup>8</sup>）。この説に関して、まず『大乘院寺社雑事記』の当該条から見  
よう。

公方若君御改名義高云々、畠山改名義国云々、先祖名也、且如何、

この条では畠山基家だけでなく、足利義遐（後の義澄）の改名も伝えている。今谷氏が義国改名の根拠とされ  
た「先祖名也」は、義国ばかりか義高をも対象にしており、またこの記事自体も「且如何」と尋尊は断定を避け  
ている。『大乘院寺社雑事記』は、たとえば文正二年（一四六七）正月一日条、同日条の如く、畠山政長を「政  
弘」と記すなど、人名の誤記がみられる。『大乘院寺社雑事記』で「義国」の名が見えるのはこの条のみであり、  
他の記録・文書類にも畠山義国の名は見えないので、『大乘院寺社雑事記』明応二年（一四九三）六月十五日条  
のみでは、基家が義国と改名したとは決しがたい。

一方、管見の限りでは、義豊なる人物の発給した文書が、次に示す三例知られる。

（年不詳）六月十九日付書状（『熊野速玉大社古文書古記録』一八七号）。

（年不詳）六月二十七日付書状（「二見文書」『五条市史』史料 二九号）。

（年不詳）七月八日付書状（「護国寺文書」『和歌山県史』中世史料一 九号）。

の文書は破損しており、花押の照合は難しいが、の義豊の花押と、『観心寺文書』二一〇号等の畠山基家

の花押の形状が一致する。は現在文書が伝えられていないが、江戸時代に作成された「牟婁郡古文書」（国文学研究資料館史料館蔵）で確認すると、花押の特徴が前出の基家のものと一致する。の書状中に「尚順事、即被補 朝敵被加御対治候」とあることから、の年代は、明応二年（一四九三）以降となる。以上のことより、基家が義豊と改名したとして誤り無いだろう。『大乘院寺社雑事記』明応二年（一四九三）六月十五日条の記事は、尋尊の誤記とみられる。

『大乘院寺社雑事記』明応二年（一四九三）六月十五日条によれば、畠山義豊が祖父持国の例により、弾正少弼に任じられたことが分かる。義豊は河内奪回をめざした政長の遺子尚順の軍勢と河内各地に戦い、明応八年（一四九九）正月三十日、河内十七カ所において戦死した。

#### 四 義英とその兄弟

畠山義豊の戦死後その跡を継いだのは、嫡子の義英である。義英は『後法興院記』（増補続史料大成）明応三年（一四九四）十二月二十日条に、「畠山少弼息<sup>八歳</sup>一昨日元服」とあり、「後慈眼院殿御記」（『九条家歴世記録』二、図書寮叢刊）同年十二月十七日条には、「霜台之子、生年七云々」と見える。『後法興院記』に記載された年齢を数え年とし、「後慈眼院殿御記」に記載された年齢を満年齢とすれば、義英は長享二年（一四八八）の生まれとなる。いずれにしても義英は、長享元年（一四八七）か二年の生まれとみられる。

義英がやや早いとも思われる年齢で元服したのは、義豊が尚順と対するのに際し、義就流畠山氏後継者としての義英の位置づけを、明確にする必要があったからであろう。畠山義豊は細川政元の都合で守護に就任したという事情もあって（）、当時の義就流畠山氏の勢力は、河内国内がようやくであった。このような状況下で反政元派の畠山尚順との対決の最前線に立たされ河内に在国した義豊が、管領家畠山氏嫡流の自負を持つ義就流畠山氏

の将来を危惧するのは当然であろう。細川政元も義豊を利用するにあたり、義英に後継者の地位を約束することは、得策と考えたのではない。義英の元服は、細川氏と義就流畠山氏の間で、一種の政治的取り引きとして行われたと考えたい。

畠山義英の文書で年紀の確定できる最初のもは、史料Cを含む、永正元年（一五〇四）七月十八日付の『観心寺文書』五七五、五八一号である。これらの文書は、書状ではなく、段銭や検断の免除、下司公文職の安堵といった当主の権限を行使した判物である<sup>(10)</sup>。

永正元年（一五〇四）になると細川政元政権内部で内衆の内訌が激しくなり、三月には赤沢朝経が政元の怒りを買って没落し、九月には薬師寺元一の反乱が発生した。このような政元政権内部の混乱に乗じて、義英は政元政権からの自立を企てたとみられる。同年十二月の畠山義英と尚順の和睦も、細川氏に対する畠山氏同盟の色彩が強かったと考えられる<sup>(11)</sup>。

義英の没年で代表的なのは、次に示す二説である。第一が「両畠山系図」・「足利季世記」（『改定史籍集覧』十三）等の大永元年（一五二一）七月説であり、第二は『系図纂要』本「畠山系図」や「続応仁後記」（『改定史籍集覧』三）の享禄五年（一五三二）六月説である。どちらの説も良質の史料による裏付けができず、ことに第二説では、後述の義堯の没年と混同するなど、そのまま信用することはできない。

「経尋記」大永二年（一五二二）四月晦日条（『大日本史料』九編之十八、大永二年雜載、疫病・生死条）に、「畠山濃州於小川他界云々」と見える。「経尋記」は興福寺大門跡経尋の記録であるから、「小川」は大和国吉野郡小川であろう<sup>(12)</sup>。「畠山濃州」であるが、該当する人物が義就流にも政長流にも存在しないため、畠山総州＝義英の間違いではないかと思ひ、国立公文書館架蔵写真帳で確認したところ、「濃」ではなさそうだが、「総」とは断定できなかった。以下、状況的に義英の可能性があるのか否か検討してみたい。

畠山義英は「春日社司祐維記」大永元年（一五二一）十月二十六日条<sup>(13)</sup>に、畠山尚順（尚慶・ト山）と和睦



して、足利義植の再挙に協力したことが見え、「春日社司祐維記」同年十一月一日条には「総州内郡迄御出頭之處、御陣破テ散々ニ成給フ」と見える。「内郡」とは宇智郡との音通によるもので、大和国宇智郡であろう。義英は「内郡」に「出頭」したと記されていることから、宇智郡より奥の吉野から出てきたとみられる。

永正三年（一五〇六）正月、義英が細川政元方の攻撃を受けて没落した際、『多聞院日記』（増補続史料大成）同年二月十九日条に、「畠山上総殿者、龍門郷大蔵谷ト云所ニ御座云々」と記されている。龍門郷は吉野郡北部の地域で、河内から見れば、前出の小川の手前に位置する。義英は以前から、吉野と繋がりがあったのである。

本書四部三章で述べた如く、義英は大永元年（一五二一）十一月の敗北以降、その動向が分からず、大永三年（一五二三）三月十八日には、史料Dの如く、畠山義堯が観心寺に判物を発給するなど、当主としての活動がみられる。畠山基家が観心寺に判物を発給したのは義就の没後約一年を経てであった。また、畠山氏の相続は、本書一部一章で述べた如く、没後相続が原則であった。以上のことから、大永二年（一五二二）四月に義英が小川で没して義堯が跡を継ぎ、翌三年三月に観心寺に判物を発給したと考えることができよう。実際、その可能性が高いと筆者は考えている。

畠山義英に弟がいたことが、「拾芥記」（『改定史籍集覧』二十四）永正十年（一五一三）八月二十四日条に、「於河内畠山上総守<sup>（介）</sup>手合戦、上総守弟播磨<sup>（磨）</sup>被打云々」とあることにより知れる。畠山播磨守は「東寺過去帳」（『大日本史料』九編之四、永正十年八月二十四日条）の「播磨殿廿二才」より計算して、明応元年（一四九二）の生まれとみられる。播磨守は畠山氏では、元来奉公衆家の系統の官途であるが、『大乘院寺社雑事記』明応四年（一四九五）二月十日条に、畠山播磨守は「誉田屋形方也、八尾持之、子息八紀州屋形方也」と見える。「誉田屋形」は畠山義豊、「紀州屋形」は畠山尚順であり、畠山播磨守の子息が尚順方について、細川政元政権に反抗していたことが分かる。尚順方についた畠山播磨守の子息に代わって、義英の弟が播磨守家の跡を襲ったのであろう。

## 五 義英の子息達

畠山義英の跡を継いだのが義堯である。義堯は史料Dに見える如く、大永三年（一五二三）三月十八日付で觀心寺に対して判物を発給するなど、当主として活動している。前述の如く、この時点で義就流畠山氏の家督が、義堯に移っていたことが判明する。義堯は、足利義維・細川晴元のいわゆる堺公方府方に立って、足利義晴・細川高国方の畠山稯長と抗争を展開した。

義堯は、生年や子息の有無、義英との関係等、良質の史料で確認できず、不明なことが多い。だが、義就・義豊・義英について「義」の字を受け継いでいることから、義英の嫡子と考えてよいだろう。『言繼卿記』享禄五年（一五三二）六月二十日条より義堯は、義英と同じく「上総介」の官途を得ていたとみられる。

畠山義英の子息として最初に登場するのは、越中方面で活動する勝王であろう。次に勝王に関する史料を掲げて<sup>14)</sup>、検討してみたい（傍線は筆者）。

先年於越中国、為始亡父正統国中士卒数輩討死、各御存知上、一々不及申顯候、然而彼国へ被入馬刻、種々合力義申届候処、終無其義、野伏一人不被相添段、無心千万候、殊自畠山尾州御書を一通不給候、誠無御情次第候、畢竟、神保所行訖候、賀州者共事者、敵御方上軍習、一旦義更不苦候歟、於越中国遣恨難打置哉、入国一兩年已後、矢を一筋仕度候へ共、爰元取乱連続、早過來候処、彼国無正体成行、既国中者共過牢人、当国<sup>（越後）</sup>其外飛州・能州へ罷越、合力義頻而申候、其上自彼国申越旨共候、切紙為披見写進候、并細川御家風上原左衛門大夫、越中太田保在宿、彼方へ自京兆御内義候上、賀州五十余人御被官中堅被仰付候、同畠山総州御息勝王殿、賀州御在国武衛衆、其外賀州者共令同心、蓮沼口可乱入旨候、自三ヶ寺書状之案

文、

為御披見写進候、勝王殿御書同前候、如此自諸口可打入由候、旁以天道時節到来由存候上、来三月上旬 可成  
行覚悟候、数年御陣勞雖令推察候、方々義時節潤熟上、更難黙止条思立候、此間御動事者、國中義候間、 各  
身二懸之条、御自專訖候、此般事者、且被対正統御志、且属本意候者、為景二一郡給候と忝可存候、被成 御  
用意、一途御合力始末、可為御芳情候、巨細猶長授院可申候、恐々謹言、

二月二日

為景(長尾)  
(花押)

長尾弥四郎殿(房)

御宿所

『新潟県史』等は、この書状の年代を永正十六年(一五一九)としており、筆者も異存はない。傍線部の「畠山総州」は、この書状が永正十六年(一五一九)二月のものなので、畠山義英に比定できる。したがって、勝王は義英の子息とみられる。

勝王を当時の政長流畠山氏の当主尚順の猶子とする説があるが<sup>(15)</sup>、この説が妥当か否か検討してみたい。そのため、畠山勝王の動向と尚順の動向に加えて、畠山氏の動向を見る上で重要な、畿内の政治情勢を見てみよう。

管見の限りにおいて、畠山勝王の初見は「三浦和田中条文書(反町英作氏所蔵文書)」(『新潟県史』資料編 四中世二、一三二五号)、(永正十五年)七月十日付勝王書状であり、終見は「上杉家文書」一七五・一九五号、(永正十六年)十月十九日付勝王書状である。したがって、畠山勝王の越中での活動期間は、永正十五年(一五一八)七月から翌十六年十月にかけてとみられる。

傍線部より、畠山尚順は永正十六年(一五一九)二月の時点で、越中の情勢に関心が無かったことが分かる。尚順の越中に関する書状の初見は、「上杉家文書」一二号、(永正十七年)正月二十七日付尚順書状である。

なお、「上杉家文書」を初め、尚順の書状中に勝王の名は見いだせない。

永正十五年（一五一八）八月に細川高国政権を支えていた大内義興が帰国し、反細川高国党の活動が活発化した。畠山義英も同年九月、和泉に出兵したことが、『宣胤卿記』（増補史料大成）同年九月二十八日条に見える。

・ より、畠山勝王の活動が終わってからと尚順の書状が見えはじめ、両者の活動時期が一致しないことが分かる。さらに より、永正十六年（一五一九）二月の時点で、畠山勝王が尚順の猶子であるとする説の根拠となる、尚順と義英の和睦説が成立しえないことが明白である。

畠山勝王の越中での活動は、の義英の行動と関係があると考えられる。義英は細川高国政権を支えた大内義興の帰国が迫った時期を捉えて、畠山氏分国の中でも尚順の勢力が及びにくかった越中で子息の勝王を活動させ、義英自身も、永正十五年（一五一八）九月以降、和泉・紀伊方面での活動を活発化させたのであろう。

長尾為景から見れば、越中に侵攻するためには、名目上守護家畠山氏と結ぶ必要があった。長尾為景の立場で言えば、守護家の一族であれば、義就流でも政長流でもよかったのではないか。畠山勝王の活動が、長尾為景らの利害関係と一致したため、為景らは当初勝王と結んだのである。

以上のことより、畠山義英の子勝王が、尚順の猶子として越中で活動したとする説が誤りであることが、明らかにになった。永正十七年（一五二〇）以降、畠山尚順方の活動が行われるとともに勝王の活動が見られなくなることが、これを如実に物語っている。

永正十六年（一五一九）十月以降の畠山勝王の消息は不明である。勝王はかつて義英が「惣勝」と称した如く、義堯の初名とも考えられる。だが、『観心寺文書』・「二見文書」等の義堯の花押と、「上杉家文書」等の勝王の花押が一致せず、両者を同一人物と考えることは難しい。

## 六 畠山在氏に関して

畠山義堯の跡を継いだのが在氏である。在氏と義堯との関係について記した史料は、次の二つである。まず、「両畠山系図」に、義英の子で義宣（義堯）の弟として、在氏の名が見える。次に「足利季世記」では、「総州義宣、其御子今ノ新上総介殿ナリ」と見え、この「新上総介」が在氏と見られるので、在氏は義宣の子とする。在氏は奉公衆家等傍系出身の可能性もあるが、出自を記した史料はこの二点くらいしかない。

「両畠山系図」は系図、「足利季世記」は軍記物であり、その記載をそのまま信じることは危険である。「細川両家記」（『群書類従』二十）に「既に総州は御あねむこ也」と、畠山義堯が細川晴元の姉婿と記しており、結婚している義堯に子息がいても不思議はない。

『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三、同朋舎出版、一九七九年）天文五年（一五三六）四月五日条に、「越中国へ畠山小次郎子息可差越」と記されている。畠山小次郎は在氏であるから、在氏には天文五年（一五三六）には、すでに活動できる年齢の子息がいたことが分かる。在氏が義堯の子息とすれば、天文五年（一五三六）に、このような子息がいることは、少々無理がありそうである。後述の尚誠の動向と合わせ考えると、疑問は残るものの、在氏は義英の子で義堯の弟としておくのが妥当であろう。

畠山在氏の初見は「蓮成院記録」（『多聞院日記』附録）天文二年（一五三三）正月の「畠山小次郎方・木津<sup>（沢）</sup>左京亮殿」という記事である。畠山在氏は『天文日記』天文十二年（一五四三）四月二十四日条等で「右衛門督」を称したことが知られているが、「細川両家記」「足利季世記」等の軍記物では、「上総介」「総州」と記されている。軍記物では義英以降の義就流畠山氏当主を、「上総介」「総州」と記す場合が多く、後年総州家とでも言うべき認識が形成されていたようだ。

天文十年（一五四一）十月、木沢長政が細川晴元に反旗を翻すと在氏もこれに連座し、同十二年（一五四三）

正月、河内飯盛城が陥落して没落した。在氏は細川氏綱の乱が始まると、細川晴元政権に帰参して家督を回復したが、天文十八年（一五五九）五月九日、堺北庄で三好長慶・遊佐長教等の軍勢に大敗して、再び没落した。在氏は天文二十四年（一五五五）九月十一日に河内真観寺に判物を発給したことが、「真観寺文書」（『真観寺文書の研究』、八尾市立歴史民俗資料館、二〇〇一年）七号に見えるが、これが在氏の終見で、以後の動向は不明である。

## 七 畠山尚誠の動向

『観心寺文書』二四九号、天文十八年（一五五九）六月四日付畠山尚誠判物の押紙に「小次郎殿ノ御曾子次郎殿」とあり、畠山在氏の嫡子とみられる尚誠は、同押紙に「生年十九歳之時」とあり、そこから計算すると、享祿四年（一五三一）の生まれとなる。前出の『天文日記』天文五年（一五三六）四月五日条の「畠山小次郎子息」を尚誠とすると、尚誠は享祿四年（一五三一）の誕生なので、やや幼少の感はある。しかし、義英が八歳で元服したこともあり、あながち否定はできない。

尚誠の「尚」の字は、畠山尚順との関係が想起される。前述の如く、尚順は義英と大永元年（一五二一）に和睦して、足利義植の再挙に協力しているからである。しかし、尚順は尚誠が生まれる以前の大永二年（一五二二）七月に没しており、尚順と尚誠の関係は不明である。

在氏が細川晴元政権に帰参すると、尚誠は上洛して御供衆となった可能性があるが<sup>(16)</sup>、詳細は不明である。確実な尚誠の初見史料は、史料Fと同じ天文十八年（一五五九）六月四日付で、観心寺に発給された一連の文書である。その約一ヶ月前の同年五月九日、堺北庄合戦で木沢矩秀を中心とする畠山在氏軍が敗北したことは前述したが、六月二十四日には摂津江口で細川晴元の軍勢が三好長慶の軍勢に大敗し、晴元政権は崩壊した<sup>(17)</sup>。晴

元政権の崩壊は、これと結んだ畠山在氏・尚誠の没落をもたらした。尚誠は困難な時期に、義就流畠山氏当主の座に就いたのである。

畠山尚誠の活動はよく知られていない。その動向を探る上で重要と考えられるのが次に示す史料である<sup>(18)</sup>。

右意趣者、属入国、<sup>并</sup>為武運長久、和州宇智郡供領三千疋、令寄進候訖、於永代、不可相違者也、仍状如件、  
天文廿一壬子六月廿八日

尚誠（花押）

紀州伊都郡隅田

八幡宮

文中に大和の宇智郡で「三千疋」を寄進すると見え、尚誠が大和宇智郡に勢力を持っていたことが分かる。また、文面の「入国」「武運長久」から、尚誠が何らかの軍事行動を行っていたことが窺える。それを裏付ける史料を次に示す<sup>(19)</sup>。

栄山寺

禁制

- 一 乱妨<sup>ニ</sup>藉之事、
- 一 放火事、
- 一 兵粮矢銭懸取事、
- 右条々堅令停止訖、若於違犯之輩者、可処罪科者也、仍下知如件、

天文廿一年五月十三日

平左衛門大夫（花押）

遊佐越中守（花押）

平左衛門大夫・遊佐越中守は、「二見文書」三五号の平左衛門大夫誠佐・遊佐越中守家盛と花押が一致するところから、実名が誠佑・家盛と判明する。この両名のうち、遊佐家盛が後掲する「良尊一筆書写大般若經奥書集」<sup>(20)</sup>に、畠山尚誠の武将として記されているので、平誠佑・遊佐家盛ともに畠山尚誠の内衆であろう。

栄山寺は大和国宇智郡にある寺院である。ここに畠山尚誠の内衆が禁制を掲げたことは、この地方で尚誠が、何らかの行動を起こしていた証左となろう。この時の尚誠の活動は、日記類の他、「細川両家記」「足利季世記」等の軍記物にも見いだせないが、「良尊一筆書写大般若經奥書集」天文二十一年（一五五二）六月七日の記事には、次のように記されている。

去<sup>月</sup> 廿三日、聡州<sup>ソウ</sup>御出張アルヘシトテ、堺辺其外諸所之牢人衆内々被相催、屋形八高野衆各御伴申、五千八カリニテ内ノ郡マテ御出陣在之云々、然処、高屋衆安見大将ニテ内郡ヘヨセカケ半死半生ニ戦、聡州方の遊佐越中殿ヲ始トシ、高野法師以下百八カリ高屋方ヘ打取了、手負其外河ヘハマリテ死物数不知云々、聡州之陣則破了之間、諸牢人失便申事且止了、御

畠山尚誠は『金剛寺文書』二七〇号より、永禄元年（一五五八）四月に至っても「次郎」を称していることが知られている。「聡州」は「総州」のことで、前述の如く、「細川両家記」「足利季世記」等の軍記物で、義就流畠山氏の当主を示す代名詞的に用いられていることから、この史料の「聡州」は、尚誠であろう。「天文間日次記」には、栄山寺に禁制を掲げた遊佐越中の名も見え、この記事は、天文二十一年（一五五二）五月から六月にかけての畠山尚誠の活動を記していると言えよう。

畠山尚誠は、なぜ天文二十一年（一五五二）五月から六月にかけて、河内奪回戦を行おうとしたのであろうか。



河内では、天文二十年（一五五一）五月の遊佐長教の暗殺、翌二十一年二月の萱振一門の肅清等、政長流畠山氏の内紛を思わせる事件が、相次いで発生した。またこの時期、三好長慶に京都を追われた細川晴元が、丹波を中心に長慶打倒をめざして活動していた<sup>(21)</sup>。このような状況を利用して尚誠は河内奪回をもくろんだが、当時は三好長慶の全盛期であり<sup>(22)</sup>、それと結ぶ政長流畠山氏の基盤は強固なもので、尚誠の企みは失敗した。

弘治二年（一五五六）七月、畠山高政の内衆安見宗房が大和の布施氏を攻めた。その際、畠山尚誠が布施氏に加勢したことが、「嚴助往年記」（『改定史籍集覧』二十五）に見える。尚誠は大和・河内・紀伊国境付近の局地勢力になってしまったようだ。尚誠は永禄元年（一五五八）四月二十一日、金剛寺に判物を発給したことが、『金剛寺文書』二七〇号に見える。永禄八年（一五六五）五月の足利義輝暗殺後、同年八月二十六日に一乗院覚慶（後の足利義昭）の求めに応じていることが知れるが<sup>(23)</sup>、これが現在確認できる尚誠の終見であり、没年は分らない。

「続応仁後記」では、尚誠は足利義輝の暗殺後、松永久秀の仲介で畠山高政の家臣になったとする。もとより良質の史料で確認できないが、状況的には肯定できそうな気もする。尚誠の婚礼が『観心寺文書』六〇六号に見えるが、子息の有無は不明である。ただ、『信長公記』（奥野高広・岩沢愿彦氏校注、角川文庫、一九六九年）に別所「山城が女房は畠山総州の娘なり」と記されており、別所吉親の妻は、尚誠が在氏の子供の可能性がある。尚誠の没年、男子の有無も確認できないほど義就流畠山氏の勢力は凋落したのであった。

## おわりに

畠山尚誠をもって、本章の終わりとしたい。義就流畠山氏の残党は、永禄年間に至っても、三好・畠山（政長流）の抗争や、三好・松永の抗争に姿を見せる。だが、かつて畠山政長の子孫達と河内争奪戦を繰り広げた当時

の面影はなく、局地戦を行う程度であり、政局の大勢には影響を及ぼさなくなっている。だが、天文末年から弘治年間に至っても、畠山尚誠が紀伊・河内・大和国境の山間部で活動している。これは義就流畠山氏の根強い地盤がこの地域にあったことを示している。

義就流畠山氏凋落の理由は、家臣団構成、分国支配体制等も含めた研究が必要であるが、義豊・義堯と、二人も当主が戦死したことを見逃してはならないだろう。常に管領家畠山氏嫡流を自負していた義就の子孫達だが、義英以降は戦死した義堯を除き、その没年が不明なことも、義就流畠山氏の政治的立場を、よく示していると言えよう。

#### 註

- (1) 義就流畠山氏家系を記した系図としては、「両畠山系図」(『続群書類従』五上)、「清和源氏系図」(『続群書類従』五上)、「畠山系図」(『系図纂要』10下)、「畠山系図」(『尊卑分脈』三篇、新訂増補国史大系)、「畠山家譜 系図」(内閣文庫本)、「津川本畠山系図」(今谷明氏「津川本畠山系図について」『守護領国支配機構の研究』第二章付論、法政大学出版局、一九八六年、初出一九八六年)等がある。

今谷明氏は「津川本畠山系図について」において、畠山氏諸系図を整理されているが、「清和源氏系図」および「畠山家譜 系図」には言及されていないなど、立論そのものに問題が多い。特に「津川本畠山系図」と密接な関係があると考えられる「畠山家譜 系図」にほとんど言及されていないことは、この論考の致命傷と言えよう。

- (2) 拙稿「戦国期河内畠山氏の動向」(『國學院雑誌』八三八、一九八二年)。本書では、義就流畠山

氏の関する部分を大幅に改稿した上で、四部三章の一部とした。以下、本章と本書四部三章との重複する部分は、特に必要な場合を除いて注記はしない。

(3) 以下、本章のA～Fの史料番号と、『大日本古文書』の史料番号を記す。A 二〇八号、B 一六四号、C 五七六号、D 二二一号、E 二三六号、F 二四八号。

(4) 畠山政国の出自に関しては、米原正義氏「畠山文芸の普及」(『戦国武士と文芸の研究』一章二節、桜風社、一九七四年、初出一九六五年)に従った。

(5) 設楽薫氏が「長禄四年記」を翻刻されたことで、筆者の推定が正しかったことが立証された。詳しくは、設楽薫氏「室町幕府評定衆撰津之親の日記『長禄四年記』の研究」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三、一九九三年)を参照されたい。

(6) 拙稿「畠山氏の内証と紀伊」(本書二部二章)。

(7) 正守護の認定は、今谷明氏「室町時代の河内守護」(同氏前掲書二章、初出一九七六年)によった。

(8) 今谷明氏註(1)前掲論文。

(9) 今谷明氏「京兆専制 後期幕府の権力構造」(同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部一章、岩波書店、一九八五年、初出一九七七年)。

(10) 畠山義英の内衆遊佐元繁は、明応九年(一五〇〇)河内で判物を発給するなど、義英の内衆は永正元年(一五〇四)以前から河内で権力を行使していた。小谷利明氏「戦国期の守護権力 判物の発給者」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部一章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九九二年)参照。

(11) 拙稿「紀伊守護家畠山氏の家督変遷」(本書一部一章)。

(12) 地名の比定は『奈良県の地名』（日本歴史地名大系三〇、平凡社、一九八一年）「小川郷」「小川城跡」の項による。なお、本章での大和の地名比定は同書による。

(13) 『大日本史料』九編之十三、大永元年十月二十三日条では「廿六日」とするが、「続南行雜録」中の「祐維記抄」では、「廿四日」とする。

(14) 「上杉家文書」一六〇号。本章では『新潟県史』（資料編三、中世一）を使用し、同書の整理番号を記した。

(15) 井上鋭夫氏『一向一揆の研究』五章三節二（吉川弘文館、一九六八年）、『富山県史』（通史編、中世）五〇〇頁等。

(16) 『蜷川家文書』（『大日本古文書』家わけ二十一）三五八五号に「畠山次郎」と見え、この史料の注記に「尚誠力」とあることより、拙稿「天文年間の畠山氏」（『和歌山県史研究』一六、一九八九年）は、畠山尚誠が御供衆になったと考えた。『蜷川家文書』の「畠山次郎」が「尚誠」だとすれば、かつて畠山義豊が河内に出陣した際、嫡子義英が京都に残ったのと同様の事例と言えよう。

(17) 今谷明氏「細川・三好体制研究序説 室町幕府の解体過程」（同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部四章、初出一九七三年）。

(18) 「隅田八幡神社文書」(『和歌山県史』中世史料一)三四号。

(19) 「栄山寺文書」(『五條市史』史料)一二七号。

(20) 稻城信子氏著『日本中世の経典と勸進』(塙書房、二〇〇五年、初出一九九五年)。

(21) 長江正一氏著『三好長慶(人物叢書)』(吉川弘文館、一九六八年)によれば、細川晴元は天文二十

一年(一五五二)四月以降、細川晴元が反三好党として活動し、同年十一月に至り、將軍足利義輝もここに合流したとする。現時点で史料は発見されていないが、畠山尚誠の行動は、細川晴元や足利義輝の動きと関係している可能性が高いと考えている。

(22) 今谷明氏「三好・松永政権考」(同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部五章、初出一九七五年)。

(23) 久保尚文氏「和田惟政関係文書について」(『京都市立歴史資料館紀要』一、一九八四年)。

「追記」 畠山勝王に関する論考として、久保尚文氏が「両畠山家融和と越中守護代家更迭 長尾為景越中進攻問題の再検討」(『富山史壇』一四四、二〇〇四年)を発表された。全体的には興味深い内容が記されているが、畠山氏関係の記述に関しては論証面に問題が多い。たとえば、両畠山氏融和の根拠とされた「畠山家譜」であるが、この史料は潤色が著しく、使用に値しない史料である。そのような史料を使用する

ことは、畠山氏に関する氏の考証が、信用に値しないことを意味している。また、氏の畠山氏に関する事実認定も現在の研究水準を理解しているとは言いがたい。この論文は先に結論があつて、それに都よい史料を無批判に使用し、先学諸兄の学説の恣意的解釈を行ったとは思えず、本章の論旨に影響を与えることは無いと考えている。

する  
合の  
響を

## 第五章 天文年間河内半国体制考

### はじめに

畠山氏は永徳二年（一三八二）二月に基国が守護に就任して以来、元龜四年（一五七三）六月に畠山秋高が遊佐信教に暗殺されるまで、一時細川氏や三好氏に河内を明け渡した時期があったとはいえ、河内の守護家であった。畠山氏は持国の跡目問題から、義就流と政長流に分裂して抗争を繰り広げてゆくが、常に両者が戦い続けていたわけではない。一時的ではあったが、両者の間で和睦が成立していた時期がある。また、畠山氏と三好氏との間でも、和睦が成立していた時期がある。現在大方が認める所となっていると思われる河内における両畠山氏、あるいは畠山氏と三好氏の和睦の時期を、次に示してみよう。

永正元年（一五〇四）十二月から永正四年（一五〇七）十二月にかけての、畠山尚順（政長流）と畠山義英（義就流）の和睦の時期。

天文初年から天文十一年（一五四二）三月にかけての、畠山晴熙・弥九郎（政長流）と畠山在氏（義就流）による半国体制の時期。

永禄十一年（一五六八）一〇月以降の畠山秋高（政長流）と三好義継による、半国守護体制の時期（<sup>1</sup>）。

これら三つの時期の中で、今回検討の対象とするのは、の時期である。それは、次に説明するように、筆者と今谷明氏の見解が大きく異なっているからである。

天文年間の河内で半国守護体制がとられていたことを、最初に指摘されたのは今谷明氏である。今谷氏は天文

七年（一五三八）七月から天文十一年（一五四二）三月にかけて、河内では政長流の畠山政国（弥九郎のこと）と義就流の畠山在氏による半国守護体制がとられ、畠山政国は高屋城で南半国を支配し、畠山在氏は飯盛城で北半国を支配したとされた<sup>（2）</sup>。なお、今谷氏は『藤井寺市史』一卷では、天文三年（一五三四）から、半国守護体制がはじまったと記述している。だがこれでは、筆者が今谷説を批判する例として提示した、『金剛寺文書』（『大日本古文書』家わけ七）二五四号、天文六年（一五三七）十二月十三日付の木沢長政判物に対し、今谷氏が「観心寺という南河内に対する安堵状の性格からみて、この書下は在氏が河内北半国を正式に管轄する以前の段階に出されたもの」<sup>（3）</sup>と批判されたことの説明がつかない。このように今谷氏の記述は自己矛盾を露呈しているが、河内の半国守護体制を指摘した今谷氏の見解は卓見であつた。

筆者は今谷氏の研究をよりどころに畠山氏研究を志した者であり、今谷氏から受けた学恩は多大のものがある。しかし、畠山氏に関する史料を収集していくうちに、前出の『金剛寺文書』のごとく、今谷氏の南北分割の見解では説明できない史料が存在することを発見した。そこで、筆者なりの見解をまとめ、河内の半国守護体制は、南北分割方式ではなく、和泉のような共同遵行方式であるとした<sup>（4）</sup>。だが、筆者自身の若気の至りもあり、詳しい説明も行わず、守護代家の発給文書を室町幕府奉行人奉書と同一線上で論じたことと、隣国和泉の共同遵行体制に引きずられすぎたことが、自説の弱点であつたことは否めない。

ただし、筆者は今谷氏の提唱した河内の南北分割説が成立するとは考えていない。よって、天文年間の河内半国体制について再検討を加え、その実像に迫ってみたい。本章で半国守護体制とせずに、半国体制とするのは、守護の任免権が幕府（細川晴元政権）にある以上、半国体制が両畠山氏和睦によって成立したとしても、これが直ちに幕府の承認を受けたとは限らないからである。

なお、今谷氏は天文十四年（一五四五）以降も、畠山晴熙（北半国）と畠山政国（南半国）の間で、河内に半国守護体制がとられたかのようにされている。しかし、天文十四年（一五四五）以降の河内分割を示す史料は存



在せず、これは史料の根拠のない全くの絵空事である。

# 一 南北分割体制の是非について

今谷明氏の提唱された、地域による河内の南北分割が、今谷氏の提示された『石清水文書』（『大日本古文書』家わけ四）六 拾遺四九号から明言できるか否か、その史料を掲げて検討してみよう。

宮

A 石清水八幡宮若宮造営同御遷○要脚河内国段銭事、早守事書旨、相懸之、可被致其沙汰、而於奉行者、如先々、存善法寺、至納下者、可為等祥蔵主之由、所仰下也、仍執達如件

天文十年六月廿日

前丹後守晴秀 在判

大和守堯連 在判

畠山

右金吾代

畠山

弥九郎殿代

B 石清水八幡宮若宮造営同御遷宮要脚河内国反銭事、早守事書旨、相懸之、可被致其沙汰、然於奉行者、如先々、存知善法寺、至納下者、可為等祥蔵主趣、被成奉書訖、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件

天文十

六月廿日

晴秀 在判

堯連 在判

遊佐新次郎殿  
(長教)

木沢左京亮殿  
(長政)

史料 A・B は室町幕府奉行人奉書であるが、史料 A・B の本文中や宛先のどこにも、南北分割を説明できる地名や文言はない。したがって、今谷氏が提示した史料からは、河内に義就流畠山氏と政長流畠山氏による半国守護体制が成立していたことは説明できるが、河内の南北分割支配までは説明できないのである。

次に今谷氏は、「天文間日次記」天文二十一年（一五五二）二月十五日条の「萱振上郡代八高屋二居、安見下郡代八飯盛の城に居て」とある記事を、自説の補強史料として提示している。まず「天文間日次記」の天文二十一年（一五五二）という年次であるが、この時点では、河内に半国守護体制は敷かれておらず、すでに遊佐長教も木沢長政も没している。そしてなにより、萱振氏・安見氏ともに政長流畠山氏の内衆であり、片方が義就流の内衆であつたわけではない。「天文間日次記」天文二十一年（一五五二）二月十五日条は、政長流畠山氏が南北に郡代を設置していた史料であり、義就流畠山氏と政長流畠山氏が、河内を分割支配していた史料ではない。

以上の事から、今谷氏の提示した史料からは、今谷氏の言われるような、義就流畠山氏と政長流畠山氏による南北分割体制が説明できないことは、明らかであろう。今谷氏は筆者の河内共同遵行説に対して、「掲げられた史料でそれを言うには無理と飛躍があり」「推測は全く成り立たない」とされた。しかし、今述べてきたように、今谷氏が提示された史料から「守護所、守護代まで明確に南北に分かれている」ことを論証するのは、今谷氏が筆者を批判したのと同様に掲げられた史料でそれを言うには無理と飛躍があると、言わざるを得ない。

今谷氏の河内南北分割説で説明のつかない史料は、種々存在するが、その中で、最も重要と考えられるのは、小谷利明氏が指摘された「壺井八幡及通法寺文書」中の木沢長政奉書である（5）。したがって、この文書を次に掲げて検討してみよう。

○御寺領事、任先例、段銭以下臨時非分之課役等之儀、可有免除之由、被仰出、則被置 御判候、珍重候、恐々謹言

天文九

十一月九日

通法寺雜掌

（木沢）  
長政（花押）

史料○は、書状の形式をとっているが、内容は木沢長政が通法寺に寺領の課役免除を伝えているので、木沢長政が権力を行使しているのとみるのが妥当であろう。文中に「則被置 御判候」と見えるので、守護家（畠山在氏）から判物が発給されたとみられるが、現在のところ知られていない。また、天文九年（一五四〇）が、河内半国守護体制の時期であることは、異論がないだろう。

通法寺は、古市郡にある寺院なので、史料○より、木沢長政が古市郡で権力を行使していたことが判明する。実は、この古市郡が問題なのである。今谷氏が南半国守護の拠点とされた高屋城も、この古市郡に存在した城なのである。つまり、今谷氏の南北分割説では、北半国守護代の木沢長政が、南半国守護の拠点がある古市郡で権力を行使したことの説明がつかないのである。

史料○より、今谷の言われる河内南北分割説が成立しないことが、明白となった。では、河内の半国体制とは如何なるものだったのであろうか。その時期と支配体制について、次節以下で検討していきたい。

## 二 畠山左京太夫に関して

河内が半国体制になったのはいかなる事情によるものだろうか。以前旧稿で天文三年（一五三四）の畠山左京太夫の家督相続のころからではないかとしたが、その是非を含めて、畠山左京太夫長経の動静について、再検討してみよう。

政長流畠山氏と義就流畠山氏の抗争は、將軍家・細川氏の家督争いも加わって、享禄年間には、將軍足利義晴・細川高国と結ぶ政長流の畠山植長と、堺の足利義維・細川晴元と結ぶ義就流の畠山義堯の対立となった。享禄四年（一五三一）六月、細川高国が摂津大物崩れの戦いで敗死した後、足利義維の堺公方府内で三好元長ら阿波国衆と摂津国衆の間の内紛が生じた。それとともに木沢長政が直接細川晴元につこうとしたため、畠山義堯は享禄四年（一五三一）八月と翌五年五月、木沢長政の居城飯盛城を攻撃した。木沢長政の救援要請を受けた細川晴元は、本願寺法主証如に一向一揆を起こすように求めた。これに応じた証如の指導で一向一揆が起こり、畠山義堯は同年六月、河内石川道場で自刃に追い込まれた。一向一揆は堺で三好元長をも自殺させて、堺公方府を崩壊させた後、細川晴元らの思惑をも越えて晴元らと敵対するに至った。この時点で細川高国はすでになく、堺公方府が崩壊したことで、將軍足利義晴と細川晴元の間を遮るものは無くなり、両者は結ぶこととなった。

細川晴元が足利義晴と結んだことは、木沢長政も足利義晴方となったことを意味し、畠山植長の立場を苦境に追いやった。本願寺と細川晴元方は、天文二年（一五三三）六月から翌三年五月二十九日まで、表面的には一時和議を結んだ。この間、天文三年（一五三四）正月、畠山植長の弟基信が大坂の本願寺に入り、植長が旧細川高国派とともに本願寺と結ぶ姿勢を示した<sup>(6)</sup>。一向一揆と細川晴元・足利義晴方との対立が再燃した中の、同年八月十六日に、畠山左京太夫が家督を相続した<sup>(7)</sup>。なお、畠山左京太夫の実名は、諸系図類をもとに普通「長経」とする。これを否定する史料はないが、肯定できる良質の史料もない。よって本稿では、適宜、畠山左京太

夫、あるいは畠山長経と記す。

畠山左京太夫の家督相続について石田氏は、「河内に再進出した優勢な晴元・木沢方への高屋での妥協的対処であつた」とされた。つまり石田氏は、遊佐長教が本願寺と結ぶ畠山植長を更迭して長経を当主にたて、足利義晴とも細川晴元とも木沢長政とも妥協しようとした、とされたのである。

將軍足利義晴は天文三年（一五三四）六月二十九日、近江桑実寺から同坂本に至り、同年九月三日に帰京している<sup>（8）</sup>。したがって、畠山左京太夫の家督相続が行われた天文三年（一五三四）八月十六日には、義晴は近江坂本に滞在していたのである。畠山左京太夫の家督相続は、義晴が京都に戻る直前の機会を捉えて行われたと考えられる。このように考えると、畠山左京太夫の家督相続は、畠山植長が木沢長政と対決するために本願寺と同盟したことで、足利義晴とも対決することが必至となつたため、遊佐長教らが河内での立場を維持するために、先手を打つたと見る事ができよう。

四部一章で指摘したように、畠山左京太夫長経が政長流の当主であつた時期は短く、天文五年（一五三六）五月十八日には、畠山播磨守が当主として高屋城に入つていたことが判明する。しかし、一般に畠山長経は、天文十年（一五四一）八月に殺害されたとされる。だがそうすると、天文五年（一五三六）から天文十年（一五四一）にかけて、畠山左京太夫長経の名が史料に見えないのが疑問として残る。まず、『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）天文五年（一五三六）五月十八日条を見てみよう（必要部分のみ抜粋）。

D 又播磨守とて尾州弟、高屋に遊佐新次郎婦・民部卿婦とひとつになり、屋形などと申候とて

「播磨守」は畠山植長の弟晴熙である<sup>（9）</sup>。天文五年（一五三六）五月十八日の時点で畠山晴熙が「屋形」を称していたと言うことは、晴熙が高屋城の城主となつていたことを意味する。つまりこの時点では、すでに畠山

左京太夫は失脚していたのである。

畠山長経が天文十年（一五四一）八月に殺害されたとする説の拠り所は、『史料綜覧』巻十の記事である。たとえば『史料綜覧』が典拠とした史料のひとつ「足利季世記」（『改定史籍集覧』十三）では、畠山長経が殺害されたのは「其比」と記されているだけで、いつごろ殺害されたのか明確ではない。畠山長経の殺害された時期を、天文十年（一五四一）と記しているのは、「続応仁後記」（『改定史籍集覧』三）や「畠山系図」（『系図纂要』10下）である。『史料綜覧』が典拠としてあげた史料は、いずれも後世に作成された比較的価値の劣る史料であり、そのまま信用することはできない。

「続応仁後記」では「天文十年辛丑九月六日（中略）且又頃年、河州高屋ノ城主畠山尾張守長経」を「弑セリ」とし、『系図纂要』本「畠山系図」では長経を「十年八ノ 鳩殺」としている。ただ、「続応仁後記」は、「足利季世記」よりも潤色が著しいとされる軍記物であり、事実、畠山長経の殺害も、木沢長政の反乱と混同して記述している。また、『系図纂要』本「畠山系図」の割書は、長経の項以外でも誤りが多く、全体的に信用できない。よって、「続応仁後記」や『系図纂要』本「畠山系図」をもとに畠山左京太夫長経が、天文十年（一五四一）八月に殺害されたとするには賛成できない。一方、諸系図類の中でも「畠山系図」（『寛政重修諸家譜』二）は、畠山長経が「畠山の家を継いで、程なくして」殺害されたと記しているので、史料Dとのつながりもよい。

畠山左京太夫長経が没した理由は、良質の史料には見えない。したがって、「足利季世記」等のやや価値の劣る軍記物か、諸系図類にしか死亡理由は見えないが、いずれも家臣に殺害されたとしている。状況的にはあり得ないことではないが、確証もないので、長経が殺害されたか否かに関しては、ひとまず保留としておきたい。

では、畠山左京太夫はいつ頃失脚したのであるうか。その時点を明示することは難しいが、ひとつの手掛かりとなるのが、『私心記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻）天文四年（一五三五）四月七日条である。それに

は、「高屋衆等打出候」と記されている。これは、高屋衆が本願寺に対して、敵対行動を行ったことを意味している。畠山植長が本願寺に与したことで、それに反対した遊佐長教らが畠山左京太夫を擁立し、天文三年（一五三四）八月に家督を継承した。それから高屋衆が本願寺に対して軍事行動を起こすのは、天文四年（一五三五）四月である。七カ月以上の間、高屋城に目立った動きがなかったことは、内部に対立が存在していたことが推測できよう。

前述の如く、畠山植長の行動には危機感をもって結束した高屋城の政長流畠山氏内衆も、木沢長政らとの和睦「半国体制にまでは一致していなかったからではないだろうか。ひとまず木沢長政らとの和睦も進めようとする遊佐長教と、反対する勢力との確執の中で、反対派に与した畠山左京太夫が失脚したのであるう。

以上のことから、畠山左京太夫の動静は、次のようにまとめられるだろう。諸系図類等で実名を長経とする畠山左京太夫は、天文三年（一五三四）八月に政長流畠山氏の家督を相続したものの、政長流畠山氏内部の対立で失脚した。その時期は天文四年（一五三五）四月以前と推定できる。また、畠山左京太夫長経が天文十年（一五四一）八月に殺害されたとする説は、良質の史料で裏付けがとれず、时期的にも不自然であるので、否定してよいだろう。

### 三 河内半国体制の確立

畠山左京太夫が失脚した後に、高屋城主となったのが、畠山植長の弟播磨守晴熙である。だが、畠山晴熙が幕府から家督の継承を承認されたとする史料は見当たらない。晴熙の家督継承に関する史料が散逸した可能性は否定できないが、実際のところ、晴熙は家督の継承を幕府から承認されなかったのではないか。この後、畠山弥九郎の家督継承の際、畠山晴熙は抵抗する気配もなく、天文七年（一五三八）七月に、「高屋方屋形」を「上表」

したことが『天文日記』同年八月十日条に記されている。あるいは畠山晴熙は、正式な政長流畠山氏の家督継承者が決定するまでの、つなぎであつたのかも知れない<sup>(10)</sup>。

天文三年(一五三四)八月の畠山左京太夫の擁立劇の時点では、將軍足利義晴は近江坂本にあり、細川晴元も摂津芥川にあつて、いずれも在京していなかつた。つまり、幕府と細川晴元政権が、畿内一帯を十分に掌握していなかつたため、畠山左京太夫の擁立劇を認めたのであろう。しかし、天文四年(一五三五)になると、摂津・河内・和泉方面の情勢に流動的な要素はあるものの、すでに將軍足利義晴は京都にあり、政局は安定しつつあつた。このような状況下で守護代遊佐長教らの都合でおこなつた、畠山左京太夫の失脚と畠山播磨守晴熙の擁立を認めることは、幕府としてできなかったのであろう。

また、紀伊の畠山植長の動向も看過できないものがある。三部三章で指摘したように、植長は弥九郎の家督相続には反対であつた。一度は木沢長政らを追い落とすために、本願寺と同盟した植長であつたが、その本願寺も天文四年(一五三五)後半に細川晴元政権と和睦したことで、摂津・河内・和泉方面の情勢は安定化しつつあつた。したがつて、植長も河内高屋城への復帰を望むようになったのではないのだろうか。しかし、遊佐長教らがそれを受け入れず、幕府としても苦慮したのであろう。以上のことから、畠山晴熙は高屋城主ではあつたが、正式に幕府から認められた守護ではなかつたと言えるだろう。

畠山晴熙の家督継承を幕府が承認しなかつたため、幕府と高屋城の遊佐長教らとの調整が必要となり、その結果、天文七年(一五三八)七月に、畠山弥九郎が「屋形」として、高屋城に入つたのであろう。『天文日記』天文七年(一五三八)七月四日条によれば、畠山弥九郎は細川典厩(おそらく澄賢であろう)が「母儀方之伯父」であり、幕府と細川晴元政権としても都合がよかつたものとみられる。畠山弥九郎が細川氏とつながりがあるということ、義就流の木沢長政が細川晴元の被官だつたことと考えあわせると、畠山弥九郎の家督相続は、縁者を高屋城内に送り込もうとした、細川晴元政権からの押し付けだつた可能性も高い。天文七年(一五三八)八月



二十六日には、畠山弥九郎の政長流の家督相続も幕府から承認された<sup>(11)</sup>。ただし、畠山弥九郎は軍記物や諸系図類にもその名が見えず、関係が分かるのも前出の『天文日記』。天文七年（一五三八）七月四日条のみなので、畠山弥九郎を政長流のどこに位置付けできるのか明らかではない。

一方の義就流畠山氏の動向は如何なるものであったのだろうか。享禄五年（一五三二）六月、木沢長政は主君畠山義堯を滅ぼした後、程なくして畠山義堯の弟在氏を、義就流畠山氏当主に迎えていたことが、「蓮成院記録」（『多聞院日記』付録）天文二年（一五三三）正月の記事から判明する<sup>(12)</sup>。畠山在氏は幕府から家督継承の承認をいつ受けたかは定かでないが、天文二年（一五三三）正月以降の義就流の当主は在氏とみてよいだろう。ただし、当時の義就流畠山氏の実権は木沢長政が掌握しており、河内の支配をめぐる政長流との和睦問題に関して、義就流畠山氏がどう対処しようとしていたのかは、木沢長政の動向が重要となってくる。

木沢長政の姿勢を直接示す良質の史料は知られていない。ただ、「足利季世記」や『寛政重修諸家譜』本「畠山系図」等の畠山長経の家督相続を記した史料には、長経の擁立に木沢長政がかかわったと記している。良質の史料ではないものの、政長流畠山氏の家督相続に、義就流畠山氏の内衆がかかわったと記述していることは、史料の質だけでは済まされない問題を含んでいると考えられる。つまり木沢長政ら義就流畠山氏は、それまでの宿敵とも言える政長流畠山氏との対決姿勢を改め、政長流との妥協路線を採用したこととなるからである。天文三年（一五三四）八月以降、河内で木沢長政ら飯盛城の義就流と、遊佐長教ら高屋城の政長流との戦闘を伝える記録や古文書がないことは、直接木沢長政が畠山左京太夫の擁立にかかわったことを証明できないまでも、木沢長政らが政長流との和睦を支持していたことの傍証になるだろう。

両畠山氏が天文三年（一五三四）に和睦を急ごうとした背景には、將軍足利義晴の帰京問題のほかに、本願寺の動向も無視できないと考える。木沢長政ばかりか遊佐長教も、一向一揆が守護による支配体制を破壊する存在として映っていたものとみられる。そのため、両畠山氏の勢力範囲の線引き等は後回しでも和睦をおこなわな

ければ、両者共倒れに成りかねないと考えたのではないだろうか。とりあえず、両畠山氏の武力抗争をやめることが、河内半国体制の原型となったと言えるだろう。

では、河内半国体制の確立は、どの時点に求めるべきなのであるか。これには、政長流畠山氏と義就流畠山氏の和睦問題とからんだ、高屋城の動向が大きくかわってくる。前述したように、遊佐長教は、天文三年（一五三四）八月に畠山植長を更迭し、畠山左京太夫を擁立することで、一気に木沢長政らとの和睦「半国体制」に持ち込もうとしたのではないか。ところが、植長の本願寺との同盟が、幕府との敵対行為となることでは意見が一致した政長流畠山氏内衆も、半国体制では意見が一致せず、天文四年（一五三五）の畠山左京太夫の失脚、遊佐長教らによる畠山播磨守晴熙の擁立となったのであろう。

したがって、河内半国体制は天文三年（一五三四）八月には、木沢長政と遊佐長教の間で合意に達していたものの、政長流内部の問題から、実施は天文四年（一五三五）にずれこんだ。その結果、天文三年（一五三四）八月の時点とは政治情勢が変化し、遊佐長教らが新たに擁立した畠山晴熙の家督相続を幕府は承認しなかった。幕府の公認のもとに河内の半国守護体制が確立するのは、畠山弥九郎の家督継承が幕府から承認された、天文七年（一五三八）八月にずれこんだのである。

#### 四 河内半国体制の様相

天文年間の河内半国体制が、今谷氏の言われるような南北分割体制でないことは、すでに第一節で論証した。では、政長流と義就流の畠山氏は、どのような支配体制をとっていたのであろうか。

『天文日記』天文五年（一五三六）七月二十八日条に「遊佐内河内両郡代」と見える。「遊佐」は遊佐長教のことであり、「両郡代」は上郡代と下郡代、つまり南北の郡代のことである。この記事より、政長流畠山氏の守

護代遊佐長教が、河内の南北に郡代を配置し、支配する体制を整えていたことが分かる。義就流畠山氏が南北に郡代を配置していた確証はないが、奉行人による支配体制がとられていたことが明らかにされている<sup>(13)</sup>。

天文年間の河内半国体制の時期、畠山氏が幕府の命令を遵行した事例は少ない。ひとつは今谷氏が指摘した第一節の史料A・Bである。この史料A・Bだけでは、第一節で述べたように、河内の遵行体制は分からない。史料A・B以外に、幕府の動向が分かるのが、次の史料である。

E「披露事記録」天文八年（一五三九）三月十九日条<sup>(14)</sup>。

一 公人奉行諏信、披露 伊勢守貞孝言上御料所河州日置庄事、度々雖被成御下知、干今不事行、畠山右金吾代遊佐・木沢以下、重而被成奉書旨被申之、仍御裁許

日置荘は河内国丹南郡にある荘園である。畠山氏で名が見えるのは在氏であり、弥九郎の名は見えない。木沢は木沢長政であるが、遊佐は本書四部三章で述べたように、当時の在氏の家臣の中に、遊佐氏が見えないことから、同書の註記のとおり、遊佐長教と見るのが妥当であろう。日置荘では木沢長政と遊佐長教の両守護代による遵行体制がとられていたことが分かるが、旧稿で述べたように、和泉と同様に共同遵行体制と考えてよいのである。実際に河内の国に利害関係をもつ勢力が、どのように半国体制に対処したのかを検討することで、明らかにしていきたい。

本願寺は天文四年（一五三五）の細川晴元政権との和睦まで、摂津・河内・和泉で一向一揆を催して、武家側から激しい弾圧を受けていた。和睦の後、寺院や道場の再興・門徒の還住等で、守護勢力との交渉をおこない、河内でも当然、木沢長政や遊佐長教と交渉を行っている。

本願寺は河内の出口と久宝寺の御坊の再興にあたり、畠山在氏と遊佐長教の了解を得るように、天文五年（一五三六）十月、木沢長政が本願寺に命じている<sup>(15)</sup>。出口は北河内の茨田郡、久宝寺は中河内の洪川郡にある寺

院である。いずれも、寺院の再興にあたり、義就流の畠山在氏、政長流の遊佐長教の了解が必要であった。久宝寺は天文九年（一五四〇）に木沢長政と遊佐長教から再興に異存がない旨が了承されている<sup>（16）</sup>。

また、「はじめに」で示したように、天文六年（一五三七）十二月十三日には木沢長政が寺領の諸役免除の判物を発給し、同二十五日には遊佐長教も同様の判物（『金剛寺文書』二五八号）を発給している。金剛寺は南河内の錦織郡にある寺院で、この時期の寺領は金剛寺周辺であった<sup>（17）</sup>。金剛寺の事例から、南河内でも、義就流畠山氏と政長流畠山氏が権力を行使していたことが分かる。

史料Eの場合、幕府が義就流畠山氏の木沢長政と政長流畠山氏の遊佐長教の両方に命じていることから、共同遵行体制のようにみえる。ただしこれは、長年にわたる義就流畠山氏と政長流畠山氏の抗争の結果生じた複雑な利害関係の調整を、義就流の木沢長政と政長流の遊佐長教に委ねたためであったと推定できる。このように、幕府にとって河内半国守護体制は、木沢長政と遊佐長教を核とした、現地任せの支配体制であった。そのため、細川晴元の被官である義就流の木沢長政のほかに、政長流にも細川晴元の意を反映できる人物として、畠山弥九郎が当主に迎えられたのであろう。

以上、見てきたように、義就流畠山氏と政長流畠山氏は、南北河内を問わず、権力を行使していたことが分かる。なぜこのようなことが行われたのかと言えば、両畠山氏の和睦の条件に帰結することができるだろう。以前拙稿でも述べたように、両畠山氏の長年にわたる抗争によって、河内における両者の勢力範囲は複雑に入り組み、北河内は義就流の管轄、南河内は政長流の管轄と、簡単に分割できるような状況ではなかった<sup>（18）</sup>。したがって、義就流と政長流の権利関係が錯綜するような場所では、義就流の実力者である木沢長政と、政長流の実力者である遊佐長教が、利害関係を調整しながら、分国支配をおこなったとするのが、河内半国体制の実像であったと言えるだろう。

後年、政長流畠山氏の有力内衆丹下盛知は、このような河内の支配体制について「先年当国之儀、木沢と兼對

候時も、左京亮与申合、半分宛令知行候」(19)と記している。「半分」とは木沢長政と遊佐長教による河内の支配体制を、同時代の人々が、両畠山氏が権力の行使を分割して支配していたとの認識があったことを示している。したがって、木沢長政と遊佐長教による河内の支配体制は、両者の権力がそろってひとつになると言う意味から、河内半分体制とでも言うべき体制であった。

## おわりに

長年にわたる両畠山氏の抗争は、足利氏の將軍職を巡る争いや、細川氏の家督を巡る争いともからんで展開していった。これらの抗争が一向一揆を引き起こし、幕府 守護体制そのものが、崩壊する危機に瀕していた。そのため、足利義晴と細川晴元が和を結ぶと、必然的に両畠山氏も講和を迫られることとなった。両畠山氏は、具体的な支配地域の確定は後回しにしても、とにかく戦闘の停止が求められたのであろう。このような状況下で、天文年間に河内でおこなわれた半国体制は、とりあえず両畠山氏の武力による抗争を静めるためにとられた方法、つまり休戦協定のようなものであったとみられる。

河内半国体制は、両畠山氏が支配地域を南北に分けるような地域分割体制ではなく、権力の行使を「半分」ずつにする半分体制であったと結論できる。両畠山氏の利害関係は、河内全域で複雑に絡み合っており、地域分割をしたくても、できなかったと言うのが実情であろう。幕府からの命令に対しては、義就流畠山氏と政長流畠山氏が利害関係を調整しながら対処したため、必然的に共同遵行のような形を取らざるを得なかったものとみられる。そのため、本願寺等も義就流・政長流の両者と交渉しながら、御坊の再興等をおこなったのであった。

丹下盛知が前出の書状中に「半分」と書いているところに、政長流畠山氏が半国体制のもとで、河内に十分な権力を行使できなかったことが汲み取れよう。義就流にしても、事情は同様であったと推定できる。両畠山氏の

勢力範囲の確定等、重要事項を先送りした形の半国体制では、当然の事であった。戦後処理も一段落し、河内の情勢が安定化してくると、先送りしたことへの不満が高まったも当然である。天文十年（一五四一）に木沢長政が、幕府に対して反乱を起こした一因に、見方によれば中途半端とも言える、河内半国体制への反発があったと考えてよいだろう。

河内半国体制を支えたのは、義就流では木沢長政、政長流では遊佐長教と言う、それぞれの守護代家であった。政長流の当主畠山弥九郎が、天文十年（一五四一）の木沢長政の反乱に際し、遊佐長教方につかず木沢長政方に走ったり、畠山在氏が、木沢長政と行動を共にすることに対して消極的だったことは、守護家を凌駕する権力を掌握した守護代家に対する守護家の姿を示していると言えよう。

今一つ看過しえないのが、政長流畠山氏の家督問題である。守護代家の遊佐長教による当主畠山播磨守晴熙の擁立と、それを承認しない幕府の図式は、後の遊佐長教による畠山播磨守（一般に政国とする）の擁立の際と、同じ図式と言えよう。天文年間に至っても幕府が家督の決定権を掌握し、遊佐長教らの擁立劇を認めないことは、政長流畠山氏の実情とそぐわない面が多く、幕府と細川晴元政権に不満を持った遊佐長教らが、幕府の体制を変えるべく、細川氏綱の乱に加担することとなった。

河内半国体制は、幕府 守護体制そのものを破壊する恐れのある、一向一揆のような事態に対処するためにとられた、便宜的な方策であった。そのため、和睦の際の重要な要素である、畠山氏の勢力範囲の確定が後回しにされ、河内の支配は、木沢長政と遊佐長教の調整に委ねられたのであった。したがって、河内の情勢が安定化すると、思惑の違いが表面化することは当然の成り行きであった。畠山氏の協調体制が、恒久的なものではなく、便宜的なものだったことが、河内半国体制を崩壊させたと言えよう。

(1) この体制がいつ崩壊したかについては、定説がない。なお、この時期の半国守護体制に関しては、拙稿「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」(本書五部一章)を参照されたい。

(2) 同氏「室町時代の河内守護」(同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七六年)。なお、本章で特に註記をしない今谷説は、これを指すことをお断りしておく。

(3) 同氏「畿内近国における守護所の分立」(同氏著『守護領国支配機構の研究』八章、初出一九八五年)。

(4) 拙稿「戦国期河内畠山氏の動向」(『國學院雑誌』八三八、一九八二年)。以下、本章で旧稿とはこれを指す。なお、旧稿で述べた河内の共同遵行論は、現在では破綻したと考えているので、本書には収録していない。

(5) 『羽曳野市史』四巻、四二八号。この史料に関しては、小谷利明氏からご教示を得た。なお、この史料にかかわらず、本章執筆に際しては、小谷利明氏から、数々の貴重なご教示・ご意見を得たことを、お礼申し上げます。

(6) 小谷利明氏「畠山植長の動向」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)により、天文三年(一五三四)時点での畠山植長・旧細川高国派・本願寺の同盟関係が論証された。

(7) 今谷明氏『戦国期の室町幕府』(角川書店、一九七五年)、石田晴男氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』一向一揆と他勢力の連合について」(『歴史学研究』四四八、一九七七年、後に峰岸純夫氏編『本

願寺・一向一揆の研究』戦国大名論集<sup>13</sup>に所収、吉川弘文館、一九八四年)、および本書四部一章

・三章による。

(8) 『御湯殿上日記』(『続群書類従』補遺)、「二条寺主家記」(『続南行雜録』、『続々群書類従』三)同 日条等。

(9) 畠山晴熙に関しては、森田恭二氏「河内守護畠山氏の系譜をめぐる諸問題」(同氏著『大乘院寺社雑事記の研究』二部五章、和泉書院、一九九七年、初出一九九五年)、および拙稿「天文年間畠山播磨守考」(本書四部二章)を参照されたい。小

(10) 小谷利明氏の研究により、畠山播磨守家は、政長流畠山氏の河内支配において重要であり、特別な位置にあったことが明らかにされている。詳しくは、同氏「守護権力と宗教権力 贈答文書論」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部五章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九九四年)、および『動の河内』(八尾市立歴史民俗資料館図録、一九九三年)を参照されたい。乱

(11) 石田晴男氏註(7)前掲論文。

(12) 「蓮成院記録」では、「木津左京亮殿」と記しているが、「木津」は「木沢」の誤りである。

(13) 小谷利明氏「戦国期の河内守護と一向一揆勢力」(同氏前掲書二部三章、初出一九九八年)。

(14) 桑山浩然氏校訂『室町幕府引付史料集成』上巻。なお、同書では「畠山右金吾」を畠山植長に比定しているが、植長の官途は尾張守であり、「右金吾」つまり右衛門督の官途を得た事実はない。今谷氏註(2)前掲書等より、右衛門督が畠山在氏の官途であることは明らかであり、「右金吾」は畠山在氏である。なお、畠山在氏の立場であるが、日置荘が御料所であることから、代官と見られる。



(15) 小谷利明氏註(13) 前掲論文。

(16) 『天文日記』同年九月二十九日条・十月五日条。

(17) 『大阪府の地名』(『日本歴史地名大系』二八、平凡社、一九八六年)「天野山金剛寺」の項。

(18) 小谷利明氏註(13) 前掲論文では、たとえば、河内国讃良郡秦南泉庵の寺領返付交渉が、天文九年(一

五四〇)に至った等、河内の複雑な状況が明らかにされている。

(19) 『蜷川家文書』(『大日本古文書』家わけ二十一)三 六六〇号、(年不詳)正月二十二日付丹下盛

知 書状。丹下盛知は天文〱弘治年間にかけて活動した畠山氏内衆であるから、この書状の年代もこの範  
囲 と考えられる。詳しくは本書四部一章・五部一章を参照されたい。

## 第五部

### 戦国期の河内支配

## 第一章 戦国期河内国守護家と守護代家の確執

### はじめに

管領家畠山氏は政長流と義就流に分かれはするが、戦国期に入っても、分国の河内・紀伊においては、守護家としての命脈を保っていた。ことに政長流畠山氏は、將軍足利義昭が織田信長に追放され、室町幕府が滅亡するまで守護家として存続している。本章で「守護家」「守護代家」としたのは、畠山播磨守が正式に家督を認められないまま当主としての権限を行使し、また、遊佐長教の没後数十年を経て跡を継いだ嫡子信教の地位が、他の内衆を抜きんでおり、河内においては畠山氏が守護家、遊佐氏が守護代家とも言うべき認識がみられるからである。

以前筆者は拙い小文の中で、天文十四年（一五四五）五月の畠山植長没後の河内を、寧日ともに守護代遊佐長教の領国であるとした<sup>(1)</sup>。これに対して、小谷利明氏、矢田俊文氏の研究では、筆者とは異なった結論に達している。小谷利明氏は、畠山氏被官の発給した文書を詳細に検討され、天文十四年（一五四五）五月の畠山植長没後も河内において、畠山氏当主が分国支配の実権を失っていない事実を明らかにされた<sup>(2)</sup>。矢田俊文氏は、畠山氏当主等の発給文書を検討することにより、戦国期の河内では守護代主導のもとに公権力者たる守護・守護代による重層的支配が行われ、永禄年間に至っても、畠山氏の守護家としての権威は顕在であるとされた<sup>(3)</sup>。両氏の論考はすこぶる重要であり、とりわけ守護家と守護代家の関係に注目する必要がある。

また、畿内一帯の細川氏分国を中心とした戦国期における支配体制を検討された森田恭二氏は、有力国人であ

る守護代とその下に統轄された国人・土豪が細川・三好を擁立する「守護代・国人体制」が成立したとする(4)。河内では遊佐氏が元来国人ではないことから(5)、守護代を有力国人とは定義できないが、国人層の動向は重要である。小川信氏による「畠山家文書」の紹介や(6)。川岡勉氏による「畠山記」諸本の検討(7)、および畠山氏関係文書の紹介は(8)は、従来知られていなかった事実を明らかにしており、重要な指摘が含まれている。

本章ではこれら先学諸兄の業績を基に、天文十八年(一五四九)の細川晴元政権の崩壊以降、元龜四年(一五七三)の室町幕府滅亡に至る河内の政治情勢を、守護家畠山氏と守護代家遊佐氏との関係を中心に、国人層や他の内衆の動向を含め、検討していく。これにより畠山氏の権威や支配が、室町幕府滅亡に至るまで続いた理由の一端を、考察していきたい。

## 一 畠山播磨守と遊佐長教

天文十八年(一五四九)六月、摂津江口の戦いの結果、將軍足利義輝・細川晴元は近江に逃亡し、細川晴元政権は崩壊した。同年七月、細川氏綱を擁した三好長慶が入京して政権確立への地歩を固めた。河内守護代遊佐長教は三好長慶の岳父であり、同盟者として、長慶に全面的に協力している(9)。かかる事態に際し、守護家畠山氏当主はどのように対処したのだろうか。次に関係するとみられる史料を示してみよう。

A 長教・長慶一味参洛事、雖加意見依不同心遁世由其聞候、為事实者尤神妙、猶晴元・定頼・晴光可申候也

十二月十九日

畠山播磨守とのへ(10)

この史料は足利義輝の御内書案である。今谷明氏が史料に註記された如く、遊佐長教は天文二十年(一五五一)

五月に暗殺されているので、史料Aの年代は天文十九年（一五五〇）以前となる。文頭に「長教・長慶一味参洛事」と記していることから、天文十八年（一五四九）以降であろう。よって史料Aの年代は、天文十八年（一五四九）か十九年（一五五〇）と推定できる。

次に畠山播磨守の諱だが、諸系図類や「足利季世記」・「続応仁後記」（『改訂史籍集覧』三）等では政国とする。主に畠山氏関係の古文書を集めた「古今采輯」（東京大学史料編纂所影写本）中に「足利季世記」と同文の遊佐長教書状があるが、その文中に「政国」の名が見える。また、畠山政国とみられる同時期の書状写も、「古今采輯」中に見える。以上のことから、断定はできないものの、畠山播磨守の諱を政国として、本章の記述を進める。

『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）天文二十一年（一五五二）二月十七日条に「畠山播磨入道へ、太刀、梅染十端遣之、宮原浄祐下国二事付候」と記されている。宮原浄祐は『天文日記』天文五年（一五三六）八月二十二日条に「紀州宮原浄祐」と見える紀州の門徒である。『天文日記』天文七年（一五三八）八月二十八日条に「畠山尾州へ以好便宮原浄祐下候間事付候」と記されている如く、宮原浄祐は当時紀伊に在国していた畠山植長と本願寺の間を取り持っている<sup>11</sup>。政国の場合も同様であろう。天文二十一年（一五五二）二月には、すでに畠山政国は、出家して紀伊に在国していた。また、『天文日記』の記事より、「両畠山系図」（『続群書類従』五上）や「畠山系図」（『新訂寛政重修諸家譜』二）に、政国が天文「十九年八月十二日」に没したと記しているのが、誤りであることが分かる。

畠山政国は本書四部一章で述べた如く、惣領名代として、細川氏綱の乱に加担していた。政国は家督の問題もあり、細川晴元政権の打倒は目指したものの、三好長慶・遊佐長教が、將軍をも近江に追いやって敵対するに及び、方針の違いから遊佐長教と袂を分かち、紀伊へ遁世したのである。その背景には、遊佐長教に実権を握られていた河内支配への不満があつたものと思われる。

一方、畠山氏の意を奉じていた丹下盛知はどのような行動をとったのであろうか。『天文日記』には周知の如く、本願寺と交流のあった有力武将の名が見える。河内は浄土真宗の発達した土地であり、本願寺と音信を通じることが重要である。天文二十年（一五五一）正月二十九日条に「（ハ脱カ）遊佐河内守、以直書為年頭之祝儀、太刀（割書省略）三種五荷遣之、使麻生也、丹下備中守へ、三種三荷遣之、走井へ、三種三荷遣之」と記されている如く、遊佐長教とともに本願寺より「年頭之祝儀」を遣わされている。丹下盛知は畠山政国と行動を共にせず、河内にとどまり、遊佐長教とともに河内支配にあたったのである。

この『天文日記』の記事では、遊佐長教とともに、丹下盛知・走井盛秀へ本願寺から「年頭之祝儀」が遣わされている。他の内衆が対象となっていないこと、内容が走井盛秀と同じであることにより、丹下盛知が走井盛秀とともに遊佐長教に次ぐ地位にあつたと考えられる。小谷利明氏が指摘された盛知の直状形式の文書（過書）も<sup>（12）</sup>、この時期に発給されたのであろう。盛知が畠山政国と行動を共にしなかったことは、両者の間に見解の相違が存在していたものとみられ、このことから盛知は、政国の意を奉じていたとは言うものの、遊佐長教の方針を支持していたことが分かる。現時点で遊佐長教の命令を奉じた丹下盛知の文書は見当たらず、前出の過書にも「河州相談」と見えることから、盛知は長教直系の内衆になつたのではない。

遊佐長教は畠山政国の遁世後、政国系の内衆を取り込んでいった。しかし、小谷利明氏の言われる如く、完全に麾下に収めてはいなかった<sup>（13）</sup>。だが、三部一章で述べたように、守護代家遊佐長教のもとで、河内の重層的な支配体制の解消に向けて変化していったと考えている。

## 二 遊佐長教と畠山氏家臣団

細川晴元政権の崩壊は、これと結ぶ義就流畠山氏の没落をもたらしした。宿敵とも言える義就流畠山氏の排除に

成功したことは、河内における守護代遊佐長教主導の分国支配が、安定していたことの証左となろう。以下、畠山植長没後の天文十四年（一五四五）から遊佐長教が暗殺された天文二十年（一五五一）にかけて、河内支配に携わった人物について検討してみよう。史料の關係上年代が前後することを断りしておく。

まず、守護代遊佐長教直系内衆、あるいは遊佐氏被官と言える存在として、四部一章より、走井盛秀・田川純忠・吉益匡弼・萱振賢継があげられる。『金剛寺文書』（『大日本古文書』家わけ七）二六一号、遊佐長教書状に「草部弥介」の名が見える草部氏は、「右衛門尉」が遊佐長教の使者として、天文十年（一五四一）六月四日、本願寺へ赴いたことが、『天文日記』同日条に記されている。永禄七年（一五六四）九月二十九日には、草部助兵衛房が遊佐長教の嫡子信教の判物の副状を発給していることが、『観心寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）二七一号に見える。永正年間に草部伊家が田河（川）実忠・走井康秀と連署した折紙を発給していることより<sup>(14)</sup>、草部氏も守護代家遊佐氏被官と見られる<sup>(15)</sup>。

『天文日記』天文十二年（一五四三）正月二十日条に「菱木孫左衛門於遊佐内三番メ之年寄云々」と記されている菱木氏は、「真観寺文書」四一号に、走井康秀との連署折紙が見える。このことから、菱木氏も守護代家遊佐氏直系の内衆である。『金剛寺文書』二五九号（天文六年）十二月二十五日付遊佐長教書状中に恩智孫四郎の名が見える。後年になるが、恩知（智）定成と走井盛秀との連署書状が『九条家文書』に見えることから<sup>(16)</sup>、同様に守護代家遊佐氏系の内衆と見られる。これ以外に「天文日記」天文十五年（一五四六）二月二十四日条より滝野二郎兵衛が、同二十年（一五五一）正月二十九日条より本間源衛門が、守護代家遊佐氏直系の内衆と分かる。

『天文日記』天文八年（一五三九）閏六月二十九日条に「從遊佐方、中小路」と見える中小路氏は、「真観寺文書」四〇号に吉益家次との連署折紙が見える。中小路氏は『蔭涼軒日録』（増補続史料大成）明応二年（一四九三）四月三日条に「遊佐河内守被官、中小路藤左衛門尉」と見え、萱振氏同様遊佐氏の被官と見られる。

これら内衆・被官の本拠地を調べてみよう。走井氏の本拠地は、河内国茨田郡走井莊と見られる。同様に萱振氏は若江郡萱振、恩智氏は高安郡恩智に本拠を構える国人である。草部氏は河内の隣国和泉国大鳥郡草部郷を本拠とする国人で、菱木氏の本拠も同国草部郷菱木と見られる。『大阪府の地名』(『日本歴史地名大系』二八、平凡社、一九八六年)中之町の項に「中小路は中之町と関係する」と見えることから、中小路氏の本拠も、和泉国大鳥郡境南莊と見られる。『天文日記』天文十五年(一五四六)九月五日条にその名が見える行松氏も、「中家文書」(『熊取町史』史料編)に、一族と見られる行松盛吉の売券が見え、「泉州日根野郡熊取庄」内の地を「先祖相伝知行」と記していることから、和泉出身と見られる。遊佐順盛書状(『金剛寺文書』二三三号)に「行松善右衛門尉」の名が見えること等により、行松氏も遊佐氏系の内衆であろう。彼らと泉出身の内衆は、畠山氏被官になることで、河内国内に勢力を扶植したと見られる。田川氏は出羽国田川郡田川郷出身であろう(17)。本間氏は鎌倉時代に得宗被官として活動した、本間氏の一族であろうか。吉益・滝野氏の本拠地は、現在のところ分らない。

第二のグループは、三宝院快敏・丹下盛知ら畠山氏当主側近とでも言うべき内衆である。彼等は天文十一年(一五四二)の畠山植長の河内復歸に伴って、河内に帰還、あるいは進出した内衆である(18)。なお、遊佐長教没後の史料になるが、酒匂和泉守も『天文日記』天文二十一年(一五五二)六月二十二日条等より、このグループに属すると判断できる。四部一章で述べたように、三宝院快敏は紀州高野山勢であり、丹下氏は河内国丹南郡丹下郷を本拠とする国人であった。酒匂氏は相模国足柄郡出身で、南北朝期にはすでに畠山氏の被官になっていた(19)。

さて、「道明寺天満宮文書」(『藤井寺市史』四巻史料編二下)の丹下備中守盛知、「真観寺文書」一〇号の盛知、「興福院文書」(『東京大学史料編纂所影写本』の平三郎左衛門尉盛知の花押が一致することにより、平三郎左衛門尉盛知と丹下備中守盛知が同一人物であることが判明した。『天文日記』天文十五年(一五四六)十二月二十八日条が平三郎左衛門尉の終見であり、同十七年(一五四八)正月二十九日条が丹下備中守の初見である



から、盛知はこの間に改姓し、備中守と称したと見られる。したがって、『天文日記』天文十五年（一五四六）十二月二十八日条に見える丹下孫三郎は、盛知とは別人である。平氏は畠山政長のもとで紀伊口郡小守護代をつとめるなど、畠山氏の有力内衆であり、丹下氏も畠山植長のもとで盛賢が、有力内衆として活動するなど<sup>20</sup>、元来両者はほぼ同じ家格であると言えよう。平氏と丹下氏が一体化することにより、その勢力は遊佐長教には及ばないものの、他氏を抜きんできたものになったと考えられる。丹下盛知が遊佐長教に次ぐ地位を獲得できた背景の一つに、このような事情が存在したのである。

安見宗房・鷹山弘頼を中心とする勢力が第三のグループを形成し、有力内衆野尻氏と深い関係があった。四部一章で述べた如く、安見氏と野尻氏は地縁・血縁的結びつきが強かった。また、安見氏の本拠地河内国交野郡私部郷には、鷹山氏も所領を持っていた<sup>21</sup>。鷹山氏は大和国添下郡鷹山荘を本拠とする一乗院衆徒である。畠山持国・義就のもとで活動した法楽寺氏は、この鷹山荘法楽寺を名字の地としたのであろう<sup>22</sup>。

鷹山主殿助は天文十一年（一五四二）三月の河内太平寺の戦功に対し、細川晴元から感状を送られたことが、『興福院文書』より分かる。また、野尻氏が細川晴元から軍事動員を受けたことが、『言継卿記』天文十四年（一五四五）五月二十四日条に見える。野尻・鷹山氏は、木沢長政の勢力下にあった大和・南山城・北河内を地盤としており、安見氏も同様であった<sup>23</sup>。安見・鷹山氏は木沢長政の反乱に際し、細川晴元の麾下に参じたのであろう。だが、『天文日記』天文十五年（一五四六）九月五日条に、鷹山主殿助<sup>24</sup>・安見宗房が細川氏綱に加担する畠山軍として出陣している記事が見えることから、この間に遊佐長教のもとに帰参したと見られる。以上のことから彼等は、畠山氏内衆としては、異色であると言えよう。

遊佐長教の下には、直系とも言える走井・田川・吉益の他に、多様な勢力が結集していた。彼等の大半は河内および隣国に本貫地を持ち河内に進出してきた国人であった。遊佐長教は多様な勢力を糾合しつつ、国人層を基盤とする分国支配を行っていたのである。

### 三 守護家と内衆の確執

天文二十年（一五五一）五月、河内守護代遊佐長教が暗殺された。『観心寺文書』二七六号（永禄七年）三月十三日付根来寺筒井坊勢春書状の押紙に「遊佐新次郎殿年齢十七歳戊申土姓」<sup>25</sup>と記されており、これから計算すると長教の嫡子信教は、天文十七年（一五四八）の生まれとなる。これが正しければ、信教は天文二十年（一五五一）の時点ではわずか四歳に過ぎず、河内の支配に携わることとは、事実上不可能であった。

河内最大の实力者の突然の死は、当然のことながら、政情を不安定にする。このことは、遊佐長教の死去が百日間秘されたことが、『天文日記』天文二十年（一五五一）八月十日条に記されていることから、明らかである。このような状況下で家臣の主導権争いが生じてても不思議ではない。果たして天文二十一年（一五五二）二月十日、萱振氏等が肅清された（『言継卿記』同年二月十一日条）。「良尊一筆書写大般若経奥書集」<sup>26</sup>の記事から、中小路・田川氏も肅清されたと見られる。また、川岡勉氏の指摘された吉益氏も<sup>27</sup>、その後発給文書が見えないことなどから、萱振氏に連座したとみてよいだろう。

『天文日記』天文二十二年（一五五三）閏正月五日条に「丹下備中へ、三種三可遣之、走井へ、三種三可遣之、安見へ為先日之返、五種五可遣之」と、走井盛秀の名が、丹下盛知・安見宗房とともに見える。前節で遊佐長教系の内衆としたグループの中で、走井氏を中心とする勢力と、萱振氏を中心とした勢力の間で、対立が生じていたと見られる。萱振・中小路氏は畠山氏陪臣とも言うべき遊佐長教直系の内衆であった。彼等の立場は、長教が没し嫡子信教が幼少のため、微妙なものになっていたに違いない。走井と丹下・安見が与することによって、萱振氏等の肅清が実行されたのであろう。

天文二十一年（一五五二）九月二十九日、畠山政国の子高政が家督を相続した。これを記した『天文日記』同

日条に、「丹下備中守へ、就同儀以取次之旨」と見えるが、走井・安見の名が見えないことから、高政の家督相続は、丹下盛知が中心となって行われたと見られる。天文二十一年（一五五二）八月十二日には丹下盛知が、畠山氏当主（高政）の意を奉じていることが、明らかにされている<sup>28</sup>。したがって高政は、萱振氏肅清後ほどなくして、当主として迎えられたのではなからうか。萱振氏肅清は、遊佐長教以来の守護家権力の排除を指向した河内の支配体制が、守護代家当主が実質的に不在であることで、変更されたことを意味していよう。

この時期、天文二十一年（一五五二）正月、近江に逃れていた將軍足利義藤（後の義輝、以下義輝とする）と三好長慶との間で和議が成立した。同二十八日義輝は帰京し、幕府が復活した。正月二十六日細川氏綱は高国の跡目を將軍から正式に認められ、三好長慶は二月二十六日、御供衆となっている<sup>29</sup>。

將軍が帰京すれば守護家の権威も無視できない。三好長慶も細川氏綱を擁しており、畠山氏においても誰かが当主の座に就くことが必要だったのであろう。高政の家督相続には、幕府（將軍）の動向も無視しえないと言えよう。

永禄元年（一五五八）十一月、畠山高政と安見宗房の不和が表面化し、高政は紀伊に没落した。「厳助往年記」（『改訂史籍集覧』二十五）弘治三年（一五五七）正月日条に「河内安見衆・子息満五郎、謀叛之儀正露頭、大曲事在之云々」と記されている。安見と高政の不和は、弘治三年（一五五七）にはすでに存在していたようだ。この間の事情を「足利季世記」は「高政ヒソカニ美作守ヲ可被誅ヨシ計玉ヘトモ、国人背シカハ不叶、アマツサヘ野尻丹後ト草部肥後相計、高政ヲ可打ト云」と記している。当時野尻が丹後守、草部が肥後守を称していたことは、良質の史料で確認できない。しかし、「厳助往年記」の「満五郎」は、『言継卿記』天文二十二年（一五五三）三月十四日条に見える「安見子野尻満五郎」に違いない。以上のことから少なくとも野尻氏は、安見宗房と行動を共にしたと考えてよい。草部氏も前述の如く守護代遊佐氏系統の内衆であり、高政と対立しても不思議ではないだろう。

遊佐氏直系内衆の中心的人物、走井盛秀の動向を眺めてみよう。走井盛秀はこの後、三好氏との河内争奪戦において、後述の如く、安見宗房と連署で紀伊国人小山民部大掾に書状を発給している等、安見宗房と行動を共にしている。「細川両家記」に「然共高屋に相残人数と安見方相談、高屋城堅固候也」と見えるのも、このような事情を表していると言えよう。

さてこの時期、京都の政情は如何なる様相を呈していたのであろうか。天文二十二年（一五五三）八月、三好長慶と対立して再び近江に逃亡した將軍足利義輝は、永禄元年（一五五八）に入ると、京都回復を目指して活動を開始した。同年十一月六日、義輝は三好長慶と再び和睦して、同二十七日帰京した。ここに中絶していた室町幕府が復活した<sup>30</sup>。

畠山高政はこのような將軍義輝の帰京を目指した動きを好機と考え、守護のもとに河内の支配体制を一元化しようとしたのではないか。だが、安見・走井等は河内国人に基盤を置いており、高政の計画も「国人背シカ八不叶」と言う状態となり、失敗したのであった。

俗説では安見宗房が、遊佐長教の死後、河内守護代に就任したとする。だが、天文から弘治年間にかけて、宗房を河内守護代とする良質の史料はない。宗房を河内守護代とするのは「足利季世記」以下、やや価値の劣る史料である。宗房の地位に関し、次に例示して検討してみよう。

『大徳寺文書』（『大日本古文書』家わけ十七）一 二六三号、天文二十二年（一五五三）八月日付禁制では、丹下盛知の次位に署判している。

「神宮寺村・小山文書」（東京大学史料編纂所影写本）八月十六日付小山民部大掾宛書状では、走井盛秀の次位に署判している。

・より宗房は、丹下盛知・走井盛秀と同格かそれ以下であることが分かる。安見宗房は丹下・走井ともども、小守護代層であったとみられる。

遊佐長教没後の河内支配は、有力国人あるいは彼等と姻戚関係を持つ、小守護代層を中心に行われた。これは、ほぼ同格の者の連合であるから、主導権争いに伴う離合集散が起こりやすい。彼等は守護・守護代と違って、自ら権利を保障できる公権力者としては不十分であつたと考えられる。また、分国支配の主導権を取り戻そうとする守護家の動きもあり、河内の政情はすこぶる不安定であつた。

#### 四 守護畠山高政の河内支配

河内の政情に業を煮やしたのが、三好長慶である。永禄元年（一五五八）五月から十月にかけて、三好軍は帰京を目指す將軍足利義輝等と戦っているが、畠山軍はこの戦列に加わっていない。四部一章で述べた如く、天文二十二年（一五五三）に義輝を近江に追いやった際に、畠山軍は安見宗房・丹下盛知に率いられて、三好軍に加勢している。永禄元年（一五五八）の戦いには内紛のため、畠山氏は三好氏に加勢できなかったと見られるが、それが三好氏が將軍側を軍事的に圧倒できなかった一因になつたとも考えられる。

一方、紀伊に出奔した畠山高政は大和の十市新次郎に出兵を要請するなど<sup>31</sup>、河内復歸を目指して活動していた。このような河内の状況は、三好氏の権力維持にとって、不安定要因でしかなかった。三好長慶は、高政を河内に帰国させることにより、河内に自らの影響力を及ぼすべく、河内へ出兵した。

永禄二年（一五五九）八月、畠山高政は河内高屋城に復歸した。俗説ではこの時高政を支援した紀伊国人湯河直光が、河内守護代に就任したとする。この説は「足利季世記」「続応仁後記」によっており、同じ軍記物でも「細川両家記」に、この事実は見えない。また、湯河直光の河内守護代としての発給文書も、管見の限り知り得ない。

高政の河内復歸後の分国支配に関する文書を次に掲げ、検討してみよう（後掲の「真観寺文書」）。

B 当寺領年貢諸成物等之事、如御蔵納可被相納之由、被仰出候訖、不混自余儀候条、被成其意全可有寺納旨候者也、仍執達如件

永禄二

十一月晦日

知（花押）

真観寺

発給者の「知」とは、如何なる人物であろうか。『観心寺文書』二五六号、永禄二年（一五五九）八月三日付禁制の発給者が「新三郎知」であり、その押紙に「遊佐」と記している。この遊佐新三郎知の花押と、「真観寺文書」の知の花押が一致することから、同一人物と分かる。「畠山家譜」（内閣文庫蔵）では「知直」とするが、良質の史料で確認できず、信用できない。遊佐知が畠山高政と行動を共にした内衆であることは、『観心寺文書』の押紙に、「尾張守殿高政於堺津取之申候也」と、記されていることより判明する。

次に遊佐知が発給した、河内支配に関する文書を、示してみよう。

『観心寺文書』二五六号 永禄二年（一五五九）八月三日付観心寺宛禁制。

「土屋文書」<sup>(32)</sup>、永禄二年（一五五九）九月十三日付土屋孫三郎宛奉書。岸田堂観音田を安堵する。

『金剛寺文書』二七四号、永禄二年（一五五九）十月八日付天野金剛寺三綱宛奉書。矢銭・兵粮等を懸ける輩があれば言上するよう命じる。

「真観寺文書」二〇号、永禄二年（一五五九）十一月晦日付真観寺宛奉書。寺領の年貢・諸成物の納入を命じる。

の土屋氏は河内国茨田郡伊香郷を本拠とする国人であり、の真観寺は渋川郡、の観心寺との金剛寺は錦部郡の寺院である。史料の数こそ少ないものの、南北両河内に遊佐知の分国支配に関する文書が見える。以

外は奉書形式であり、遊佐知は守護の意を奉じた守護代、あるいは奉行人と考えられる。

畠山高政は守護代家の遊佐信教が幼少なことにつけこみ、三好長慶の軍事力を利用して、守護代家遊佐氏系内衆やこれに与する内衆を一掃しようとした。そして、守護権力をも凌駕しようとした守護代の権力を排除して、重層的な河内の支配体制を清算し、守護のもとに一元化しようとしたと考えられる。あるいは、高政は守護在国のもとでは、守護代は不要と考えたのかもしれない。

遊佐知の河内支配に関する文書は、永禄二年（一五五九）十一月晦日が下限である。史料の残存性の問題もあるが、分国支配が行き詰まったと見ることができよう。遊佐知は守護代家の一族とはいえ、永禄二年（一五五九）以前にはその名を見いだすことはできず、あるいは紀伊に在国していたのかもしれない。したがって、安見・走井の如く、河内国人層に基盤を置いておらず、その支配が行き詰まっても当然であった。この事態を打開するために高政は、河内国人層に基盤を持ち、在地の情勢にも明るい、安見宗房等との和議を余儀なくされたのであろう。

さて、三好長慶は畠山高政の河内復帰に決定的な役割を果たしたことにより、河内に発言権を得た<sup>33</sup>。筆者は長慶が、高政を細川氏綱の如く傀儡化することにより、河内の支配を目指そうとしたと考えているが、そのためには高政と、国人層に基盤を置く安見・走井等とを、分離しておくことが必要であった。

畠山高政が独自の動きをする以上、守護として擁立する必要はない。そこで三好長慶は、河内を直接支配下に置くべく、永禄三年（一五六〇）六月、河内に兵を進めたのであった。激しい攻防の後、永禄五年（一五六二）五月、河内教興寺の合戦で畠山軍が大敗し、河内の主要部は三好氏の手に落ちたのであった<sup>34</sup>。

## 五 信長上洛後の河内守護

畠山氏には独力で河内全域を回復する力はなく、永禄十一年（一五六八）九月の、足利義昭を擁した織田信長の上洛を待たねばならなかった。上洛直後の十月、畠山氏は三好義継とともに河内守護職を認められた。俗説では、畠山高政が河内南半国守護に就任したものの、翌十二年（一五六九）秋、安見宗房・遊佐信教の陰謀により高政は高屋城を追放され、弟の秋高が守護に就任したとする。

畠山秋高は一部一章で述べた如く、永禄八年（一五六五）に当主の座についており、河内守護に就任したのも当然秋高である。このことは永禄八年（一五六五）以降、畠山高政の河内・紀伊支配に関する史料が見られないことから明らかである。では、高政は隠居したのであるうか。『言継卿記』永禄十三年（一五七〇）三月一日・三日条では秋高とともに、元亀元年（一五七〇）五月三日・五日条では単独で、高政の名が見える。高政は當時在京していたのである。

元来畠山氏は守護として分国を支配するのみならず、幕政に関与することがつとめであった。明応の政変以降はそのような機会は少なかったが、將軍足利義昭は管領家畠山氏に期待したとみられる。しかし、当時の状況は、三好三人衆の反撃、若江城の三好義継、内には守護代遊佐信教と、守護自らが在京して幕政と分国支配を行えるほど、甘くはなかった。そこで畠山氏は、当主の権力を分割し、秋高が河内に在国してその支配にあたり、高政は秋高の後見として在京し、幕府や織田信長との折衝にあたったとみられる。かつて永正年間に守護畠山尚順（ト山）が紀伊に在国して分国支配を行い、嫡子植長が在京して幕府との折衝にあたった場合と似ている。この時植長は河内が争乱状態になると、一部一章で述べた如く、下向して分国を守っている。高政も同様に三好三人衆が河内に侵入すると、下向して戦っていることが、『言継卿記』元亀元年（一五七〇）十月二十二日条より分かる。

『言継卿記』の記事より、畠山高政が失脚したとされる永禄十二年（一五六九）以降の活動が確認できる。高政の永禄十二年（一五六九）失脚説は、『足利季世記』に基づくもので、もとより良質の史料で確認できない。また、陰謀の張本人とされる安見（遊佐）宗房が、足利義昭の上洛後奉公衆に取り立てられたことが、『言継卿記』



永禄十三年（一五七〇）正月三日条より判明し、河内支配に関与しなくなったことから否定できる。

次に河内の守護体制について検討しよう。若江城の三好義継が北半国を、高屋城の畠山秋高が南半国を支配したとする俗説の是非を、問い直していかねばならない。

「尋憲記」（『大日本史料』十編之十九）元龜四年（一五七三）正月朔日条に「草部肥後・上軍代、野尻・下軍代」と見える。草部・野尻氏とも畠山氏の有力内衆であり、軍代は郡代の音通によると考えられる。この史料より畠山氏は河内の上・下に郡代を置いており、北河内にも畠山氏の支配が及んでいたことが判明する。これは、元龜二年（一五七一）五月十二日に、織田信長に反旗を翻した松永久秀が、畠山秋高の武將安見右近の守る北河内の交野城を攻めたことが、『多聞院日記』同日条に記されていることから、裏付けられる。以上の事実より、永禄十一年（一五六八）の河内守護補任は、単なる南北分割でなかったことが、明らかにした。

畠山氏は永徳二年（一三八二）二月に、畠山基国が河内守護に就任して以後<sup>35</sup>、河内の公権力者であった。一方、永禄年間には三好氏が、河内の公権力者としての地位を獲得していた<sup>36</sup>。このように、織田信長が上洛した時点では、畠山氏・三好氏ともに、河内の公権力者であった。

したがって、永禄十一年（一五六八）の守護補任は、公権力者たる畠山・三好氏の河内守護としての立場を認めたのであった。両者の支配地域は、それぞれの範囲と考えるのが妥当であり、それを半国と称したのである。ゆえに、北河内に畠山氏の家臣がいても何ら不思議はない。戦国期の河内は、机上で南北に線を引き色分けできるほど、単純ではなかったのである。

だが、場当たり的にも思えるこの方法では、畠山・三好両氏が、自己の勢力伸張を図る以上、在地での紛争は必至であった。高政と秋高の権力分割には、このような背景があり、元龜二年（一五七一）以降の三好・松永氏と畠山氏の抗争は、起こるべくして起こったと言えよう。

## 六 河内守護代遊佐信教

遊佐長教の嫡子信教は、永禄六年（一五六三）九月十八日、金剛寺に「所当官物」以下の免除を認めた判物を発給したが、『金剛寺文書』二八七号より分かる。信教は翌七年（一五六四）九月二十九日には、観心寺にも「臨時課役」等の免除を認めた判物を発給したが、『観心寺文書』二七〇号より分かる。長教没後十数年をへて、河内守護代家遊佐氏の当主が成人し、権力を行使したのであった。

このように畠山氏は、永禄五年（一五六二）に河内の大半を三好氏に奪われた後も、南河内の一部を勢力下に置いていた。その支配体制を、次の史料より検討してみよう。

C 就当寺与卷尾申事、重々存分雖在之、御本意之間、彼寺衆徘徊候共、不可有意儀通、被仰出候処、御請御祝著候、於一途上者、重而当寺如存分、可有其沙汰由可申旨候、恐々謹言

拾月廿三日

丹下越前守

遠隆（花押）

金剛寺

年預坊

遊佐左衛門大夫

清（花押）

D 就当寺与卷尾申事、重々存分雖在之、從上様・教依御異見、御本意之間、彼寺衆徘徊候共、不可有意儀通、被仰出候処、御同心御祝著候、於一途上者、重而当寺如存分、可有其沙汰候、猶以、各儀不可有御別儀之旨、被仰出候、恐々謹言

十月廿三日

恩智左近大夫

定成（花押）

走井左京進

慶秀（花押）

遊佐美  
宗作房守（花押）

金剛寺

年預御坊（<sup>37</sup>）

史料C・Dの年代は、『金剛寺文書』二九一号、永禄八年（一五六五）十月二十三日付左衛門大夫（遊佐高清）・越前守（丹下遠隆）連署条目に「巻尾寺与当寺申事、相理上者、通路等不可有別儀事」と記されており、内容が関連することから、永禄八年（一五六五）とみられる。史料Dの「上様」は『金剛寺文書』二九五号（年不詳）六月六日付清若為当書状より「かみさま」と読み、おそらく畠山高政のことであろう。教は五部二章より遊佐信教と見てよいだろう。丹下越前守遠隆（後に遠守）・遊佐左衛門大夫清（後に越中守高清）は、一部二章で考証した如く、畠山高政・秋高系の内衆である（<sup>38</sup>）。走井左京進慶秀は盛秀の子か一族とみられ、恩智左近大夫定成は前述の如く、河内国人恩智氏の一族であろう。遊佐美作守宗房は四部一章で指摘した如く、花押の一致により、安見宗房である。走井・恩智は前述の如く、守護代家遊佐氏系の内衆である。守護代系内衆と連署していることは、安見宗房も守護代系内衆に位置付けてよいのだろうか。

三節で検討した時点では、宗房の書判の位置が異なっている。また、前出の永禄十年（一五六七）と推定できる十二月二十八日付畠山氏家中奉書でも、遊佐美作守宗房は最後に書判している。また、この時期より宗房は、姓を安見から遊佐に改めている。宗房が遊佐氏を称したことは、他の内衆の上位に位置する地位についたことを示していると言えよう。遊佐長教の没後、安見宗房が河内守護代に就任したとするのは、史料Dの時期の宗房の

地位と、天文から永禄にかけて畠山軍を率いて戦っていた宗房の姿とを、後世の軍記物の作者が混同したからであろう。

『九条家文書』五一五三号で永禄九年（一五六六）七月九日、遊佐信教・遊佐宗房は、和泉守護代家の松浦孫八郎と誓紙を交わしているが、その宛先は

遊佐河内守殿

遊佐美作守とのへ

で、宗房は信教の次位にあり、敬称も「殿」ではなく「とのへ」である。このことより、あくまでも宗房の地位は、信教を凌ぐものではないばかりか、和泉守護代家を凌ぐものではなかったことが分かる。

また、守護代家系畠山氏内衆の中でも、草部房綱・野尻実堯等、遊佐信教系とも言える内衆と、遊佐宗房・走井盛秀等の連署した文書が見えないことから、守護代家系内衆も守護家の秋高・高政に対応し、分かれていたものとみられる。五節で指摘した織田信長の上洛後、宗房が奉公衆に取り立てられたのも、河内守護に就任したのが秋高で、守護代も遊佐信教に代替わりしていたからであろう。永禄九年（一五六六）の時点で両者が併存しているのは、河内奪回をもくろむ畠山氏内部での便宜的な措置とみられる。

永禄八年（一五六五）の畠山氏勢力下の河内における守護家と守護代家による重層的な支配体制は、織田信長が上洛した後も受け継がれたとみられる。だが、前出の「尋憲記」元龜四年（一五七三）正月一日条に、上・下郡代として見える草部・野尻氏は、前述の如く、守護代系の内衆である。また、守護代遊佐信教が国人に対して独自に感状を発給していることが、「武富保一氏所蔵文書」（『大日本史料』十編之五、元龜元年十月五日条）等により確認できる。

このように在地の掌握は、守護代遊佐信教が、守護畠山秋高に勝っていた。永禄十一年（一五六八）以降の河内では、遊佐長教の時と同じく、守護代家主導による分国支配が強化されていたのである。

さて、織田信長は河内の支配体制に、如何なる影響を与えたのであろうか。

E 態以折帛令申候、仍野尻備後守殿就御借錢之儀、度々催促雖申候、于今御難渋之事候、然者其通信長へ得御意候処、彼御知行押置可被下候旨候、為其坂井右近・木下藤吉郎従上使衆以折帛令申候、於他納者可為二重成候、恐々

(永禄十二年)

九月十六日

牧郷名主百姓中

この史料は堺の商人今井宗久の書札案である<sup>(39)</sup>。野尻備後守は守護代系畠山氏内衆で、「尋憲記」(『大日本史料』十編之二十)天正二年(一五七四)正月十七日条より、実名は「実堯」と分かる。坂井右近・木下藤吉郎は織田信長の家臣である。文中に「従上使衆以折帛」と見えることから、形式的には幕府の決定ではあるが、織田信長が、畠山氏内衆野尻実堯の知行する河内牧郷の「押置」を命じ、家臣を遣している。このことより、信長が畠山氏の河内支配に、発言力を持っていたことが分かる。

これは畠山氏の河内回復が、織田信長の上洛を契機としており、信長が將軍を擁している以上当然と言える。『信長公記』(奥野高広氏・岩沢愿彦氏校注、角川古典文庫本、一九六九年)によれば、畠山秋高の将安見新七郎の居城交野城が、三好義継・松永久秀の攻撃を受けた際、元龜三年(一五七二)四月、信長の派遣した援軍により、交野城は救われている。三好氏の勢力が国内に存在する以上、信長の軍勢力無くして畠山氏の河内支配は、覚束ない有様であった。

## 七 守護・守護代の終焉

『多聞院日記』元龜三年（一五七二）正月四日条によれば、「遊佐殿高屋ニテ屋形ヲ生害サセソシ、ノカレ了ト」この噂が飛んだとする。この噂は「尋憲記」元龜四年（一五七三）正月一日条で、畠山秋高が遊佐信教とともに、高屋城に籠城していることが確認できることから、そのまま信じることはできない。だが、守護と守護代の不和は存在していたらしく、それに三好・松永の反乱といった当時の河内の不穏な情勢も加わって、このような噂として流れたのであろう。

不和と言われた両者がなぜ同じ高屋城で、信長方として籠城したのであろうか。それは宿敵とも言える三好・松永の勢力が、国内に存在していたからである。三好・松永に対するためには、織田信長の軍事力が必要であった。またこの時点では、將軍義昭と信長との間が険悪化していたとはいえ、公には決裂していなかった。以上のことから、永禄八年（一五六五）、一貫して義昭方であった秋高・信教とも、反信長的行動はとれなかったとみられる。

守護と守護代の不和による河内の一層の不安定化は、將軍義昭の望むところではなかった。元龜三年（一五七二）閏正月四日、遊佐信教は畠山秋高とともに、義昭に誓紙を捧げている。そして義昭は信教に対し「領知方之事、入洛已来当知行一切不可有別儀」（『相州文書』『大日本史料』十編之八、同日条所収）と、安堵している。「領知」「当知行」は信教の所領と解するより、信教の権力の及ぶ地と解するのが妥当であろう。

戦国期に至り、守護代家遊佐氏の家格は上昇していた<sup>40</sup>。『天文日記』天文二十二年（一五五三）閏正月五日条等で遊佐太藤が御供衆となったことが分かり、一族の遊佐宗房も義昭の上洛後、奉公衆になるなど、遊佐氏は守護を介することなく、直接將軍と結びつくようになっていく。したがって、將軍自ら守護代家遊佐信教の「当知行」を安堵したことを、信教が守護と同等の地位を公に得たと考えたとしても、何ら不思議はないだろう。これが、後日遊佐信教が畠山秋高を殺害する、原因の一つとなったと考えられる。

元龜四年（一五七三）三月七日、將軍足利義昭は織田信長と断交した。（元龜四年）四月四日付「顯如上人文案」（北西弘氏編『真宗史料集成』三）に、「摂州池田遠江守 公儀へ参候、畠山・遊佐已下同然之由候」と記されているように、畠山秋高・遊佐信教とも、足利義昭方についていた。

同年四月七日、織田信長の軍事力の前に、義昭は降伏した。しかし、義昭は四月二十日になると、二条城の修理を行うなど、信長との対決に備えており、七月一日、再度山城・榎島城に挙兵した。この間、河内でも重大事件が発生していた。六月二十五日、守護代遊佐信教が守護畠山秋高を殺害したのである（<sup>41</sup>）。

通説では義昭方の信教が、信長方の秋高を殺害したとされる。一旦は守護として將軍義昭方についたものの、織田信長の圧倒的とも言える軍事力を目の当たりにした秋高が、国内の三好勢力の存在をも考えた時、反信長戦線に躊躇し、進退に窮したとしても当然と言える。一方、保田知宗や河内における秋高系内衆の大半は、義昭に与することを支持していた。これを好機と見た遊佐信教が、畠山秋高を殺害したのであろう。秋高を殺すことにより、守護権力を排除して重層的な支配関係を解消し、かつ、織田信長の影響力をも排除しようとしたと考えられる。

元龜四年（一五七三）七月十八日、足利義昭は織田信長の力の前に屈して降伏、十一月には紀伊由良へと落ちていった。義昭に味方した大名も、越前の朝倉氏、近江の浅井氏、河内の三好義継と相次いで信長に滅ぼされ、十二月には松永久秀も降伏した。ここに反信長戦線は寸断され、大きく後退した。

室町幕府が滅亡したことにより、將軍のもとで公権力者として、守護勢力を排除した支配を行おうとした、遊佐信教の企みは潰え去った。信教も統一権力の前には、朝倉・浅井などと同じ道を辿るのであった。

おわりに

戦国期河内国では、守護代主導のもとで、守護と守護代による、重層的な支配が行われていた。それが天文十八年（一五四九）六月の細川晴元政権の崩壊後、將軍との対立をも辞さない守護代遊佐長教に反発した畠山政国の紀伊隠居もあり、守護権力の吸収をめざす遊佐長教を中心とした支配体制となっていた。守護代家遊佐長教のもとには、小守護代層に糾合された国人層を中心とする多様な勢力が結集しており、その支配を支えていた。

天文二十年（一五五一）五月、遊佐長教が暗殺された。嫡子信教が幼少なこともあり、遊佐長教の路線は頓挫してしまふ。その後の河内は、守護代家の権力をめぐり、これを得ようとする安見宗房をはじめとする小守護代層や、吸収しようとする守護家畠山高政の政争の場と化した。同盟者三好長慶にとって、河内の政争は政権の命取りになりかねず、永禄年間に至り、これを直接支配下に収め、畠山氏は河内の大半を失ってしまった。

永禄十一年（一五六八）、織田信長の上洛により復活した室町幕府のもとで、畠山氏は河内を回復し、守護代家遊佐信教主導型の支配体制が強化された。だが、織田信長の軍事力に頼る面が少なからず存在し、信長も発言力を持っていた。

元龜三年（一五七二）に至り、將軍から権力の保障を得たとみた守護代家遊佐信教は、元龜四年（一五七三）六月、守護権力の吸収と織田信長の分国支配への介入を排除すべく、守護家畠山秋高を殺害し、信長と対立していた足利義昭に与した。だが、幕府による公権力の承認を前提とした支配体制は、幕府が崩壊すると意味をなさなくなり、織田信長の前に滅び去るのであった。

畠山氏の動向を見る上で、室町幕府の動向は欠かせない。戦国期になると室町幕府は、何度か中断・復興を果たしている。三好長慶と將軍足利義輝は対立と和睦を繰り返したが、和睦が成立して將軍が帰京した、天文二十一年（一五五二）と永禄元年（一五五八）に、畠山氏の当主擁立や内紛・没落と言った事件が起こっている。一部一章で述べた如く、畠山秋高の家督相続も足利義輝の殺害が契機となったとみられる。永禄十一年（一五六八）の河内回復は、足利義昭を擁した織田信長の上洛による幕府の復活によるもので、元龜四年（一五七三）の畠山



秋高殺害も、幕府存亡の瀬戸際であった。これらは単なる偶然ではなく、幕府権力と密接な関係を持つ、守護畠山氏の姿であったと言えるよう。

遊佐長教は三好長慶とともに、この枠組みを破ろうとしたが、志半ばにして倒れ、残された者は内部の権力闘争に終始し、幕府の滅亡後程なくして、統一権力の前に屈した。したがって畠山氏は、守護・守護代と言う室町幕府の体制から脱却することはできなかったのである。

#### 註

- (1) 拙稿「天文期の政長流畠山氏」(本書四部一章)。
- (2) 同氏「守護近習と奉行人 政長系畠山氏の支配構造」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』一部三章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九八九年)。
- (3) 同氏「戦国期の守護家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章三節、塙書房、一九九八年、初出一九九一年)。
- (4) 同氏「戦国期畿内における守護代・国人層の動向 管領細川氏の領国を中心として」(『ヒストリア』九〇、一九八一年、後に村田修三氏編『近畿大名の研究』戦国大名論集5、吉川弘文館、一九八九年に所収)。
- (5) 小川信氏著『足利一門守護発展史の研究』三編二章二節(吉川弘文館、一九八〇年、初出一九七七年)。
- (6) 同氏「國學院大學図書館所蔵『畠山家文書』 翻刻と考察」(『國學院大學図書館紀要』一、一九八九年)。
- (7) 黒田俊雄氏編『畠山記集成』(『羽曳野資料叢書』一卷、一九八八年)の解説。
- (8) 同氏『畠山家文書集』(『羽曳野資料叢書』三巻、一九九一年)。

(9) 今谷明氏著『室町幕府解体過程の研究』二部四章(岩波書店、一九八五年、初出一九七三年)、長江正一氏著『三好長慶(人物叢書)』(吉川弘文館、一九六八年)。

(10) 今谷明氏が翻刻された「飯倉晴武氏所蔵『御内書要文』」(同氏著『室町時代政治史論』二部、塙書房、二〇〇〇年、初出一九八五年)。

(11) この時期の畠山植長の動向に関しては、拙稿「紀伊守護家畠山氏の家督変遷」(本書一部一章)、および本書四部一章を参照されたい。

(12) 小谷利明氏前掲論文。

(13) 小谷利明氏前掲論文。

(14) 「真観寺文書」(『真観寺文書の研究』、八尾市立歴史民俗資料館、二〇〇一年)。なお、「真観寺文書」に関しては、小谷利明氏に多大のご教示をいただいた。

(15) 草部氏が遊佐氏被官であることは、川岡勉氏「河内国守護畠山氏における守護代と奉行人」(同氏著『室町幕府と守護権力』三部二章、吉川弘文館、二〇〇二年、初出一九九七年)による。

(16) 『九条家文書』(図書寮叢刊)四 一二六八号。なお、『九条家文書』では「遠井盛秀」とするが、

『九

条家文書』七に掲載された花押は走井盛秀のものである。筆者が『和歌山県の歴史』（山川出版社、〇〇四年）執筆時に宮内庁書陵部の写真で確認したところ、署名も走井盛秀であった。

（17） 田川氏の出自は、畠山氏分国である越中の可能性もある。ただ、出羽国田川郡は遊佐氏の出身地に近

いため、出羽出身と考えた。

（18） 小谷利明氏前掲論文、および本書四部一章参照。

（19） 小川信氏註（6）前掲論文、および拙稿「織田信長と畠山氏家臣」（本書五部三章）参照。

（20） 本書一部一章、および四部一章。

（21） 永禄十一年（一五六八）二月五日付鷹山藤寿宛篠原長房知行宛行状（「興福院文書」）。

（22） 地名の比定は『奈良県の地名』（『日本歴史地名大系』三〇、平凡社、一九八一年）鷹山荘・高山城

跡・法楽寺の項による。地名と姓の一致により、そのように考えた。

（23） 小谷利明氏「山城上三郡と安見宗房」（同氏前掲書二部付論2、初出一九九四年）。

（24） 川岡勉氏はこの「主殿助」を「（畠山義昭氏所蔵）畠山文書」の解説（『畠山家文書集』）において、

吉益家次とされた。しかし、吉益家次は「法隆寺文書」（東京大学史料編纂所影写本）で、「木沢兵糧の一文から天文十年と推定できる十月十一日付連署状では、「吉益長門守家次」と署判している。また、

『天文日記』の記載も「高山主殿助」であるから、「主殿助」は鷹山氏である。

（25） 遊佐新次郎「教」河内守信教は、拙稿「教興寺合戦をめぐる」（本書五部二章）参照。

（26） 稻城信子氏著『日本中世の經典と勸進』史料編一（塙書房、二〇〇五年、初出一九九五年）。

（27） 同氏「（畠山義昭氏所蔵）畠山文書」の「吉益系図」の解説。

（28） 小谷利明氏註（2）前掲論文。

（29） 今谷明氏「三好・松永政権考」（同氏著『室町幕府解体過程の研究』二部五章、初出一九七五年）、

および長江正一氏前掲書参照。

（30） 前註（29）参照。

（31） 小川信氏註（6）前掲論文所収「畠山家文書」三号。

（32） 『枚方市史』六巻では「足利義輝御教書」とするが、発給者は遊佐知である。小谷利明氏のご教示に

よる。

(33) 長江正一氏前掲書。

(34) 長江正一氏前掲書、および本書五部二章。

(35) 今谷明氏著「室町時代の河内守護」(同氏著『守護領国支配機構の研究』二章、法政大学出版局、一九八六年、初出一九七六年)。

(36) 矢田俊文氏前掲論文。

(37) 『金剛寺文書』二七〇号 C・二九三号 D。なお、東京大学史料編纂所写真帳で『大日本古文書』の誤りを訂正した。

(38) 堀新氏は「織田権力の寺内町政策 関連史料の検討を中心として」(『古文書研究』三十三、一九九〇年)において、丹下遠守・遊佐高濂を、畠山秋高ではなく遊佐信教の家臣とするが、根拠とされた「畠山家譜」は、潤色が甚だしく信用に値しない史料であり、堀氏の見解は成立しない。なお、堀氏は論文において、元龜年間の畠山氏の動向を述べておられるが、史料の選択・解釈等に問題があり、批判も十分に行われていない。また、脇田修氏が『近世封建制成立史論 織豊政権の分析』(三章、東京大学出版会、一九七七年、初出一九七五年)中で論証された、織田信長と室町幕府の関係に触

れていないなど問題が多く、この時期の政治情勢を的確に記しているとは言い難い。

(39) 奥野高広氏著『増訂織田信長文書の研究』上巻、一九八号(吉川弘文館、一九八八年、初版一九六九年)。

(40) 矢田俊文氏前掲論文。

(41) 以下この時期の情勢は、奥野高広氏著『足利義昭(人物叢書)』(吉川弘文館、一九六〇年)、および本書五部三章による。

〔追記〕 小谷利明氏は「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)において、遊佐信教が畠山尚順の娘の子と遊佐長教の間に生まれた可能性を指摘しておられる。筆者は遊佐信教の年齢から考えて、その可能性が高いと考えている。そうすると、遊佐信教が「藤原」ではなく、「源」と署名した文書の謎も解決する。遊佐信教は、自分の家系が畠山尚順に繋がることで、畠山秋高に代わり、河内の公権力者になれると考えたのではないか。

## 第二章 教興寺合戦をめぐつて

### はじめに

永禄五年（一五六二）五月二十日、河内教興寺付近で戦われた畠山勢と三好勢の戦闘は、畿内の政局の帰趨を決した戦いと言われている。戦闘の経緯は、「細川両家記」・「足利季世記」等の軍記物に詳しいが、日記類では『御湯殿上日記』（『続群書類従』補遺）に、高屋城が落城したと言う簡単な記事が見える程度なので、長江正一氏<sup>(1)</sup>、今谷明氏<sup>(2)</sup>等先学諸兄の業績も、勢い軍記物によっている。

筆者はもとより先学諸兄の研究成果を否定する気は無いが、軍記物に依拠することで、見落とすことも少なくない。また、「細川両家記」と「足利季世記」とでは、いくつかの記載の相違もみられる。本章では、管見に触れた若干の史料を加えて、教興寺合戦の実相を今一度見直してみたい。

#### 一 「細川両家記」と「足利季世記」

「細川両家記」と「足利季世記」の教興寺合戦に関係した部分を次に掲げ、通説とも言うべき、先学諸兄の研究について整理してみたい。

#### A 「細川両家記」<sup>(3)</sup>

一、飯盛城に八三好修理大夫殿楯籠堅固也、然二安見美作守・根来寺衆一味して三月中比より陣取昼夜せめ  
 けれ八、城内難儀由風聞也、然八四国衆・摂津国衆被相談候て為後巻、先陣三好山城守康長、同年五月初  
 国を立上洛し、安宅摂津守、摂津国にて八三筑前守・同日向守・同久助・同下野守・同備中守・松永弾  
 摂州衆悉一味して渡辺川を渡越す、五月廿日二河内の都興寺と云処二、紀州湯川方・根来寺衆陣取  
 懸り合戦有、三好方切勝て六百余人打取と云、殊大将湯川方打死なれ八、残衆散々二成行也、飯盛  
 安見方・根来寺衆此由、則散々二落行也、安見方八大坂へ被入由候、畠山高政、高屋城より又堺津  
 之由候、只一日二河内・和泉・大和・山城・摂津国五ヶ国、三好方へ理運二成行事前代未聞と申候  
 盛長慶運を被開、三好方大慶之由候也、高屋城へ八阿州衆・三好山城守被請取由候也、  
 一、江州六角殿（衆）此時迄勝軍山に在陣候つれとも、此時無異義帰国候也、  
 一、摂州三宅出羽守（国村）八此時畠山方へ一味して、此日色を立て、同五月廿日二摂州豊島郡十里斗放火候つれば、  
 如此成行候条、則其晩に京より我城を明ケ浪人、

B 「足利季世記」(4)

教興寺合戦之事

カクテ畠山方大ナル勝軍シテ悦事限ナシ、サラハシハラク休ミテ、三好修理大夫長慶ノ籠リシ飯盛城ヲ取巻  
 テ責落セトテ、同年四月五日ヨリ打立、同五月十九日マテ日々ニ責戦ヒケル、松永弾正久秀八大将長慶の前  
 来リテ申シケルハ、実体（休）打死アリテ、高屋城・岸和田城モ落城シテ、此城ヲハ八重九重取巻、惣責ニス  
 シト申候、急キ後詰ノ勢ヲ催シ、敵ヲ追払玉ヘト申シケレトモ、長慶少モ不騒、色紙・短冊取り出シ和歌  
 吟味シナカラ、万事八和主ニマカスル也、ヨキニ八カラヘト宣ヒケル、松永弾正方々エ催促シテ、三好筑  
 守義興ヲ大将トシ、同日向守政康・三好久助・同下野守・同備中守、四国衆八三好山城守康長・安宅摂津  
 守



冬康、松永弾正八不及申、八千余騎馳集リ渡辺川ヲ渡リ、五月廿日、河内国教興寺表ニ押寄ケル、松永謀ヲ廻シ、三位ト云法師武者アリケルヲ陣僧ニ作りナシ、遊佐美作守方ニ持来、ヤウヤク開キ読ケル間ニ、彼使立返リ、此状ハ美作殿ニハ不参、河内守殿ニ参リタリトテ取り返シケレハ、美作守則彼使ヲ打取リ、状添テ大将畠山殿ニ見セケレハ、是ハ敵ノ偽リニ謀リタルナルヘシ、唐ノ軍ニ此謀アリト聞ク、相力マヘテ可驚ト下知シ玉フ、其状云、

両度内通珍重二候、殊更近日高政父子可被誅謀在之由、誠以目出度存候、其時分承届、当方ヨリ遣人数、勝負可決即時二候、猶吉事可申承候、恐々謹言

五月十九日

義興判

安美殿

遊河殿人々御中

遊佐河内守・安見美作守ハ、畠山方ノ大名ニテ当代ノ福者ナレハ、高政ノ長途ノ野陣ヲイタハリ、陣屋ノ中ニ湯舟ヲ力マヘテ高政ヲ入申、饗シ可申トテ色々ノ酒肴ヲト、ノヘテ、遊佐力陣屋ニ高政ヲ可申入由使ヲ参セ、御供ニハ誰レ々ト有リシヲ、丹下・玉木(重)以下悉ク聞之大ニ驚キ、スハヤ昨日ノ雜説府(符)合シテ、遊・安見逆心アリ、高政ヲ可打トノ謀ニ、カクコソ申ラント推量シ、諸人吾先ニト引ケレハ、夜中ニ高政モ帽子形ノ城ニ引退キケル、紀州衆玉木・湯川・根来寺衆、後陣ニテ夜明テ退ケルヲ、三好方一万五千人一ニ成テ追力ケ、レハ、湯川宮内少輔直光・根来寺衆三千人ニテ、大勢ノ中ニ面モ不振切テ入り、十文字ニリ付追廻シケル間、三好方ニモヨキ士千余人被疵、三百人打死ス、紀州衆ハ湯川宮内少輔直光大將ニテ、同名民部少輔・同神太夫・方田伊豆守・湊上野介・同紀伊守・龍神刑部少輔・富田牛ノ助・貴志五郎・白檉郎兵衛・飯沼九郎左衛門尉等也、石垣ト堀内ハ今度不登シテ国ニ留リ、彼等名代安宅神助堀ノ内名代・妻良兄弟・山際兄弟二人石垣名代・神保右衛門尉、都合名ヲモ人ニ知ル、士八百余人、根来衆二百人打死也、安見

・遊佐ハ 石山ノ城工落行、畠山殿ハ烏帽子形ニモ咏エス、堺工落ラル、長慶ハ一戦二敵ヲ押払ヒ、忽チ運ヲ開カル、ノミナラス、河内・和泉・大和・山城・摂津五ヶ国、皆三好工降参シケル、高屋城工ハ三好山城守康長入 城シケル、摂津国ノ住人三宅出羽守国村モ畠山殿一味ニテ、同五月廿日、豊島郡ヲ放火シケルカ、高屋城自 落ノ由ヲ聞テ、城ヲ落テ堺工引退ケリ、去年ヨリ勝軍地藏山ニ在城シテ度々合戦アリシ六角衆モ、畠山殿落 玉フト聞テ、二万余人江州工引退テケル、此大勢ニテ一戦八有ヘキナレトモ、ヲメ、ト引返シケルト、京 童トモ小歌二作リテ謡ヒケル

史料A Bの共通点は、六角氏に關した部分を除くと、次の如くまとめられる。

この合戦は、根来寺衆徒・湯河直光等紀州衆を主力とした畠山軍と、四国衆に摂津衆を加えた三好軍との決戦であつた。

飯盛城の三好長慶を包圍していた畠山軍に対し、三好義興・松永久秀等三好軍の増援部隊が渡辺川（淀川）を渡り、五月二十日教興寺付近で両軍が激突した。

畠山軍は湯河直光が戦死するなど大敗を喫し、安見宗房は大坂の本願寺へ敗走し、畠山高政は堺から紀伊へ逃れた。

戦いの後、河内支配の拠点高屋城には長慶の伯父三好康長が入つた。

以上が軍記物による教興寺合戦の大きな様相だが、史料A・Bでは、相違点が少なからず存在する。以下、その主な点を示してみよう（便宜上、通し番号とする）。

畠山軍の飯盛城攻撃開始は、Aによれば「三月中比」だが、Bでは「四月五日」とする。

Bでは松永久秀の謀書が畠山軍敗北の原因になつたとする。

Bには安見宗房と並んで遊佐河内守（後の信教か）が有力武将として登場するほか、討ち死にした紀州衆の

人名も詳しい。

Aでは畠山高政が退いたのは高屋城とするが、Bでは烏帽子形城とする。

は作話とみられるが、混成軍たる畠山軍の内情が表れており、一概にすべてを否定することもできず、事の真偽は、現在では確認のしようがない。は検討するだけの準備がないので、今回は検討の対象とはしない。

は『御湯殿上日記』永禄五年（一五六二）五月十九日条に「（河内）（高屋）（城）（破）かわちたかやのしろやふれて」とあり、また次節の史料C・Dより、高屋城が妥当であろう。

次に について検討してみよう。三月説をとる史料は、「長享年後畿内兵乱記」（『続群書類従』二十上）、「永禄以来年代記」（『続群書類従』二十九下）があり、四月五日説には「続応仁後記」（『改訂史籍集覧』三）、「目良家証文」<sup>（5）</sup>がある。「目良家証文」の日付は「永禄五年庚戌五月廿日」だが、敗走の最中に書き上げたとは考えがたく、また、永禄五年（一五六二）は「庚戌」ではなく「壬戌」である。したがって「目良家証文」は、後日作成されたとみるのが妥当であり、その内容をすべて事実とみるのは危険である。

以上の史料は、いずれも後世に作成されたとみられることから、これらの史料からは、飯盛城攻撃開始の日は断定できない。同時代の史料より、永禄五年（一五六二）三月五日の和泉久米田寺合戦以降における畠山軍の行動をみていこう。

畠山軍の中核として活動していた根来寺衆が、永禄五年（一五六二）三月十一日付で河内真観寺に禁制を掲げている<sup>（6）</sup>。これは和泉方面から飯盛城を攻撃する際、真観寺が軍勢の通過点にあったからであろう。また、「本興寺文書」（『兵庫県史』史料編中世一）二〇号で、根来寺は同年三月日付で摂津本興寺にも禁制を掲げていることが分かる。これは三月中に根来寺衆が、摂津尼崎方面にまで軍事行動を起こす予定であったことを示しているよう。以上のことより、畠山軍の飯盛城攻撃は、「三月中比」より取りかかったとする、「細川両家記」等の説が妥当であろう。

## 二 古文書よりみた教興寺合戦

天理図書館報『ビブリア』八三（一九八四年）に翻刻された「大館記書案」中に、教興寺合戦について記したものがあつた。次に示し、検討してみよう。

○河州并泉表様躰之事、

一、廿日二後卷衆与根来衆及一戦刻、松浦小屋焼あかり候ゆへ、悉くつれ候て、根来衆失利相果候由申候、  
一、畠山尾州安見父子、手二不合候て、尾州者高屋へ御退、それより、内郡へ御退候、安見八大坂へ罷退候、  
息孫五郎八鷹山谷へ相退候、

一、湯河宮内大輔、最初に討死候、依之大略相果候様申候、

一、薬師寺以下、武具爰元にて、大略令沽却、各東国へ可罷下之旨申由候、

一、河内并根来衆、大将八何も無別儀候間、相催是非共、可決実否旨申由候、

一、貴国御人数も大略可被相 之旨申候、

一、三好筑前守八くつろきの為に芥河へ越候由申候、

一、松永八大和へ相越候、

一、飯盛修理大夫無別儀候、

一、御帰座之事、夏中にて八不可有御座之由風聞事、

一、松山・寺町・石成・吉成此衆八此刻、是非共無事可然之条、可馳走様申由風聞事、

右、爰許風説有様此分候、此内相違之儀も可有之候、眞贋々々申候間、実儀まれ候、猶重而可申候、以上、

五月廿六日

D 河州并泉州表合戦前後之様躰、難書分候、去廿日後巻之衆と根来衆大合戦之半、松浦陣屋焼あかり候処、飯盛より取出、前後より切懸、根来衆くつれ落居趣候、尾州八高屋へ御越候て、内郡へ御退之由申候、安見父子  
八大坂へ相退由申候、湯河宮内太輔、当座討死由申候、大覚寺殿、越前へ可有御下向為、坂本へ御越候、伊勢守父子、坂本へ被相退候、其外奉公方、京都二相残衆、大略坂本へ相越候、拙者事、第一不弁、殊老足  
禁中御近辺有之趣候、爰元様躰とり、肩鼻々々に申候間、何を正儀に可仕様無之候、先有様此分候、定相  
違之儀も可有之候歟、御心得候て、御申肝要候、閣筆候、

五月廿七日

大館陸奥守

遊佐美作守殿 参(7)

史料C・Dは教興寺合戦を伝えたもので、永禄五年(一五六二)と推定できる。日付よりC・Dは教興寺合戦の直後に作成されたもので、合戦の模様を伝えた第一級の史料と言えよう。史料A・Bと比較すると、多少の相違点がみられる。以下、その要点を列举してみよう(A・B同様六角氏関係を除く)。

和泉の松浦氏の陣が崩れ、それが畠山軍敗北の原因となった。

湯河直光が最初に戦死して紀州勢が総崩れとなったが、河内衆・根来衆の大將は無事である。

畠山高政は高屋城から大和宇智郡(8)をへて、紀伊へ没落した。

の松浦氏だが、守が天文十八年(一五四九)六月の摂津江口の戦いで三好長慶に味方するなど(9)、三好氏とは同盟関係にあった。それがなぜ三好氏と対立するに至ったのか、次に「九条文書」(『和泉市史』一卷)を示し、若干の考察を試みてみたい。

E 泉州事、從養父周防代并一(十河)存被申付、以前自無相違、可有存知候、為其、以一札申候、恐々謹言、

卯月廿三日

松浦万満殿

(三好)  
長慶(花押)

文面より松浦氏の当主が幼少であり、三好長慶の第十河一存が後見していたことが知られる。松浦守はすでに没していたのであろう。十河一存が岸和田城に入った時期は判然としないが、松浦守の消息が弘治年間(一五五五―五八)以降知れず、「細川両家記」永禄元年(一五五八)九月二十日の記事に、三好方の「諸勢和泉国中打廻」とみえる。これらのことから、十河一存は遅くとも永禄元年(一五五八)には岸和田城に入り、松浦氏の当主が幼少なことに付け入って、和泉の支配を進めようとしていたのであろう。十河一存は長江氏前掲書によれば、永禄四年(一五六一)四月二十三日に没したとみられることから、Eの年代は、永禄元年(一五五八)から三年(一五六〇)の間と推定できよう。

松浦氏は天文年間(一五三二―五五)にはすでに守護権力から自立していたことが、矢田俊文氏の研究により明らかにになっている<sup>(10)</sup>。十河一存の岸和田入城は松浦氏にとって、自己の権力基盤を犯す重大な危機と言えよう。したがって、松浦氏が畠山氏方について、三好氏による和泉の支配強化を阻止しようとしても何ら不思議ではない。永禄四年(一五六一)から翌五年(一五六二)にかけて、和泉・河内で戦った畠山軍には、三好氏の支配強化に対抗しようとするこれら地域の勢力が、少なからず参加していたようだ。

おわりに

河内・和泉は、天文十八年(一五四九)六月以降、三好長慶の同盟者である畠山氏(遊佐氏)・松浦氏の支配

する国であつた。永禄年間に入り、三好氏は両国の直接支配を目指す、その背景には、畠山氏の内紛・松浦守の死去の他に、永禄元年（一五五八）十一月に、將軍足利義輝が帰京し、幕府が復活したことが関係していたとみられる。三好氏は、本拠地阿波と京都の間に位置する河内・和泉を直接支配することにより、政権の基盤強化を目指したと考えられる。

教興寺合戦を頂点とする、永禄四年（一五六一）から五年（一五六二）にかけての畠山氏と三好氏の抗争は、河内・和泉を支配していた守護・守護代層と、これに取って変わろうとする三好氏との抗争の、一つの帰結点であつた。

だが、この後の三好氏による河内支配が、順調に行われたわけではない。永禄六年（一五六三）九月十八日付で、畠山氏の河内守護代家当主遊佐信教が金剛寺に判物を発給したことが『金剛寺文書』（『大日本古文書』家わけ七）二八七号にみえる。信教は翌七年（一五六四）九月二十九日に観心寺にも判物を発給したことが『観心寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）二七〇号にみえるなど<sup>11</sup>、畠山氏は南河内で権力を行使していたのである。河内における三好氏の権力基盤は強固なものではなく、後年の三好・松永の抗争の下地は、すでに内在していたと言えよう。

#### 註

（１） 同氏著『三好長慶（人物叢書）』（吉川弘文館、一九六八年）。

（２） 同氏著『戦国三好一族』（新人物往来社、一九八五年）、および同氏執筆『大阪府史』四巻五章二節。

（３） 本章では、『群書類従』本「細川両家記」との比較の意味もあり、原本から転写したと言われる国立国会図書館所蔵の「細川両家後之巻」を翻刻した。「細川両家記」に関しては、和田英道氏「細川氏関係 軍記考 書誌篇 永正期を中心とする」<sup>1</sup>（『跡見学園女子大学国文学科報』十一、一九八三年）を 参

照されたい。

(4) 本稿では「足利季世記」の原本である天理図書館本を翻刻した、黒田俊雄氏・川岡勉氏編『羽曳野中世軍記等史料集』(羽曳野資料叢書2)を使用した。

(5) 『後鑑』四(新訂増補国史大系)永禄五年(一五六二)五月十九日条所収。

(6) 「真観寺文書」(『真観寺文書の研究』、八尾市立歴史民俗資料館、二〇〇一年)六三号、永禄五年(一五六二)三月十一日付大伝法院惣分老若中快秀禁制写。なお、参考のために次に掲げる。

禁制 真観寺

一、当手軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、

一、剪採山林竹木之事、

付居陣之事、

一、相懸矢銭兵糧米之事、

付放火之事、

右、条々堅令停止訖、若違犯之族於在之者、速可処敵科者也、仍下知如件、

大伝法院

惣分老若中

永禄五年三月十一日 快秀

貴重な史料の閲覧の許可を下さった真観寺様、ならびにひとかたならぬご慮を賜った八尾市立歴史民俗資料館の皆様に御礼申し上げます。

(7) 桑山浩然氏「室町幕府内談衆大館氏の残した史料 室町幕府関係引付史料の研究・序説」(『古文書研究』三〇、一九八九年)によれば、「書案」は大館晴光が作成した朝倉氏宛書札案の原本とされる。だが、朝倉氏の家臣に遊佐美作守は存在せず、史料Dの遊佐美作守は、能登守護家畠山義綱の重臣遊佐

続



光とみられる。したがって、史料Dは能登畠山氏宛の書案であろう。

(8) 内郡は宇智郡との音通によるものであろう。

(9) 『天文日記』(北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年)天文十八年(一五四九)六月二十七日条等。

(10) 同氏「戦国期の守護代家」(同氏著『日本中世戦国期権力構造の研究』二章四節、塙書房、一九九八年、初出一九八九年)。

(11) これら判物の署名は「教」であるが、花押の形状が「玉置家文書」(『和歌山県史』中世史料二)六号の遊佐信教の花押と一致することにより、遊佐信教と分かる。『大日本古文書』では「教直」と注記するが、これは「畠山家譜」(内閣文庫蔵等)をもとにした誤謬によるものと思われる、そのまま信じることはできない。

「追記」 教興寺合戦に関しては、小谷利明氏が「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)で、三好氏と畠山・六角氏による「幕府を分裂させた天下の大戦争」で、その結果「幕府権力が大きく解体に向かう」とされ、大覚寺義俊の役割の重要性が示された。小谷氏の見解を十分検討する間が無かったため、本章の論旨は旧稿のとおりになっている。また、松浦氏に関する廣田浩治氏・山中原氏の最近の研究成果も時間の関係で、十分反映していない。

五 時

### 第三章 織田信長と畠山氏家臣

#### はじめに

元龜四年（一五七三）、將軍足利義昭は織田信長に京都を追放され、ここに室町幕府は滅亡した。同年六月二十五日、河内・紀伊守護畠山秋高が河内守護代遊佐信教に殺害され、畠山氏も事実上滅亡した。

永祿十一年（一五六八）九月、足利義昭を擁した織田信長が上洛した。三好氏に河内を追われ、紀伊に没落していた畠山氏もこれに協力し、河内を回復した。畠山秋高は高政とともに、永祿八年（一五六五）五月の將軍足利義輝暗殺後、足利義昭方として活動していたゆえ当然である（<sup>1</sup>）。畠山氏は河内支配において、度重なる三好氏の攻撃に対抗するため、織田信長の軍事力に依拠する面も多く、信長との関係が重要であった。したがって、織田信長と將軍足利義昭の関係が破局を迎えると、畠山氏の立場も微妙なものとなった。

石田晴男氏は、畠山氏において、遊佐信教を反信長方、保田知宗を信長方とされた。また、畠山秋高の殺害を天正二年（一五七四）とされ、遊佐・保田の対立も、これと関連して説明されている（<sup>2</sup>）。これは石田氏が論文を発表されたのが昭和五十二（一九七七）年であり、昭和五十四年（一九七九）に『大日本史料』第十編之十六が刊行され、秋高の殺害が元龜四年（一五七三）六月二十五日に比定される以前であった。秋高殺害の年の違いは、当時の日記・古文書類に秋高の殺害が見えないからで、軍記物・諸系図類も没年はまちまちである。それゆえか、昭和二十八年（一九五三）に刊行された『史料綜覧』巻十一には、該当する記事は記載されていない。

畠山秋高の没年が確定された以上、石田氏の見解は再検討の必要が生じてきた。本章では、保田知宗の活動を

中心に、畠山氏滅亡前後の河内の政治情勢を検討していきたい。

なお、一般に畠山秋高は「昭高」とされる。これは諸系図類・軍記物ばかりか、『言繼卿記』永禄十三年（一五七〇）三月一日条に「畠山左衛門督昭高」と記していることが大きいと思われる。しかし、「粉河寺文書」（『粉河町史』三巻）三〇号（年不詳）七月七日付秋高書状の如く、現存する古文書の自署は「秋高」である。文中に「昭高」と記したと思われる文書もみられるが写であり<sup>(3)</sup>、かつ発給者は秋高自身ではない。

「秋」と「昭」の混同は、なぜ生じたのであろうか。周知の如く畠山氏の当主は、將軍から偏諱を受けることが多く、秋高も同様であつたと考えられたからである。では、その時期について、検討してみよう。

三好三人衆による將軍足利義輝暗殺後、幽閉されていた南都より脱出した義輝の弟一乗院覚慶は、永禄九年（一五六六）二月十七日、還俗して足利義秋と名乗つたが、同十一年（一五六八）四月十五日の元服に際して、義秋を義昭と改めている<sup>(4)</sup>。「秋」の字より、この間に畠山政頼が偏諱を受け、秋高と改めたとみられる。畠山氏が將軍就任以前の足利義秋から偏諱を受けるのは異例と言えるが、これは將軍殺害と言う非常事態に対し、義秋方としての立場を明確にする意味があつたためと考えられる。一度与えられた偏諱を簡単に変えるとは考えられないことから、秋高が昭高と改めた可能性は低い。偏諱は將軍が与えるものであり、足利義秋が義昭と改名し、將軍就任時は義昭であつたことから、誤解が生じたものとみられる。

## 一 保田氏と畠山氏のかかわり

保田氏は紀伊国有田郡保田莊を本拠したとみられる国人である<sup>(5)</sup>。長禄四年（一四六〇）五月に紀伊で発生した守護領と根来寺領との水論に際し、『大乘院寺社雜事記』（増補続史料大成）同年五月二十五日条等に、守護方の軍勢として「保田弥四郎」の名が見える。この事実から、保田氏は応仁の乱以前に、畠山氏の被官人とな

っていたことが分かる。しかし、この時期、保田氏は分国支配にその名を見いだすことはできない。

明応二年の政変以降、政長流畠山氏では、畠山氏当主が紀伊に在国することが少なく、河内で戦う兵力を紀伊に求めることが多かった。このような中で、畠山氏と保田氏の関係が深まっていたと考えられる。天文十一年（一五四二）三月、畠山植長は河内に復帰したが、この後、保田佐介長宗は畠山植長の内衆として、和泉や大和で活動している<sup>(6)</sup>。畠山秋高の時期、政長流畠山氏の内衆は、守護家畠山氏系と守護代家遊佐氏系に分かれていた<sup>(7)</sup>。保田氏の畠山氏内部における立場を検討するためにも、守護家畠山氏系の内衆を検出してみよう。

本書一部二章より、遊佐勘解由左衛門尉盛・丹下越前守遠守・三宅志摩守智宣・遊佐越中守高清（左衛門大夫清）が、秋高系内衆と判明する。次に川岡勉氏の研究より<sup>(8)</sup>、碓井因幡守定仙も、秋高系の内衆と分かる。『観心寺文書』（『大日本古文書』家わけ六）一〇九号で、天正四年（一五七六）七月七日、酒匂久介次が、畠山秋高の追善のため観心寺に寺領を寄進した。酒匂久介次は、『天文日記』（北西弘氏編『真宗史料集成』三巻、同朋舎出版、一九七九年）天文二十一年（一五五二）九月二十九日条で畠山高政とともに本願寺に音信を通じた酒匂久介と同一人、または同族とみられることから、秋高系の内衆である。酒匂氏は小川信氏によつて、相模出身であることが明らかにされている<sup>(9)</sup>。ただ、『太平記』（日本古典文学大系）巻三十四に、「丹下・俣野・誉田・酒匂・水速・湯浅太郎・貴志」と、河内・紀伊の国人とともにその名が見えることから、南北朝期にはすでに河内に本拠を移していた可能性がある。

では、保田氏が秋高系内衆の中でどのような地位にあつたのか、次の史料<sup>(10)</sup>から検討してみよう。

A 「（別紙）

月行事地蔵院宝積院

於紀谷五ヶ寺給之、

乙丑 尾張守次郎四郎殿御制札永禄八年 拾月十八日」

禁制 観心寺

- 一 軍勢甲乙人乱紡狼籍之事、
- 一 伐採山林竹木事、付放火事、
- 一 相懸矢銭兵粮米事、

右条々、堅令停止訖、若於違犯輩者、可被処嚴科者也、仍下知如件、

永禄八乙丑年十月日

(保田)  
山城守(花押)  
(三宅)  
四郎兵衛尉(花押)

御屋形様	御奉	行保田殿	三宅殿	尾張守	次郎四	郎殿御	制札
------	----	------	-----	-----	-----	-----	----

史料Aの山城守の花押と、「興福院文書」年不詳十月二十四日付保田佐介長宗書状の花押とを、東京大学史料編纂所影写本で照合すると、特徴が一致することから、保田山城守は保田長宗であるとみられる。史料Aは、一部一章で述べた如く、畠山氏が將軍足利義輝の暗殺後、三好氏に占領されていた河内を奪回すべく、軍事行動を起こした際に発給されている。同様に「押紙」の「尾張守」は畠山高政、「次郎四郎」は畠山政頼に比定できる。史料Aの三宅四郎兵衛尉の花押と、「高野山恵光院文書」の三宅志摩守智宣の花押を、東京大学史料編纂所影写本で照合すると、特徴が一致することから、両者は同一人物とみられる。三宅智宣は前述の如く、畠山秋高系の内衆である。保田長宗は秋高系内衆と連署で禁制を発給していたのである。

『金剛寺文書』(『大日本古文書』家わけ七)二八九号には、左衛門大夫と山城守の連署禁制がみられる。『金剛寺文書』の山城守の花押と、史料Aの保田山城守の花押とを、東京大学史料編纂所写真帳で照合すると、特徴が一致することから、同一人物と分かる。左衛門大夫も同様に秋高系内衆の遊佐左衛門大夫清(押紙)である。三宅智宣・遊佐清は畠山秋高の有力内衆である。保田長宗は秋高系の有力内衆と連

署しているのであるから、保田氏は、守護家畠山秋高の守護家系内衆として活動していたのである。

## 二 將軍の拳兵と畠山氏の立場

元龜四年（一五七三）三月七日、以前から険悪化していた將軍足利義昭と織田信長の仲は、ついに決裂した。重大な局面を迎え、畠山氏当主及び内衆は、どのような行動を取ったのであろうか。この当時の状況を、次の史料から<sup>(11)</sup>検討してみよう。

B 芳札<sup>馬</sup>之旨具遂披見得其意候、仍信長事既至東山着陣候、公儀へ雖懇望申不能御承引由候、就其所々令放火候、洛中之儀此度安危之境候、摂州池田遠江守 公儀へ参候、畠山・遊佐已下同前之由候、是者当分露顯之体如 此候、当寺之儀者、三好家種々申候間可令出勢由相談候、此度信長帰国相支之様、江州表早々御進発、片時も可被急事肝要候、委細之趣頼充可申入候間、閣筆候

四月四日

（朝倉義景）  
左衛門督殿

この史料から判明するように、畿内諸勢力の大半が反信長<sup>II</sup>將軍義昭方であり、畠山秋高・遊佐信教も同様に、將軍義昭に与っていた。武田・浅井・朝倉の反信長方大名も顕在である。このような状況にもかかわらず、信長の軍事力は強大であり、その力の前に將軍足利義昭は屈し、四月七日降伏した。

これは一時的なことで、あくまで信長の打倒を目指す足利義昭は、ほどなく再挙に向けて活動を開始し、七月三日、山城槇嶋城に再度拳兵した。だが、前回の拳兵の際に、義昭がいとも簡単に信長に屈したことは、複雑な事情を持つ畿内諸勢力に、少なからぬ動揺を与えていた。再び「顕如上人文案」から、当時の情勢を見ていこう

(以下史料の傍線は筆者)。

C 御内書謹而令拜見候、仍三日至真木島御移座之由蒙仰候、然処近日信長可馳上之通風聞、就其条々被仰出候、随分不可存如在候、将亦三好内輪並高屋辺之儀切々申遣候、聊油断無之候、一途之御左右臈而可申入候、猶御使二申渡由可被申入候、恐々

七月八日

真木島玄蕃頭殿

一色式部少輔殿

此時之御使安田、若江よりは金山、多羅尾兩人罷越候而行候様申候き、但公方ヨリノ副状ハ真木島玄蕃也

高屋は畠山氏の居城で、河内支配の拠点である。傍線部分より三好氏・畠山氏ともに内部に複雑な事情を抱え、反信長Ⅱ將軍義昭方として、一本化していたわけではなかったことが分かる。

足利義昭の挙兵に先立つ元龜4年(一五七三)六月二十五日、高屋では河内守護代遊佐信教が、守護畠山秋高を殺害していた。後述の如く、遊佐勘解由左衛門尉盛・碓井因幡守定仙・酒匂久介次といった秋高系内衆が、この後も活動している。したがって秋高の殺害は、天文二十年(一五五一)の遊佐長教の場合と同様、暗殺されたのではないのだろうか。あるいは、『寛政重修諸家譜』・『寛永諸家系図伝』の記す、遊佐信教の謀叛による自害説が、意外と的を射ているのかも知れない。当時の諸記録類に秋高が没した記事が見あたらないことから、家中の動揺を抑えるためにも、一時喪を秘したとも考えられる。

守護代家遊佐信教による守護家畠山秋高の殺害、將軍足利義昭の再挙といった重大事態に際し、保田知宗以下紀州衆はどのような対応をとったのであろうか。次節で検討してみよう。

### 三 元龜四年の反信長戦線

前述の如く、將軍足利義昭の再挙に際して、畠山氏は反信長で一本化していた訳ではなかった。史料Cの注記に「此時之御使安田」<sup>(12)</sup>と見え、「安田」とは保田知宗のこととみられる。義昭再挙後の元龜四年（一五七三）七月八日、保田知宗が高屋と本願寺の間の連絡をとっていた。保田知宗は遊佐信教とともに、反信長戦線に与っていたようだ。

このような反信長戦線の活動にもかかわらず、圧倒的とも言える織田信長の軍事力の前に、七月十日、三淵藤英の守る京都二条城が陥落した。槇嶋城の義昭も七月十八日に降伏し、義昭は同二十一日、三好義継の河内若江城へ逃れた。

將軍足利義昭の両度に渡る挙兵は、織田信長の前にもろくも潰え去った。だが、三好義継の居城とは言え、河内国内に將軍を迎えた保田知宗等は、どのような立場にあったのか。次の史料から<sup>(13)</sup>考察してみたい。

#### D 禁制 観心寺

一 当手軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、

一 剪採山林竹木事、

一 相懸矢銭兵粮米事、

右条々堅被停止訖、若於違犯之輩者、速可被処嚴科者也、仍下知如件、

元龜四年九月七日

保田左介<sup>(知宗)</sup>（花押）

この史料より一日前の「元龜四年九月六日」付で、智莊嚴院某も観心寺に禁制を発給していることが、『観心



寺文書』二八〇号より分かる。周知の如く元龜の年号は、七月二十八日に織田信長の奏請により天正と改元されており、元龜四年（一五七三）九月は存在しない。

しかし、七月二十八日の天正改元後も、元龜の年号を使用した文書が少なからず存在する。たとえば、『高野山文書』（『大日本古文書』家わけ一）三三八九号「千手堂上眞供養曼荼羅供請定」も、「元龜四年癸酉九月三日」付である。前出の元龜四年（一五七三）九月六日付で觀心寺に禁制を發給した智莊嚴院某も、高野山の院の一つとみられることから、これらの年号使用には、何らかの関係があると言えよう。保田知宗等の旧年号使用は、かつて足利義維を擁した堺公方府が、享祿改元後も旧年号大永を使用したことと<sup>14</sup>、同様の事態と考えている。保田知宗等は信長の奏請した新年号天正ではなく、旧年号元龜を使用することにより、足利義昭に与する自らの立場を、明確にしようとしたものと考えられる<sup>15</sup>。

だが、八月二日には三好三人衆の一人である石成友通が山城淀城に戦死し、二十日には越前の朝倉氏、二十七日には近江の浅井氏と相次いで滅亡した。武田信玄はすでに四月十二日に不帰の客となっており、反信長戦線は危殆に瀕していた。

足利義昭は毛利氏の助力を得て、巻き返しを行うつもりであり、十一月五日から堺で交渉が行われた。だが、毛利氏に拒否され、若江城も義昭方で一本化しなかったために戻れず、やむなく紀伊由良の興国寺へ下向した。紀伊は畠山氏の分国であり、明応の政変以降、京都からの軍勢が国内深く進攻したことはなかった。興国寺は山景倫が源実朝と北条政子の菩提を弔うために創建したと伝えられる、源氏ゆかりの寺院であった。この地は奉公衆家湯河氏の勢力下にあり、義昭の当面の滞在先としては、無難な選択であった。

畠山氏の分国とはいえ、將軍足利義昭が畿内から去ったことは、この地域の反信長勢力にとって、大きな痛手となった。前々から一本化していなかった三好氏は、多羅尾綱知・池田教正・野間康久が信長方につき、金山信貞を自殺させて信長軍を若江城に引き入れたため、十一月十六日、三好義継は自殺した。大和多聞山城の松永久

秀・久通父子も、十二月二十六日、信長に降伏した。

このような事態に際し、反信長戦線に与した遊佐信教等畠山氏旧臣はどうしたのであるのか。『吉川家文書』(『大日本古文書』家わけ九)一 六一〇号(天正元年)十二月十二日付(安国寺)惠瓊書状に「河内高屋之城、由佐(遊)と四国衆楯籠候、相城被取付候、其人数打入候者、信長も帰国之由候」と記されている。遊佐信教は、四国衆(三好康長)と高屋城に籠城していたものの、もはや攻勢をかける力はなかった。畿内における反信長戦線は、事実上崩壊したのである。

#### 四 保田知宗と織田信長

天正二年(一五七四)の河内の情勢を、次の史料から<sup>(16)</sup>検討してみよう。

E 河内国天野山成金剛寺之事、自往古代々以手続証文雖為不入、近年国役少々納所依有之、根来寺為惣分、一円可令免除旨被申候、然上者無異儀令寄進候状如件

天正貳年二月十日

保田左介

知宗(花押)

大伝法院

宿老衆御中

御同宿中

これは保田知宗が独自に発給した判物である。史料Eの宛所である大伝法院宿老衆は、いわゆる根来寺衆であり、発給者の保田知宗ともども、元来紀州の勢力である。史料Eに関連した遊佐信教や旧畠山秋高系内衆の文書

は見られない。

遊佐信教は河内守護代家であつても、紀伊守護代家ではない。保田知宗は守護家畠山秋高系内衆であつて、遊佐系の内衆ではない。保田知宗は畠山秋高が没した以上、遊佐氏の命令を受ける必要はないのである。守護家系・守護代家系に分かれていた畠山氏内衆は、守護家とその権力を保障する幕府が滅びたことから求心力を失い、保田知宗・根来寺衆は軍事力を背景に、独自の活動を始めていた。これがこの判物の発給となつたのであろう。

天正二年（一五七四）三月二十八日、織田信長は大和多聞山城へ下向し、翌二十八日、『信長公記』（奥野高広・岩沢愿彦氏校注、角川古典文庫本、一九六九年）に「三国隠れなき御名物」と記された、東大寺正倉院の蘭奢待を切り取つた。信長の威圧とも思えるこの行動に挑発されたのか、四月二日、本願寺が拳兵し、高屋城の遊佐信教・三好康長もこれに応じた。四月十一日、信長方の筒井順慶が河内に出陣し、翌十二日には信長軍の先鋒も、河内に入つた。

このような事態に対し、保田知宗や旧畠山秋高系内衆は、どのような対応を取つたのであろうか。次の史料から<sup>(17)</sup>検討してみよう。

F 此方弥無異儀候間、可御心易候、

安<sup>(保)</sup>田<sup>(知宗)</sup>佐<sup>(知宗)</sup>介人質事、未被出之由、信長承候、如何御由断二候哉、早々被仰付、御進上候様二私 可申上旨候、可有御披露候、恐々謹言

五月十七日

遊佐勘解由左衛門殿

秀吉<sup>(羽柴)</sup>（花押）

宛所の遊佐勘解由左衛門は、奥野高広氏が増訂版で訂正された如く、盛とみられる。前述の如く盛は、同じ遊佐氏でも信教とは違い、秋高系の内衆である。年代は奥野高広氏の推定のとおり、天正二年（一五七四）である

う。羽柴秀吉は遊佐盛を通して保田知宗の人質を要求していることから、この時点で遊佐盛はすでに信長方についていたようだ。後述の如く、碓井因幡守定仙等が織田信長の家臣団に組み込まれていることから、秋高系内衆の多くが、天正二年（一五七四）五月の時点で、信長方についていたとみられる。

次に、天正二年（一五七四）五月の時点で、今一つ動向が定かでなかった、保田知宗の動向を探ってみよう。

G 柴田<sup>（勝家）</sup>かたへ書状披見候、肥高<sup>（昭）</sup>之事、無是非候、無念不可過之候、其方身上之理聞届候、両方衆相談及行、遊佐<sup>（信教）</sup>事可相果候由尤簡<sup>（肝）</sup>要、就先調候趣、為此分別不相届、可然之様二調略肝要候、於様躰者、柴田可申候、恐々謹言

七月十四日

信長御印<sup>（織田）</sup>

保田左助殿<sup>（知宗）</sup>  
18

この史料の「肥高」を石田晴男氏は「昭高」の誤写とされ<sup>19</sup>、『大日本史料』十編之十六の編者もそれに従ったため、誤写説が定説化した。信長が昭高としたのは、「はじめに」で述べた如く、「秋」と「昭」の字の混同によるものであろう。

史料Gの年代を奥野高広氏は『織田信長文書の研究』において、天正二年（一五七四）と推定されていた。しかし、『大日本史料』十編之十六之編者は、畠山秋高の没年を元龜四年（一五七三）六月二十五日に比定したのに伴い、史料Gの年代も元龜四年（一五七三）とした。そのため奥野高広氏も昭和六十三年（一九八八）九月に刊行された『増訂織田信長文書の研究』において、史料Gの天正二年（一五七四）説を撤回し、元龜四年（一五七三）に改められている。

前述の如く保田知宗は、元龜四年（一五七三）九月七日の時点で、織田信長方ではなく、足利義昭方として活

動していた。したがって、九月七日より前である七月十四日以前に、保田知宗が織田信長方と音信を取るなど、到底考えられない。ただ、史料Gが天正二年（一五七四）だとすれば、天正元年（一五七三）に畠山秋高が没してから、時間がたちすぎているとの疑念が生じて当然であろう。これは、天正二年（一五七四）に保田知宗が織田信長方に付き、信長が書状を送った際に、改めて秋高系内衆である保田知宗に対し、秋高に対する弔意を伝えためであろう。

このように考えれば、史料Gを天正二年（一五七四）に比定しても問題はないだろう。史料Gは史料Fと関連づけて論じるべき書状であり、当初奥野高広氏が推定した如く、天正二年（一五七四）に比定するのが妥当である。以上のことより、保田知宗が織田信長方についたのは、天正二年（一五七四）であったと言える。

## 五 河内平定後の旧畠山氏家臣の動向

天正三年（一五七五）四月、河内は織田信長に平定され、「国中高屋の城初として悉く破却」（『信長公記』）された。このような事態に対し、畠山氏旧臣はどのように対処したのであるうか。旧畠山秋高系内衆から見ていこう。

碓井因幡守定仙は、天正三年（一五七五）十一月二十五日、畠山秋高追善のため、「知行分」の内から観心寺に寄進を行い、酒匂久介次も、天正四年（一五七六）七月七日、同じく秋高追善のために、「知行分」から観心寺に寄進を行ったことが、『観心寺文書』一〇八・一〇九号より分かる。前述の如く、天正三年（一五七五）四月に河内は、織田信長に平定されていた。したがって、天正三年（一五七五）十一月二十五日、および翌四年（一五七六）七月七日の時点で、碓井因幡守定仙・酒匂久介次に知行を宛うことができるのは、織田信長以外考えられない。両者は信長の家臣となつたのである。

『信長公記』天正四年（一五七六）七月十五日の記事に、信長により「住吉浜の城定番として、保田久六・碓井因幡守<sup>20</sup>・伊地知文大夫・宮崎二郎七、番手に入置かせられ候キ」と記されている。保田久六は知宗と同族<sup>21</sup>、碓井因幡守は定仙とみられる。伊地知文大夫は一部二章で述べた如く、畠山氏内衆であり、「足利季世記」に碓井因幡守と同様、畠山秋高系内衆で宮崎氏の一族とされている「伊地知文大輔」のことであろう。宮崎二郎七であるが、角川本『信長公記』では、大和の住人と注記している。だが、一族とみられる宮崎謙大夫・鹿目介が、毛利氏の水軍と戦って戦死したことが、『信長公記』天正四年（一五七六）七月十五日の記事に見える<sup>22</sup>。海の無い大和の住人が、毛利氏の水軍と海戦を戦うとは考えがたい。保田氏の場合と同様に、紀伊国有田郡宮崎莊を本拠とする宮崎氏と考えるのが妥当であろう。

碓井因幡守定仙・酒匂久介次は、旧畠山秋高直系の内衆であり、伊地知氏も同様であろう。保田氏は秋高系内衆であるが紀伊出身であり、宮崎氏も紀伊出身である。彼らが織田信長から知行を与えられたり、城定番になったりしていることは、信長の家臣となった証左と言える。畠山氏旧臣の中で、旧秋高系内衆と紀伊出身の家臣は、織田信長の家臣団に組み込まれたのであった。旧秋高系内衆と紀伊出身の家臣の接点となったのが、保田知宗であろう。史料Gの「両方衆」とは、旧秋高直系内衆と紀伊出身の家臣のことではないだろうか。

一方、反信長方として活動した遊佐信教は、どうしたのであるうか。高屋城で共に籠城し戦った三好康長は、天正三年（一五七五）四月、織田信長に降伏し、家臣団に組み込まれていた。遊佐信教の消息の手がかりが、『吉川家文書』一四九三号にあった。

H至其表、公儀被移御座候、仍為達上聞、遊佐差下候、就其、右馬頭（毛利輝元）以一札申候、可然様被相談、此刻急度可被遂御入洛事、肝要候、然者此表之儀、紀州三ヶ寺申騒、不可有油断候、随而甲越両国同入魂事候、於様子者、河内入道可申分候、当家之儀、別而御馳走憑入候、恐々謹言

五月十三日

吉川駿河守殿  
(元春)

進之候

頼英(花押)

足利義昭が備後鞆に移ったのが天正四年(一五七六)であるから、傍線部分より、史料Hの年代は、天正四年(一五七六)以降に比定できる。頼英は「此表」で「紀州三ヶ寺申騒」と記していることから、紀伊か畿内に居していたとみられる。「頼」は本願寺の下間氏が多く名乗っているので、「頼英」は本願寺の関係者と見てよい。また、河内守護代家の遊佐氏を「差下」せるのは、守護家が滅亡しているのも、本願寺と考えるのが妥当であろう。「差下」された「遊佐」氏だが、「河内入道可申分候」と文中に見える。「差下」された「遊佐」氏が、吉川元春に「申分」したのであるから、「遊佐」氏は「河内入道」であろう。遊佐信教は河内守の官途を得ており、天正二年(一五七四)以降、信教が没した記録も無いことから、史料Hの遊佐河内入道は、信教に比定できるのではない。

遊佐信教は、高屋城落城後も本願寺と共に、反信長方として活動していたのである。江戸時代毛利氏家中に遊佐氏が見えるが、信教の子孫であろうか。同家に伝わった「譜録」(山口県立文書館蔵)等からは明らかにできない。

## おわりに

戦国期、畠山氏当主は度々紀伊に在国し、紀州衆に河内における軍事力を依拠した。保田氏はそのような状況の下で畠山氏に従い、河内での活動を行うようになる。

元龜四年(一五七三)三月、織田信長と將軍足利義昭の間が決裂すると、畠山氏は内部に種々の問題を抱えつ

つも、守護家として將軍義昭に与した。激しく動く政治情勢の中で、守護畠山秋高は守護代遊佐信教に殺害された。重大事態にもかかわらず、秋高系内衆や紀州衆は、足利義昭方として、遊佐信教とともに活動していた。

天正元年（一五七三）十一月、信長に敗れた義昭は紀伊に去った。紀伊は河内と同じく畠山氏の分国とは言え、畿内ではない。このことによって、利害関係が必ずしも一致していなかった畿内の反信長勢力に動揺が広がった。三好義継の滅亡、松永久秀父子の信長への降伏は、將軍義昭の畿内不在が、大きく影響していたとみられる。

旧畠山氏内部もその例外ではなかった。小異を捨てて大同についた感のあった旧守護家系内衆や紀州衆と、守護代家系内衆の間が決裂した。織田信長の介入もあって、旧守護家系内衆や紀州衆は信長の家臣に組み込まれ、天正三年（一五七五）四月、信長は河内を平定した。碓井因幡守定仙・酒匂久介次等旧畠山秋高系内衆が信長方についたのは、足利義昭が畿内を去ったことと、対抗関係にあった遊佐信教が、畠山氏の政敵三好康長とともに高屋城に籠もり、積極的に反信長方として活動していたからであろう。

畠山秋高系内衆の中でも保田知宗等紀州衆は、足利義昭が本国の紀伊由良に滞在している以上、義昭方として活動しても不思議ではない。しかし、彼らは義昭方ではなく、信長の麾下に入っている。保田氏は紀伊出身であっても、河内で活動する以上、河内に於いて自己の権力を保障してくれる者を見極めて従う必要があった。保田知宗は義昭を二度も容易に下した信長の軍事力に魅力を感じたのかも知れない。

畿内の諸勢力にとって、將軍足利義昭の存在は大きかった。元龜四年（一五七三）、畠山・三好・松永等、いずれも内部に矛盾を抱え、それまでは敵対していた勢力も、相互不信が解消した訳ではなかったが、ひとまず將軍義昭方として、織田信長と戦った。彼らは足利義昭の追放・紀伊下向の前後に滅亡したり、往事の勢力を失ったりしている。したがって、畠山氏を室町幕府体制下の旧勢力と位置付けるのは、妥当な結論と言える。足利義昭が畿内を去った天正元年（一五七三）十一月は、畿内で活動する諸勢力にとって、室町幕府の滅亡を実感させ、織田信長を統一権力として認識する一つの転換点であった。



註

(1) 拙稿「紀伊守護家畠山氏の家督変遷」(本書一部一章)。

(2) 同氏「守護畠山氏と紀州『惣国一揆』一向一揆と他勢力の連合について」(『歴史学研究』四四

八、一九七七年、後に峰岸純夫氏編『本願寺一向一揆の研究』戦国大名論集<sup>13</sup>に所収、吉川弘文館、一

九八四年)。

(3) (元龜三年)六月八日付高屋連署中宛織田信長書状写(奥野高広氏『増訂織田信長文書の研究』上巻三二三号、吉川弘文館、一九八八年、初版一九六九年)。

(4) 奥野高広氏『足利義昭(人物叢書)』(吉川弘文館、一九六〇年)。以下、本稿における足利義昭の動向は、基本的に本書による。

(5) 『大日本史料』十編之二十一、天正二年二月十日条では、保田知宗を「大和」出身とする。しかし、『奈良県史』十一(大和武士)に保田氏の名前が見えないなど、保田知宗を大和衆とするのは賛成できない。また、『大乘院寺社雑事記』長禄四年五月二十五日条に「保田弥四郎」とともに名前が見えるのは、大半が畠山氏内衆か紀伊国人で、大和国人はいない。保田氏は小川信氏が「國學院大學所蔵『畠山書』翻刻と考察」(『國學院大學図書館紀要』一、一九八九年)五号文書の解説や、奥野高広氏が『増訂織田信長文書の研究』一〇八一号の解説で述べられたように、紀伊国人とするのが妥当である。

(6) 小谷利明氏「畠山植長の動向」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』所収、高志書院、二〇〇四年)。

(7) 拙稿「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」(本書五部一章)、小谷利明氏「戦国期河内における国郡支配について」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』一、一九八九年)。

(8) 同氏編『畠山家文書集』(『羽曳野資料叢書』3)所収「畠山義昭氏所蔵畠山家文書」二五号の解説。  
(9) 小川信氏前掲論文。

(10) 『観心寺文書』二七八号。

(11) 「顕如上人文案」(北西弘氏編『真宗史料集成』三卷)。なお、「顕如上人文案」は『大日本史料』

で  
異同を正した。

(12) 『真宗史料集成』の解題によれば、注記は顕如の備忘のためのコメントである。

(13) 『観心寺文書』二八一号。

(14) 今谷明氏「細川・三好体制研究序説 室町幕府の解体過程」(同氏著『室町幕府解体過程の研究』

二部四章、岩波書店、一九八五年、初出一九七三年)の见解による。

(15) 反信長勢力がすべて「元龜」の年号を使用したとは限らない。

(16) 『金剛寺文書』三〇七号。

(17) 奥野高広氏註(3)前掲書、四五二号。

(18) 奥野高広氏註(3)前掲書、四五六号。

(19) 同氏前掲論文。

(20) 『信長公記』(角川古典文庫本)の人名註索引では、「塩井因幡守」とし、「姓は字体不詳、仮入」

とする。『信長公記』自体の確認はできなかったが、『信長公記』の作者太田牛一の自筆である池田家本『信長記』で確認したところ、確かに姓の字体は分からない。だが、この前後に記されている人名が畠山氏旧臣なので、「碓井因幡守」に比定して誤りないだろう。

(21) 奥野高広氏『増訂織田信長文書の研究』下巻一〇八一号文書の解説によれば、保田知宗は天正四年(一五七六)五月三日に戦死した。

(22) 『毛利家文書』(『大日本古文書』家わけ八)一三三八号(天正四年)七月十五日付村上元吉等連署注進状等当時の史料によれば、木津河口の海戦が戦われたのは、天正四年(一五七六)七月十三日から十四日にかけてであった。





## 終章

### はじめに

本書に収録した各論文は、古いものでは二〇年以上前のものもあり、本書をまとめるにあたり、出来得る限りの修正を加えている。その作業の最中にも畠山氏研究に新たな進展があった<sup>(1)</sup>。直近の業績を、本書に収録した各論文で取り入れることは、時間的に困難であるため、十分に補訂を行えなかった章もある。本章では、本書で明らかにしえたと考えていることに、直近の研究動向をも視野に入れて、筆者の考えを記したい。

### 一 畠山氏家督と幕府の関係

畠山氏の分裂を招いた原因は、將軍足利義教による家督干渉と、突然暗殺されたことにある。嘉吉の変後復権した畠山持国は、畠山氏内衆の中核にあつた遊佐国政と斎藤因幡入道を肅清した。これは両者が持永擁立に動いたためである。さらに持国は、自己が隠遁中に近侍したと見られる一部内衆を重用し、従来からの内衆を分国支配から事実上排除した。これが、内衆間の対立を生むこととなった。また持国は、自分の跡目を実子義就がいるにもかかわらず、自己の復権に多大の功績のあつた弟の持富とした。しかし、持国の側近が自己の地位を維持するため、義就擁立に動いたことが、畠山氏の分裂を決定的にしたのである。

明応の政変以降畿内の政争は、將軍職を巡る争いを軸に展開しており、畠山氏も政長流と義就流の抗争が、これと結びついて繰り広げられていた。この図式に変化が見られるようになったのが、永正年間である。政長流と

義就流の抗争に加えて、政長流内部での抗争が見られるようになったのである。

永正十七年（一五二〇）、畠山尚順が内衆や奉公衆家等と対立して、分国紀伊を追放された。この事件の直前、細川澄元方の攻勢に対して、將軍足利義植は細川高国と行動を共にせず、京都に残留して澄元に細川氏家督を承認するなど、細川高国と足利義植との不和が表面化していた。その際、畠山尚順は細川高国ではなく、足利義植に与して行動していたとみられる。このような尚順の立場が、京都で細川高国政権が復活するとともに、尚順の追放に結びついたであろう。

堺公方府が崩壊した後、將軍足利義晴が対立していた細川晴元と和睦して、いわゆる細川晴元政権が成立したことで、この状況に変化が生じた。これ以降反細川晴元勢力は、將軍足利義晴の下で幕府の枠組みを変更することをめざし、將軍の地位を巡る争いが起こらなくなったのである。

細川晴元政権の成立に際して畠山植長は、旧細川高国派ばかりか本願寺とも結んだため、天文三年（一五三四）、植長は遊佐長教らによって河内を追放された。その結果畠山植長は、細川晴元政権から見れば枠外にあるが、將軍足利義晴から見れば幕府 守護体制の枠内にあると言う、ややこしい立場となった。これが政長流畠山氏内部における抗争の原因となった。細川晴元政権は義就流の在氏に畠山氏家督を認めただけでは不十分であると認識し、天文七年（一五三八）畠山弥九郎の政長流家督継承を行った。これは政長流・義就流ともに畠山氏家督を認めると言うものであり、河内の守護職を分割し、それぞれ南北に分割支配を行ったのではない。両者の勢力範囲は複雑に入り組んでおり、机上で線引きできるようなものではなかった。一時しのぎ的な体制ではほころびが出るのは当然で、木沢長政の反乱は、起こるべくして起こったと言えるよう。

木沢長政の乱の結果、天文十一年（一五四二）三月、畠山植長は河内に復帰した。この際植長は、政長流の弥九郎ばかりか義就流の畠山在氏をも攻撃し、翌年正月飯盛城を攻略して、在氏を没落させた。畠山氏家督は、植長によって一本化されたが、植長と旧細川高国派との関係が切れたわけではなく、細川晴元政権は体制内に異分

子を抱え込むこととなった。このような状態を解消すべく細川晴元政権は、天文十四年（一五四五）に至り、畠山四郎の擁立を図った。ただ、天文三年（一五三四）の時とは違い、遊佐長教が晴元政権に同調しなかったため、この企みは失敗した。

天文十四年（一五四五）の畠山四郎の家督相続は、旧畠山植長家臣団の内紛には至らず、四郎は高屋城に入れなかったばかりか、京都での活動も見られない。これは、守護家の家督を幕府で決定しても、家臣団の支持が無ければ当主として権限を行使しえなかったことを示している。一方、遊佐長教とともに河内高屋城にあった畠山播磨守政国は、惣領名代であった。この事實は、一六世紀半ばに至っても、守護家の家督決定権が幕府（將軍）にあったことを示している。遊佐長教らが細川氏綱の乱を主導したのは、幕府の枠組みを変えなければ、自己に有利な畠山氏の家督決定ができないと判断したからであろう。

天文二十一年（一五五二）九月、畠山高政は家督を相続したが、永禄元年（一五五八）十一月、高政は安見宗房らと不和になり、紀伊に出奔した。畠山高政が家督を相続した天文二十一年（一五五二）九月の時点では、將軍足利義輝と三好長慶の和睦が一時成立しており、高政が紀伊に出奔した永禄元年（一五五八）十一月は、將軍足利義輝が三好長慶と和睦して帰京した時である。永禄八年（一五六四）の畠山秋高の家督相続は、將軍足利義輝が暗殺されたためとみられ、元龜四年（一五七三）六月の秋高殺害は、足利義昭と織田信長の対立からんだものである。このように、家督の継承や内紛など畠山氏の動向は、將軍（幕府）の動静と密接な関係があった。

## 二 守護代家の権力と内衆

前節で述べた政長流の内紛の原因には、守護家と將軍（幕府）との関係とともに、守護代家遊佐氏の権力の強大化があったと見られる。本節では、畠山氏分裂以降の内衆の家格秩序について述べる。戦国期の河内では、義



就流畠山氏・政長流畠山氏ともに、守護家と守護代家による重層的な支配体制がとられていたことが明かにされ、守護内衆の中でも、守護代の地位が高かったからである。

近年、室町期の武家の家臣団の在り方について、一揆的結合で説明することが多い。この場合一揆的結合とは、ある目的達成のために構成員の平等を原則に結ばれた集団と、その共同行動という意味で用いると規定されよう<sup>(2)</sup>。確かに畠山弥三郎擁立劇の際、「畠山被官人等一揆背伊豫守」と『康富記』（増補史料大成）享徳三年（一四五四）八月二十一日条に記されているように、畠山氏内衆は、ある目的のための「揆を一にする」集団を形成したことは間違いない。だが、本書で述べてきたように、畠山氏内衆には守護代家以下、家格秩序が存在しており、構成員の平等を前提とした集団とは言い難い。畠山氏家臣団は、有力内衆の元に他の内衆が結集する、派閥と理解すべきであろう。

義就流畠山氏においては、誉田氏が「畠山之長衆」と「妙音院朝乗五師日並」（『大日本史料』八編之三十七、延徳二年七月十二日条所収）に記されている。また、文明九年（一四七七）九月の畠山義就の河内下向に際して誉田氏の軍勢は、『大乘院神社雑事記』（増補史料大成）文明九年（一四七七）十月二日条に「後陣誉田、馬上四十二騎」と記されており、この数は義就に次ぐものであった。このように義就流畠山氏においては、誉田氏が遊佐氏とともに守護代家の家格を保持し、他の内衆より上位に位置していた。これは、誉田氏が義就擁立に熱心であったからであろう。

義就流の誉田氏は原氏・法楽寺氏・江河氏らと一党を形成していた。政長流の遊佐氏は、萱振氏・草部氏を遊佐氏被官と記した史料が存在するように、萱振・草部・走井・吉益氏らと一党を形成していた。彼等はそれぞれ小守護代や奉行人として活動している。守護代家の権力が伸張する背景に、分国の支配機構を守護代が掌握していたことが、大きく影響していたと考えられる。

義就流畠山氏では、義就没後に内衆間で勢力争いが生じ、義就の河内三奉行の内、花田・豊岡氏が没落したば

かりか、菅田氏も遊佐氏との抗争に敗れて没落した。このように、内衆間の勢力争いが、木沢長政による守護代家の家格奪取につながったと見られる。義就流畠山氏では、政長流と違い守護代家遊佐氏の家格が安定しなかった。このような内衆相互の抗争が、義就流畠山氏の勢力を弱体化させ、義就流畠山氏が没落する一つの原因となったのである。

政長流畠山氏では、遊佐氏と神保氏が守護代家の地位にあった。しかし、神保氏は長誠が越中に在国したことであって、河内・紀伊に基盤を形成できなかった。そのため、守護家当主とともにあった河内・紀伊守護代家遊佐氏が、それまで以上に重要な地位を占めるようになったとみられる。

細川高国政権期に、畠山尚順が河内に在国しなかったこともあって、河内では守護代家遊佐順盛が、守護代家奉行人を登用するなど、守護代家主導による支配体制を整備した。これが、内衆による政長流畠山氏当主廃立を可能にするとともに、遊佐長教による河内支配の基盤となったとみられる。

天文三年（一五三四）、守護代遊佐長教は守護畠山植長を河内から追放し、守護代家による河内支配体制を作り上げた。天文十一年（一五四二）、畠山植長が河内に復帰したことで、重層的な支配体制が復活したが、遊佐長教の権力が紀伊にも及ぶなど、遊佐長教の権力は伸張した。天文十四年（一五四五）に畠山植長が没した後、遊佐長教は守護家系の内衆に加えて、安見宗房らをも内衆に取り込み、畠山氏家中を統率した。

三好長慶と結んだ遊佐長教は、天文十八年（一五四九）、細川晴元政権を崩壊させた。このころから遊佐長教の書状が「直書」と呼ばれるようになるなど、守護代家遊佐氏の家格はさらに上昇した。このことが、遊佐太藤が御供衆に就任する、重要な理由になったとみられる。

天文二十年（一五五一）、遊佐長教が暗殺された。この時点で嫡子信教が幼少であったことに、守護代家を継いだとみられる遊佐太藤が御供衆に就任して河内を去ったらしいことが加わって、強化した守護代家権力をめぐる内衆相互の抗争が起こった。この抗争で遊佐氏直系の萱振氏らが肅清され、本来は傍系の内衆であった安見

宗房が台頭した。後に安見宗房は遊佐氏同名となり、奉公衆となった。畠山氏内衆の抗争は、安見宗房を台頭させたが、畠山氏の河内支配で見ると、支配体制を動揺させ、三好氏による河内支配介入をもたらすこととなったのである。

永禄十一年（一五六八）織田信長が足利義昭を擁して上洛し、畠山氏も河内を回復した。河内では守護家と守護代家の重層的な支配体制が復活した。守護代家遊佐氏は、前述の如く、遊佐長教の時に、守護代家中心の支配体制を打ち立てていた。これが遊佐長教暗殺後の畠山氏の内紛で崩壊し、再び重層的な支配体制が復活したのであろう。

遊佐氏は守護代家に止まらず、一族から御供衆・奉公衆を出す家柄となっていた。また、惣領家当主の遊佐信教は、畠山尚順の娘の子と遊佐長教との間に生まれたと考えられることから<sup>(3)</sup>、信教自身家格的にも畠山秋高と同格であると考えていたのではないだろうか。このような事情から遊佐信教が、重層的な支配体制に不満を持っていても当然である。そのためか、遊佐信教は早くから畠山秋高との不和が伝えられており、元龜四年（一五七三）六月、畠山秋高を殺害した。

遊佐信教が畠山秋高を殺害したのは、自分が守護家を継承できると認識したからであろう。しかし、遊佐氏による河内支配は、足利義昭が織田信長に追放され畿内を去ったことで、旧守護家系内衆や根来寺衆が離反して崩壊したのである。

### 三 宗家と庶家の関係

本節では、畠山氏宗家と庶家の関係について述べる。この場合宗家とは、管領家のことであるが、義就流は庶家とのつながりがよく分ならず、政長流中心の記述となることをお断りしたい。管領家畠山氏の庶家としては、

播磨守家・刑部少輔家・中務少輔家・式部太輔家・兵部少輔家等が知られており、いずれも幕府（将軍）直属の奉公衆である（<sup>4</sup>）。

戦国期の畠山播磨守家は、政長流・義就流ともに当主の弟が播磨守を名乗っており、奉公衆家を守護家が取り込んでいたとみられる。畠山播磨守晴熙は畠山植長が紀伊に閑居した後、高屋城主として当主の役割を果たしている。また、畠山植長没後も畠山播磨守政国は惣領名代として、当主代行の役割を果たしているばかりか、畠山高政は畠山播磨守の子息である。畠山播磨守家は当主不在時に守護権力を行使する重要な位置を占めていたと言えよう（<sup>5</sup>）。

畠山中務少輔家も畠山植長の弟基信が中務少輔を名乗っていることから、守護家の庶家となっていたらしい。畠山中務少輔家の名跡を、畠山高政は紀伊の国人で奉公衆家の湯河直光に与えている。このことより、戦国期に至っても畠山氏庶家の家督決定権を宗家が掌握していたことが判明する。

畠山氏宗家は、庶家の家督決定権を有していた。それを利用して宗家は、庶子（当主の兄弟）を庶家に送り込み、一族の結束を図ったのであろう。また、紀伊の戦国領主湯河氏をも畠山の名跡を与えることで、畠山宗家の下に取り込もうとしたと見られる。畠山氏の庶家は、畠山氏宗家を存続させる役割を担うとともに、宗家の分国支配にも利用されたのである。

#### 四 守護家と奉公衆家の関係

畠山氏の紀伊支配を見る上で、守護から独立した支配領域を有する奉公衆家の湯河・玉置・山本氏との関係を避けて通ることはできない。本節では、守護家と奉公衆家との関係について述べていく。

明応の政変に伴う幕府権力の分裂によって、奉公衆の結合も崩壊したとされる。紀伊においても奉公衆家の山

本氏は畠山基家（義就流）に、湯河氏は尚順（政長流）に与するなど、奉公衆家の分裂が確認できる。

畠山植長の時期、守護家と奉公衆家の関係に変化が生じるようになった。玉置・山本氏は、畠山植長の添状を発給するなど、守護権力との一体化が見られるようになる。一方、湯河氏は、永禄元年（一五五八）から五年（一五六二）にかけての畠山氏と三好氏の抗争に際して、將軍からの要請の有無で、畠山氏に味方するか否かを決めていた。このように湯河氏は、守護権力と距離を置いており、畠山氏とともに河内に出陣する場合でも、將軍からの要請が重要な基準となるなど、独自の判断で行動していた。また、この件より、永禄年間に至っても、將軍から奉公衆家への伝達系統が機能していたことが分かる。

湯河氏は永禄年間に至っても、將軍直属の奉公衆であることを強調している。これとは反対に、戦国期に入り、同じ紀伊の奉公衆家であった玉置・山本氏は、奉公衆（將軍直属）としての活動が見られなくなる。湯河氏は將軍直属であることで、他の在地領主とは異なる存在であることを強調したかったのではないか。これは、戦国期に湯河氏の権力や支配領域が拡大したと無関係ではないと考えられる。湯河氏は自身が將軍直属の奉公衆であることが他の在地領主との「違い」であると認識させることを、拡大した領域の支配原理に組み入れていたであろう。

## おわりに

以上のことを、畠山氏の分国である河内・紀伊ごとに記し、本章のまとめとしたい。

河内では守護代家遊佐氏の権力が伸張し、守護代中心の分国支配体制を確立していた。守護の分国支配も、守護代抜きには成立しえなかった。天文年間以降、畠山氏が家督問題で動揺するのは、幕府（細川・三好政権）の意向と守護代家の意向が異なる時であった。遊佐長教はこのような不安定さを克服し、独自の支配体制を確立さ

せようとした。

しかし、遊佐長教が暗殺されたことで、状況が大きく変化した。遊佐長教が暗殺された時点で嫡子信教は幼少であり、内衆間で権力闘争が生じた。また、戦国期になると幕府は、守護代家の直接掌握に乗り出した。河内では遊佐長教の没後に遊佐太藤が御供衆となり、織田信長上洛後は遊佐（安見）宗房が奉公衆となった。これも畠山氏の分国支配から見れば、守護家と守護代家の対立を招くこととなり、支配体制を不安定化させる要因となった。このため、遊佐長教の路線は水泡に帰し、織田信長上洛後の河内においても、守護・守護代による重層的な支配体制がとられたのである。

義就流畠山氏は、守護代家の権力を掌握した木沢長政が幕府に反乱を起こし滅びたことで衰退した。政長流畠山氏は、遊佐長教の暗殺後権力闘争が起こり、三好氏に河内を奪われた。守護代家の権力が不安定になったことが、義就流・政長流ともに河内を失陥する原因となったと考えている。

紀伊においては、奉公衆家の玉置氏・山本氏は一六世紀前半には、守護と共同での権力行使が見られるようになった。同じ奉公衆家でも湯河氏は、一六世紀半ばに至っても、將軍直属を自負しているように、守護権力に包摂されたとは言い難い状況であった。

天文十四年（一五四五）、畠山植長が没した後、紀伊国内では畠山氏の分国支配に関する史料は、見られなくなる。一方で畠山氏は、永禄四年（一五六一）から翌五年にかけてと、元亀元年（一五七〇）に大規模に紀州衆を動員している。これは、紀伊において畠山氏が、守護権限の一つである軍事動員権を失っていないかったことを示している。

以上述べてきたように、政治史的に見れば畠山氏は、守護権限に基づいて分国を支配しており、室町幕府 守護体制の枠組みから離脱することはできなかったと言える。

註

(1) 小谷利明氏「畠山植長の動向 永正」天文期の畿内」(矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年)、同氏「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』五一〇、二〇〇五年)等。また、吉田賢司氏「書評 小谷利明著『畿内戦国期守護と地域社会』」(『日本史研究』五一二、二〇〇五年)は書評であるが、示唆に富んだ内容である。

(2) たとえば、榎原雅治氏「一揆の時代」(同氏編『一揆の時代』 日本の時代史一 吉川弘文館、二〇〇三年)では、室町・戦国期の家臣団編成を一揆の結合原理で説明する。話としては面白いのだが、臣団の家格秩序を無視した話では実証的とはいえない。

(3) 小谷氏前掲「畿内戦国期守護と室町幕府」。

(4) 福田豊彦氏「室町幕府の奉公衆(一)」御番帳の作成年代を中心として」(同氏著『室町幕府と国人一揆』 二、吉川弘文館、一九九五年、初出一九七一年)、同氏「室町幕府の奉公衆(二)」その人」と地域的分布」(同氏前掲書 三、初出一九七一年)。

(5) 小谷利明氏「守護権力と宗教権力 贈答関係と家格秩序を中心に」(同氏著『畿内戦国期守護と地域社会』 一部五章、清文堂出版、二〇〇三年、初出一九九四年)。

## 収録論文について

### 序章

新稿。本書の導入として作成した。紀伊・河内・越中の守護としての畠山氏の研究史を概観するとともに、管領家畠山氏系図を作成した。論旨の都合上、研究論文の引用の注記が他の章と異なっている。

### 第一部 畠山氏の抗争と紀伊

「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」（『和歌山県史研究』一七号、一九九〇年）を核に、派生論文とともに構成した。

#### 第一章 紀伊守護家畠山氏の家督変遷

「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」の「第一部 守護に関して」を骨子とした。旧稿発表以降、『田辺市史』『粉河町史』執筆の成果を入れて補訂した。

#### 第二章 紀伊守護家畠山氏の支配体制

「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」の「第二部 守護代・奉行人等」を骨子とし、「某姓宣頭に関する一考察」（一部三章）等の成果を加えて改稿した。

#### 第三章 某姓宣頭に関する一考察

『南紀徳川史研究』五号（一九九四年）に執筆した小文を、本文の部分のみ収録した。原論文は、「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」を補訂する意味で執筆した。



#### 第四章 応永二十五年・熊野本宮と守護の抗争

『くちくまの』八七号（一九九一年）に掲載された小文に、『田辺市史』の成果を加えて収録した。原文は、「室町時代紀伊国守護・守護代等に関する基礎的考察」の執筆時に関連して収集した史料の紹介である。付論 畠山修理大夫満慶に関して

新稿。今谷明氏が畠山基国が没した後、家督を継承したのが満家の叔父畠山修理大夫入道としたが、これが今谷氏の史料解釈の誤りであることを正す意味で執筆した。

付論 畠山式部太輔と貞政

『和歌山地方史研究』三九号（二〇〇〇年）の「地方史のひろば」に書いた同名の小文を収録した。

#### 第二部 畠山氏の抗争と紀伊

『田辺市史』『粉河町史』執筆に関係した論文を中心に構成した。

##### 第一章 畠山氏分裂の原因に関して

新稿。畠山氏の分裂抗争の原因について、筆者は『粉河町史』一卷三章四節1（二〇〇三年）、小山靖憲氏編『和歌山県の歴史』六章一（山川出版社、二〇〇四年）で述べてきたが、書籍の性格上、典拠が示されないなどの問題があった。そのため、これら書籍の論拠となる論文として執筆した。

##### 第二章 畠山氏の内訌と紀伊

『粉河町史』一卷三章四節、『田辺市史』一卷六章二節（二〇〇三年）で、畠山氏の分裂抗争について執筆したが、それを論文にしたもの。「紀南戦国史序説」一二三節（安藤精一氏編『紀州史研究』四、一九八九年、国書刊行会）を使用した部分もあるが、全面的に改稿している。

### 第三章 紀伊の野辺氏小考

「野辺氏小考」と題して『くちくまの』八〇号（一九九〇年）に掲載した小文を、南部で高田土居の調査が行われた際、野辺氏が南部の高田土居城に居城していたため、『くちくまの』一一五号（一九九九年）で「紀伊の野辺氏」と改題した上で改稿した。今回本書に収録するに際し、その後の研究成果の発展を踏まえて大幅に改稿している。

## 第三部 守護家と奉公衆家

紀伊の奉公衆家に関する論文を核に構成した。

### 第一章 奉公衆家山本氏に関する一考察

同じ題で『和歌山地方史研究』四三三号（二〇〇二年）に掲載した拙稿に、「文安年中御番帳と山本氏」（『上富田文化財』二二集、二〇〇〇年）の一部を加えて再編成した。

### 第二章 戦国期紀州湯河氏の動向

同じ題で『南紀徳川史研究』六号（一九九七年）に掲載した拙稿を、その後発表された小谷利明氏「畠山植長の動向」（矢田俊文氏編『戦国期の権力と文書』所収、高志書院、二〇〇四年）等を参考に改稿した。

### 第三章 戦国期紀州湯河氏の立場

同じ題で『田辺市史研究』一四号（二〇〇二年）に掲載した拙稿である。第三部第一章と対をなす論文で、第一章の山本氏・玉置氏が守護権力と一体化するのに対して、將軍直属の奉公衆であることを強調した湯河氏の在り方を論じた。

#### 第四部 政長流と義就流の家系と権力

「戦国期河内畠山氏の動向」(『國學院雜誌』八三卷八号、一九八二年)と、「天文年間の畠山氏」(『和歌山県史研究』一六号、一九八九年)を中心に、派生論文とともに構成した。

##### 第一章 天文期の政長流畠山氏

「戦国期河内畠山氏の動向」と「天文年間の畠山氏」の、政長流畠山氏に関する部分をもとに再編成した。旧稿発表以降の研究成果をできる限り反映するため、大幅に改稿している。

##### 第二章 天文年間畠山播磨守小考

同じ題で『和歌山地方史研究』二八号(一九九五年)に掲載した拙稿に、旧稿では紙数の関係で省略した史料を加えたもの。天文年間の畠山播磨守をめぐる人名比定は、これでひとまず決着したと考えている。

##### 第三章 戦国期義就流畠山氏の動向

前掲「戦国期河内畠山氏の動向」と「天文年間の畠山氏」の、義就流畠山氏に関する部分をもとにしているが、第一章同様大幅に改稿している。

##### 第四章 畠山義就の子孫達

同じ題で『南紀徳川史研究』四号(一九九一年)に掲載した拙稿を、その後の研究の発展を取り入れて、改稿した。

##### 第五章 天文年間河内半国体制考

同じ題で『南紀徳川史研究』七号(二〇〇一年)に「天文年間河内半国体制再考」と題して掲載した拙稿を、一部改稿した。筆者は「戦国期河内畠山氏の動向」で、天文年間に河内で行われたいわゆる半国体制が、今谷明氏が言われるような南北分割で無く共同遵行体制であったとしたが、論証が未熟で無理があった。このため、こ

の論文で、半国体制そのものについて論証しなおした。したがって「戦国期河内畠山氏の動向」の半国体制の部分は、今日ではその意義が無くなったと考え、本書には収録していない。

## 第五部 戦国期の河内支配

「戦国期河内国守護家と守護代家の確執」と、それに関連した論文で構成した。

### 第一章 戦国期河内国守護家と守護代家の確執

同じ題で、米原正義先生古稀記念論集『戦国織豊期の政治と文化』（続群書類従刊成会、一九九三年）に掲載した拙稿を、旧稿発表以来の研究成果を加味して一部改稿した。

### 第二章 教興寺合戦をめぐって

同じ題で『和歌山県史研究』一八号（一九九一年）に掲載した拙稿をもとにしている。

### 第三章 織田信長と畠山氏家臣

同じ題で『和歌山地方史研究』二二号（一九九二年）に掲載した拙稿をもとに、旧稿で誤解していた保田氏に対する認識を改め、その部分を中心に一部改稿した。

## 終章

新稿。本書のまとめとして執筆した。